



不覺



新公易策集

卷二

昭和十三年二月十五日印刷
昭和十三年二月十九日發行

新萬葉集 第二卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番

電話芝(43)白一一二四番

目次

——作者別氏名五十音順——

え の 部 三

お の 部 一六

か の 部 一四八

作者略歴 三六五

- 装幀 横山 大觀
- 題簽 比田 井天來

第
二
卷

江川 静美

わが影にめだかおどろき散らばれり冬の山田は何事もなし

江口 きち

たらちねの拙なき文字に記されし家計覺えを見出しにけり

江口 圭次

よべひと夜底冷えせしが此の朝は高山嶺呂に雪ふれる見ゆ

江口 健一

病やや愈る

窓外の夾竹桃の花ざかり久しく聞きてわが起てぬかも

病友の死

立ち騒ぐ人の氣配はうつつにも覺えぬにけり今にして思へば

起きいでて何かむなしき心なり寝巻の帯を締め直しつつ

江口とり子

勤やめし夫と明暮かすかにも命老いゆくは安らふに似つ

江口まさ子

生き死にの境をこえてあきらかにかかり障子の棧を見にけり(出産)
指ざして一の谷ぞといふ山の山岫やまぐらにしてうごく雲あり

彦山の空かと思ふひらひらと秋稻妻の見する白雲

握り飯パンもグリコも食べつくしいや限りなき青空の色

江崎綾子

粉雪の吹き舞ふなかに湧きいづるこのみたらしの水暖かし
吾子のなき歎をもちてこの秋も破れぬ障子はり換へにけり

江崎 鈞 八郎

製糸工場こぼちし跡もそのままに衰ふる村のすがたぞ思はる(内津峠越え)

陶器積みて峠を越え來るトラックの埃しづまるひまさへもなし

古町の池田町屋は宵早く戸を閉したるくらき家並(闇夜内津峠を越す)

江崎 利 一

青蛙ききつつ思ふ夏瘦せのわれに忌むべきとき近づくを

日のひかり照りとほりつつ野茨の茂みの中の青がへるのこゑ

湯ノ平温泉

老人を先に立たせて月の光にひかる白髪を見つつ歩めり

溪川の岸の小岩に相寄りて家鴨は寝らし清き月夜を

江尻 萬 左

大西洋を渡る

朝あけて水平線に立つけむり吾が妻よかくへだたりにけり

江 添 英 一

馬つつじすでに散りたる赤城山あからさまなる山肌を見す

江 連 詩 路 潮

たまさかにこの山峽にすれちがふ向うの汽車も人のともしき(高山線)

山はらを下りくる牛朝草をここだ背負ひてゆらぎつつ來る(阿蘇山)

母重態の報に歸郷す

みいのちにあへるうれしさ衰へし母が身ちかくわれは坐るも

江 渡 哲 太 郎

早苗田の水は明るしゆるやかに空行く雲の影うつりつつ

ゆたかなる心に居りつ吾が願ふ願ひことごと成るべく思ほゆ
病む吾子の寢息かすかに聞えつつ今日のひと日はことなくすぎぬ

胃潰瘍にて入院中

夥しき吐血の後のかすかなる脈かぞへつつものに堪へ居り

命かけしことのなくして有りへにし吾が生はかくてすぎゆくらしも
静かなる獨りの生活こひ願ふ心恥ぢつつ老いゆかむとす

江戸・彩華

夫を喪ひて

くろ髪を顯正院に捧げけり我れも彩華と法の名を得て

かなしみをかき消す春の靄ならばつつまれてまし喪にこもる身も

江波戸秋葉

夕小田を父と植ゑつつ聞く蛙先田にひとつ後田にふたつ
田草取りし昨日の疲れか朝床に起きつつたゆき身をもて餘す

二男昭三歳にて死す

亡骸なきがらを護りて明けしこの朝大霜降りて物の靜けさ

江波戸醇一

桑の葉の色は日に日に深みきて春蠶はなごもすでに三たびねむれり
田の畦のころばし稲のからからに乾上りて晩秋あきの日和定まる
甘藷いも掘りが仕事となりしこの頃は手につきし澁いを落さず久し

江波戸白花

兩の足かはるがはるに地をふめりわれうろうろといでてあるけば
見覚えの無きつらなれど景氣よくわれも帽子に手をかけしかな

君ならでうち明け難き事といふまことは錢を貸せとなりけり
わが負債濟さんすべなみ教員を止むと語れど人驚かず

江原 青島

夕月に小田の稻葉の照りしづみ田より田に入る水音さやけき
移さむといだき上げたるうたたねの吾子の重きに驚きにけり

江村 定憲

この國のジャーナリストの無氣力を憤りつつしかもうべなふ

江村 峯代

向ひあひ母どもの縫ふこのやすけさいのちのかぎりかくてありたき
たがひに心に陰影を持つらしも今日はことさら言葉すくなく

穎田島 一二郎

白木屋焼く

火災救助の輪を描きつつ低く來し飛行機の影の我身をとほる

友の死

この汽車に昨日きも今宵も見仰げる赤星ありて身をかなします(事中)
屍をたもつ冷度の肌刺せり生きてゐて言ふことなかりしか

おのおのに大きい寺もち村人等氣負ひし時代とは過ぎつつあり(歸途)

二二六の頃

衢ゆく砲も音なし隙間雪深く吹きいり積りつつをり

東北冷害

義金箱に錢の落ちたる音を聞き氣はづかしくて歩みをはやむ

長女夭逝二首

手の甲の笑靨あざやかなりし子のからだ焼き果てて今はなきなり
爪ののびしるしと思ふ時にさへ我は子を思ふ死にてゆけるに
宵床に寝がへる骨の音しつつさめぬらしきわがやまひ妻

南朝鮮にて

室隅にうつろふ山の夕あかりかくも身近くおもはざりにし
ひさかたの空のかがやき赤土の山におよびて夕やくるなり

榎原山路

山鳥のこゑ透りくる朝寢床かくさめをれば母は呼ばせし
山岨をあふるる水はうつほぐさ花さく方へ徑こえて落つ

榎本文女

雲焼けのさむるかすけき野路をゆきその暗がりにまばたき覺ゆ

こぬれより下枯草に立つひびきしみに寒く霰降り出づ

榎 本 太 郎

つぎつぎに子等の顔をば剃りてをりいづれも似たる眉の伸びかも

榎 本 夢

軒深く吹き入る風のさやけくて疊の上に松の花散る

宿の娘が露にぬれたる芍薬を剪るとかがめば地につく袂(さる温泉にて)

庭草のおどろが中の酸漿酸漿の赤きをぬらし細細き雨降る

家を出でむと心さだめてみづからの騒騒だつ思ひ抱きしめて居つ

海 老 澤 欽 三

ほこり浮く舗装道路の夕ゆふ日光かげ大風を持つ子と遇ひにけり

朝明けの舗装道路のま白さや一人の歩みわが方に來る

桑の實の黒き小つぶを手にもちてふと聞くものに遠き松風

鐘鳴りて施餓鬼船行くあはれさを川邊に立ちて吾は見て居り（大震災七年）

枯木多き路を行きつつ小淺間を高しと見しに今はま下なり（淺間登山）

溪川をへだつ向ひの山腹を人聲動く路かあるらし（青梅街道）

海老沼黎明

西瓜もぐ兩手のひらにしとどなる朝の冷たき露つかみたり

海老原翠山

押しづけに漬けし冬菜のやはらかさ芯には小さき花持ちて居り

白菜の畑に來ればこのみに音たてて降るたそがれの雨

ひた押しに家鴨むれゆく細川の水ふくれつつ岸に及べり

葦原の穂並が末の波あかり目にちらちらと光りただよふ（印旛沼）

空梅雨の日和となりし開墾田にあそぶ雲雀は土塊とまぎらふ

浅川のながれ淀みて夏は來ぬ水藻の花も咲きそろひつつ

峽の田に下る山路のそここの馬の足跡に清水たまれる

土用あけてにはかに夏はかたむけりたまたまに來る雨の佗しさ

蝦名 五郎

網あぐる唄をしきけばあかつきの海よりひびき空にひろがる

青雲の野づらは遠き蕎麥の花湯槽に馬の眼をつむりをる

鮭とると川に張りたる大網にさやらふ水の音もなくゆく

鮭さげて犬の毛皮をきし男夕日の河に影をうつしゆく

出双いるるたちまちあふれこぼれくる子囊二つ生ける思ひあり(舞)

忍従の冬すぎぬれば香を吐かん蘭の青さのきはまりもなし

満開の櫻の上に醸造會社の煙突太く煙を吐きあぐ

蛭原濱壽

「録の木」の能を觀て

人の世に佗びて住へばいにしへも情に生きて嘆きあひにし

ダイナマイトにて失明せし坑夫の按摩となれるを見て一首

手足揉む世過に馴れて眼しひたる自しが身歎かぬ人のさみしさ

遠く來て汽車より下りし日の暮れに山焼くる火を見つづるにけり
住みつきて山家は親し宵々に雁がね渡る頃となりにし

蛭原やゐ

隣り家は樽工場なり秋の日の冴えたる中に樽たたたく音

延壽寺末稱

寢ねに就くと乏しき煖あたたかをいけにけり明朝あしたまでたもつものの如くに

隱岐とく子

ギブスベツト

石のへのかりねの夢のともしさよこほろぎ來りふところところに啼け

病臥二十三年

しくしくに床とこずれ痛む此の夕ゆふべ無量壽經むりやうじゆをそらんじてをり

身じろげば腰も脾腹ひはらもこなごなに碎くる如しこなごなこなごなになれ

宿しゆくかりはのろのろはへりのろのろと何しにわれも生きてあるらむ

織田善雄

春はるめきて今朝けさの陽ひのいろ氣遠くも向つ屋やに雪ゆきの溶くる音ねする

碓氷嶺すいへいりやうをわが越えくれば霧雨きりこにぬれて落葉松かきまつの山は日昏ひぐるる

親龜の背に錢龜が乗りてゐてのどけし甲羅かわきたらへる

燈火管制一首

かそかなる月光ひかりはあれど灯ひなき市街まちにさむざむし地下を水の流るる
砂ほこりたちて貧しき長屋町よらば斬らむと子ら遊ぶなり

老 川 潮

ポンポン船山向うの海に聞えゐてなかなか出で來ず春山のさきに

川田和孝を送りて

行く人は行きてしまへりと思ひつつ心をかへて夕餉にむかふ

沖 大 兄

かやはらを押しして野分の吹くなべによしきり二つまひたちけり
さかさ雨ふせぐすべなし片谷の霧の中よりひたふきあぐる(大天井ヶ嶽)

みぐるしき嬌つよあらそひとおもひつつあらそはねばならぬうつしみあはれ

此の國の北は開けて海べなり時折きこゆ海なりの音

汝わがが父も母も來りて看護かまるなり眼をひらけ心たしかに(妻病む)

山の雪裾の村まで下り來て此の國原はみ冬寂びたり

沖 美 一

柿の花散りしく庭の星あかり地蟲の聲もきくべくなりぬ

汗あえて自轉車のペタル踏みにけり今日は並木のそよりともしせず

沖 本 悟 樓

連山を歴して湧ける夏の雲くづれんとして未だくづれず

沖 本 重 虎

人と生れし寂しさにさへ堪へてありその餘のことは忍ばざらめや

山の井ゆ汲み來る眞水おほかたは路にこぼしぬ吾も吾妹も

奥 榮 一

駿河國愛鷹山の農場に住みて

雪空の峽はかそけし森深くわが打つ斧は溪にこだます

武藏國秩父山下の山小屋に住みて

油つぼさげて歸ればわが歩む山路はくれて雪ふり出でぬ

奥 和 夫

姫百合の大き薔のふくらみに雷のひびかふ光はしれり

夕餉をへてなほ暮れなづむ遠みどり星のいでなば湯あみにゆかむ

奥 田 和 男

仕上がれる監禁室に吾入りて太き格子戸閉ぢて見にけり(瘋癲院)

板仕上ぐる鉋削りも粗きままやめねばならぬ手間安き仕事

奥田喜一郎

夜風たつ市のはづれや唐黍焼くと蹲ふ女の白き裳見ゆ(安東所見)
岩床に落ち水の音ひびくなり山わさび田の冬も久しき(伊豆にて)

奥田哲良

颯風過ぎし家に戻り来てこのゆふべ壁代りなる蓆つりをり
颯風のち家に舞ひ込む蝶おほし追ひ立つることもなくて過しつ
ゆきゆけば柿の花散る道明るし父の葬り處も見えて來にけり
おほらかに牡丹は咲けり日の縁に青磁の壺をよしとし置くも

奥田富雄

指折りて驚かさるる年月の春はふたたび目の前にあり

ややのびて蔓まくほどのささげなり青竹の手を副へてやらうぞ
陳列の流行服の赤色に引きずられゐる女のまなざし

あぢさゐの玉花の吐くむらさきの炎にやけて蝶は死ぬべく

銀色の廣告氣球冬空のくもりを重きものにゆれをり

八重山の涯に海ある空の窓冴え冴え秋の色をのぞかす

杉の秀はのとがりに冷ゆる一と山の藍をこきおろす瀧つ瀬の音

咲くばかりになりてひらかぬ白牡丹のふくらみ重し五月のくもり

大合唱冬の月夜の枯原のすすきの風のごとくひろがる

奥田 白水

この冬をふるさとに來て藏の屋根のなだれの音を聴くは久しも

夜の街のとある空地の一ところ草ありて秋の蟲なけるかも

音たてて夜ふけの電車すぎたるはいくたびならむ物思ふ間を

奥津清子

ばら色のをとめの夢をふんわりとのせて流るる春の夕雲

奥戸足百

どこしへに生きむと願ひしみおやらの命はつづきて我等にこもるを(年頭所感)

奥貫信盈

妻子を田舎へやることありて一首

暑き日も暮れて蟲鳴く夜となれりあと二夜寝れば子は歸るなり
熱退きて今朝は笑顔を見する子にまなぶたあつくわが對むかひゐる
次の間に君が代歌ふ子のこゑのつかへて妻が合せやるこゑ

師はいまも奥の部屋より聲かけて來ますがごとし集あつふわれらに

昭和五年十月四日東聲師と共に沼津支社大會に出席古奈温泉に
一泊す。師と我との最後の旅となりぬ 二首

この古き三島の町の大通り富士をそがひに暮れてゆくなり、
離さかり來し三島の町は夕富士の聳ゆる裾に灯をつらねたり
白百合の蕾の太りきはまりて開かむとする力満ちをり
朝庭に咲きしばかりの百合白し淨らけき薬いまだ匂はず

相 聞

うつそみのまた逢はむ日も知らざるに人目のなかに別れつるかも
しみじみと月の面より來るひかりはかなき涙われに落ちけり
秋山の枯草しきて妹いもとあればうつし世遠き思するかも
ふたりゐて足らふ心に黙もだしをり風わたり來て松葉をふらす

妻を生家へやりて 一首

久しくもこの寂しさを忘れぬしひとりの床を敷きつつ思ふ
家いづる時に泣きいでし子のこゑのいまだきこゆる道を曲りぬ

みなかみ行

奥利根は山々すでに眞白なり旅寢重ねて來りけるかも

遠き子も試験の頃か前をゆく村のわらべのかたらひ聽けば

奥野町子

鼠取りかけむとせしが新しき子の年なればそのままに寝る(初巻)
旅の家に吾がとく帶の幽かなる音もなつかしこほろぎが鳴く

奥村奥右衛門

教育界引退の素志成る 一首

にこやかに又の銚子を取りに立つ妻も心の寛げるらし

玻璃戸透く縁の日ざしのあたたかさ剃刀は砥に合うて來にけり

ある年の夏明石大雨人丸山の西麓に山崩れありき

ひろき田になだれ込みたる砂利土の埋めのこすところ早苗ゆらげり

淡路西浦の落日

水平線におほいなる日のあかあかと觸るべくなりて海の輝き

桑名にて

森ふかく濠を漕ぎ來てひそかなり水さわだてて蛇渡る見つ

大正十五年一月新年歌御會始陪聽の榮に浴す

靴にふみて厚みおほゆる絨毯の御廊下ながし幾まがりしつ

一天の君おはしますみあらかにまうのぼり來つわが父よ母よ

皇大神宮遷御の御儀に庭燎奉仕の榮を荷ひて

闇ふかき森にゐてわがきく雨は山ひと山に降りそそぐ音

哈爾賓郊外志士殉難碑

野邊遠き曇りを四方にめぐらして記念碑寒く降る雨に立つ

みづからを狙へる銃つに目をやりて冷たく笑みし時か撃たれし(志士銃殺)

皇太子殿下御降誕 一首

よろこびの涙に讀みし號外はおしただきて床の上におく

藁火たける烟のなかをとほり抜けにはかに寒し朝霜の道

海なりの地をつたひ來て音ひびく玻璃窓のそとは菜の花曇り

關門海峽

門司の灯よりともしり續ける船の灯はけぢめを分わかかず下關の灯に

くらき河を舟提灯のかるやかにかゆきかくゆく夏さりにけり

外國交際官宮中參賀

高橋を禁裏にむかふ自動車は速度をゆるくたもちつつ過ぐ(二重橋)

幼時回想

山川の向う堤をとほりゆくけもの見にけり晝の深きに
ひる深き山の中ゆく野狐は遠のきてなほかへりみがちに

奥村 さき

頬ずりも今は限りと抱きあげて命なき兒にもいふわれは
麥畑のむぎのうれ穂の放つなる光するどきまひる野をゆく
燈を消して月のしたびにつづく家たまたま人の話ごゑきこゆ(燈火管制)
兒を遊ばする草山かげは夕しめり觸るる穂草の足につめたき

奥村 静子

卵生めば鶏屋走り出でて水をのむ鶏も息づく心なるべし

奥村 玉枝

朝明けのま青き空に浮き出でてすでに匂へり富士の高根は

奥村 芙樹子

分譲地は傾斜になりてたかだかと花のひかりたる椿ひともと

夥しくバケツに投げ込まれし花の赤さ日暮の舗道にいきいきと並びぬ(廣小路通)

奥村 文子

片寄りに乾ける道にかすかなる埃立つさへ春はなつかし

ありし日の夜毎を吾兒が喜びし急行列車があかあかと行く

笑みこぼれわれによりくる兒を見れば命ありしを嬉しとおもふ
田を越えて遠く驛あり音もなく長き列車のすべり入る見ゆ

奥村政治郎

山谷を戀ふとはいはね苔むせる一つの石をかたへに置けり
めづらしく今日家に居てうらやすし柿のむだ實はひねもすに落ち
海の上に朝ありたる月のかげほのかに見しを一日おもへり
手足かなふ身をしよろこび思ふにも吾は老人の素直にあらな

奥山秋歩

大連の驛に今日降る春の雨かなしきことは言はで別れむ

奥山樵平

山かひの新墾畑に山鳩啼けば母とはたらくこころゆたかさ

さし潮に放水路の水うねり満ち夕蘆叢の騒立さわだちやまらず

奥山友吉

裏畑にみそさざい鳴く聲聞ゆ炬燵に倚りて足袋はきをれば

山峽の貧しき村に子等二十人教へて寒き冬越すわれは

日に一度河越えて來る郵便が今日は來らず吹雪あれたり

學校に居る間は樂し先生と居るは樂しと書きし子等はも(綴方)

辨當に枴の實餅を食うべをる教へ兒見ればいとしきろかも(因作)

奥山美佐雄

病床吟

青芝にまじりて白き齋サイ咲く庭見くだせり寢臺を下りて

健やけき人のごとくに髪カミの毛を短く刈りて吾はかへれり

長島愛生園

をさなきはをさなきばかり住ひ居る少女舎の前を見つつ過ぎ來ぬ

義姉難産にて母子共に死す

一すぢに焼場へ通ふ山の道廣くさびしく思ひけるかな

億 川 攝 三

坂本龍馬の銅像 一首

石に倚り手をこまぬきてとこしへに海をながむる君がまなざし
じねんじよを肩になひてふるさとの二里の山道雪ふみくだる

長男一郎の死

病理解剖終れば外はたそがれて夾竹桃の花ほの赤き

押 尾 克 己

掘建の小屋に葦を下げ渡し住む人見ればなぐさみにけり

利根川の向ふ常陸の村落が堤がくり屋根ばかり見ゆ

運び來し稻の匂をなつかしみ馬の鞍とく月明りかな

押尾 憲 治

ことさらに舌長々と出させにきやるせなき身の戯れ心(診察)

落合 一 雄

夜のほどろ犬かなにかが庭ぬちをひそかにあるくけはひこそすれ

落合 鉦

越中立山、彌陀ヶ原にて

茜さし遠き富山の海ひろし西に傾く原のま下に

月冴ゆる原をへだてて聳え立つ峰寂かなり早乙女さとめ・大日だい

高瀬川溪谷天井澤

岳樺のふかき樹の間をつらぬける澗谷かんだの上を歩み來れり

伊豆大島に向ふ

沖よりぞ時化しけくるならし波わたる千鳥いく群もいく群も見ゆ

前穂高岳岳澤にて

澗谷かんだの巖うち濡らし雨ふれり雲ながら降る雨は音なし

落合はな

教へ兒紫斑病といふに罹る

癒ゆるべき病ならずと我が思ふに汝もしか思ふか別れ言ふはや

落合詩有

夜更けなばこの風おちて雪こんと言ひつつ父は外よりかへり來

美作みまさかの冬はさびしも山國の山かききらしふぶく日ばかり

たまさかの風ぎのあしたの空のいろいやがうへにも青き空のいろ

落 合 直 又

一つもて君をいははむ一つもて親をいははむ二もとある松

緋ひ緘せきのよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくら花

近江あふみの海夕ぎりふかしかりがねのきこゆるかたや堅田なるらむ

身につけしその世こひしく思ふかな太刀見るたびに太刀とる毎に

呼びにやりし友より呼びにおこせけり雨はいづこもさびしかるらむ

野分して荒れたる宿の園生には惜しきばかりの月のかげかな

しめこそはひきはへたれど山里はおのづからなる門の門松

をとめ子が扇の風やよわからしふたたたびたちて飛ぶ螢かな

陸軍始の行幸ををろがみて一首

わが袖にかよふもかしこ御輦みくるまのすぎゆくあとの春のはつ風
小木曾山たかき梢の鷺の巢もあやふきばかり吹くあらしかな
月清みひとりこえきて二人まで友にあひけり歌の中山
知らずしてわれ宿りしに今朝見れば窓はむかへり富士のしば山

從軍行といふ題にて 四首

霜しろきいくさの場ばに月さえてひきく過ぎゆく雁かりの一つら
敵ははや近くよすらしうつ銃づつのけぶりぞ見ゆる松原がくれ
影きよみ地圖手にとりて見てあれば月をよこぎる雁の一つら
このゆふべ風なまぐさし屍しかばねの上より上をふきて來つらむ
をちかたに笛の音すなりさ夜ふけて月にねられぬ人もあるらむ

誰か來てわれよりさきにすずみけむ松の木かげに扇すてたり
家づともてきて植ゑし一もとの萩にもやどる秋の夕風

從軍行といふ題にて

彈丸にあたりたふれしは誰そふるさとの母の文をばふところにして
鞍はみなあけに染まりて主もなき駒ぞ嘶くなる山かげにして
駒にのりあかつきはやくわれくれば折れたる太刀に霜おきにけり

紀元節の日、野若草といふことを

七ゆきし少女が伴をしのぶらむ高佐士の野の春のわか草

大洗磯崎にて 一首

大洗磯われおり立てば裾のあたりよせてくださる八重のしら波
長谷寺はこれより右としるしたる石をぬらしてゆく時雨かな

遠くちかくひびく五山の鐘の音も聴きわくるまで里なれにけり
牡蠣殻かきをのせたる蟹あなが屋根の上に鶴つるなきて日は暮れむとす
やよや子ら東鑑あづまかみにのせてある道はこの道春のわか草

椿さく久能くのの御坂みさかの七まがりまがりてくれれば雉きき子すなくなり
磯山の小松を引きてよる波に手あらひをれば鶴たづなきわたる
城あとと聞きにし岡に古瓦ひろひてをれば雉きき子すなくなり
順禮の子を呼びとめてものめぐむ人もありけり秋の夕ぐれ
簪かざしもてふかさはかりし少女子のたもとにつきぬ春のあわ雪

安房にて一首

霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の寒きに
父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

阿伽の水汲まむとすれば谷川に白くうつれりしら藤の花

小瓶をば机の上にのせたれどまだまだ長ししら藤の花

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころことさだめむ

君が袖にふれてうごきし白あやめ明日むらさきに咲きやかはらむ

さわさわとわが釣りあげし小鱸コサザの白きあぎとに秋の風ふく

ましろなる石よりなれるこの少女おのれきざまば衣きぬきせましを

草も木もおなじものとはおもふまじ春の春雨秋の秋雨

原町にめしひ二人が杖とめて秋の夕べをなに語るらむ

竹三もと蘭ここのかぶいはほ四つその巖めぐり清水ながれぬ

舟よばふ渡わたはいまだくられどあらはれそめぬ多摩の横山

おくつきの石を撫でつつひとりごとといひてかへりぬ春の夕ぐれ

あぶら繪に見たるが如きくれなるの雲の中より夕日さすなり

舟うけてをりをり君の訪ひまさば住みても見ましかのはなれ島

病 中

わが墓を訪ひこむ人はたれだれと寝られぬままに數へつるかな
昨日より今日は悲しく聞えけり明日またいかに入相の鐘

音 代 節 雄

樂浪の赤埴暑し靴先にあたりし瓦かそけき音す(古瓦)

及 川 水 馬

井戸換への終の桶に汲まれたる小さき鮎の鱗の光

及 川 光 子

わが家の露臺明るく照る月夜ぬぎすてしまま靴散らかりぬ

秋畠の荒れゆくときに實りたる西瓜を拾ふ草のなかより

稚兒が破りし障子引きさして一人こもるに月ぞ明るき

及川 米子

騎馬さけて道のかたへの草叢にわが踏み折りし曼珠沙華の花

及川 玲子

病軀哀唱

にくしみもまたあらそひのかげもなく聖らけき世ぞこのま夜なかは

友を哭く

祈らざりし君がこころを責めがたし山麓ふもとの雨に柩ふもとゆくなり

及川 堅造

夏瘦せの子にのませたるドリコノの瓶に活けたる夏草の花

及川 經子

殺人でもありたる如しぼんやりと貨車のホームに電燈がともる

笈川 憲

スキツチを入るるたちまちダイナモの響きどよもす中にわれあり

樗木 忍子

久々に足袋ぬぎしかばひややかに蹠にしたし疊の冷えは

大 中一郎

ぬぎすてし汗の着物の下に鳴くこほろぎありて夜はふけにけり
田舎道よけて馬車をしやりければすみれの花を我が踏みにけり

大石 逸策

十日餘りを遊び足らひて父母は雪降る郷にまたかへります

病 中

大石 花 晨

つつましく今はあせらず寝て居らむこの身このまま死なるものか
寝ね飽きはせずやと言ひし父上のゑまひのなかに齒の缺げをみし

大石 隆 子

叱られて歸る生徒の足どりのふてぶてしさを又もせめむか

大石 鐵 雄

かうしては居られぬ如きこの心日毎深みてゆけどすべなき

大石 亮 三

淡雪のつみたる上に氷雨降り別れし人は今は遙けし

春の夜の雪はさはらふ音もなしひそかに積みてあらむ朝まで

苗代の馬の尾をふる田の畔におどろかず居る鴉の一羽

大石 美沙緒

酒ふふめどほろにがきかな淋しきは石の如くに我胸にあり

大泉 米吉

ひややけき林の中に白き蝶青き空よりこぼれ來れり

大泉 和子

風わたる青き木立に向ひつつあはれものわすれする日頃となりぬ

輕井澤 二首

米をとぐ山井の水は落葉松かろうまつの枯葉ひとつふたつまじりるにけり

晝寝より覺めてきき入る秋蟬は息づまるごとく寂しきものか

庭草に水やるあした曇りゐて月しろのごと白き日のみゆ

呀えさえし星空見ればいたづらに憤りしことを寂しく思ひぬ

大内 須磨子

われのみの持つにあらざるかなしみを分たむ人よ遠くもなりぬ
庖丁を研ぎゐる手許明るくて夕日しばらくながしもとにさす

大内 鐵二

丹波の學校へ赴任す

都にて教を受けし師の聲をラデオに聴きぬ山深く來て

大内 規夫

龍山にて

兵走り埃をあぐる道の涯風の流れの速しも秋は

うちあぐる銃の煙の淡く消えはや涼しさや練兵場の草

仁川にて

岬の鼻風はらむ帆の往き迅し雲が光ればその下に見ゆ

黄海にて

この海や底あさくして濁りたり然か思へかも傾く煙筒
吹き變る午前の風にはためきて船旗は白し波にひびかふ

威海衛にて一首

行きすすむ船の舳に陸は動き人の生活のいきいきと見ゆ
砲車の上にゆられすぎゆく兵もだせりおのおの生ける力きびしさ
うち見やる林芽ぶかざ然れども春あさきかなや砲車とどろく
風白き晝のつれづれに剪りて來し山歸來なり活けて足るべし
夕あかりそぞろに冷えて透きとほる山の線細し秋ふかみける

こゑのみてすぐすみ冬の夜ながし山川は鳴らず月照りわたる

空のいろ深まり果ててうす暗し落葉林の道のはるけさ

林の道敷く霜しろし日あたりに張將オヤシは居れど人の行くなし天下大將軍
地下女將軍

底寄りに谷の家群みなひくし谷の寒さに地を這ふ如し

身に近き下枝揺りつつ吹きのぼり一山の音はただ松の風

登りしだまみひとすぢ清し吹き沁みて松風の音水切るとし

奉天北陵

みささぎをめぐりておこる松籟のかすかなりけり拜殿にきけば

東鷄冠山にて

うち對かかひ生命を殄つす刻ときながし敵のけはひのあなしづかなる

敵壘に手はとどきたるときの間をいのち奮ひ立ちてこゑはあげしか

吹き越して赭土山をくだる風夕昃り早き草に沁みつつ

大内 波光

稻田わたる夕べの風はまむかひの藪にとどきて音たてにけり

眼ざむれば車窓にまぶし石狩のはてなき雪の野の朝づく日

大江 保徳

夜となりて間遠に光る稻妻は河原に竝ぶ大石に映ゆ

大江 剛男

日蝕とアイヌ 三首（ウエンカムイは悪魔神）

ウエンカムイのきたる兆しとアイヌ等はをのき伏して日を見むとせず

ウエンカムイを拂ふためにか酋長は黒き日に向けブシ矢を飛ばす

日蝕の終れりと見るやアイヌ等はウエンカムイ去れりと喜び踊る

夜の更けを書讀みをれば陶物の凍みわるる音す厨のあたり

大江 氷原

夕ぐれの水^{みづ}照りあかるき軍港をめぐる山の山櫻花

昭和六年十二月一日午前十時頃久良岐郡野島上空に於て海軍

戦闘機の墜落せる慘狀をゆくりなく見る

空中滑走すると見るまにとび出でし人の眞白き落下傘ひらく

落下傘ふわりとひらき風のままだ流れゆくなり空の青きに

燃えながら落ちはてし機の煙まだ消え残りゐて空の眞青さ

大河内 國子

原のむかう木立若葉にふくらめり眞日の下にて兵士訓練す

岩山のなだりは赤きつつじ花雲ひくき日の光しづめり(武藏嵐峽)

秋が來て山の小鳥のかはりたり近頃とべる四十雀の群(輕井澤)

ふきくだる風の下びに鳥一羽この溪こえて空にはるかなり(日本平)

大河内 由美子

また春のたち還るなりひたすらにさびしき春とたれかおもはむ

大川 きよ子

末消えて夕虹うすくかかりたり紫陽花あざむぎの花の蒼き薄明かほたれ

青葉して丘の傾斜なだのふかぶかと時計臺あり雲は動かず

何事も徹しえぬ我が弱き性こころに悲しく絡むこほろぎのこゑ

武藏野や丘の起伏の秋すすき穂波の銀を空に透かせる

薄曇る空の光に仄見えて櫻は白き幻となる

大川 すみ江

全身にあぶら汗出づ右胸を切尖大きくめす廻るらし(手術)

訪ね来る人もあらず寝疲れのしたるこの夜は膝立ててねる
道の邊の乞食に錢を投げて過ぎなほわびしさをもちつつあゆめり
ひねもすを衣縫ひて居り家をゆする道路工事のろおらあの音

大川 橋 夫

はろばろと來ましし母と春の夜のつきぬ話は寝つつ語らふ

大川 涉

二女禮子病臥十ヶ月十九歳にして逝く

まだ吾子は生きてしゐるを死に飾る引伸寫眞出來てきにけり

大垣 紋 治

曹達工場の設立に一村反對せしが青年はぞくぞく雇はれてゆきぬ

街なみの築^{ついで}牆の内より高々とそびゆる松に風の吹く見ゆ

萬善簿十卷

一萬の善をばつまむ誓には蚊をころしても心いためき

大鐘よそ子

非常時日本國民の行くべき道を講^か演^みりつつ白髮の蘇^か峰^み先生幾度も汗拭き給ふ

大釜一男

丹後由良海岸にて

くさはらを吹きあげて來る潮風に蜻蛉小さく流されてゆく

大木雄二

おどろきは宿直室の戸をあけてかくもよせたるいちめんの霧

病みてやうやく物思ふ時を得たるとしいろいろなことが氣にかかるかな

大 木 良

高槻のこもれ日さしてしづかなる家ゐの屋根に鶏あそびをり
みづぐちの障子にうつるひとのかげ米磨ぐおとの今宵さむしも
薄日かげてりてはかげるみじか日の障子とざしてひとりこもりぬ
草の葉につゆのこしゆく夕雨や河をまたぎて虹たちにけり
夕さればともる灯さむしはづかなる冬涸川の水にうつりて
炬燵してこもりつぐ夜となりぬれば遠きちちははを思ひがちにす

ピエル・ロチ屋敷跡 一首

昔ゐし人をおもへど青々と生まひたるくさのなにごともなし
ゆく春のひかりしづかなる古畑にくづれかかりし緋牡丹の花
日傘さして少女子ひとりあらはれぬ杏咲きさかる古き門より

ますがしき軒下川を桶に汲むと日傘置きたる少女子あはれ
風おちてたたへしづまる沼水に霜のくづれこむ音かすかなり

病・床 吟

病床をいでて歩めばすがだたみつめたく足にふるるけさかも
さきさかる牡丹を見よと家びとらふとんのむきをかへてくれけり
穂にいでて風にふかるる草繁み蚊帳吊草か高くゆらぐは
夕されば咲く夕がほのすがすがと心すがしくありたきものを(絶詠)

大 木 喬

今日もまた自殺の記事を二つまで見出しにけり非常時あはれ

大 城 清 史

工場を出づれば外の明りあり夕焼空に向きて歩むも

山原の晝の深きに野ひばりの高くは飛ばず聲透るなり(阿蘇山)

通されし二階より見えて海暗しすぐそこらまで波よする音(富岡にて)

うろこ雲今しはなれて照る月のさへぎるものもなくて涼しき

夕ぐれをせはしく植木植ゑ終へて足元くらく土ふみ馴らす

大城 貞夫

朝露の潤ひ保つ土の上に菲の小花は散り初めにけり

含みたる飯も噛まずに生徒等はひたと見つめぬ言はねばよかりし

大久保 琴子

けさ見れば思はぬ果てに裾曳きて赤城嶺またく晴れわたりたる

大久保 日吐男

五月雨さみだれにいささかたれて雫する竹の若葉はみづみづしけれ

荒磯にひくくとびかふ蜻蛉をり枯草の穂にとまるさびしさ

木々の葉の散り来る音の幽かさよこの路あゆむもいつまでならむ
山行けば若葉の匂ひただよへりこの山道に人のこひしさ

大久保文子

京都帝大在學中の子

そひあゆむ心たのしも夫つとと子の専門語まじりの話をききつつ

朝鮮旅行

箕子陵へ松の落葉の道ながし朝を木洩れ陽の額にあつき

大久保正繁

眞夜ふかく蚊を焼くと持つ蠟の火に兒らの寝顔はつくづくとみし
ひと握り刈りては振るに稻の穂のおもみゆつさりと掌てにしこたふ

大久保幸子

おのづからをとめのころのなげかひにことなるさへもあはれなりけり

ふるさと

山川のいささながれの水の音ころにしみてひびく朝かも

いもうとと父としづけくすむ家はつばめを居らすその梁の上に

大熊長次郎

海中わたなかに薬空瓶を擲げすてぬ癒えてゆくべし秋ぞらのもと

師を埋葬す

はふるべき時近づきぬ嶺岡の日かげとなりし大きすがたや

山の上の空あかあかとすみとほりこの日のくれを人葬るなり

安房妙ノ浦にて

水ふかく投餌を待てる鯛のかげむれて徐かなり蒼き底ひに
さわだちて餌を襲ひくる大き鯛近く觸るるを荒鱗に刺す

亡師の家 一首

外の面には大雪ふれり空家にいまひびけるはわれのしはぶき
春晚き電をもたらす夜の空木群の上にさむく澄みゆく(春電)
灰白くかかむりし燠をかたはらの火鉢に見れば幾時ならむ

父を悼む 二首

編笠のうちよりわれは見えて通るいく年ぶりぞふるさとの町を
寒き風ほこりを巻きて來たりしが柩のうへを越えゆきにけり
冬ねむりかそけき時におそはれし孔雀の嘴くちばしの蟲けらを見つ

工場のなにを動かす音ならむからだにひびく衢の日のくれ

奈良

鹿の仔に餌をやりてゐる妻の見ゆ高きにのぼりわれは見てをり

天城

谷かげに黝く群れつつたまさかに高く飛ぶ蜂の翅きらめく
夏草をふみて歩めば陽のいでてわがかげおとす山の上の原

大島

白き猫船より船に飛びてをり一夜荒れたる海風ぎぬらし
蒸氣あげて船より下ろす角氷明つくとけけ方の濱にたちまち積まるる

千櫓忌

おのづから車座になれば亡き人もかたはらに來てすわる心地す

わが家の井水濁りしをとつひの地震ありてより秋深まりぬ
赤白と幼児のものを部屋せまくならべぬる妻を立ちて見に来つ
山越えてしばしば來たる小夜時雨白きもの残す垣の根方に
窓下に來りて去れる紙芝居何をおもひぬしわれにかあらむ
汽車つきし近江長濱に朝明けて湖より起るもの音もなし
高尾やま若葉する頃にのぼり來てわが古さとを眼の下に見つ
歩きつつ卵を食へり山の上の土に鹽こぼし立ち去らんとす
歸り來て吾兒が眠る面ざしを立ちて見てをり蚊帳の上より

熱 後二首

厨邊に青き菜見ればもの戀しししばらくもはら春菜をくはむ

けふ癒えて友に随へり伊豆山の松の芽ながき春やまを越ゆ
雨の降る日ぐれの庭をわが見れば昏がりの中に蜩蝶とべり
枕邊の瓶にし惜しむ花すらもとどまらなくにわれは長病む
ふる里のわが知る人の菊畠しきりと見たきこころ湧けども
あやまりて薬の粒をおとしたる路面のあやめすでにして昏し(病閑行歩)
わがまなこ衰へにけり本棚の書物の背文字眼をほそめ見る

絶 詠

こころさだめてとみに静けし鉢花にあたる日光ひかりをわれは見てをり
をとつひ我庭木々に木花さきいのちある内に美しきものを見ぬ
こときめて心平らかにあり關根本村の棋戦を日々に興ずる
妻子らの聲をしきけばまねかれるわがたましひに沁みわたるなり

わが手力おとろへにけり筆もちて五六字書けばつかれはてつる
すでにして午後四時をうてりわがいのちうすねむるまで幾時ならむ
けふ見舞に來たる何もしらずかたはらにゐる兄は見るに堪へぬかも
何もかもゆるしたまへといのりつつわれの眼になみだたまれり
靜にぞねむらせたまへ人間の命死にゆく時のをはりに

大熊 勇 二

伊豆熱川附近

磯へきてかへりみすれば天城山萬二郎嶽に雲ただよへり

大藏 宏 之

この兒等の昔語りとなる日あれ住み難き今の世の中のこと

大黒 富 治

御物川岸にあふるる雪解水は護岸工事の石をひたしぬ

雪解水のおふれ流るる春寒き田川を越えて姉が村に來つ

足乳根の母のみ靈を守る夜に馬のいななくはあはれなりけり

兄も姉もいたくし老けぬ母死にて悲しむ時に集りにけり

翁草の花をあはれみたまとはる草生の徑は砂濱に盡く

大越候鳥

河北郷土研究會員一行と大壘山踏査

香香背男がかつて食みけむこの山の山椒の實をわが噛みにけり

銃音の響く時のま撃たれたる鳥の落つるははかなかりけり

大崎勝年

鴨跖草の莖こまごまと枯れにけり時雨れて後を寒さいたるか

寂けさの極まる顔とをろがみぬまなこをとぢておはしけるかも
粗髯は幽かに青く光りけりともしびかかげをろがみ申す

大 澤 勇

貧しさに妻子の心いぢぎたなくなりはせぬかとひそかに恐る

大 澤 かつ

暑さ凌ぎ難しと病床の夫の嘆くに

壁ぬきて障子たてたる此の部屋に吹き入る風を人は喜ぶ

大 澤 茂 樹

霞ちる朝なり人は刺子着て氷きらむと出でゆくものか
着ぶくれて走り來るさま信州の冬の子供は雀にも似る

大澤 忍

山離れて河幅ゆたかにゆく水の澄み透りつつ波立ちやまず(熊野川溯航)
まなかひに迫りてくろき大尾根ゆ天の河原は傾きにけり(伊吹山)

大澤 清 一

庭松の花粉こぼしつつ春あらしひと日を吹きて夕べ曇りぬ
身ごもりの妻にみとられて病み臥る^{*}我の命を死なしむなゆめ

大澤 千 隈

耳遠くなりゆく母かこと問ひてさびしきおもひ日々くりかへす
たらちねがあらぬいらへのをかしさも日ごとになりて時にうとんず

足を病みて臥床すること八年に及ぶ

抱へられて庭べの椅子による時も櫻の花はまなく散りつつ

大澤 春子

霧晴れて松の細葉にたまりたる雫を照らし夕陽さし來ぬ

書物かかへて厨の吾れにつきまとふ娘の試験日もあすに迫りぬ
試験すぎて下心やすからし夕庭に青き柿の實娘はかぞへ居り

大澤 弘

ひとにはひめもこそせめあきらけき神のみまへにかくさふべしや
低丘をのぼり來りて夕かげとなりゆく道の山櫻の花

大澤 政司

我が家のたつきの代と飼ふ蠶みすみす捨つる桑なくて今は
立ちゆかぬ百姓業を思へども炎天の畑に草むしるわれは

農業不振のため、力織機八臺を入れて伊勢崎銘仙の賃織を始む

停電に機械止みたり出でて來て春とし思ふ庭の土を踏む
乳母車に泣く子に何か言ひながら妻が糸繰る手はもはらなり
織子等が汗流しつつ織る機は汚點多くして規格に觸るる

大澤 雅 休

榛花が揺りこぼす花粉つぎつぎに樹の間に見えて雪にとどくも
下枝にひそみ怖ぢゐる小鳥をり襲ひし鷹は今は居らぬに
四聖堂のみ庭閑けし松かさの落ちてころがる音折々に
もろこしの赤き穂立はしづかなりくもりしづめる丘の上の畑
星川の瀬の音たかくひびかへば天なる星はまたたきにけり
夕小田の早稲の走り穂たわませて大山とんぼとまりけるかも

歸 郷 八首

ふるさとを今日も思ひつつ楡の木の森ふかく来て寒き夕かも

齒^し朶^だを揺り我家の井戸の水を汲み顔を洗ふも三年ぶりなり

水汲めば井戸にしたしき音のあり幾あけくれをここにくみにけむ
大いなる赤き没^い日^びをうち仰ぎ今日もなげきぬつづくひでりを

風呂がまの焚火あかりに母がむく玉^{たま}蜀黍^{もろこし}の粒そろふ見ゆ

大川の土手の枯芝に日あたりるしづけさを破る何事もなし

一色に草紅葉せる野に來りあかるき日ざしふみてあそびぬ

冬山に入りたる人のしはぶきのこだまするなり谷の向ふに

日かげれば遽にさむしこもりぬの鳩の小鳥も水を被^かかず

曇り夜の空にはあれどあふぎゐれば明るきもののあるごとく見ゆ

阿蘇にて

つきつめしものの力にふれて居り火口見下す熔岩の上に

太宰府一首

古きものの持つ力ひしひしと迫るなりけだもの埴輪見まもりゐるに
火山灰今日も降り來て山畠の煙草の花にふりかかるなり

大澤 味香 夫

父を悼む

ちちのみの父がけふよりすみどころ冷たき石をわれは起せり

大澤 やちよ

地に青葉空に眞綿のちぎれ雲光をどりて夏近づけり

大下 三雄

高文試験に落ちたる友を慰めぬる
私の心はたのしみてはるぬか
疲れつつ歸りて來たる街路の果に忘れてゐたる赤き陽ぞ沈む
鹽田の浅き潮にうろくづのあそべる様は見つつかなしも

をさなごは小さき足を蒲團より出して眠りをりこの宵早く
酒のみてたはやすく寢て終ひたる父の顛頂をわれは見てをり
昨夜よりの心ゆらぎはつきつめず朝光のさす道をゆくべし

大 鹽 學 道

石林なる乃木將軍の遺邸を拜觀して

當年のままなる爐なり湯氣たぎり南部鐵瓶自在に懸かる

大 嶋 武 雄

旅客機にて(福岡—大阪間)

すさまじく滑走をはじめしわが飛行機の車輪の下に伏しくる青草
着陸と空中滑走はじめたるわが機に見る見る大地もりあがり来る

東京―大阪間

高度計の針はげしく動き見る見るに一千米を指せり機の外は雲海(箱根近し)

南 國 行

室戸岬を大きく曲りしわが船の右舷まともに日はのぼるなり

かぐはしも五月の風はせんだんの花咲ける木をさわさわにゆる

土埃白くかむれる道ばたの草木をあふり夕風のふく

潮霧にけむれる渚はろし夕づく道のうぐひすのこゑ

潮霧にけむる長濱ゆきゆきて阿波の穴喰に日は暮れにけり

あけそめし海上の空氣清々しわが大君のおはします艦見ゆ

眠れりと思ふか妻はわれの鼻をつまみてこよと兒にをしへをり

大 島 一 邦

妻と争ひひと日見ざりし赤坊の聲を夜床にあはれみてをり
月に一度養父より貰ふ生活費も給料の如しわれは病み慣る

大 島 重 一

野面吹く風にゆれつつ青空にしろくさぶしくあかしやの花

大 島 よ ね 子

山際はすずしく雲のひかりきぬ壁に背をよせいづる月待つ

大 島 菫 花

麥うるる島の向うをエンプレツスの白き巨いなる船體すすむ

大島青子

枯山かりやまはすそべり寒し夜の目にも一列ひとつらの雪の白う凍みつつ

風出でて微塵舞ひ立つ街角は斑雪はだれの汚れ目につきて寒し

脂照りの日中ことなきひそけさよ芭蕉は花の咲きにつつあり

大醉英市

北海道根室に小學校教師たり

いね足りし宿直の朝をまかがやく雪踏みて掲揚柱に國旗持ちゆく

邊土やうやく春ならむとす

新造船を海におろすと曳き綱を卷く馬の腹は泥まみれなり

北千島出漁船出發日迫る一首

バラムシルに船出まなき獨航船の滿船飾なりて旗は音たつ

阿寒連峰國立公園内の小温泉地川湯硫黄山に遊ぶ

よびとめし氷下魚賣る人は屋根雪のしづれしたたるをくぐりて入り來

保安林の太き標杭は噴煙のただなかにありて文字くすぶりぬ

硫黄山黄の岩肌をのぼり匍ふ噴煙黒し日をかき覆ふ

噴ける湯の樋づたふおとは風に去る地鳴りのひまにさみしく聞ゆ

大須賀英作

捕りて來し螺貝あはれ憩ふ間に茶店の疊這ひ始めたる(男鹿半島樺村)

橋立の闇の夜路にゆきあひし人は魚の匂ひ放てり(天の橋立)

漣の柴山瀉の鴨の群ひとつ泳げばみな泳ぐなり(加賀片山津)

大杉 繁

向ふ屋根の照り反し暑き二階の室に熱計らむと汗拭ひをり(病床にて)

こまやかなる泡立ちとなりてくろずめり晝深く漆のかさ減りしるし(漆精製作業)

大 園 茂

夜學びのつかれにひとりくふ柿のほのかにしぶく口にたまれり
一面に松の芽ながく伸び立ちぬ山にこもりて久しきを思ふ

朝早く蚊帳はづしくるる看護婦の化粧けはひかそけくにほひくるかも

大 田 き く

笑まひつつ迎へられたり貧困の状況調査にたづねしわれは(家庭訪問)

大 高 克 己

「病氣は自分の手で」をモットーに軀の達者を利して癩の研究に努む

いづこよりか寒蟬の聲聞えくる解剖室に獨りこもらふ

大 高 富久太郎

青々とてりみなぎらふ波のうへ鳥とびすぎし光のこれり
海に注ぐ山川の水のひたおしに鳴り響みゐる音はきこえず
あかあかと海を貫く川の幅ひた押しに押しして浮きたるごとし

長病の後

朝光のみなぎらふ庭に下りたちぬ冬青も木斛もそよぎてまぶし
みなぎらふ光の中に立ちにけり病みぬけの體しんまでまぶし
ひたぶるに縁の端まで出でにけり蛙子のこゑからだにひびく
日向べにさ蕤藉きて呆れぼれと子と遊ぶなり蟲光りとぶ
長病に疲れしわれや額にさす朝の光をあつしとおもふ

西山莊六首

晝くらき杉の根方に日のしづくおちてうごけり笹の葉のうへ

西山莊に坐りて聽けば水の面に影そよぎゐる松杉のおと

西山莊に來りて被誅藤井紋太夫をしのぶ

裸木をしごきて過ぎし風の幅するどき氣合身にひびくなり
櫂かの秀ゆを渡らふ風の光するどし黒き烏子を寄りつかしめず
吹きおこり逆毛だつ山や松杉の重なる音のうちひびくなり
清稚き子ろを首うち恥ぢざりし藤井紋太夫を刺したまひけり
年若く死にたる妹をりふしやわが子の顔にあらはれて消ゆ
父母のくらしきたりしなりはひにわれは生きつつ子らをはぐくむ

妻二人の子を残し死す

簞笥よりとり出しし妻の着物よりすこやけきころの體臭にほふ
袖の振あかくすこやかにくらしたる妻た顯たちくもよ紅絹を賣りつつ

亡き妻に似合の模様と話しあひし古濱小紋をけふは賣りたり

妻を子を保険に契れしめて窮りたる生活しのがむと書もよま
ざりき

亡き妻の簡易保険金にて買ひ入れし品の値上りに生活くらゆるぶか
わが妻のいのちをかけし金をもて仕入れし品を店に積みあげぬ
小遣をわれに貰ひに来る子らは亡き母のことを言はずなりたり
亡き妻が抱き寝しにける幼き子その姉と寝をり廣き座敷に
幼らはずむりをよせて眠りけり亡き母の夢を見ることあらむ

大 瀧 晴 子

辛うじて書き上げにける子等が文字急ぎかかげてうちつどひ見る(書初)

二女朋子はからずもかしこきあたりより御召しの御恩命を蒙り
東宮殿下の側近に御奉仕申上ぐることとなる

身の限り心の限り説もて仕へ奉れとひた祈るかも

大竹 島 緒

羊齒しだの葉のすでに色づくみ山路の細路を來て海に向へり
暮れてなほしまらく保つ空の色淡き光はすでに秋なり

大 竹 毅

父は野井戸に身を投じて自殺し姉は傷心の極氣が狂つてしまつた

たはごとを言ひてわめきゐる姉見ればぶちのめしたき思ひなしといはなくに

芳子姉は自分が六つの時死んだ

うつしゑのわが姉見れば額かぶかがみの女の童わがなり清すがしきそのまみ

大 谷 嘉 助

石見の海

あかあかと海に没る陽の大ききよ二百十日の夕空晴れて

自然兒のひたぶる心一向ひたむきに祖國日本をたたへたまひし

大谷 泉

つばらかに山の爨みゆ雪はれて朝あかるき安達あだ太郎たろうの山

雪白き吾妻のねろに影をおとし雲の過ぎゆくはさびしかりけり
大谷 多香子

尋ねあてし家の小門はとぎされて青葉の奥に時計なる聞ゆ

大谷 典彦

朝まだき歸り來れば大阪のくろき藁に日はまだてらぬ(歸省)

大谷 雅子

ふるさとの春たけにけりこの夕べ食くす筍は齒にかたくして(歸國)

大谷津 照子

秋草のにほふ裾野をおしなめて霧たち罩むる中を吾が行く(赤倉行)

大知 正夫

白湯たぎつ音を聞きつつ病室に素枯れむとする葉牡丹を見つ

大津 哲緒

うしろより望郷臺に登り來し人は言ひ出ぬ空の暗きを

夕汐の荒きに浮む海鵜鳥一羽鳴きたち翼光らす

大津 晴朗

もののかげ日ごとに深みゆく見ればつくづく秋はさみしかりけり

大津 はる子

傍らに新聞よみに來し姉の化粧ほの匂ふけさの秋風

叱る人なくて朝寢の床の上に氣儘になりし身をさびしめり

大塚英都代

たなぞこに數へおづおづと出す人の錢は藥價の半ばに足らず

大塚喜一

芍藥は花のおもみに倒れかかり辛うじて保つ土との隔り

雪ふりて瀬鳴り乏しきこの夜らは峽間はざまのうへに月おし照れり

向山の木ぬれ明れるを見つつ來て耳に遠ぞく山川のおと

芍藥に雨ふり注ぎくれなるの莖ながの花相觸れにけり

大塚楠緒子

いつの間に咲きて散りしか苔の花それはた花の數なりけむを

胡蝶さへとはじと思ふ花の中に小さき花をわれぞ見出でし

足折れてとべぬこほろぎヌカもまたこの秋われに物思へとか

來し方を行末をはた今の身を思ひくらべてみる夕べかな

今日は過ぎぬあすも斯くてと見つめたる燈火風にきえがてにする

語れども心汲まれず聽く人のわき得ぬやはたわれか狂へる

櫻花さきみちしより木のもとの莖は人にふまれつつのみ

書の中にはさみし莖にほひ失うせぬなさけかれにし戀人に似て

人のゆきし遠き國べのとほどほにたよりあらぬ頃を秋の風ふく

うらがれし林のうしろ薄雲のゆきき見えすく秋の暮かな

人を見しところの景色それとなく友にかたりて消す思かな

人つどひさざめく聲につつまれていよいよ我ぞさびしかりける

雛あまたかへしつるより鶏の猫にもおぢずなりにけるかな

しばし世のつらさ忘るる眠かなこのまま息のたえよとし思ふ

大塚 喜十

けふのみの吾が獨り身と思ひつつ遙はろに仰ぐは君が家の邊り(結婚の前日)

大塚 五朗

身を愛しむ心切なり街を來て航空標識燈しばし仰ぎぬ

山行くと心ひそかなり行きあひし人に禮みやして道をゆづりぬ(洛西嵯峨)

ひそけさや杉の葉に湧く夕霧のすでにかすかにしづくしそめたる(比叡山)

さびさびと降りてすぐやむ冬時雨寒けき空のまた見えて來ぬ

大塚 泰治

妻入院す二首

苦しさを訴へやまぬわが妻にこの夜の長さ朝となりがたし

あかときと白みそめたるひむがしにほのかに焼くる雲はたのもし
樗と松二もとしげる庭に來てつくつくほふしあしたより鳴く

曾 爾 村

峽の空雲多くして日の照れる遠き伊賀見の山ぞしたしき

父死して十七年 一首

父の顔思ひ出でがたき今にして父の性格ぞ心にうかぶ

忘れしこと思ひ出ださぬに似たりけりこの幾月か妻を叱らず

波 豆 村

青田の中をバス行く道は平凡にてめづらしきごとし理髪店あるは

室 津

今の世の遊女を夜の町に見き現實といふはみなあはれなり

秋づくこの海濱の岡の上にほしいままなり臭木のしげり

交野村二首

上田より下田に落つる水ながれ蚊帳つり草かむらがりて生かふ
ま晝鳴くからすの聲はあやしきか甘南備山の方にあたりて
身にしみて心にふることもなし雲かげ淡く土の上に消ゆ
今朝までも雪降りし空と思ほえず月すむ空になびく雲あり

二二六事件一首

戦ひは東京に起りたりといふひそかなる聲ひろがり行きぬ
槇の木の新芽の立つはおそくしてすでに梅雨降る雲うごき初む
昏れそめし草むらの中にいつまでも石原しろしせまき石原
たけ高きよもぎの裏葉白く見ゆすでに昏れたる草むらの中

大塚 武 司

架橋工事に働く兵ら見て來り午前十時よりの講義に臨む

解剖臺に横たはる頬に白粉のかすかに残るを見るははかなし

大塚 虎 雄

わかき日の木登りの木はいまだあり母に會ふごとなつかしきかな(歸省)

春淺きハイデルベルヒの城に來て石にわが名を刻みけるかな(ラインにて)

大塚 文 野

居睡りし吾れに休めとのたまひし母はその日のゆふべ逝かせし

一生ひととをば働き通しし自が爲に母は何をかなし給ひけむ

大塚 政 光

吹き曝れて廣き河原を片よりに流るるみづは寒く波立つ

川みづの流るるままに波立ちて弱々しくぞ冬日かがよふ
野づかさの櫟林を鴉立ちさむげに羽振はく夕やけ空に

夕かげの庭やぶぬちに花白く木莓咲きておぼつかなしも

蒼白きさぼてんの花に來し蝶のとまるかと思ればとまらで去りぬ

日昏るればよべと同じきあたりにて管蟲くだまきなけり庭の草むら

ひつそりと隣の部屋にゐし客もたちて行きたり吾が知らぬ間に(上京して)

庭先の露の瘦葉の土埃に白く汚れしはちぎりて捨てぬ

妻とわれ火鉢かこみて暇ありかくあることの久しぶりかも

省線電車しんせんの窓より今日も吾は見つ煤けて紅き街の没り日を

書きものにふかす夜つつき立居にも衰へ見ゆと妻に言はれぬ

代搔きし水田の濁りやや澄みて風に芥の吹かれゆくなり

着膨れて靱干しおはす母上に朝の日ざしののどかなるかも

終列車待ち侘び居ればこつとりと切符賣場の窓明きにけり

馬居らぬ厩舎は廣し氷りたる馬糞の上に鼠遊べり

碎氷船入り來る沖にさむざむと光りて冬の雲は動かず

大 槻 一 夫

鞍馬より大比叡かけて雨脚につつまれし中のしづけさにゐる(比叡山夜營)

大 槻 俊

白花の山梨のたわむ梢より雪はだらなる山を仰ぎつ

大 辻 美 枝 子

吾れに似ると人皆言へり母上の若き姿は見れどあかぬも(母の寫眞)

大正天皇崩御

大 坪 純

うち伏して嘆きかなしむ國たみの息嘯おきその風は土凍らしむ

大 坪 甲 一

死にし兒の頬に顔よせて妻の言ふ言葉を聞けば我も泣かるる

大 坪 直 子

大いなる月は岬の上にあり港よりきこゆ帆をあぐる音

巢より出で松の梢に並びたる五位鷺の子の黄なる脚見ゆ

秋の夜の風ある空を鳥の聲遠ざかりてはまた近づきぬ

大 坪 葛 子

死にゆくところ定まりし子と共に心耐へつつ夜を經むとすも
産みの責めふかく負ひつつ病みはてて足なえし子の足さすりをり
歳暮さいぼの街心ひそめて歩み來つ車馬絶えし間を冷雲院に入る
白椿花明りして落ちつげり室に燈ともす日中のあらし
汐入の川の干汐の晝下り橋くぐりくぐり家裏とほる
敷き藁に水しとどなり根つきつつ根もとさびしき白瓜の苗

大 坪 富

切りいでし齋火いひに燠の燃え盛りふつつ跳る釜の粥竹
夜もすがら齋いひごもる神の前にして心かしこみ粥竹を割く
夜をこめて占うらへひそめし卜事うらごとを今朝の朝明あさけに言ふれにけり

海の面に紛れむとする魅ひくし潜水艦は潮に迫りて

み吉野の山深く來て吉水の大ましどころ見ればかしこき

枯草の崖の高どに風とよみ降り來る粉雪土にとどかず

大妻 一枝

山峽の空に大いなる雲わきて部落一つはかげりけるかも

秋晴れの湖の空氣清くすみ對岸の馬のいななき聞こゆ

大友 喜助

耕せる畑の上に雪置きて朝閑かなり柵あとどころ(厨川柵安倍館趾)

吹きそへて松風聞ゆ山の上山の麓とひびきわかれて(勿來關趾)

大友 泰助

蝶々のもつれつつ屋根を越えゆけりこの裏道の眞晝ひそけし

閑古鳥しきりに鳴きて高原のコンクリートの厩にこだます（牧場）
ほととぎす身近に鳴きて曉の草木の動き目に立ちきたる（栗駒登山）

大友 忠 太

北上の流は長し此の國の兵士強し馬もたくまし
君がよはやちよと歌ふ海の外のみ民のこゑをラヂオにぞ聴く
ちちのみの父の怒に吾ふれしその日も戀し年ふるままに

大伴 貢 吉

次男祥雄誕生

大御代を繼ぎて統べさす日の皇子の御楯とならむ男の子生れたり

二・二六事件 一首

兵に告ぐるラヂオに額たれて聲のみ泣きぬ妻見れば妻も

遠き方に新議事堂の尖塔のさしとがりたる寒き冬ぞら

野中大尉自決せりといふ貼りビラに心せまりて眼を張り見なほす
あかしやの落葉を透きてさす日影鶴の卵は眞白かりけり

さしのぼり月まどかなる丘のうへ草つけ馬のぼかりぼかり來る

平泉中尊寺の金色堂

年の行き幽けかりけりけり木もれ日の御堂の屋根にさして見る見れば

伊勢參宮

曉ときの齋庭すがしもひそやかに白丁は拾ふこぼれ紅葉を

この林泉に紅葉をとほす夕日かげ浮きくる鴨の片羽光れり(曲玉池)

羽たたきて林泉の上ひくく飛ぶ鴨のしづくたまゆら夕日に光る

大 鵬 芳 影

自動車のヘッドライトにてらされし時雨は白く筋光るなり

大鳥居 金一郎

ふつかかけの雨あわただし屋根上の南瓜の臍もみなぬれにけり

シベリヤ出征 三首

水汲みの女とふたりふみのぼる五月の朝の浦鹽の山

雪の原向うにひとつ家ありて日の丸の旗がぼつちりと赤し

いつかしら死んでゆくぞと肩打てど友は一心に飯はみやまざ

萬作の納屋のうしろにうす黄なるまこもは咲けどお光はあらず

大 西 祝

駒なべて大路をわたるつはものの毛衣しろく雪ぞかかれる

獨のみ病の床にふすときは何とはなしに物ぞ悲しき

ひむがしの窓をあくれば豆の花さける小道に蝶の飛ぶ見ゆ

しづかなるいほのうちかな春雨のふるとはすれど音もきこえず

古の聖賢ひじりの書ふみにむかひても君をし見ねばさびしかりけり

寺々のつとめのかねの音きけばはやあけぬらし長きこの夜も

なきわたるからすの聲にいねざりしこの夜あけぬとしるぞ嬉しき

まくらべにものはいはでもしる人のありとおもへばうれしかりけり

しづかなる月の光にながむればわれもほとけにならんとぞ思ふ

大西伊三郎

いだかれて位牌もてるはまさしくも幼きわれやこのうつしゑに

洛西嵯峨に遊ぶ

北嵯峨の藪けの秀けの上に見出でたる晝の三日月ときに見うしなふ

兄亡き後

師の前に見せじとあるにあふれくる涙は手もおしぬぐひぬる

兄の追悼歌會のかへり京極を通りて

京極の夕べにぎはふ人中よ笑みつつ兄のいで來ぬものか
骨壺の中に片よる兄の骨わが持ちかふる掌てに感じける
電燈にこの夜動かぬ秋の蠅をはじきとばしぬ壁の際まで

大西耕三

今にして三年の後の世のさまをしかと言ひ得る人ありやいな

大西正一

未だ霽れぬ朝靄ながら麥の穂は靡きて風の明るく渡る

犬蓼の花のつづける河沿ひや今日かへり來てこの道長し

大西貴美之

庭樹々の影うつしつ自動車のヘッドライトはすぎぬ闇の障子に

大西天陽

四國路よ宇野のみなとに入る船にあまたも見ゆる藺刈人ども(宇野棧橋所見)

佐柳島手島栗島高見島島々こえてさぬき富士立つ(鹽飽七島)

あかねさすひうちの灘ゆとほ霞む伊豫の高嶺はくもの上に見ゆ(燧灘)

大西節

應援の辯士熱して去りし後に瓶の白藤さゆらぎやまず

福島縣四倉海岸

重々と一日の曇り昏れそめてさびしきこゑの猫鳥すぎぬ

猫鳥は岬の山に群れるしが長き汽笛にみだれ立ちたる

大西 不歸

フィリッピンにて一首

水牛の背にたはむるる兒ら四人落ちむとするが手を伸したる

ひらひらと漁師の手より捨てられし河豚はふくるる夕陽の砂に

大貫 迪子

この家に亡き父の魂はとどまらむ夜深き闇にたてる大屋根

大野 定

生命死せる友を葬りてほろあまき筍飯を食ひをり今は

大野 一雄

むさぼりてよむ汝が文の短きをもの足らず思ひくりかへしよむ

窓の外を戦車とどろき過ぎつれど疲れて睡る戦友は目覺めず
防空氣球の昇騰終へて落付けば夜霧冷たく流るる覺ゆ
防毒面外し終りて草の香のしるき大氣を胸ひろげ吸ふ

大野 皖 司

樺太放浪吟

日にけむる能登呂は長し昆布とる亞庭の灣は夏も寒かり

みちのくの旅にて

遠山の雪のかがやきひるたけて田のかげろふに鴉あそべり
ひつたりと兒はよりそひて寝ぬるなり秋の夜寒の親しまれ來ぬ

大野 保

やすらけくよみぢはゆけと小さなるもろ手くみやるわれとわが妻と

馬うりてすでに久しき厩さへ人手に今は渡るべくなりぬ

今にしてこの家賣らば老いの世にいつちゆかむと母の嘆かす

大野千代子

去年の秋活けし萬年青のきほひたつ葉ぞりをみれば春まぎれなし
試験近き吾子のまなこの落ちつきて今日はことさら言葉少なき

大野虎治

病む我に就職話を持ち來り酔ひてゑらげる人を寂しむ

おほかたのものは消化をせずなりし腹に生きよき魚を食ひたし

二つゐて暮鳴くきけば井戸の邊を離れて遠く鳴き行くらしき

汗あえて枕をはづす曉の疊の上に啼けるこほろぎ

諦めよあきらめよと母がいふこゑを血を喀きながら我はうべなふ

日に幾度通ふ厠に新聞の相場の記事を我は讀みつぐ

厩馴れぬ我家の牛の啼く聲を朝飯あとの身につかれ聞く

大野 信 貞

冬枯れの刈田の畔の野火の跡櫛子は黒くこげのこりたり

冬籠り春近づけば納屋ぬちに篋の双のくもりをぬぐふ

ながぶりにはこび捨つべき時をなみ納屋の蠶渣はいきれてにほふ

いそがしき蠶上族に一日まぎれるし人の上の事は夜更けておもふ

かたづけてひろき土藏なり父上と暑き日なかは入りてやすらふ

日もすがら雨にをぐらき納屋の中地唐をすゑて魚粕搗くも

牛ひきて夕べを下る薄原いつしか蟲もなかずなりたり

いく日のしぐれに濡れて干る間なき蓑は着ながら今日も桑摘む

薦張りの假小屋さむく雨ふれば一夜火もやし蠶まもりぬ

明日は朝より馬に搔かせむ田をめぐり夜水ひき居れば月いでにけり
春雨の今日あたたかし納屋ぬちに一日薄着になりて米搗く
あさな朝な庭に散りおく楢櫨の落葉は掃きて牛に踏ましむ

大野 白 雨

雪解くる軒の雫の落ちなづみ夕寒くしてつららとなれり

大野 富美江

しづしづと河口に入りて船おそし鐵のにほひの流れ來にけり
空あれて雲あしはやし山根よりひくく出で來し月の大きさ
横雲は吹き寄せられてうろこなし中空にさゆる月のするどさ
あわただしき日本橋通り夕ぐれて灯をつけし店の干魚光れる

大野 文 雄

着かへむと野良着を脱げばほろほろと糺こぼれたり疊の上

春繭の初相場よしと聴きとめしラヂオニユースを村にもたらす

大野 誠 夫

日ごと來て釣する人のおびただし或はあらむ失職の人も

大野 み どり

竹林に竹をゆさぶる童子ゐて幼き聲のひびきくるなり(相模の山路)

朝なさな行き逢ふ若き將校を擾亂の街にふとおもひたり(二月二十六日)

山の上の寂けさにゐておもへればわが愛憎の心をさなし(相模嶺秘唱)

野の草のあえかにもみぢするみれば心すなほに生きたかりけり

いさぎよく人ゆるさむときめしとき涙は落ちぬ草のみぢに

豫審免訴となりて

大野 默然 人

検事室のすだれ戸あけて入りしかばかしこまりゐるものよわが父
ひかへ目にこゑおとし吾を叱り給ふちちのみの父の言葉に泣かゆ

大野 郁子

萼の花眞白う咲きぬ乳匂ふ牧場の家に夏の雨して

大野 義雄

谷 邃く熊笹ごもり行く水の閑かに山は夕冷えそめぬ

鶺鴒は白のさし羽のくきやかに水切りにけり崩るる光

大埜 間 霽 江

往診を夜半にもとむる電話の鈴わが家内にひびきわたれる

兒を抱けば乳のにほひのなつかしくわれの心の素直なる朝

大場多美江

この町を通りぬけなば大いなる海ある如く思ふ夕空

大場寅郎

追門こすと音もとどろに流れ入る潮の迅さは眼にとどまらず(大鳴門)

あやふかるいのち保ちしわが妻よ日をまぶしみとまばたきにけり(妻病む)

眼のまへの夜霧うごけるひややかさ川瀬のあかり遠く見えつつ(上高地にて)

きぞの夜の荒潮波はこの路を越えてぞ落ちし蘆群の中に(石津川口)

小栗栖の灸に通ふちさき馬車堤の上をかけゆきにけり(山科街道)

鴨のむれ鳴きつつくだる湖ぎしにうつろひゆけり寒き夕日は(諏訪湖)

人ひとり通るばかりのほそみちがおのづからあり深雪のうへに(木曾路)

しぐれ雲ふりこぼす雨は谿あひの木群にあらき音立てにけり(伊勢菰野)

大場 益治

表情もなく踏切番は旗振りて夕暮時の雑沓を斷つ

大庭のぶを

河上は月夜明りとなりにけむかつここの聲折々聞ゆ

大庭 泰久

うち連れて牛は川瀬を涉りしが山羊は川邊をなきてのぼりぬ(遠賀川)
風やみて葦生のそよぎしづもれば炭坑まの機械の音たかまりぬ

大橋 倭文子

熊笹にさし通したる魚さげて砂ふみ歸るとなり村より

野の小屋ゆ朝鮮をみな出で來り青菜を洗ふ前の流れに

わが横を通りすぎたる男一人野の一つ家にはひりゆきけり
縁に出てつくづく見れば松山の梢はなべて動きあるかも
釘にかけし病む兒の制服の薄埃起ち居に見つつ涙ぐましも
通り來し湯の町の道白々と下深く見ゆ高き驛より

大橋 邦喜

高原の朝の空氣にとよみくる送電線の音はろかなり

大橋 光一

吾が乗れるバスの停れば動き居る前窓掃雨器ウインドスクリーナーの音聞ゆなり

大橋 松平

父を悼む

青空よ父の薬を提げ持ちてわれの生活くらしは貧しかりけり

綺麗になつた綺麗になつたとなでて居り父のあたまは冷たきものを

結婚以後

あめつちの大きき力のことごとを身にあつめてぞ妻まく我は
はらからが睦みつどへるふるさとのこの大き家に妻まく我は

世のつねの妻に倣ふなますらをの望みをわれにとげしめよ妻よ
呀えわたる月の下びにいとせめて妻にやさしく物は言はばや

青田の面見つつしあゆむわれと妻と眠りたる兒をこもごも抱けり
ふるさとの青田の原に兒を抱きて立ちたる妻のけふ美しも

門川のすがしながれを汲み來り夕べは庭にまくべかりけり

門川の淺き澱みに夕されば馬ひかれ來て洗はれにけり

日とともに嵩むのみなる負債のことおもひつつ眠る癖つきにけり

足らはぬに足らふ心のくせとなりわが貧しさのひとり樂しも
わが家に米のなき日は米のなきことを歌ひて心たのしむ

亡兒の夢をみて 一首

死にうせし兒等と知りつつ夢の中にその兒等が手をとりにて歩めり
新舊の歌論騒然たり人間の歌を歌ひてわれあかなくに

上京前後

安らかに生きむと思はず東京に生き悩むときを期しつつゆかむ
街上に地圖披きをればわが前につきつぎに來てタクシーとまる
辻々に立ちてひらきし東京地圖いたく破れぬ東京地圖あはれ
はづかしきほどには饑ゑず貧しとふ言葉はいまだ遙けかるらし
つかれはてて歸ればすでに夜ふけなり飯食しをれば地震ゆりきたる

持てるものつぎつぎに家に減りゆくややうやくおほゆる心のたしかさ
糧かひの代たらぬを言ひてわれと妻とこゑほがらかに笑ひてぞ居る

上高地白骨抄

霧の上に大なる山のあらはれてくろぐろと天に傾きて見ゆ
溪風に吹きあふられて舞ひあがる紅葉を見つつわがたちつくす
きぞの夜に穂高の嶺につみし雪あをみて照れり晴れとほる空に
夕寒く時雨のふれる溪みちの草に顔よせてその根をぞ掘る

先哲をおもふ (地動説の二偉人)

まさに我大地動くを信ぜりと焚刑ふんけいの囚ブルーノーは叫びぬ

眞實のことを書きしかば秘め置きて十三年を経きコペルニクスは

いまのさきわれをしみじみ見ませしが別れのきはのころなりしか
天地にたよらむものとのわれを起居たふみのまにまたよりたまひき

遺骨を携へて歸郷す

東京驛にて繰返し繰返しおもへるは旅費節約のことに盡きたり
三年みつとせぶりにわれは歸り來ぬわが母も歸りたまひぬ悲しきものを

非常時吟

叛亂部隊の歩哨立ちたる街行きて氷りし雪を暗に蹴散らす
新聞雜誌むさぼり讀めど問題の本質をつく文字眼にふれず

大橋 日名子

幼びてまりつき遊ぶその父を子等はすわりて見つつよろこぶ

大橋 眞佐子

たらちねの母が好みし紫の帯似合ふまで年たけにけり

籠坂の峠をゆけば下に見る深き溪間に白雲下る(富士山麓)

病院の高き窓硝子一列にひかりかがやき日は落ちむとす

女われ幾多の希わがひは健かにありといふことにかかはりてあり

しもつけの返り花して咲きつぐをあはれと見しが日々に衰ふ

所得税の免税點が下るとて我等が夕餉の話題となりぬ

大橋 正朗

水さび田に風の荒立つこもり音峽はせまはいまだ春にうつらず(塚原峽)

大橋 茂代

塀の外をかけゆく吾の幼児に氣をつけくるるとなたの聲か

山深き寺の座敷にわが子等の遊びすがしも草ならべつつ(鳳來寺)

大橋 良尙

磧の向ふ行く水もり上り石原越えてたまたま光る(天龍川)

大橋 綠葉

天ぎらひ降りふる雨はうそ寒し橋をながながと馬ぬれ通る

階段を昇る幼き手に足に溢るる力見つつたのしき(善子)

杉垣のいたく荒れたれば隙間多し知る程の人は聲かけて通る

病中の母

うかがへばうるみておはすみひとみを靜かにひらきなにかのらすも

大畑 千代子

並ぶこと幾度習へどいとけなき一年生は眞直にならず

大圃 哲子

朝戸出に遠山鳴の響くなり御影石落す加波山なるらし

大原 彰

小夜ふけを二人がひたる温泉なり處女ながらにいまは吾が妻(結婚當夜)
塗装室にストーブの位置を定めしが午すぎでより霏ふり出づ

大原 英三

かたつむり箱にしまひて子はいねぬ梅雨さむき夜の疊のしめり

大原 靖枝

霖雨が霽れし今宵の星空やすでに親しきま夏の配置

大原 弦月

草刈馬道いつぱいの荷をつけてゆさゆさと山をくだり來るなり

大原 しのぶ

こぼこぼと田水おちゆく音のして水芹の花のそこに咲きゐし

大原 潮花

霞みたる空に日の暈青くして松の花粉の匂ふ晝なり

大林 愛正

月の暈ほのかなる夜をいでくればまだ燃えのこる草の匂ひす

鹽見坂下りつつ見れば眼下の松の秀越に灘ひらけたり

大東 由造

見るかぎり虚しきいろに枯れにける草山の峯に雲を居らしむ(伊吹山)

われ一人きたり立ち去るうしろより夢殿の扉をかたく閉す音(法隆寺)

大平 松夫

崎山ゆ上れる月に片照りて浪はつめたく海礁にくだく

落雷にて送電線破損す

區間試送の指令發しつつ鳴りすさぶ雷雨のなかに陽のさせる見ぬ

大平登美子

屍體解剖實習

屍のにほひこちたしひそやかに手を遠のけてわれは坐りぬ

メスのあとかすか開きて皮下脂肪日だまりにして黄色くみゆる

大平櫟山

炎熱はなほ續くらし鶏頭の眞赤き莖を蟻のぼりゆく

大亦貴美子

御召艦比叡の雄姿まなかひに嚴かに黜し月の下びに

春日和に働く農夫の話し聲野づらを風に運ばれてくる

大丸 なみゑ

家計簿がびつたり合ひし嬉しさに夫の歸りの待たれてならぬも

大眉 一末

島山の熔岩のなだりは海に入り夕潮しろくそこにみだるる(櫻島に對ひて)

洞なかに足をとどめてひそかなり蠟燭の火をつぎてわがをり(肥後白石鐘乳洞)

大 見 清

ゆるやかに藻草をめぐるいなの群の影はもつる底の砂地に

目の前に向きをかへたる一群のいなの行手のさざなみの影

竹群を流れ出でたる眞清水の梅の林に入りてかがやく

大 宮 穂 芳

蠶室に舞ひきし螢そのままに見逃すまでに疲れたり妹は

大村 吳 樓

石州三瓶高原

秋ぐさにあはれに心澄みゆけば山のすがたを手帖にうつす

秋の雲の水のごとくに過ぎてゆく天の花野に君を歎かむ(中村盛吉先
生を偲ぶ)

高原のとほくに照りて一すぢの水飼どころ居る牛もなし

熔岩に日のあたりゐるところより小鳥の飛びてまた寂しき

高山の清き月夜に憶ひ出づる朗かなりし過去にはあらず(志學温泉)

南 紀一首

熊野川の濁りを越えてのぼる船に盆棚のものただよひ寄れる

暑き庭にきりぎりす鳴き何事もなかりし家に歸り來にけり

舗装路に何にあふるる上水(じょうずみ)か朝の巷に踏み越えて行く

伊香保にて

ゆとりなき旅ををしむに伊香保呂の宿の疊の昏れきたるかな
湯の宿の黄にこもる燈に狭霧吹きこまごま吹きて山の夜冷えぬ

中村憲吉全集編纂に従ふ

寝不足を歎ける日記は山ぐにに歸りたまひし後もおなじき

中村憲吉先生を訪ふ

峽のおくへ退きゆく霧がまだ見ゆる廣き座敷へ伴れだち通る
しづかに病やしなへる君を見てそのゆふべには國境こゆ
先生に言ひたきことの何ひとついはず來しさへわがたぬしきに

布野展墓

峽ふかき山の墓原夕かげのときの間にして草冷ゆるなり

秋はやき狭霧に沁みて峽のやまの君が素墓すでに寂しき

明石を過ぎて土田耕平氏をおもふ

春さむき風は明石の門より吹き人をぞ歎くけふの所縁に
太寺に住みぬし人は遙かにて寒さ暑さを訊くこともなし

妻逝きし後

天の川とほく澄みつつ妻の骸焼くらむ焔いまぞ燃ゆべし
野牽牛花は白膠木を巻きて咲きぬたりぬくむ骨甕抱きて歸るに
墓間に盆燈籠の倒れしをいくつかおこしわが徘徊らふ
墓石を濕せし水が流れたる泥濘に香を炷きのこすかも

新聞社にて

梅雨あけのきびしき照りに疲れつつ病むとあらねば出でて勤むる

早曉三時を過ぎて夜勤終る

地階浴室の厚き硝子に朝あけて汗にまみれしからだを洗ふ

高壁の電氣時計に朝光あさひかりのしろじろありてわれは寢に來つ

輪轉機のおと震ひ來るベッドのうへしばし眠らむ沓下を脱ぐ

南紀湯崎

颱風の吹き晴れし海に白波の高く飛びつつ見ゆる鳥なし

高野よりたまに下り來しわが兄の法衣を脱ぎて暑がりにけり

阿蘇高原

肥後のうま日向の馬を大阿蘇の高原に放つ夏さりにけり

大村つる子

戀心切なくなりて今の今逢ひ度しと君に文書きにけり

起ちがたき身とは思へど現世うつしよに君ますかぎり生きたかりけり

松の葉の葉なみの亂れ目に立ちて今朝はた風の冴えかへりつつ

大村 信子

我がもてる螢の籠のそば近く池のほたるもきたり光れる

大村 松之助

かなし子をささげて見やる猿の群に仔を搔きいだく猿もまじれる

土地の風習土葬なり。葬儀の翌曉に長子その墓をおとづること
亦慣はしと言はる。一首

土ふかくきのふはふりしわが母をひとりしおもふあかつき闇に

獨樂どくがくの心こゝろいまや全く澄みいりて微塵みだれぬうららかさかな

いはけなく獨樂をまはしてしまらくを心さやかにわれは在りけり

ゆふぐれをまた啼きいでし小禽ありひと日あそびて歸りしならむ

よるふかくやすらふ耳に冴えわたるこほろぎのこゑは四方^ちにはて無き
灯を消せばこほろぎのこゑひたぶるにさわやぐ秋となりぬ都も

父母を託せる義兄急死してやむなく歸る

東京にともにあそびし誰かれのしのばるるかも星くらき夜は

新築の家に住むこと半歳ならずして遂にまた郷里を脱れぬ 一首

家ちかく水田に鳴ける蛙のこゑふたたび聴かむわれとしも無き
しづかなる水の音かな歸りきてゆるぶこころに佇みきけば

大震火の跡を

屍のにほひただよふ焼野原まぬがれ生きしわれのもとほる

焼け死しておほふもの無き屍に照りそふものか天つ光は

ながらへてけふしやすらふうつし身にしみじみと沁む日の光かも

大村 文子

洗髪かろく束ねて物買ひに櫻あかるき見附をゆくも

わが途のまうへの空にひろごりて一樹の青葉風にあそべる

こころよく立ち働けばくりやべの水のながれもうたへるごとし

ひさしより落つる雪解ゆきのたまり水みちびきながす流れをひきて

弟のあさげのしたくいそぎつつラデオの講義きれぎれに聴く

熱海に遊びて

丘の上の海藏寺の境内には梅雨じめり閑かにひろく海ひらけたる

山にかよふみちののぼりに双柿舎の對むかひなす柿のその梢えだみえくる

大村 由太郎

生れいづるよろこびをもちてをどるがに豆はころがる筵の上に（豆打ち）

子を負ひて妻は夜風呂にいでゆきぬこのしづかさを惜しみわがをり

大森 さなみ

遠近とちんの田にともしびの光り居り夜ふけをいまだ藺草ひぐさかるらし

大森 繁子

苗代の水すみきりてまきし粃の一粒一粒あざやかにみゆ

向ひ風に歩み來れるをみな子は瞳を細めてすぎゆきにけり

大森 すみ子

元三笠艦乗組水兵十三氏五十日の國葬期間を東郷元帥のみ墓
に奉仕す

夜をこめてみ墓べまもるますら夫がたむろのあたり月はほのけし

ひと年のみ祭 (昭和十年五月三十日多磨墓地にて)

國をあげていたままつりしかなしびの皐月みそ日ははやめぐりきぬ

對馬より徒歩にて參拜に來りしとふ人あり

はろばろとみ墓まうでに來しといふ對馬つしまの人に茶をすすめつつ

大 森 武

暇もなき友より借りしこの本は野にて讀みしか土の匂へる

大 森 波 奈 子

歸り行く一むれの人等ふりかへり大き煙突を見上げて行きぬ(火葬場)

大 森 弘

ふる雨に立ちぬれつつもおとなしく木につながれて牛のありけり
山里の冬はさびしも卵買ひ一人來しままくる人もなし

大 森 朴 堂

春、伊豆伊東町の近郊の山莊に移り住みて

庵する伊豆の横山櫛引の山のことごと木の芽ふきたり

大正四年秋大嘗祭の眞夜中南面神門に侍立して

火炬手の桃花色ごろも火照りして夜ふくる空を鵲の啼く

大屋 一三

猜疑の心ゆらぎもなごみてはさらに寂しくおもひしづめり

潰えそめしレブラ患者の顔みつつ憐憫のころしばしおこらず

大屋 一郎

ひたぶるに吾が歩みゆく雪夜道木原をこえて太鼓きこゆる

白馬踏破

上り来て眞下は霞む大雪溪岩一つ黝くかそかなりけり

雪溪に眞日てりみちて晝闌けぬ動きつつ小さき雷鳥の翳

大屋 重 榮

世に勝たんねがひ一途に生くればかけはしくなりし貌かほを妻のいふ
物をもちて人をへだつる習性を時に吾が上に見出でておどろく

大屋 正 吉

商旅 吟

發電所の鐵管そそり立つかたはらに細々と路をつけて人の住む
磬梯の遠くのびゐる麓まで眞平の雪は踏むことなけん
給料の渡る三十日と思ひつつ生卵割りて宿に飯を食ふ

商旅の途次寸暇を得て赤城山に登る

沸き立ちてひた押し來たる雨の雲山の雜木の右より左より

白樺にはじく光のかすかなり上州沼田町影の如く見ゆ

黒檜山地藏ヶ岳を噴きあげし火口の跡は青き湖(大洞湖)

大 矢 都 根 夫

杳掛町にて

おりたてる町のしづけさ古びたる家並なみをぬひて山の霧ふる

岩原スキー場スキーヒュッテ

夜を覺めてさえざえ光る窓の外の雪は身近く迫るをおぼゆ

大 矢 美 佐 緒

瀧なして巻きくづれたる大き浪しばしたゆたふ深き蒼さに

砂山の小松の振りの面白さむきむきにして皆丈低く

大 矢 道 之 介

蛾のかげが部屋いつばいにうつるゆゑらんぶの灯をば消してしまひぬ

妻よ風見が空で軋る音のひやうひやうと寒ければ灯をあかくせよ（不眠症）

視野のびて青空につづく新開道路ばすの點景が風をきるなり

どの家の窓も開かれあをい朝の風はほのかに花の匂ひす

西日ざしまぶしみ通るをとめらの歩調そろへり秋の十字路

大 矢 流 木

歸り住みてふたたび夏はきむかへり遠蛙きく夜ごろとなりぬ

春あらしやうやく風ぎし日の夕べ黒きマスクをかけてわが出づ

大 八 木 亀 太 良

川底にゆらぐ藻草の間々に獨り泳ぐ魚群れ泳ぐ魚

大 藪 翠 光

門口に見送りませるたらちねをかへりみずして遂に來にけり

大山かをる

大いなる牛のたりのたり行き過ぎぬのたりのたりとついで行きたし

大和田建樹

花いばら薰るあたりに取る匙の露ふきこぼす春風もなし(西洋料理)

大和田蔦子

たちどまり提灯を闇にかざしつつわが前を馬がすぐるをまちつ

大井廣

やはらかにふくらみきりて形よき白磁の瓶に恍としてむかふ

床にあればありて白磁の花瓶の耀りほのかなりただ恍として

水たまる池のみぎはに莖たてて五尺におよぶかきつばたの花

水をきりてあやめ花さくみな月のしのめ時のこのふかき空

花をとぢて眠るに似たり睡蓮のこのやさしさをかつて知らざりき
くれかけし水にひそかに睡蓮のつぼむころをかぎりなくおもふ
遠くなりし世があはれなり橋寺の斷碑のもじを誰かうたがはむ

灯をつけて心ほのかなりこの夜の床にすわりし壺のくらき影

海のはてに何もあるなきうす明りいのち寂しき冬きはまりぬ

すがれはてて雪のなければなきゆゑに素莫として冬ひかりなし
虚無に似てひとりおもひはきはまりぬ冬至にちかき空のあはれさ
きはまりし冬至の空は西方の浄土のごとくひかりはるけし

かりそめの契りならねばつらしとて憂しとていのちむつび争ふ
手になでてきめもこまかき端溪たがひの硯のはだは濡るるごとく思ふ

端溪の硯をしばし手になでて人のはだよりかなしと思ひき

ほれぼれと硯のはだをなでてをり春もちかづく夜のしづかさ

生きてゐるもののごとくに端溪のはだへに露をむすぶかなしさ

大井重二郎

裾ひろく展けし原の一つ道に夕陽さしあかり人の行く見ゆ(狩勝峠所見)

三輪が崎白浪騒ぐあら砂に芋をつくれる畑つづきたり(紀州三輪が崎)

大井秀子

はぶ草は夕べ静かに葉を閉ぢぬ呼吸いづくものの親しみを思ふ

大井田 齊

參道のさくら並木はことごとく青葉となりて日のあつきかな

閑古鳥啼けばおもほゆ曾て居し津輕の奥の山蔭の村

大岡啓二郎

刷りあげし死亡通知を揃へ居りインキすこしくうすきに過ぎし
マツチレツテルに文字を刷り込む賃安き仕事はかどらず日暮になりぬ
根つめてわが坐りゐる仕事場に這ひ寄りし兒を妻に除けさす

大岡博

時雨ぞら降らむとしつつたもちをり八つ手がこぼす花のひそけさ

太田郁朗

けふはよしけふはよしとて來し友をひきとめてゐて熱たかめたり
生れしは男の子男の子とよろこべる母のみまへに血は咯くものか
うへの子はうすうすながら父が顔今死ぬるともおぼえてをらむ
くる友もくる友も妻を外によびてはげますらしもよからぬかわれは

妻に乞ひ母に乞へども瘦せやせしわれに鏡をみせてくれぬかも
大しけのまひるさみしくにはとりのきもを煮て食ふ妻とむかひて

太田 うめ

腎臓摘出

よかつたよかつたしつかりせよと人みながいふ中にして吾が子もありぬ

太田 興夫

一筋に雨雲の上のびにける照空燈に雲渉る見つ(防空演習の夜)

月残る朝けの谿をゆきし時鴉さかしまに田に降る見つ(有馬温泉)

太田 幸一

はるかなる荷馬車の音のたかだかと沼にひびきて夕さりにけり
とつ國の皇子迎へむとわが大君東京驛にみゆきしたまふ

松の芽を汝が肩に飛ばせたる事も何時かは思ひ出づべし

太田嘉都子

睡蓮の葉に掬ひあげしおたまじやくし小さきながら命ひらめかす

太田五郎

火の山の麓の路に手を振りて別れ來にしは昨日のごとし

國へ歸る愁ひ心はこの窓に雪どけ水のにじむをみてをり

ふるさとの山のいく重の色ふかき檜原のかげにかくろひてゆく

太田青丘

歌に着くことも一つの煩惱とおもふ夕べは雲を見てをり(病床)

いたはりつつ且つ勵ましし恩愛に思ひ到れば荒き涙あり(父)

たぎちつつ岩間を下る溪川の濁りもうれし春となる水

大いなる志さへ世の塵にまみれてゆくか人の横顔

ずつしりとかぶさる雪を全身に感ずる如しいねつつもなほ

青年の感激だにも日常のこととしなりて世に染みてゆく

いささかの不平はいはじ大いなる世の憤り我に來れよ

い向はん道に怖るるものはなしされども思ふみな畏るべき

太田進一

目をつりて命絶えたる母の顔が記憶にありてつねに怖れき(幼時)
にはかに風おこりたる谿間より隧道とんねいの中へ霧をふきこむ(天龍遊行)

太田節子

まむかひの乗鞍山に雪明り幽かにたもつ月夜となれり

いかづちの音遠のきてまさやけき月夜となれり筑摩つま國原

山の上の千島桔梗のむらさきの色おとろへて實を孕むあり

太田節子

寒明けの薄日うけつつ籠のうそ低くはあれど鳴き初めにけり

太田素俊

並み立てる山脈やまなみ見れば冬の日の乏しき光移りてゆくも

太田たけ穂

向つ丘の木立まばらなり煙幕に見えかくれつつ兵突入す(演習)

北満匪賊討伐に小隊長田中中尉を失ふ

腹部貫通銃創の血はぼたぼたと擔架をもりて雪を彩る

太田忠太郎

傷つきて色うしなひし妻の手のかき抱くわれにひしとすがりぬ(妻の奇禍)
坑内の人に馴れたるねずみらは足許の飯ひそやかにくふ

太田 利衛

いくたりか我よりほかの母となり老いていまさむ母し偲ばゆ

故郷は夜な夜な蛙鳴くといふ友のたよりは家思はしむ

ふるさとの妻子らおもひ夜を起きて遠き湖田づみたの蛙をきくも

若く逝きし父を思へばよはひ長く吾は生きなむ我が兒のために

太田 文平

杭州にて一首

西の都サマルカンドの街よりもにぎはひしげしとポーロは書きぬ
冬枯れの山路に拾ふ小さき石に一つ貝殻のつきてゐるにけり

太田 稔子

をみな子はただいたはられ生きよといふ母の言葉をききわけてをり
何するとつけしあかりか高窓は再び暗くしづもりにけり

太田 ふぢ子

白ばらの露はこの世のものならず光り冷たく指にふれみる
今朝少しウエーヴかけしわが髪にささばや露の白薔薇の花
むらさきの花に蔭あり光りありみつめてゐたり暗きころに
ひとすぢに人にたよりてゐるわれとおもふときしも涙こぼるる
海の色の日毎に變るさびしさを見るくせとなりて橋にたたずむ
芥火のけむり野邊よりながれきて春となる日の垣根をつつむ
水鏡のぞきてみたり晝の野の白雲すこしみだれけるかな

白雨ゆふのはれぎはきよき池水にむらさきながす花あやめかも

太田信

そそくさと焚ける圍爐裏に松かさのあかあかとして燃え残りたる

太田道子

軍港の秋しづかなり艦上の案内人の聲澄みひびく

太田水穂

ひむがしの天あまのまなかにしら雪の山を太しくうなばらの國

峯をゆく松のあらしの音さへやゆたかにひびけ濡るるおもひに

手に撫づる髪にもしめりあるごとし春となりたるこのあさの風

むらぎえて落葉の谷に雪すこしあるだにうれし梅さきにけり

さくらさく島のあらしに雲仙の大嶺のくもりよこたはりたり

みんなみの海のはてより吹き寄する春の嵐の音ぞとよもす

花に見いるけさのこころの空しさに揺れてぞゆきしありとなき風

ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらのゆく方もみむ

九百年松を爽めてふきたぎつ嵐に跡もとどまらぬかな(勿來關)

木蘭のはなを活けある花甕の照りくはしくて明るき瞳

つばらかにしろき齒なみのこぼれたるうす紅梅のひとのくちびる

たちばなの花にあらしのやや冷ゆるあさの納戸に袷着かふる

ひむがしの玉の宮居に皇子います五月五日のむさしのの晴

杜鵑啼く青みなづきのこもり水に生るる螢のいのちをぞおもふ

葛飾はあやめ田どころ水どころ葦あれば啼くよしきりの聲

髪あげて人のすずしき瞳かな鐵砲百合のはなひらきたり
まかがよふ光りのなかにあぢさゐの玉の紫ひややかに澄む
むらさきか紅かしぼりか朝顔の荅はあすもしらで咲くらむ

宇治黄檗山に潮音社大會を催す

七堂のからびし像に秋やけふ光りを入れて風のそよめく
説法の大方丈のしづけさにひらめかしたる扇すずしき
河上より篝火をたきてくだりくる舟ふた方に分れいざよふ
すさましくみだれて水にちる火の子鶉の執念の青き首みゆ
くぐり出てはつかにあへぐ鶉のくびのつぶつぶかなし水にただよふ
雷のおと雲のなかにてとどろきをり殺生石に歩みちかづく
雷雲のかさなり紅くすきとほり石の毒氣の面にふれくる

僧ひとりひる寐してをり方丈の廂ひましのうへのふかき青空

秋となる土のかわきやむらさきに澄む草の葉の影もこまかに

心とみに飢うるをおぼゆ武藏野のくまぐま晴るる日のひそけさに

秋の氣の裂けて鋭とごゑにもず啼けばもも草の實もしまるとききぬ

雨霽れて月に濡れづく石ひとつ流るるなしてこほろぎの鳴く

水のいろに月をながしてひとところ椎の隈せまどる銀泥ぎんじの霧

楚々そそときておどろがなかに葛くわの葉の秋をみせゆくおもしろの風

雲ひとひら月の光りをさへぎるはしら鷺よりもさやけかりける

塵ひとつとどめぬ空のきよけさをわがものにして月ぞ待たるる

あけぼののあしたの雲にけはひだつ黄色めざまし大りんの菊

星ひとつ青く明けゆく山際の匂ひにしみるきくの花びら

このあさの露にぬれづく大りんの菊のおもたさを手にささへみし
秋の日のひかりのなかにともる灯ひの蠟ひよりうすし鶏頭の冷ひえ

皇子御降誕あらせらる 一首

御日嗣のみ子あれましし悦びをつたへて太しけさのサイレン
冬となるひと日ひと日に艶まさる柚子ゆずの玉實たまごや霜にさえつつ
葉ごもりに隠れてありし柚子の實のひとつするどく色を投げくる
すすき山みゆるかぎりの銀の穂のまうへに高しひるすぎの富士
手をうてばはるけき方かたに山彦のこたふる聲をよすがにし住む
年ここに身にふりつもるしら雪のひかりのなかに目をしばだたく
ふかき夜のあかつき方かたの山の端はにひかりも暗くいでし月かな
おもひつくし恨みつくして長き夜のあかつきくらく出でてみし月

こがらしの吹き白^{しろ}めたる月ながら曙となる空のいろなり

日支事變出兵あひひ繼ぐ

日のもとの益良男の子はたたかひに赴くときしすでに神なり
関^{せき}のこゑにおくられゆきし兵のかほ目ざむるときにまづ思ひいづ
一瞬^{じゆん}にかはる危ふきたたかひの氣息^{きそく}をのみてゐる砲の口

太田茂一郎

御射山祭

みさやまの祭日けさは神酒^{かみさけ}あげて青茅^{あそち}の箸をそなへまをさむ

下諏訪高木島木赤彦の墓に詣づ 一首

赤彦の墓石のおもてつやつやし暮れゆく湖^{うみ}のいろぞうつれる
病みふして日あたりよきをよろこびし離室^{はなむら}も見ゆれ柿の木かげに

もやはれて明く日のさす田の水にかげひく苗はいまだ短し
おほははは倉の日なたに風さけて箒草をばもみほぐしをり

富士山吉田口

街屋根のなみつづきたる上にしも大きく富士の山はれにけり

太田 黒敏男

父とゆくわがふるさとの宇土の町たちよる家も今はあらなくに
立ちのぼる阿蘇の煙の夕雲にまぎれむとして天あめにたなびく

恩 賀 智

紀伊根來山

天正のむかし弓矢に滅びぬる根ね來とる二千の坊舎し思ほゆ

恩 田 藤 吉

流れのままに流れてゐたる鴨二つふと向き直り流れに對ふ

織 本 良 子

蟲の音の今宵はしげし隣家にをりをり聞ゆ朝鮮語の話

加賀美 はじめ

吾子二人と生別す

木槿の垣透きてぞ見ゆる吾子の家いねたるならむ物の音もなし

梅ヶ島温泉

谿間より吹きあぐる霧はたちまちにまなかひの山を白く包めり

加賀山 榮

風立ちて寒さにこもるこの日頃ほとほと遠き春を思ふも

雪止みて風いでぬらしこもりゐのころ虚しく午后をすごしつ

羽織ぬぎて心もかるしさ庭邊にふくらみ初めし白つつじの花

春風の海を見放くる山窪につつじは白き花こぼしたり

加古 未 四

人待つに所在なければたんぼぼの絮坊主など吹きたたせ居つ

餌をきそふつばくろの雛が巢の上にのびあがりなく嘴の大きさ

加瀬 幸 次

掛引の刹那にうごく微妙なる客の心理をあやふく掴む

きざしくる人氣の機微の瞬間を買ひまくりたる決断はよし

加 治 杉 子

崖下のここは涼しき陽の翳り木苺の花すでに闌けつつ

夕方の微熱のきざし感じつつ白木蓮の花を視て居る

よく效きくといへばいよいよ力増し肩たたたく兒よ力み居るらし
處女會の幹事といふがあはれなり愼ましく來て茶を注ぎ呉れし
我家に乙女となりし雇めひ女を今日かへすなり帶締めてやる

加地 富子

歴代の足利氏の像見てゆくに七代將軍は童子なるかも(等持院にて)
裏山に夕をとよむ風の音この石庭にももの影なき(龍安寺石庭)

加藤 意沙彌

東北地方大凶作 一首

東北の兵は強しと頼めども家族は木の實草の根をくらふ
みちのくの黒森峠越え來れば丸木を組み住める人あり

熊谷武雄先生逝く 二首

見知らぬ人等づらりと並びつ先生が常に坐られし大き爐のべに
亡き人が永く閱きて手ずれたる言泉はいかになりゆくらむか

雲の影すぐるうねりに海鴨の黒き頭うかぶつぎつぎに浮ぶ

夕明りのこる澤べの柴栗は葉裏の毬いぶのいまだをさなき

おのづから心ゑまるるこの小さき著物着すべき子の生なるるなり

加藤 和夫

永久にひかりへだてし地の底ひここ豎坑に息つくわれは(坑人生活)
つとめおそくかへりし友は部屋なかにどつかとすわりものも言はぬも

加藤 清介

脚疾にて病臥生活十數年未だ回復の曙光を見ず 一首

佛説阿彌陀經心經法華經と讀み誦めど心の空虛うつろ満しかねつも

化體神虛空藏なればと老いし母うなぎをば食べずうまきうなぎを
手鉤もてトラツクよりおろす油鮫棒切の如くみな凍みてをり

加藤 勘助

生きるより他に道なし今日もまた寝ねつつ一人物を思へり

加藤 清松

こがらしのふく日つづきて我が庭のかけひの水の音も涸れゆく

加藤 熊六

鋭角をなして上下する體溫表見つ病む日のなほ幾日か

加藤 玄裳

懺悔せむさはれ悲しやこの罪は來世をかけて我を離れず

君追うて行かばや海のふるさとへ海のあなたの死のふるさとへ

死にぬべしともに命のありなしを思ふひまなきまで酔ひにける
うすぐらき心のかげのありありと見ゆるがかなし水にむかへば
しだり尾のくだかけなきぬ伊勢の宮朝しづくする木のしたかげに

加藤 宏太郎

繪本もちて母に倚りつつ父われに來ぬ兒を見れば心嘆かるる

加藤 阜蓮

長病に瘦せおとろへしわが足をももに抱きてあたたむる母
のり越しておどろき降りし停車場の人氣少なき秋の暮かな

加藤 三郎

梢うねかすめつぎつぎわたる鴉みればくちはし長く陽にてらされぬ
うら枯るる蘆の穂なみの向うには冬菜ともしく霜かむりみゆ

桐の種のそこはかとなく吹かれとぶ静かなる日を出でてあゆみつ

加藤 参 郎

報告書の残り書き終へ夜ふけて宿直室の錠を下しぬ

椎谷しひのぼたにのくらきをのぼり朝焼けの雲みだるるをふりさけにけり

加藤 七 三

波蘭と露西亞の國境を過ぐ

白樺の林の中に鐵條網すこしつらなり國を境す

阿 蘇

蕨の葉しげれる丘を越え行けば童子がひとり牛糞を拾ふ

加藤 章 三

北の風ひと日荒れつつわが部屋にゆふべ掃きいだす砂おびただし

瀬野すぎて河内三原のあたりには曉かけて雪ふりにけり

加藤 杉 枝

ほめられし唯一言にはげみ持つ兒を教へゐて教へられにき

ものいふと見交す目さへおのづから笑みとなりゆくうれしさをり

加藤 助 三 郎

背後よりにはかに撃ち出せし機關銃吐く火はまさに吾にい向ふ(終夜演習)

塀つづく長府の街の午ふかし蟬なきとよむ人の家の庭(病氣全快歸滿の途次)

面にふるる空氣つめたし洋車(オトコ)に乗りて天下第一關を今くぐるかも(山海關にて)

塀の根に柳絮はきためてありければ泳(こら)へかねたるゆまりを放つ(鐵嶺にて)

なりとよむ船の笛きけば松花江(スンガリ)の結氷にはいまだ早き寒さか(ヘルピンにて)

帯模様(オビ)の如き地表がはつかづつ退(しぞ)きてぞゆく眼下はるかに(飛行機にて(家)屯より通燈へ)

上昇の如き衝動を感じたる瞬間に高度指針はいたく震ひぬ

午すぎは陽もうららかなれ踏みつけて硝子の如き雪もとけそむ(酷暑)

季節風夜はをさまりてこの宿舎に張れる鐵條網無氣味にしづけし(海州岩窟宿)

加藤 清 一

靄がらの山と積めるに日のさして霜げむりたつぬくとき日向

春祭ねりゆく山車がしの鳳凰の金のつばさに花ちりかかる

加藤 泰 三

谷底ゆ湧きたつ夜霧のぼりゆき尾根にとどけば月に輝く

加藤 卓 爾

春潮はみちたたへつつ岸壁に凍み凝れる雪の白きをひたす

碎き捨つる根雪の下に色鮮あまし年越し草か今年草にか

吾を待つと江別の驛の腰かけにつつましく小さく母おはしけり
夜の更に船まきすなり輓轡捲く馬はくらやみに圓ゑがきめぐる
一群の白鳥はわたれ白雲のゆきただよへる天の深處を

たちあふぐ天ゆく鳥の群聲のすがすがしきは聴けりと思ひし

興安嶺のまだきの森に焚ける火は今は踏み消し出で發たむとす

加藤 龍雄

諍ひて黙に居りしが夕空に虹かかれるを妻は言ひいづ

露おきし屋根に立ちいで仰ぎつる北斗にとり牧夫座見ゆ

加藤 妙子

善きことも悪しきことをもまねらるる吾が身思へばおろそかならず
一冬を越す教室なればこはれたる硝子障子に紙はりにけり

加藤 環

滿洲事變

宵口より撃ちつづけける砲聲は千山せんざんあたりと思ひて眠る
夕庭にしばし蟲が音聞ける間も威嚇の砲は遠くとどろく

妻入院

のぼりゆく保養院のみちに凝る雪の清くしあれば吾がいたいたし
今日も來て妻の病室に腰かけぬ朝やけしままの海の上の雲

加藤 千代

燈のもとに藍のかをりを繰りひろげ夏着を縫へばすすしき夜風
ひそやかに林檎商ふ店のうらは海峽の波しろく上りつ
聴き耳に入り來る遠き啼き聲は野越しの村の郭公の聲

加藤 知多雄

秋空の光見てゐぬ腰かけし石の冷たさを身に感じつつ

雪空の下を久しく行きし時もの言ひがたくなりゐたりけり

加藤 司

牡丹の芽十四五本もありぬべしひとかたまりに先そろひたる

加藤 恒二

秋晴の空ははろけし飛行機を見あかぬらしき子供らのこゑ

加藤 柚ノ實

昭和二年二月、大正天皇御大葬

大君のあがりの宮の大庭に玉敷くばかり零れる雪かも

眉引の多摩の横山とことにはわが大君のいでましどころ

たどたとど渡る淺川ゆく水のかへり來まさぬ大御幸かも

昭和七年十一月、今上陛下には大阪城東練兵場に於て近畿二府
五縣の男女青年團員八萬人を御親閲あらせらる

舉手たまふその白妙の御手套まさめにしるくたふとかりけり

昭和十一年十月、阪神沖に大觀艦式を行はせらる

茅渟の沖霧らへるなかにをこそかの影ぞたぐへる陸奥と長門と

大皇艦方向かはりたりかがやかに大き御紋章波に映えつつ

犬養首相宛變

まで聽かむ待てをといふを撃ち放つわが武士道もうつろひにけり

教育疑獄ありける時

まぬかれて恥なきやから玉銚の大路を行きてぬきあしもせず

選舉肅正を

いはれなく票を棄つるといはれなき票を入ると愚かさはいづれ

職を退きしころに

日並べて家居る父を幼きら出づるに入るに樂しめるらし

加藤 哲雄

朝夕に湧くさびしさは百姓のおのおのが持てる寂しさならむ

値ぎられてやすく賣りたる粗朶束に心のこしつつかへり來にけり

植ゑよ植ゑよとすすめられつつ植ゑし桑今はこぎ捨てん手間代もなき

夕月の光ほのけきとなり畑も人ゐて麥を刈る音きこゆ

戸の隙よ見えし月かげわらぢ一つ作るまを早や見えずなりたり

緞あふる唐箕たみの風にさゆれつつほこりづきたる白菊の花

心曲ぐる何物もなし山深く入りきて今日もひとり木を伐る

霜ばしら凍れる上に降りいでて忽ち白し朝のみぞれは

加藤 てるよ

家並低き町を出でたる明るさよもみぢ色濃き伊豆の山々

加藤 てる緒

ゆくりなく手ぐさに引きし蔓草のちさき丸葉ももみぢしてをり
屋根の雪落ちるだけ落ちし音やみてふたたび夜のひそけさとなりぬ

加藤 敏子

ひと一人思ひつくして生きてゆく女の幸をけふぞ知りたる
愛しまれて生くるをみなのおさいはひを思ひゐる日のあたたかき窓

防空演習

町一つ闇に沈めて空襲の夜空を荒く雨降りしきる

照空燈光り鋭く高速度の敵機捉へをりビルの眞上に

加藤 延年

若き日を捧げ盡して同志社に四十年近く我は經にけり

加藤 信夫

天さかる鄙のわらはべ胸高に袴を穿きて竝びたるかも

加藤 博陽

木蓮は天つ光にほのかなるまばゆさ見せて花ざかりなり

ちちのみの父に來るとてさしのべし吾子の日ぐれの手のつめたさよ

しら壁の冬の月夜となりにけり置きすてであるだいはち車

朝すでにうすら冷たく秋たけて茶湯の湯の氣たちのぼるなり（佛前）

移り來てひと夜をいねし朝めざめ工場の汽笛のいろいろ聞こゆ

宇野へ向ふ連絡船にて

旅に出るすこしさみしき心なりあかるき海に雨は降りつつ

栗林公園

風雲の夕やけ空はさむぎむしとほくみだれて冬山がらす

高松

海港に廣告氣球たかくあがりをり五月の海のひる風のいろ
まだ寒き春のあしたの日の光みち潮の川の長橋をわたる

阿蘇山

枯れくさの阿蘇の盆地にはろばろと早春の陽が照りかげるなり

朝鮮旅情

いにしへの新羅の王のみ墓べの草生に降りてあそぶかささぎ

秋空の大屋根の反りいつくしき南大門の夕陽となりぬ

金剛山久米山莊

白樺の幹しろじろとあかときの月かげさせり風のおと遠し

加藤 ひさ子

出揃ひし蒲の穂群の直ぐ立ちに秋の日中の深き静もり

大阪に移り住みて

方角もまだわきまへぬ街ながら夫つまとし住めば安けかりけり

加藤 比呂史

巧みなる鶯の巢を見いでたり芽吹き初めたる若木の枝に

加藤 ふみ子

白雲はいゆきつくして光澤つやふかき空の高處たかどに月すみわたる

西空にたたなはる雲白みつつ根こそぎ動く月にむかひて
岬山さきやまに下りむとしつつ舞ふ鳶のこゑ夕風ゆふかぜの海にひびかふ
じやり庭を犬の走らふ軽き音朝はすがしと我が聞きにけり
あさあさを寒のもや立つ庭みれば去年植ゑし木も落着きにけり

加藤 富美子

初めて月給を貰ふ

珍らしき物見る如き心地して折目なき紙幣をしみじみと見ぬ

加藤 文友

夕まけて歸る三和土たかどの靴脱はきだに郵便一つありて寒しも

本間俊平師の説教を聴く

さかしらの世にかれがれしわが生命いのち涙とともによみがへり来る

加藤 文輝

芽をたもつ雑木透とほして日あたれり山路の霜のうは解けしつ
つ
雨雲を透とほす夕日やなほしばしひんがしの山にあかくながらふ

加藤 武三

父母かつて加奈陀に渡り苺の栽培を業とせり我幼き日を
彼の地に送る

白人の子と争へば泣かしめし日本人我は強かりにけり
苺の花うららに咲きて野の果てのヘネンの驛ゆ汽車の鐘きこえぬ
バンクーバの異人の店に賣りわたす紅き苺を箱に飾れり

隣家にドグレスと呼ぶ少女ありき

野苺を摘みて楽しく草原にままごとなせりドグレスと我と

加藤 政吉

熟れたちて匂ひはげしき麥の穂に裸馬の太腹さやりて行きぬ

しら梅もまだととのはぬ下田街道あぎと釣るされ魚の干されつ

加藤 政吉

思ふことまれまれなれど亡き母の夢に見ゆるはかなしかりけり
塵とのみ思ひゐるたるに紙の上のこの微生物動き始めぬ

加藤 將之

ひむがしに虹あらはれて川尻の蘆原すずめ鳴きとよもすも
山ざくらあした開きて夕散るさま見たりけり甲斐が根にして
青葉道かかる月夜のほの照らひ浴びつつ人の來るべく思ほゆ

北アルプスに登りて飛驒に下る

飛驒のおく蒲田に下る山みちに落葉はふかし足にすくふも

天幕はりて女ばかりがたぬしげにかくはさわぐと我は見て過ぐ

轉居の日に

荷を出して柱に花を挿しそへぬ家賣りしとき父はしかしき

友人松本良彦教授の手記「上海出征記」を讀みて

のこのこと交代移動する支那兵もやさしきものと目にうつりしか

草津へ

白樺は雪の斜面に屯してすれすれにうすき月はかかれり

高田城址にて

しぶく雨濛のなかばを搔き消して蓮の花はわづかにただよふ

加藤 正・雄

貧農に生れてをはらむわれの人生に歌詠む愉快ゆるされてあり

峽に入りていづくも白き茅の穂にわがひた心などみゆくなる

加藤 松之助

背戸庭の梅の苔はふふみつつややかすみゐる日のやはらかさ

生業なりはたといふもはろけしいささかの鶏を飼ひて卵生たまごましむ

加藤 美枝子

何となく弱いき生命いのちを思はせてこほろぎなける夕さびしも

加藤 美知子

寝せおけど寝せおきかねて顔出せばこほるるばかり笑ふ吾わが子こかな

加藤 明治

入營の吾をことほぐとこの朝餉あさご家族かぞ等らつどひ鰯食いわしぶる

たらちねの母に蠶いとはまかせおき遅れし野良に家うち族かぞつれだす

借金になれし村人無造作に連帶責任の判をつきあふ

炎天に桑つみあきし弟は瓜をもぎ來て我にも食はず

祖父おぢの柩出でゆく門口くちまに馬舍うまやの馬の首だしにけり

馬を賣る話まとまり圍爐裏邊に手打の音はあはれなりけり

夜のあけを賣られゆきたる吾が馬は馬桶くらに麥むぎを食たみ残したる

加藤 滿

砂山の向うの海は青からむま青ならむと踏み登るなり

加藤 やす緒

柿の芽の明るきいろにわく想ひ馬を待たせて汗ふきにけり

加藤 東籬

國道のはてに横はる春の山青くなるまで青森に居る

折にふれ歌など書けばすべもなくさびしけれども生くる心地す
にはかにも髪なのびける心地しぬ青葉の家ひとりこもれば
窓寄りにこがらしききて小半日ものをいはねば兒等もより來ず
錢欲しとおもふこころを叱りつつむかへばしろき岩木嶺の雪

としどしに言葉すくなになりけり口なしびととならむとすらむ

きさらぎの春は來にけり雪の上を肥料こはこぶとて糧えをしつらふ

おとなしく役場がよひをせんとしてゆけばゆく手の山のま青さ

豌豆のはしりをもらひ煮て食うべま裸になり山を見て居り

裏畑にけむりのごとく時雨する今朝をたのしく菜を煮てたぶる

山時雨降りみ降らずみ裸木の木肌ぬらして今日も暮れけり

この山に幾らも居らぬ鳥かも一羽の啼けば朝はしづけし

うららかに冬日はてれりこの窓にすわれれば見ゆる枯草の丘

加藤 義一

吾を偽はる妻の眼をしみじみとみつめて居れば悔湧くらしも

阿夫利嶺に雲湧きたてば蘆の葉のそよぎこまやかに雷なりて來ぬ

加藤 佳子

スカートの長さ氣にして出でて行く吾子が姿はおとなびにけり

加藤 賚作

眼覺むれば靜かに降れる雨の音子等の遠足濟みてよかりし

加藤 淘綾

病 居

つきつめて言はば疲れむ人と居て身ぬちにきざす熱をさびしむ

日ならべて熱出でぬ身のさわやけしもの多く食ひて我は肥らむ
はびこりし地しばり草をはがし居り霜とけそめし庭の日向に
冬庭にはびこり生ひし寒竹のほそき筍を刈りてたばねぬ
常のごと體温器時計そへおきて旅の宿りの眠りさびしむ

地圖の上にわが行きし道の赤き線山ふかくありし頃しおもほゆ
母と二人あるは寂けしかくしつ々つきつめて言ふ事もなくて經ゆかむ

伊豆神津島

船のひびき夜半にとまれり眼近くに鳥山くろく揺れつつぞ見ゆ
よべはただ暗く踏みつる渚邊の明くればすがし白砂の濱
浅山を出でにし水は光りつつ島裏の灣にただに流るる

伊豆三宅島

潮さして夕ぐれぬるくなりし温泉に流され貝も雑魚も入り來つ
荒磯みち行きゆきて立てる石見れば島びとのあまた海に果てたる

三宅島に流人英一蝶をおもふ

島にして描きたる繪に魚の血を顔料とせしを聞くがかなしさ

暗　　思

足ることなく過ぎし一生を言ひ出づる母の願ひは我にかかれり
生きむ途にわづらふ我の眼ざめ居るこの夜のふけに母も眠らず
鮫の子の姿みにくく泳ぎ居ることもはかなく今日われは見つ
時すぎて濱晝顔も實となりしこの砂原にひとり來馴れぬ

中　里　村

書机に鍋茶碗なぞ置きちらし貧しく見ゆる部屋のしたしさ

徳子に

みちのくの安達太良山の麓とふわが行く日なき村しおもほゆ
これの世に離れ離れに生き居りてつひに忘るる日もあるらむか

赤彦先生の御墓に詣つ

御墓木の蟲ばみし葉はしきて散る眞下の畑も霧こめて居り

戸隠山中

笹谷地原いくすぢに行く水すみて國の高處は素枯にむかふ
近き樹もたちまち見えぬ霧の中に笹うつ雨の響きひろしも

春近く

家猫の小鳥拾ひ來る幾朝か山に雪つみておつる多けむ

淡ら陽の冬木が中のわが歩み香にたちて來るものもなきかも

枯山に尾をふれば見ゆる黄鷄きびたきのしばらくにして谷に下りぬ

木曾氷ヶ瀬に赤彦先生を憶ふ

霧にぬるる谷川石を踏みてゆき遙かなるかも亡き人おもへば
跣足はだにて君が踏みけむ谷石のきよらかにして水の速さよ

加藤木 十二朗

峽道の若葉のみどり色よきに馬車ゆ手をのべふれつつゆくも

加 納 曉

さよふけて我家の風呂の落し水音もかすかに眠らむものか
夕まけて熱いできたる身はさむく降りはじめたる雨の音きこゆ

母を悲しむ 三首

秋の雨ふりてけながし窓の外の藤の蒔みなくろく朽ちたり

稻の穂をみたしとのらすたらちねの母は日にけに衰へにけり
母の息いまだかすかに聞きつつも飲ませまつりしこの水あはれ
朝夕に仰ぎてとほるこの松のうつくしきかも今宵の月に

ながき日も夕さりきたる松山に新芽だつ木々あざやかにみゆ
おのづから心なごみくるさ夜ふけの月の光はうつろひにけり
風のむきかはりたるらし我肌ねばりおぼゆる夕べとなりぬ
むらぎもの心しづもり吾が居れば草木の影もあざやかになれり
松原の幹透きてみゆる海の面月のかたぶく光ともしも
鳩鳥の一つ居て潛く池の面に日暮の光さむくうごくも

雪やみて月夜となれり時の間に晴れたる空におどろきにけり
あわただしく住みふるものか自ら泪はわきて告ぐる人なし

船の上ゆ見ゆるかぎりは焼野原いづべの方に吾は向はむ

早鞆の瀬戸をせばみか船とめて夜明け待ち居り鷄かひなくきこゆ

歸 省 三首

この山につね遊びけるをさなどち一人二人と今は世になし

鐘の音消ゆると思ふに吾がたてる土にこもりてひびくが如し

吾が家にかはり住む人を知らぬまでに遠ざかりつるものかなしさよ

遠濱に夜網ひくらしきはだちて一人の聲のとほりくるかも

遠くよりとよもしきたる風の音つひに聞えずなりにけるかも

岨道にしだれかかれる山吹のさかりの花のしづけさあはれ

岩山の頂せまる谷間空一つにひびく瀬々の音かも

家竝はつばらにみゆれ振りさけて山とふもののみえぬ國かも

階段の小暗き壁に陰影かげさすは階下したよりとどく光なるらし

ストオブの燃えたつ音を寂しめり宵早くより床につきつつ

海の上へおとろへゆきし雷のとどろく音をただに思ふも

病床吟

吾ながらあはれと思へや昨日より煙草をたちて飴をしやぶるも

鼻先を煙草の煙ながると思ひあきらめ眼ひらくも

かにかくに煙草を一日のまずして眠りに就くははかなかりけり

けだものの生きのままなりこの日頃腹へればくらひ眠たければねつ

裏山の谷間ふかく鳴きすぎし蜩の聲つづかざりけり

わけもなく癒ゆると思ひ寝つきしが浴衣をネルに著更へむとする
東京の郊外地圖を買はしめて友のたれかれの住所ところたづねし
天然てんねんのうつりかはりの目立たぬをただ山を見て幾日すぎつる

加納 小郭 家

阿波鑛山の歌

馬どちは峠に逢ひて嘶きあへりさびしくあらむあはれ馬どち
坑夫の養子に居つける鮮人の言ことのかなしもよ鑛山かみな訛り

臺灣たいわい拳芒けんぼう蕃社

わが轎を昇きてかちわたる蕃人の腰にたぎちて荒き山川

琉球藩民遭難碑

あら艸にしるしばかりの風熱しここに過ぎにし命おもはむ

臺南赤崁樓

プロビデンチヤ一城の人を養ひし古井の水の今もこそ湧け

臺南運河畔居住

餉臺ちやふだいより卵の殻を吹きおとすさやかなる風の中に朝餉す

夕餉のあと運河のへりに椅子を据ゑ涼むならひは日の沈むまで

帆まかせの戎克じやんくの行きは樂しけむ月のあかきに唄聲きこゆ

リヤカアに豚を啼かしめ運び去る土手の遙かに安平灯る

日常吟

椽果を冷やし食みつつ夜半にしてゆるぶ暑さを妻とかたらふ

酒ゆゑの肥大肝臓を手におさへ雨荒き夜半に命惜めり

暑き夜半に妻の寝ざうを見てゐしが食人饗宴のことをおもへる

叱れども裏の廣場の水牛にまた乗りて遊ぶ我の子らはや
月のもとに茗を煮て語らふ人のかたへしらじらとして茉莉花まつりばなにほふ
無雜作に附鬻を疊におきしまま媪おばは眠りをりさびしくもあるか
風の土に吹きつくる背戸に出で妻はさらさらと蜩の殻を捨つ

加 美 精 二

夕かげは道にとどかず青葉樹のしたなる門の黝く寂びたる

加 茂 昭 風

日照雨そひして海はあかるし鳥影を出でし白帆の虹に向へる(松島)

ひさしより檜木ひのきにうつり黄楊わうやうにとびさ庭の米を見てなく雀

つれたちて庭石づたひ行くすずめ一羽が飛べばみな飛びにけり
ものおちて飛びたつ時し雀子の翹かぜにふれて黄楊の葉ぞ散る

甲斐高峰精舎にて

山内の木立とよもし風吹けどこの書院にとどき來らず

加茂 南枝

田を植ゑて疲れ休みの雨の日を妻と背中に灸すゑあへり

加茂 のぶ

風いでてかそかに花の動く見ゆそら豆畑の春の夕暮

背戸畑の桑は明るく刈られけり繭を賣りたる後の寂しさ

賀澤 あや子

吾が心に満ちあふれ來るさびしさにひたすらとなりて物縫ひてをり

滿洲へ嫁ぎ來て一年

ひとときに芽吹き立ち匂ふこの國の明るき春に吾が逢へるかも

馬車まぐるまの上に手を合せすぎぬ孟蘭盆ぼんぼんのみ寺は芥子の花盛りなる

嘉納とわ

咲ききりて葩はなびらのそり力あり陽にまむかへる白芙蓉の花

鹿兒島壽藏

那須にて

高原に朝さしわたるうひうひしきひかりの中にわが兒を立たす
みちのくの方にひらけて朝日さす余笹あまのささのしもは鳴る谿のおと

白河南湖にて

白河にひと夜ねむると涼しきになにか久しく住みしここちす
松高くそびゆる山に眼まなこむかひていち早き夜氣よぐさのすみ來る思ひす

甲子山中

山中にくすり湯浴みてわがあそぶ日數盡きむとしつつ静けき

戸隱山

裾野原秋さびわたるおほぞらに戸隱の宮の鳥居立つ見ゆ

もみぢあせし荒山の上にあすならうの青きひともと仰ぎともしむ

飯綱野いづなのさむき夕暮なびき伏す麻にまぎれて人たちゆきぬ

九十九里濱

ゆくらかに出づる日のひかりつつみつあかときの雲沖にのびゆく

別府海地獄

夕立は鶴見ヶ嶽を押しくると思ふばかりに海地獄に降る

船上吟

このあした光をうけし大海はひとときに湧きしあら潮と思ふ

鹿兒島 やすほ

目のさめて吾子の寢さまをなほししがまたすぐに吾がふかく眠りし
つかれたる眼はまぶしくて春草の青き野の上にすわりゐにけり

鹿島 良信

門司ヶ關風師の山ゆ見はるかす玄海灘の白き浪かも

亡き父に肩のあたりの似たりとて吾を歩かしめ母の見たまふ

可長 澄子

よりどころなき思ひありたはむる子を見まもりてただにゐにけり

可兒 敏明

放たれて鳴き競ひ來る家鴨子の聲さやかなり朝の河原に

箸おきて聴くにかしこし生れませる皇子は日嗣の皇子にぞまします(ラヂオ)
デモの列はなれて來り一人の女工は吾兒に旗くれにけり

可 兒 作 衛

鈴懸の青葉かぶさり筒形の交番の中の巡查涼しも

香 川 し げ 子

引き締めて鼓の紐の張りのよさ今宵あかるき唄もあれかし

香 川 頼 彦

寄進札に父の名のありこの村に家衰へずありし日思ほゆ(吳服神社)

浅茅原あさやまに秋のひかりの澄みにけりふくれ青みてゆく川が見ゆ

たとほる冬山ふゆやまの際は枯萱かきの照返あやしゐる夕日のひかり

夕風ゆふかぜげる海うみのおもてを波黒く盛りあげてゆくは鯛たうの群ぐんか

香 取 健 助

この窓のガラスに忍びよりし冬けものの鼻の如く冷たき

香 取 峻

冬山を歩みて來れば乾き砂崖をこぼるる音のかそけさ

筑波に登る 一首

大空の疾風はやてに堪へていのち生くる諸木はなべてかがまれるかも
今日もまた悔いどころあり漢文の讀めぬ生徒を虐げて來つ

香 取 秀 眞

落 葉

冬されば岩根山坂落葉していで湯に通ふ道たえにけり

明治三十三年五月十日御慶事

青山のみこの宮居は遠長に妹脊二柱さきくありまさむ

大正十一年九月十六日柴燈護摩を見むとて山城鞍馬の奥の峯定寺に宿る。十七日の拂曉に

山の端はのかすかあかきに夜あけぬとまさ眼に見れば眉なす月かも

大正十二年八月、九十九里濱に遊ぶ

磯をのみいそを吐きつつ大浪のよせてかへしてやむ時しらずも

九月一日大地ふるふ、南の方に白雲高く立のぼる、市内所々に火起る

なるふるひ町に火いでて人心やすからなくに蟬なけりけり

大正十三年七月末高野山にて

夕立のおどろおどろに降りなだれ山さけとほり神なりどよむ

矛杉の木立をしげみま晝すら夕さびてあれや蝸のなく

高野やま千とせの今もいく御魂大師は生きてますところなり

蜂

芍薬の花しべがくり蜜蜂の出で入るを見るしづ心かも

正岡母堂八十の賀筵に

常盤木の老松のめのさめだちをめでたき人にたぐへていははむ

蟬

この里に鳴きいでければ遠方の村つぎつぎにひぐらしの聲

大正十四年三月二十七日上野公園梅川亭にて國醇會の會合あり
ける夜

しづけくも夜くだつかもと戸をくれば庭木眞白く雪ふりてをり

五月廿四日不忍池畔を過ぐ

折れふして蓮の枯き残れるに浮葉卷葉に夏よそひせり

七月廿八日寒川陽光林若樹柴田宵曲君等と上總埴谷に蕨樞堂君
を訪ふ

苗植ゑし人もその子も過ぎし世にこの杉山は空をおほへり
人は去り人はあれつぐ代々を経てこの大きな杉はそだてり

昭和元年によめるうち

庭の木をしきりに傳ふうぐひすはそこには鳴かず背戸山になく
五月雨のふるや野川の村あしのにひ葉押ならし水ながれゆく
白みゆく汽車の窓より田をみればすでに人あり露のなかを行く

昭和二年二月七日大正天皇を誅び奉る

をす國の多摩のみやまの松かげに臣のなげきしわが大君はも

夜

年ひさに都にすめば戀しかも蛙の夜聲きかまほしかも

山

國中の武藏にすめば山を見ず晴れて初めて遠富士を見る

昭和三年の初ころ鍋といふ題にて日親上人を

焼けただれとろろぐ鍋のしたにゐておごそか聲よ法華經をととなふ

雪のいとふりける日

天地の静もるなかに椎が枝のゆらりとゆれて雪しづれたり

大嘗會

近江なるやすの三上をうらとひに悠紀とさだめてぬきほ採らすも
背振嶺のしたにひろごる千町田の脇山むらの主基の御田はも

昭和四年のはじめ筑波山を

ころも手のひたちの空にくきやかに女夫なみ立てるを筑波の山
つくば山雄山め山とたむだきてむつび立ちたり風あるる日も

四月はじめ朝鮮にて

新羅^{しらき}こま國はほろびて山かれて墓よりいづるみづたからかも

十一月六日國醇會の人々と正倉院拜觀

千とせふる瑞たからなれや龍神の加護なからめや勅封の倉
大君の御名もて閉ぢしあぜ倉は雷火に焼けず木にはあれども
み櫛笥にいつく珠なす三つ倉のここだ寶につぐたからなし

昭和五年紀元節に

うねび山たつみのすみのかし原を國のもなかと宮はじめけり
玉垣とうしほのなみをめぐらせるうるはしき嶋の大やしま國

十一月はじめ奈良にゆきける時唐招提寺開山堂に鑑真和尚の像
を拜す

おむまぶたふたぎたるままつくいきのきこゆるばかりもだし給へり

昭和六年春のころ畫贊のうたくさぐさよみけるうち觀音の畫に

補陀落のみ山にいます南無ぼさつ無畏の利やくをあたへたまはな

五月二十四日鎌倉清水山の茶會に遊ぶ

夕月のほのかなる田の早苗田に蛙ころころ鳴きやまざけり

十月二十三日信濃國牛伏寺に詣づ

奈良の代につくりしと見るみ佛に思はざりにきここにあひ奉る

高松宮宣仁親王殿下を日本美術協會に迎へまつりける時人々
書畫をかきてたてまつる。その時式紙にかきて奉れる

ひがしの海八重のうしほをせきとめて神のきづきし大八洲くに

昭和七年五月はじめ鹽釜松島中尊寺をめぐりて歸りけるとき

藤の花咲きつのは行く長ふさの末になりつついろあせにけり

甲戌の年わが還曆の新年を迎へて

みどりごにかへると知りて今さらに戀しかりけりおも父はなし

香 取 治 吉

ひえびえと杉の芽生めおひに日は流れ雨あとの山はひととき明し

香 美 雅 子

特價品あらけなく選る女人らに混りてはをれ心おくれつ

香 西 照 雄

少年刑務所參觀

監房の暗き廊下をとほりぬけ冬日まぶしみ險とづるも

香 坂 竜 男

春寒のゆるびてぬくき此宵なりラヂオは魚の移動を報ず

香 杉 純

時給三錢八厘の少年工なり弟は夜ごと眞黒く疲れてかへる

幸 節 靜 彦

北信某温泉

夕山にいまだのこれる入日かげけきこえし峠はかの低きところ
山の湯に一夜をいねて今朝たつと見あぐるやまはきのふ越えし山

紫野大徳寺山内

さしのぞくに禪房の裡うちよくかたづけあり晝ふけて明り寂かにありけり

京都御所

御苑のうちひつそりとして朝の日さしなり鋭すまどの冷えを堪へて歩める

恩師石井直三郎先生御葬儀

遂の御供と御葬みはふりの路わがゆけばただ眼に赤し山つつじの花

篁居にて

篁にさし透る秋の日ざしなりときありて朝の風ふき起る

大阪港にて

岸壁にひたとよせたる汽船の腹あらはれて赤し秋日の中に

香村 かすみ

うす紅の小さき貝殻をおもはする吾子の爪かも剪り惜しまるる
青麥の穂並をわたる夏嵐ふかれてゆかむ身をばまかせつ

香村 金北

正月はここへは來ぬといひきかす親とその子の眼は何をいふ(ニューズ)

香山 治子

夕したくみななしをへて夫を待つはしるすがしき風ふきにけり

子どもらがよきあそび場となりし田のつみわらのかげの冬の草かも

ひるすぎの風なごやかに松の葉の光る浦べの春たけにけり

甲 斐 京 子

ひかり足らふ山のなぞへは枯草にまじりて赤しぼけの花群

裏畑にすがれてのこる菊の根をぬきつつ心なぐさまなくに

甲 斐 さ や か

手の甲におつる涙をいぢりつつ何時迄も船にゆかざりし子よ

甲 斐 水 棹

日本橋まだ土橋なるころに來て赤埴のみちに泪おとしき(渡瀧)

吾があはれ極まりしとき職たびし大き先生は死にたまひけり(鈴木博士を偲ぶ)

地平線にかたむきとどく天つ空波立つ雲を低くをらしむ(滿洲平野)

客の前に頬赤らむる子となれり窃にわれは驚かむとす

聯盟の態度憤る邦人のこゑきく時ぞちから張りくる(滿洲事變頃)

高粱の垂り葉のさやぎ秋づきて馬賊近よるとき至りけり

戦ひは過ぎて久しき巖山のおきふしさやに澄む空のいろ

よこしまも正しく通る世に生きて貧しき吾れや嘆かざるべし

照りかげり果なき水脈みや大海おほのまひるの風ぎに思ふことなし

甲 斐 雍 人

阿蘇にて 三首

日の歩みやうやく寂びてゐたりけり柿多き里に日和ひつづくも

岨道は夕風あかきものの冴え櫟こぼるる道を來にけり

雷鳴のこだま直ちに谷走りうらたのめなく四方しづまりぬ

かぶりつつ襯衣着るときにいとけなき如き錯覺のうかぶ朝あり

甲 村 鼎

きまぐれに捕へし蟬の鳴きしきりわが手のうちにもてあまし居り

甲 本 碩 亮

春淡き光のなかに伸びたちし青菜の臺に雪降りにけり

狩 野 晃

血を吐きて一夜明けたる枕べに鉢の金魚のあやしづけき

狩 野 文 朔

細立の赤松も見ゆむらぎえの雪あかりして町近き山

狩 野 満 人

鑛山の子等一日集ひて遊ぶ見れば索道遊びトロツコ遊び

狩野登美次

うすれゆく記憶のなかにわが母の味噌くさき手を思ふときあり

海達 貴文

幸福のわれにめぐりてくるごとく咲きはじめたる日まはりの花
寒菊を活けたる瓶のかたはらに林檎をおきてひとりたのしむ

海達 公子

青丹よし奈良の都に降る雨は木々の若葉の緑をながす

海保 行雄

いだきよせつくづく見れば眉の毛の端にほくろを此の子は持てり

向後 直衛

海とほく白き一朶の雲かかり幽かなれども春の雷きこゆ

おのづから木々は寂しき影もてり月夜を歸る山巖の道
細みちのゆく手はるかに雲をおく信濃の國に向ひて歩む
夜の雲白くさやけく流れゐて利根の水上月明りせり

高 坂 彪 嘯

貧しかる故に正しく然かあらぬ故にとめりとわれは言はなく

肅正選舉有感

人さには國にはあれど一票を捧げむとするその人なしに

高 野 正 一

繭の値はあまりに安し富士登山のくはだてなどは思ひとまらむ
代田搔く馬の腹がけ泥水にまみれて重くたれさがりたり

埼玉縣比企郡小川町一帯の地は和紙の産地なり。冬期我が家
にてもその業に従事す

寒き夜を土間のむしろに坐り居て楮の皮むく膝冷えにけり

板ませに板たてかけて晴れし日に干す紙白くまばゆかりける

郷　　松　　樹

さ庭べに糶ほしをれば隣家の鶏つぎつぎに垣くぐり来る

四つ這ひに這ひて田草く取るうかららが四つのまろ笠よくならびたる

畑すみの黒胡麻の實は時すぎてはじけそめたり秋の日でりに

郷　　司　　青　　嵐

轉任の荷をととのへて寒き部屋に此の夜かぎりの夜をいねにけり

郷　　田　　勝　　登

思ふ様鋏振上げて芋掘りの出来るからだとなりにけるかな

郷　間　儀　一　郎

かなしもよ淺瀬にあそぶ幼な兒のひとり
は泳ぎひとり見てゐる

幸 島 菊 子

吾子のスキーにゆくを送る

いさみつついそぎ足にゆくうしろかげ月のしたびにとほざかるなり

山 中 湖

草山の峰にかげこき一つ松舟ゆけどゆけど猶しよく見ゆ

幸 田 躬 行

街燈に描き出さるる我が影の次第に延びて坂道暗き

暗やみに煙草をすへばうすあかく一坪ばかり草のほのみゆ

幸 田 吉 弘

斯くのごとわれもなし來ぬ鐵鎚てんま振ふ小僧の顔は汗あえて黒し

女の童紙風船をふくらまさむと丹の和頬にぎほに息ふくめたり

幸野 羊三

闇ふかく吹きむけて来てぬば玉の海木枯の山を揺るこゑ

一人子を喪ひし友を訪ねて一首

日のくれのたたみの上に散りこみしひとつ落葉のかげもさむけく
毒だみの花青じろく六月の夕べの闇を妖あやめかすなり

鏡 長壽郎

聴診器の下にいきづくおほははのしなへし乳房小さくかしこし

蠣崎 稻男

落葉松かろまつの若き芽立ちのさ緑の目にやはらかき春は來にけり

磯桐の蔭にうたひつメノコらが雲丹うんたんむきいそぐ秋は來にけり

柿市 靈仙

存在を當爲にかふる教育のわれの任務はなまかならず

柿坂 拍夢

家近くもなればにはかに大聲に我が兒の泣きて歸り來れり

柿塚 欣一郎

アイヌ村移動カメラに全景の裸木多き谷は寫りぬ

眞夜中の騎馬兵過ぐる舗裝道路ひづめの音はぬれたる如し

柿木 鷹子

あわただしき退け時の街をゆくバスのゆれはげしきは一途なるごとし

強 震 一首

謝電打つと地震過ぎし晝を出でて來れば何事もなき道路の廣さ

敷石かみてタンク續けり街路樹の根づきたしかに見ゆる新道を

柿谷伸吉

奉天事變に居て

大砲はまことなりけり地を震りてをのこ心をしきりに充たす
小夜中の月さだかならず爆裂の砲^た彈^まの地鳴りはしきりなるかも
むらぎものこころひそめて思ふべし今宵瘴れし兵幾人ぞ

我軍北大營及遼寧省奉天支那街占領の報來る

明けくればものものしけど八衢におらべる聲は勝鬨の聲
すめらみくにの御旗輝き蒼空に迂回旋回飛行機來る

北大營の戰禍を視る

體臭はなつかしきかな日本の兵士はその夜の夜襲を談る

攻めとりしこの營庭につはものは眼尻あげて夜襲を談る

東北訛なだらかならずつはものは身振りいらたち言繼ぎにけり

赤き陽のいろ

地は深く沈むが如し高粱のさやぎゆれつつ赤き陽のいろ

驟馬ぐるま牽きつれて來る鈴の音に高粱の葉ずれの風たちそめつ

秋の陽はほがらかに草のいろそめしこの原の向うに匪賊たむろす

音たてて落ちる溪水を朝あけてしきりに寒く聞きゐたりけり

柿村 秋人

行手に海を感じつつ燈火の小暗き町を左にまがる

埃づきし庭松に灯かげさす見れば遊び足らひぬ今日のひと日は

熊笹は我が背にあまれかざし行く提灯の中に露落つるなり

目の前に栗の青毬あそびが揺れなびき野分と思ふ風の吹きしく

閉めきりて暑き二階に臥りゐし一日暮れゆきて雁が音きこゆ

程近く鳴きて過ぎたる雁かりがねのふたたび鳴くは既にはろけし

角 谷 静 江

公主嶺に汽車着きにけり龍首古りし驛舎の臺に寒き日のいろ

ひそけくも險に來つる面輪なれ夜半しみじみと覺めてなげかふ

大空は澄みきはまれり一せいにふり上げられて光るつるはし

景 山 碧

朝鮮神宮境内

總督府はるかに見ゆと指させる町空にしてアドバルーン一つ

影山銀四郎

瓶にさしし芒の穂だち灯にうつり閉したる戸に大き影さす(中秋無月)

朝燕あまた飛びきて啼き合へり青田をゆする風のひそみに

わが庭の水盤にきてひそひそと蜂が水のみ夏となりつも

蜂のとなりへ子雀もきておのおのに水盤の水のめるしづけさ

影山邦俊

蟹のごと鋏を持ちて日々の米代稼ぐ吾は理髪師

かりそめの我が營業とおもほえず髪刈る技術に一生かけつつ

すがすがとこの頬髯を剃るごとく吾が憂鬱を除くすべなきか

垂れ髪の延びたる剪れば白じろと女童の額際だちにけり

剃刀の刃のさきにのりくる紅の色うすら匂へり娘の頬剃りつつ

空梅雨の照りいちじるし土手の上のばら垣の花埃づきにけり

影 山 一

夜給桑より朝給桑までの五時間はしみじみたのし帯解きて寝つ
刈りながらたまたま混る芹の匂雑草の匂を一時は消す
手許まで夕暮れにけり石ころに草刈る鎌は火花を散らしつ
自ら夜桑やるころを目覺むれば電燈の光暈もちて見ゆ
素足にて拂ひつつ行く朝露のひえびえしさは頭まで沁む

影 山 正 治

アカシヤの繁り明るくしづもりて晝の旅順の街は寂しも

獄にありし頃

かそけくも鳴くなる鳥か朝雨に鳩鳴く聞けば心和めり

夏雲のかがよふ見ればしかすがにふる里の山思ほゆるかも

ここに住みてうやうやしもよかそかなる雑草の花に心うたるる
目を閉ぢて朝の大都の遙かなる大きどよめきに今朝も聞き入る
湯に浸り静かなる夏の朝の間の心和みに母を想へり

物學び多くを知らぬわが母のやまとをごころ尊くありけり

掛 貝 芳 男

雨上り築地の橋をわたるとて心に浮ぶ言の葉もよし

歌舞伎座の涼しき夏の夜となりぬ君が扇の水いろの風

銀座より築地の空に鱗ぐもたなびきたれば思はるる海

兩國の花火の噂立つ頃のあぢさゐ色の夏空もよし

ひなげしの咲く日となりてその上のそよ風ほどになつかしきひと

窓近く風にゆらげる草ありて物に乗りたる心地するかな

それとても夏のゆふべの波おとに半まぎれて聞きし言の葉

八月の末の夜空に風吹けば街の廣場も海ごちちする

路すでに秋のけしきとなりぬれば心になしひとり行くこと

あはれにも淺間の灰の都まで降る朝ありて初秋となる

深大寺弱きころの人に似る釋迦の御顔のなつかしきかな

秋はよし曝書の縁に射せる日のあたたかさなど思ひ出に似て

消息の紙に代へんと思ふまで廣き葉散りてなまめかしけれ

忘れよと書き給ふにはあらねどもおぼつかなしや此ごろの文

禪院の山より出づる寒き水落ち會ふ溝を見て車待つ

初冬の朝の障子の薄明り海ある方の空ごちちする

行く方にあぢさる咲きて夕空もわれの思ひも水の色する

朝顔の咲く日となりぬ約束を忘れし人も歸り來るごと

修禪寺の涼しき庫裏ぐりに語れるは頼家よりも稍若き僧

掛場 すす

妹の死

ねもごろに顔拭きやれど眼まあけて姉よと笑まむひとならなくに

掛札 幸江

冬ながら晝の日射ののどかなり水槽の貝はしづかに歩む

笠石 スミ

マリヤの姿を見て

これが世のあらゆる母の姿かもほほゑみである氣高き其の面

笠原中正

骨折の爲入院

みとりする人をみながら遠ざけて呻きてありき二日二夜を

笠原みつる

共同して拂下米を買ふ

米俵挽き歸りつつ我も人もわびしき安堵して語るなり

笠原道子

うすみどりはつかなる芽の杉垣をすがしみにつつ葉書出しに行く

春雨は晝餉どきより門のへの萩の若芽に降りにけるかも

姉上は何をたうべて居るならむ春菜ゆでつつ吾は思ふなり

講義をへて障子あけはなつ縁先の龍のひげに泡雪ふれり

白田舎にて平福百穂先生をしのぶ

くれなるに咲きたる花に雨かかる萩の秀^すさきは芝生に伏しぬ

笠間 東太郎

梅雨入の氣壓の配置定まりて山に春蟬のこゑはおとろふ

虹の脚かかれる丘の畠道を傘をすぼめて人の通れる

水上ゆ雨吹きおくる風強し峽を渡りて虹立てり見ゆ

梅雨雲の流れ杜絶えし海峽は常見る山の更に迫れる

山の湯は浅宵ながら月落ちぬ際立ち見ゆる三國山脈

笠井 京平

富士山頂久須志神社に奉仕

月讀は火口の上へ廻りたり焼け亡びたる山の寂けさ

木も草も生ひねばものこのゑはなし巖にきびしき眞夏の光

薬師寺一首

しづかなる佛の顔におく光千年といふ時經ちにけり

目交まなかひの島に冬日のあたりゐて昨日荒れたる海のしづけさ

冬迫る山には巖のかげふかし夕日の照れば寒々とみゆ

笠井新也

落合直文先生を憶ふ一首

ただ一首朱をば乞ひつるわが歌の終にかへらずはてませる大人
春の雪かろくつもれば木々はみなおのが姿をよろこびて立つ

風間文夫

國の便りかくしに入れて讀む間なく仕事とぎれぬをもどかしみ居り

柏 倉 正

鑿目を吾が刻み居る雨の日に雀軒下にあされるが見ゆ

向ひ居て無口の父に言ひ難み外の面を見れば雪降りやまぬ

柏 木 愛 子

この長き橋を渡りてひそけくも山あひに町つづき行くらし

柏 木 收 三

山の根の柿は青き芽ふきいでて春日たゆたふ鎌倉の谷

柏 木 天 遙

堀堰きて引く水清し鮎の子の群泳ぐ見ゆあさき春田に

柏 木 英 穂

旅を來て思ひはるけし加郎戸の渚の石を我がひろひつつ(壹岐島)

一群ひとらの胡蝶しや花が青々と茂りたる谿のほとりは硫黄いおうにほひぬ（天ヶ瀬温泉）
朝鴉啼きわたりゆく水上は靄晴れゆきてあをき松山（船小屋温泉）

柏 倉 吉 見

移されしこの隔離舎にこもり寝も久しくなれりこほろぎの聲

近き日に吾が娶るべき少女子を曲馬團の前の人群に見し

柏 原 燭 子

面 河 溪

ひとすぢに心がなしく谿に來て黒き岩茸をわれは食ましたり

石槌の山嶺はづかに見えそめてこの深谷に光さしけり

伊 豫 の 海

海の上にややにうつろふ夕光興居い島の嶺は黝みそめたり

涯なく砂吹きすぐる西風や九十九里の濱に坐りて居れば

柏原俊郎

東京より歸りきたりてわが生活くらしきびしきときに子を死なしめし
八幡製鐵企業祭に蜜柑持ちて子に會ひにゆく人も乗り居り
塀越しに朝々ものを言ひ交し親しくなりて人去りゆけり

柏原佳子

鳥海山のふもとに見ゆる丘の松ざわめく音の部屋にきこゆる

櫛尾沽泉

下葉みな枯れ盡したる山菊の花はほつ枝に群りて咲く

櫛尾道子

次々にほぐれて揺れて月見草咲き揃ひたる庭の明るさ

粕谷 貞一

手遅れていまだはづさぬ吾が稻架いねかに近處ちかところの雀すずめみな集あつひくる

糟谷 富美子

町中をとほりぬけこし電車窓ゆ秋に明るき山みえて來ぬ

君が瞳を避けて居れどもわがこころかくはりつめてみじろぎもせず

春日 篤史

オンドルの焚木にすらし街路樹は手の届くかぎり枝あらずけり

春日 井 瀧

さとに來て意こころよろこぶ妻の面婚おもむきへる夜より媚にほふともしさ(妻の里)

鳥山の竹の林に吹きこもるいなさの名残松の花をこぼす

志摩より紀伊にあそぶ

大わだに船はいでたりかつて見ぬ濤の秀がしらはいたぶりかへす

奥飛驒白川郷を越えて富山に出づ 一首

一里來てまだ家を見ぬこの谷にをみなの聲す桑摘みの唄

吹きあれてつひになぎたるわが門に松折れたりと人言ひて通る

信州八ヶ嶽山麓野邊山原

かしばみも實となる頃となりゐるに蕨穂に出づる山の露けさ

名古屋市郊外八事山興正寺の千燈供養に養し月下に護摩會
を拜す

月を背に護摩の火柱あがると見てうすぐもる夜のつめたくなりし

太陽異變あり

食甚となりゆくときし雲を出て陽の光炎は朝月と見ゆ

雲わしる梅雨空の隙ひまあえなくて天づたふ陽は虧けてゐにけり

郊外に移り住む身をわびて

町遠くはなれすむ身はわが庭の紅葉をいひて手紙書くなり

日本らいんに近きわが桑風莊

矢車草たふれしままに花咲きて螳螂の子は生れてありぬ

巢ほだちして嘴くちばしととのはぬ子雀に庭の苺はひきちらされぬ

春日井政子

とき終へし米しろじろと水に透きて清すがしくは見ゆ月の光に

片岸巳年夫

月既に寒しと思ふ夜の静寂しじまにたたたと迫る機關銃の音

谿川のさざれ小石のりゆく水明り霧凝りしづむ曉あけは冴えつつ(奥伊豆)

片岸芳久美

田の畦にぬぎすて置きて夕べ着る野良着はしたし陽の匂ひあり
鋤はき勢はり馬が蹴立つる田の水におしろいはげし吾わが妹子もあはれ
夕おそく蠶こくさき家にかへり來て心さびしく野良着をぬぐも

田疲れの馬の寢息をあはれみつおそき夕餉の箸とりにけり
田がへりの月夜あかりにもぐ茄子の露冷々し秋立ちにけり
組み急ぐ稻城いなぎのそらに傾きて銀河は白し闌けにつつあり
さやかなり日昏れは空の星のくづ稻積み終へて仰ぐ安けさ
雪の野は月明うしてしづかなり一羽なきゆく五位鷺のこゑ

片桐顯智

山峽の小さき驛に霧深ししみじみと濡れし焼杭の垣
峽深く水の激たぎちのこもる音空に通ひて山はさびしき

大阪天王寺

餌を撒けばすなはち首を地におとし啄ばむ鳩はつぎつぎにます

片 桐 勘 藏

うたかたの消ゆるがごとくも亡びゆく家多きわが村はさぶしき

十二貫五百匁の古本は七十錢にて買ひて行きたり

蒔たく種ねの粒々ごとに水玉の跳ねては白く光りては消ゆ

片 桐 敏 男

歳末の用もちていそぐ町裏に佛具屋は佛具みがきて居たり

さえざえと夜半にありつつ棕栢竹の葉は酒をうすめてぬぐひやるべし

むし暑き午後ひるすきを來て南蠻さいかちの散るがすがしき子房しほぼあらはに
苔の上に唐辛しろく花散りぬなべては過ぎたるごとく思へど

片 桐 良

夕まけてしみはじむらし土間のうちに蓑をあみ居る膝の冷たさ
はちす田の花ことごとく咲き絶えて今年の夏も終らむとする
あかぎれの疼き痛みて常ならぬ今宵のぬくさ雨けづくらし
涸れてゐし田になみなみと灌ぐ水ランプさし寄せ見つつうれしも

片 口 安 之 助

十方世界あまねき光したひつつ病みぬればこそ床の上にあれ
山かげにただひとすぢの路ありて馬のとほれば馬の脚あと
ともしびを消してのぞめば月の夜の山のすがたはしづかなるかな

母の病革まる 一首

母の手をさすりてあれば寢よ寢よと母の宣らすに答ふるすべなし
あたらしき時代のことば歌によみ父はよろこび老いたまひけり

片瀬 宗英

秋はまだ夕餉の汁にうかしたる菊菜の莖のほそきころかも

人を悼みて 一首

山住みの幸をつばらに告げ來しが思ひはかへるその在りし日に
春の日の曇るともなし桃畠の土の乾きの明るみて見ゆ
咲きそめて咲きつぐ花のとほしきに椿は春の霜にいたみぬ

片野 静緒

水張田に代かく牛の毛のよごれ照る日たしかに夏となりぬる

貯桑場にランプともして枝桑を扱かきつつあれば啼くほととぎす
製絲場の柵のみそ萩咲きにけり見つつ通るに繭の匂ひす

片柳 恒夫

柿若葉明るき庭にかがみたる兒の膝小僧のまろまろとまろき

片山 廣子

女らはほそき帯して物くへりあひるの騒ぐとなりの家に

一すぢのわが落髪を手にとれば小蛇のごとく尾をまきにけり

人なくなりしのちに

なほりなばうれしからむと君いひしその細きこゑ夜も日もきこゆ
子ら二人われと向ひて茶をのめば父かへり給ふ夜のごとくおもふ
わかき日のさびしきをりに祈りつるその神々のとほくおもはる

長尾峠にて

ちがや光る箱根の山のまろき峰すれすれに朝の雲きたりつつ
かぜも日もあたるままなるはだか木の木のもとに立ち富士を見にけり

輕井澤なる野澤原に住みて

高原は夜ざりにしづみわが上に星の夜ぞらのちかくより來る

信濃追分にあそびて

板屋根のふるびしづかなる町なかにただ一羽とぶつばめを見にけり
さびしさの大なる現はれの淺間山さやかにけふの青ぞらの中に
かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちのわかれめに來つ
われわれも牧場のけものらとおなじやうに靜かになりて風にふかれつつ

六里が原にて

わがさきに夕だちすぎけむ熔岩のくづれたる路のいちめんのつゆ
わが上をひとむらの雲ながれゆくむらさめをはりいま青きそら

小瀬溪にこの松山はつづくといふ松の葉ひかりどこまでも松の山
赤砂の浅間のやまの山ひだにひかるすぢあり陽にふるへつつ

雨とほく過ぎ日のすきとほる草丘はいちめんほそきすすきの穂ばかり
わがむすめそばなる母をわすれはて野原のなかにさびしげなるかな
野のひろさわれをかこめり人の世の人なることのいまはかなしも

野のとほくに雲のかげうごき一ぼんの樹のたつところも曇りたるかな

病める友に

あけくれをいかにおはすとただおもふさむく明るきこのごろの日は

樹々うもれ風たちさわぐすすき山けものの通るみちを見にけり
谷かこむ山の樹すがしわれやがてここに住まむと人はいひしも

輕井澤にありて

葦原のなかの砂地にたちとまり人がうしろから來るやうにおもふ
わが傘のみ一つみゆるかところづき葦原のなかに傘たたみたり
七月の青きいのちはすさまじく馬越まこの原に葦さやぐなり
さびしさをたのしとおもふ野鳥らのあそびかくるる野のなかにわれは
雨やみてあかしやの葉のつゆふかき矢が崎橋をわがわたるなり
とんぼらは砂地にひくく飛びるたり物の影なく曇るまひるま

横濱の外人墓地にて

大ぞらと市街まちに向へる傾斜面十字架のまへにさける花々

片山久太郎

鋤き返へすところどころに葱は葱牛蒡は牛蒡の土の臭ひす

遠小田に終日叩く畦作り音正面にて風の變れる

夕づきて風出でたらし水屋べに吊す蠶紙のしづかに搖るる

子供らを前に坐らせ妻がする焼饅頭は焼きたまりせず

片山邦夫

氷雨降る大野峠をうち越えて鹿火屋を見ると吾來つるかも

月讀の光さやけき宵々を野上野川原に雁鳴き騒ぐ

伊賀境けふ越え行けば伊勢の國やいこふかげなく雪ふりしきる

片山敏彦

おもかげに立ち來る君はあめつちの夜の暗さを背に負へるかも

茜さす空のなかほどを飛ぶ雲の清らにかろく春は來にけり
まばたきて仰ぐまなこに大空の秋になりゆく遙かさが見ゆ
ふるさとの荒磯の夜ごと灯をとす友の仕事になぐさめもあれ
ふるさとは今は春邊と咲く花の李の花の白きを手向く(父の墓)
今日よりはわれも父なりちまた行き見る幼児らとみに親しも

片山平四郎

路の邊の樹々の葉の面は濕らへり今過ぎし雲のかかりつらむか
男體山のなだれに湧きし白雲はひそかにありて晝たけにける
没りてなほ陽の明りありみんなみの空の果にぞ雲たむろせる

片岡 永左衛門

綱かけて船よりおろす砂の上の大赤鱗えびに秋の雨ふる(安城にて)

片岡宗

吉野川深き青淀に突き出でし崖に眞赤く曼珠沙華咲く

片岡長英

言ことに出て何も言はねど眼にものを言ふ人と居て今日も働く

片岡恒信

白根山國の高原わがゆきて寂しきときはかへり見にけり

比叡山にて 二首

廻廊の檐のきをかすめて吹きおろす雨ぎりの中に庭の苔青し

比叡山に朝あるる雲の湖うみに下り雨降りにけり瀬田も大津も

熱海上の山にて

夕庭の橙の實の雫せりいまふりし雨は過ぎにつらむか

はずみつつ吊橋すぐる自動車なり闇ふかき夜の溪流よるを感じず

片岡 久子

睫毛ながくなりし瞳に物を追ふ子に母われの映りそめしや
旅客機の爆音ひとつかぶさりて春のくもりとなる屋根のうへ
山茶花も白きは威ありたたまれる七重の瓣に陽をばはじきて
信貴生駒たたなはりたる山の嶺のかつらぐ雪は際きはあかりせり

梶谷 輝夫

またも襲ふ霧かと思しが山腹を過ぎたる雲は海の上に出づ

志々岐灘にて猛訓練中掃海艇友鶴怒濤に吞まれ轉覆切開きし

船底より救ひ出されし者三名のみなりき一首

二十八時間経ちて切開けし艇底より息ありて三人救ひ出されき

登るほどに低き夜空の星の冴え光は細く限につきささる

梶 塚 鈴 音

敷島の吸ひのこされて二三本かくしに遣れり亡き夫つとの服

梶 原 九 八 郎

秋ほたる稻葉にひとつとまりゐてくまなくも照る月のひかりは
嵐やみし朝山ゆけば山梨はあまた落ちゐたり青草のなかに
雨にぬれし青草わけて吾拾ふ山梨の實の冷たき手ざはり
雨やみてけさの冷えかも頬白のなく音ねは山にすみてきこゆる
日だまりに新藁ほせば新わらの青き匂ひはただよひにけり
靄よなき月夜となれり前島ひかり冷たきは京菜の青葉
陽の入りて風静まれり檜山の向ふはふかき冬の空かも

竹つみて縣道とほる馬車のおと鎌とぎをればきこえきにけり

梶原とよ子

樺太にて

眞日のもとひたむきなれや移民らが荒野ひらくと馬うごかせる

梶原太

道路工事を監督す

ふりあげて打ちおろしたる鶴嘴をがつちりうけて岩はくづれず
石山ゆ割りて運べる割石の殺そぎ落したる角かどのするどさ

梶村正義

比叡山一首

織田勢のをたけびのうちに火をふきし根本中堂のむかし思ほゆ

明暗のかすかなる艦底に靴の音鐵にひびきて近づき來る

高野山

雲のかげしばらくすぎし寺庭にわれと妻と立ち大塔に對ふ

唐招提寺

しづかなるたづきを欲りて唐ゆ來し佛師も寺にあがめられにき
日かけ既にかたむく寺の門入りて松の間にせまる屋根を見たりき

梶本綾子

つくばねのケーブルカーの道沿ひに咲きてしづけき龍膽リンドウの花
益良雄の君とし行けばこの眞陽のわが爲にのみ照るかと思ふ

勝崎猪之助

腎臓の講義終へしときつとたちて父のやまひを聞きし子のあり

教室は教ふるわれと學ぶ子の氣合こもりてちりも動かず

勝田基文

山の温泉の朝の散歩にとりて來し野あざみの花きつね麥の花
途すがら剪りてもらひしあぢさゐの花毬がこぼす山の朝露
露ふふみ咲きしづもれるあぢさゐの朝土におとす大きな花影
山里は水ゆたかにて若葉かげいたるところに水車まはれり
夏山にわく白雲のひろごりは日照雨となりて庭に降り來る
山吹の垂り枝をくぐり行きし犬の蹠あとは残る雨あとの土に
この朝を鳴ける鴉のひとこゑの澄みきはまれる秋空に消ゆ

華嚴の瀧

瀧のしぶき谷にこもりて息ぐるし白泡立ちの水のま青さ

瀧つぼのしぶきに映えて金色のにじ立ちにしが須臾にして消ゆ

大熊長次郎病む

かくのみに病みてのびたる髯ゆゑにあはれと言ひて剃りてやるなり

天 日

妹いもうとがうれひなぐさめかねて天つ日の光りのもとに立ちつくしたり

日の光りおほに仰ぎてしらたまの妹がうれひを相なげくかも

日のもとにふかきうれひのわびしらに寂しき笑ひゑみかはしつつ

千櫨先生歿後

空地にはま夏日あつし火をつけて焼くはかなしも先生の物を

藁布團の燃え立つほのほうち靡きなびきかかれり向日葵の花に

先生の位牌の前にすわる時いつも湧く思ひけふもわきけり

マーケット風景 一首

なま乾きの三和土のしめり靴をとほし日暮れは蹠のつめたくなり來つ
湯に行かば心すこしははれゆかむ猫のあくびを寝たまま見てゐつ

勝野 正男

黒松の根がたに竝ぶ庭石のいろ寂びたるに雨は降りつつ
しづかなる雨と思ふに霽れゆきて薄陽に匂ふ山茱萸の花

金關寺にて 一首

水明りは池より照りて落敷の縁のひさしに揺れてうつれり
糸切齒かすかに見せてゑまへるにいとしき子よと思ひそめける

勝俣 久作

山小屋に目覺めて聞くは寂しかり砂吹きつくる疾風のとよみ

勝目實

白雨の過ぎたるあとの絲瓜棚へちまは青く雫たらせり

勝山紫夕

木曾川の葭原に棲む行々子の聲をまづ告げ友歸り來ぬ

桂孝二

ねおんさいんあざやかに照れ別れ來てつかれてわれの息つきにけり

桂定治郎

足もとに鶯のこゑきこえしが水のひびきとなりにけるかな

浪けふるここは磯村枳殻の垣根を越えて鷗おりきたる

遠方にうけらの花のま紅くて峽の眞晝ものの音もなし

桂 木 陽 一

兒等の瞳の吾に向へる明るさや今日一日をつつしみてあらむ
黒々と此の畑土の粘りあれば老父憇はせて獨り耕す

葛 城 史 朗

堀切菖蒲園 二首

あやめ田におつるかけひの水のおとかそかにきこゆ朝のしじまに
朝ぐもりをぐらき小田につらなれるあやめはしろし水にうつりて
たかむらに風をさまりて冬日和さだまる日なり妻髪を結ふ

門 林 兵 治

崖下の家居しづけし消えのこる雪踏みしだき出ては歸るも
街中の空地の草も實をもちて單衣に寒きけふの雨かも

門屋 いつらう

賣られ行く仔馬まけにをはりの飼葉やりて灯をさしのべて立ちたまふ母

門屋 ますゑ

養蠶は減らし西瓜を多く植ゑ世の移りゆくにただにしたがふ
寒むぎむと陽の入る時に重りて見ゆるかぎりの山澄みにけり

門 井 眞

闇に奏かなづる貧しきひとの樂器を想ふ夜業の村は更けにたるかな
泥股引洗ふ野堀の夕かげり水のぬくみのただにしたしき

野を遠く背負ひ來て厩にぶちまけたりほつと漂ふ草のほとぼり

蠶飼棚外しし部屋に寝る夜なり吊りたる蚊帳が風にふくらむ

蔽ひかぶさる村路の青葉雫せり口笛太く人通りたり

角 繁 子

大吹雪の夜

息づまる思にまちしわが六^{つま}は歸り來ましぬ雪にまみれて

茅ヶ崎にて

平嶋の飛び飛び岩の波のまをかもめ群れ降り舞ひあがる見ゆ

叶 翠 村

闇の夜の海づら走る灯の二つ後の一つが追ひ越しにけり

叶 多 重 雄

凍^いて土にわが行く下駄の音響き笈をかへす支那町暗し

鉛 山 良 太 郎

朝すでに膳にむかひて疲れたるこの衰へはかりそめならず

梅雨の雨しぶきて降れば晝床に素足の冷えをわれはなげくも

青空に鳴る風あれば目の前の松の花粉は見えて散るかも

赤とんぼひとつの向きに流されて數かぎりなし夕づく空に

枕邊にとり置きしまま日を経たる眼鏡の塵を拭きしがまた置く
海の上にしぐれの雲のうすれつつ見え來る佐渡は雪ましろなり

悼 友

かなしみてわが眠りしがかかはりなき夢を見つぎてあかときにさむ

東北大K先生より著書を賜はる

床の上に仰向きて讀む先生の著書重ければ休みやすみに

金子花城

今朝はやく港をいづる船の笛ふとぶときこゆ海にひびきて

心ばかり搗きたる餅をねもごろに切りをり母と語りながらに
はねまはる蚤をやうやく押へつつ獨言いふ朝床の上に

金子 薰園

藤の花ひたぬれたれどしづくせず晝かけて細き雨ふれりけり
しづくすと見えねど藤の花垂るる棚の下べはぬれてありけり

早春妻と銀座を歩む

一ことの妻の言葉もはればれし柳のけぶる銀座をいきつつ
ふと家におきて來りし兒らおもひ多く語らず銀座の街ゆく
青芽ふく並木のやなぎけぶる日は銀座の街もしづくし見ゆ

五十歳を迎へて

わが^{よはひ}齡五十^{いそ}路^ぢに入らばやすらけき心をえむとかねてねがひし

子らいまだいとけなければ身の老をおもふいとまもあらずはたらく
わかうどのすなる勤めを日ごととして疲れしといふことを言はずも

蜂を詠める

朝見ればみどりこまかき楓葉の葉がくりかへはに蜂の巢をかけてける
巢をいでてあそぶ日もあり遊ぶ日は羽音をたてて樂しげに見ゆ
あやまちて楓の枝にさはれども巢をかくる蜂は螫ささざりにけり
蜂は巢にわれは書齋にむきむきの營みをしてひと日くらせり
蜂の巢は遠よそに見よちかよりて手をしふれなば螫さされむ兒らよ
汝れが巢にわざはひせむと思ふものわが家やにはなし人を怖るな

箱根強羅にて 二首

雀らは枝さしかはす山松のうれよりおりておぼしまに遊ぶ

雲晴れて朝の日させばおぼしまに近き松が枝雀むれをり
いつかわが床に來りてねむりゐる兒を見る朝のねさめよろしき
父となり子となりて相抱きつつしづかに夜をねむるたのしき

落合直文先生の萩之家忌に

萩の家の本つながれをわが在らぬ世につぐべきはこれら若人
萩の家の本つ流れはわが承けてわが統のひと繼ぐべかりけり
師の大人の逝きて二十年斯の道のまた新しく興らざらめや
橡青葉一枝一枝ゆれるしがやがて樹をゆする風となりけり

雜誌「光」を出すとして 一首

今か起つわれらひとしく秋ぞらの眼にみなぎれる光を仰ぐ
兒をつよく叱りし後のさびしさよ向うをむいて遊びをるぞも

佛蘭西語片言かみことにいふ兒がこゑの涼しきかもよ「ほんじゆるむつしゆ」
日焼けせし顔に帽子の日覆ひひの雪ゆきより白き水無月きたる

吉川靈華氏を訪ふ

唐朝たうとうの埴輪はにわの武人ぶじん藥いすとりて塗ぬの箱はこよりいでにけるかも

草刈女を 三首

うつむきて草刈る女の半面に草がうつるか青ざめて見ゆ
朝つゆの残れる草を刈りつつもをりをり空を仰ぎてゐるかな
そのやは手幾日かからば原の草刈りをはらむぞ青空遠し
花買ひてかへる心となりにけりこの静けさや幾日欲ほりせし
夕ぐれのがらんとしたる一室に紅き林檎が投げられてあり

さむざむと厨の隈の棚の上に紅き林檎は筈はずにしありけり

宇治にて

夜あくるか平等院の鐘の音のきりの中なる水にひびける

妹 逝く

神無月末の六日の日がてればしらつゆよりも清くうせにき
水のごとく心はすみて執着も未練もあらず死にゆけるかな

新宿御苑にて

曇り日の御苑は雨となりにけりしづかに歸りゆける庭師ら
胸ひらくごとし御苑の青ぞらのもとにひろびろつらなる紅葉

母を憶ふ 三首

母は誰もうらまず責めず目を瞑とぢぬわが十一の秋寒き夜に

父と母と諍いざなひするをかたはらに聞いてゐるし日のわが涙かな
妻を娶らば妻を愛さむとおもひけりあはれその頃の子供心に
人のおもひまつはる如き春の夜のわがるまはりのものの手ざはり
灯あかりのいろのものなつかしき春の夜に白きままなる原稿紙かな
停車場をいでて並木の夜を行くわが肩にちるものあり落葉か
落葉する前の樹木きりぎりすのしづかなるさびしき心わが夜よに來ぬ
京の夜はやや霏あられだちてふけゆけりおもひ残してあづまに歸る
かへりきてをぐらき室に置かれたる旅靴など淋しかりけり
大漁の鰹の腹も背もひかる月夜の濱のひとのどよめき(五浦にて)
路たえて芒あやわくればほそぼそと多摩の岐まがれの水澄みて行く
書くものはみな書きをへて冬の日の暮るるに間あり雪の降りくる

金子 不泣

いづかたか時の歩みのきこゆらめゆふ靄の中に麥穂となるも
しづやかにこの世の生死おもひ居り穂麥の上にゆふ日あざやか
眼をふせてものなおもひそ春の日はただ遠くして明るきものを
遠き地に病む子訪はむとあらしの夜出でゆく親に菊の花暗し
短かかるべしと相寄りともどものいのちあはれにさびしみしかな
天ざかる鄙に住まへばうら寂し茄子畑なすに茄子なすもぎにけり
母の聲厨の方にきこゆればあわてて起すわが幼な妻
雨戸繰るわが手を止めてきき入りぬ夫となる夜の遠田の蛙
秋近し居間の柱にわが妻の寄り添ふ見つつこころ寂しき
渡津海の果の島山明ければかりがね渡るかそかに啼きて

人間の哀愁うれひただよふ能の面見居まへみつつ久し庫内にして

秋の風親のしりへに従ひて仔馬は渡る青き川瀬を

幽かに一すぢ細く吐く息の時には絶えて見守りがたし(妹の死)

忙しさにしみじみ抱きし日も稀ら吾兒わがこを死なせて後悔いにけり

草の穂の垂れて重たき揺らぎをも吾兒を死なせて寂しとは見る

窓の外の花は盛りをすぎにけり錢を數ふことの寂しさ

夕明り甘きにほひに驚きぬここにもそこにも桐の花盛り

目方足らぬ米の俵に差し米をさせるさびしさ小作人と居て

そらまめはわが子の丈より高ければその花陰に子はかくれたり

金 子 健

的野上等兵を送る

かへる日をまた思はざらむつはもののかがやかし顔に汗はにじめる

金子信三郎

萩桔梗抱へ下りつつ目はなみだ青き空より母來るごとし(母の日)

枝低く細谷川の上に咲きて香かざりをあぐる朴はなの木の花

岩山のいろ黒ずめる松の秀ゆたかに小さく澄みて冬日落ちゆく(山居)

老に入りて泰やすけき人に面むかひ若き日の母をききて戀こひほしむ(母が學友に逢ふ)

豁はらふかき柵しほの黒秀くろゆたかをまきのぼる雲ぞ現うつしく空に照り入る

龍駕上毛の地にとどまらせ給ふ

星の飛ぶ曉ぞらはしづけてひびきながるる山河のおと(参拜の儀に参す)

野の果に並ならみよろふ山やさしいづる朝日に雲のごとくうるほふ

あなたふと民草われの目にありてわが大君は立たせ給へり

五萬の兵曉の草野にみちくるとみなぎる力はかりしられず(大觀兵式)

み光の四方に溶け入るおもひなり天皇旗高くわれは拜みぬ

細谷を一里のぼり來て鈴蘭の群生にきよき日のひかり見つ(黒瀧山參禪)
そのかみの領主の牧に畑拓き人等乏しき煙あげたり

眞弓に死なる 三首

山路に露の丸葉のはためけばわが子駈け出して來るかとおもふ

わがからだ違和のきしみにあり堪ふる庭に影ゆれて蝶の舞ひ來る

街の上に山松のみどり色牙ゆるゆふべ子が骨を抱きて歸れり(故山埋骨)

この宿の奥がの谷は人ゆかず若葉明るく水鳴りにけり

雪の上に雨のそそげる一夜あけて露の臺淡く芯ひらきたり

この四五日人に關はる怒ありて感冒かみ荒あの咽喉にまづき飯食ふ

金子 静 光

肉一片見せびらかして犬にその知れるかぎりの藝を強ひをり

明日もまた霜ぞとおもふ月影の障子に水の音さやかなる

金ほしと何につけても思ふと言ふかくさぬ友の氣持をうべなふ

金子 善 治 郎

ぼろ船の思惑おもはくなどといふことをおもひみるだに遠きくらしか

天氣圖は琉球の荒化しげを示しをり二百十日の風窓かぜどに熱く

金子 貞 美

曉有賀峠を越ゆ 一首

今日よりは通はむこともわが無けむ凍てし山路雪降り出でぬ

みどり葉の新葉の桑を手に摘みて蠶飼ひする日は近づきにけり

金子 白光

河中のとび石こえてゆく我に瀧の音いよよ近くきこゆる
おくれ花一つひらきし朝顔の花にもぐりて蜂のゐるなり

金子 秀子

目つむればこゑなきやみのそこひより身をせむるおもひなしといはなく
上野山ゆふこがらしの音きけば鴉のこゑもまじりてきこゆ

金子 美美子

くくみなくここの沼田の初蛙蘆吹きすぐる風は梅雨めく
黄金蟲金の薄羽をひそめたる苑さかのま晝のひなげしの花

金子 坂花影

人夫となりて樺太へ

アイヌらがくむ酒壺を片照らし船室のほかげ暗くありけり

金崎民三

關門海峡

岸つたひ和布刈の岬にうつ汐の白くながれて渦巻き去ぬる

金澤長三郎

下積の生活はながし年金のねぶみをしつつひとりたのしむ

金澤恒治

麗かに出でし朝日はよべ荒れし川を照らして闌けゆかむとす

家並により添ひきたる兵士等のかがむすなはち砲とどろかす

丸太積む馬櫓いくつも連りて街にひととき汗いきれ立つ

雪原に深く食ひこむ櫓跡は道をはづれて馬櫓の過ぎし

金澤 一雄

生野鑛山にて

埋れゆく廢泥堰堤の水際に赤き躑躅の花咲きにけり

手撰場に鑛石撰りゐしに古びたる煙管出でにきその鑛夫思ふ

この山の谷間は水も流れゐず陽の照る岩は酸化鐵ふけり

人も我もまたかと聽けり豎坑に墜ちて死にたる人の噂を

金澤 照子

秋茄子の味のうまさを言ふ母の目のくぼみさへかなしきものを

金澤 種美

父死す。その一生は妻なるわが母を虐みし一生なりき

おもふまま爲たいざんまい爲つくして死にゆきし父はうらやむべかり

母

死をばかりおもひつめしころ何時となくうすらげば母が生きてありけり

郷閭小情

こつそりとこのふるさとのかたすみに母子かくれて朝茶をのめる

漂泊の旅をつづく

富士が見ゆ二階のまどの破れ戸の穴から今日も富士を見て暮す(静岡)

橋際の芝居小屋の旗はたと風にうごけば旅ぞさびしき(福井)

ふるさと

ふるさとの屋根のうへの草あき風にそよぎてころみだれがちなる

高野山に登る。剃髮得度せむとする前後

これがこのつひのころのおきどころ山深うして鳥も來鳴かず

まだ剪らぬ新發意の髪の櫛のはのあとに消え入るはるの淡雪
外の面には春の雪ふる山の寺の庫裏にかくれて足袋をつくらふ

大和の山寺に籠る 一首

村の衆が呉れゆきし菜は厨邊の板敷の上にわすられてある
柿の實をぬすみ居る兒にこゑをかけて泣き出されぬれば淋しくぞある
ひるをひとり厨の甕の残り水筒にはうつして頬ひげを剃る

高野山奥院奉職のころ

くるくると頭を剃りて戻る夜の月を寒しと見あげたるかも
あかあかと灯しつらねて萬燈籠堂あしたの霧にぬれて人居る
密林の中の小草におく露は霜じろみつつ光りたるかも

東京にて

秋風の神保町の町角にしゃがんで下駄の緒をたてなほす

金澤 眞砂

爾靈山

西港も双島灣も見ゆるなり此處のとりでにのぼり來たれば

金澤 ひさ子

ひたぶるに自^しが利にふれて思ひゐしか誠ごころのあらば恐れよ
身ひとつに包めるものを時じくにあふれて出づる思ひせつなき
かたくなに思ひひそめてひたすらなる怒りは人を憎みそめつも
心荒れて一日ゐにしか灯のもとにふふめる梅の紅さ目に沁む
うす照りにいきるる日中門川の瀬鳴り荒々し身は疲れたり
一日おきに來るそり待ちて用たのむともしき山の佗住居かも

動き動く世とは思はれず山里に雪のしづるる音をしきけば

金 田 美 山

菜の花の咲き終りたる三島野に眞白き罌粟けしの花咲きにけり

金 田 千 鶴

群なして夕べの空を飛ぶ鳥に歎きはありと思ほえなくに

しづかにも今かへりみつかくなりし身の成行を悲しまざらむ

このゆふべ來りし人とまさびしき面合せけり五年を経て

ふたりゐて眺むる山に落つる日のまたたく間なる時を惜しみつ

夕べの日に照らされにつつかくのごと君と在る身を疑ひにけり

言ひいづることみな空しき心地すれふたりをりつつ時は經行くに

人を送り立ちかへり来てわが心知るべくもなき母ともの言ふ
むらぎものころゆらぎて七日經つさみしき吾に立ちかへるべし
願なき身とし知る時しづかなれやさしき言ことをきくは苦しき
もろともに老ふけゆくものか遠國に人も獨し住み居るらしき
年ふけて知りゆくことはみな寂し人もわが身も若き日過ぎぬ
こほしさはすべなけれどもあやまてる身をば悔いつつ吾は果つべし
一年の過ぎし思ひの今朝わきてすわる疊になじむ日のかげ

病床雜詠

見残ししもの一つと戀こひ念おもふ水邊涼しく蓮あま咲くさまを
外の面おもにはうつつに鳥の啼きてゐてなほいく日かわが在りぬべし
悲しめる心にあらず何げなく言ひたる時に涙ながれぬ

瓶にさす知風草の穂のかすかにもたえずそよぎて涼しかりけり
何時いつと何を待つ身にあらなくに日々に秋づき行くをたのしむ
夢うつつに醒めたる夜半にしげしげと面わ近寄せて母の呼ぶこゑ

金 近 信

古き日記ひろひよみつつ今もなほ人にときめくわが心あり

金 津 於 菟

水濠のくらきたたへに降り消ゆる晝幽かなる雪を見にけり
しぐれつつ日ぐれさわだつ池の面によぢれて寒き噴水の散り
なめらかに濡れて光澤だつ庭石の配置も寒し夕べしぐれに
ゆふさればともし涼しきとなり家のひとのたちるも樹のひまに見ゆ

金 登 雙 紫

そのもろ手こなたにむけていだかると吾を見てするよ兒は愛しきかも

金箱 慶三

むくむくと綿入れたまふこの蒲團今宵小床せどこにわれは敷き寝む

金丸 與志郎

戸をくれば隣もあけてゐたりけり流るる霧の中にももの言ふ

ぶつつりとラヂオ終れる静けさや外の面おもての雪はやみてをりたる

野阜のづかさは菜種から焚く夕まぐれ動く子のかげ炎かにむきむきに

金村 シゲ子

勤より急ぎ歸れば燈火なき部屋より吾子わがこら飛びすがり來ぬ

金森 契月

牛の如く父は働き給へども我家は何時も貧しかりけり

全生病院創立二十周年記念に御出席を給ふ

齒のかけし御口あらはに笑まひつつ澁澤子爵語り給ひぬ

病院の墓所

一人死ねば一本松を植ゑしとふこのおくつきの松山に來し

飛行機のとどろと飛べど知らぬがに牛は牛どち寝て居りにけり

金 森 宏

手にをへぬ兒をさとしつつ教育のちからうたがひて思ひ疲るる

金 盛 仁 平

信州下諏訪なる島木赤彦先生の舊居を訪ふ 一首

軒氷柱障子に映り明るけれこの室に君は逝き給ひけり

新らしき學期となりて教科書の活字小さきを子は喜べり

たらちねの一生淋しく住みなせし狭庭の隅の石落の花

金谷正二

山窪にひとり藪草を掘りゐしはわが住み足らふ心にあらず

昏れなづむ浅山幾重見の果に耀よふ雲は日の在處かも

持ち重みかたむけて来るをとめ子の籠ぬちみなぎる桑いきれかも

鬼灯を口にふくみて鳴らしをり愛しとおもふ山の娘ろかも

金山平二

松葉刈る鋏の音は日暮まできこえたりしが月出でにけり

虎杖の根まで煎じて飲まんとす心はげしく生きたし生きたし

金山曠

青蛙のどふくらせて鳴き出でぬ蜜柑の花の白きたそがれ

子を亡ふ

金井 廣吉

たそがれは乳満ち來らしその母の獨りやしほるひそけき音す
手をふるればほのぬくみあり今更に憚りもなく鳴咽ををあぐる
いのち果つる時を知らねば匙をもて無残や乳を子にぞ吸はせし

歸郷、數年振にて兄弟相會す

ぞんざいの言葉ながらにいささかのいつはりはなしふるさと人は
わかれ行かば生きてあふ日のありやなし聲こそむせべ自動車來る

金岡 正男

恩給に安けく暮らす友は我が植うる代田しろたを見て通りたり

兼田 重子

田草とる朝涼しければ母上は歌唱ひますこゑうつくしく
取り入れて山と積みたる稻束のあまきかをりぞ庭にただよふ

兼 松 義 明

特別議會開院式 (二・二六事件の後)

現神すめらみことが歎き給ふ大みことのりに涙あふるる

河 合 一 路

窓のべに夕陽さし來ぬ搗く米もいまは眞白くなりけるかも
ただひとつとる新聞を母上がつひえ嵩むとのらす日は來つ
小商人の滅び残りがとぼしくも生くるすがたをこの友に見つ
議會傍聽あきて出で來し百姓のわれは疲れて淺草に來つ

妻病みて望なしといふに

はづかにも痛みまぎらすに過ぎぬとふ薬の壘をすかしみにけり

河合元巳

税金未納注意書は來れどもどうなるものぞ狀差にさす

貧しければ吾もかくありき弟は學用品買ふべく荒繩をなふ

あせじめり冷たくなりし地下足袋を火にぬくめつつ今朝もわがはく

ひとり病めばかかるしぐさもなすべきか食べし葡萄の種をかぞふる

あざやかに伊吹の山のやまなみの見え渡る秋となりにけるかも

河合千代子

露にぬれて花瓣ほぐるる山百合の蕊しよはまとまりていまだひらかず

しつとりと百合の雄蕊はしめりもてり開きかけたる花瓣の中に

ほのぼのと心にせまるものあり咲きととのほぬ百合のかたむき

飛びてこし鶉ひよのとまればしなひつつ楓の細枝いまだ芽ぶかず
風吹けばおもむろにゆるる竹の秀はの諸葉のそよぎつぎおこりく
ふかぶかとかさなり茂る竹の葉によどむ陽ざしのやはらかさ見つ
六月の晝をきほひのぶる木櫛の若葉の光澤つは陽をはじきをり
陽のぬくみたもてる若葉肉厚くしんなりとわが指にふれくる

宇治平等院にて

屋根のそり兩翼ののび此堂のととのへる美のもてる靜寂

河合 恒治

うすら陽の松の葉なみに照り映えて暮れなむとする山はひそけき
二番子の燕巢立ちてゆきにけり乾きし糞の見るにさびしき

鋌を焼く火床烈々と焰を吐けり鐵の匂ひはまがなしきかも

夜航海二首

くだちゆく眞夜のうなさかほのぼのと思はぬ方に月の浮びぬ
もり上りうねりくづるる波の秀の白々つづく月の下びに

白々と波の秀がしらみだれたち此のごろ冷ゆる朝つづくなり

河合年枝

おもむろにおのが心のあゆみをかへりみるまでさだ過ぎにつつ
つりすてし盆提灯の七草にまぎれてきたる燈心蜻蛉

河越百代

昏れてなほ新樹がたもつ薄明りそこはかとなく蝙蝠の飛ぶ

河崎敏之

新芽ふく庭木の揺れの音立てて春のあらしの吹きつゝの見る見ゆ

河 杉 初

すがの根のながき春日に心ゆるび言ことにいでなばかなしけむかも
わが庭のうす紅梅は咲きにけりわびてし住めどかかはりもなく
日のぬくみほのけき石をしたしみて倚りてし居れば石の冷たさ
霧雨の二日を降れば夏ながら麻の小夜着のふれの冷たさ

としふりし椎の大木はものさびてかなしき人の心を知らず

水に散りしみにらに匂ふあるの香に心したしみて衣きぬをそそぐも

くぬぎ山くぬぎのもみぢ夕まけて燃ゆる日ごろは物をこそ思へ
ともし火のもとに相寄る人もなしひとり生きつつ秋にあひにけり

はてしなき芒の原に臥すこころ夜どこの闇にこほろぎの鳴く

枯色のただ一いろにたたなはる大草山に冬日あまねし

冬山を下りきてわびし肩掛のふさにまつはる枯葉はらふも

みすずかる信濃路を來て白雲のさやけき秋にはやくあひにけり

高原の焼石原に風澄めり浅間葡萄のつゆけきを摘む

天城やま越え來し人か夕ちかき谷の湯宿の釣橋わたる(湯ヶ島)

わがひたる黒部の谷の岩の湯に栃の黄葉(もみぢ)の散りてうかめる(鐘釣の湯)

人さには四條大路をみちゆけど知る人もなし旅にしあれば

河 瀬 菊 枝

湧くまでと老父(やち)の一徹に掘らしめし井戸深きかも水も清らに

河 田 世 以 子

暮るるまで春陽をうけて靜かなり山のなぞへの一むらの家

河 田 烈

明治三十三年頃東洋風雲漸く急なり

雪深みシベリヤの野に鷺をおひデカンに獅子を狩るよしもがな

河 田 菊 乃

わが涙一つ散るにもおどろきぬ白き羽もとひく木の下の蟻

水に住むもののひれにも似て振りぬ夏の月夜の二つのたもと

河 田 楢 男

瀬戸内海北木島

生干しのいりこの匂ひ漂ひて濱の漁家に人影もなし

河 田 政 一

京城昌慶苑にて

松多き韓かんの苑生にさす日光秋ひかげを近みか頬ほに強からぬ

河内阿希美

うつそみはひとりと思ふ安けさに夕月淡きみちを來しかな

河内英壯

人の前に肩を落して坐る癖は店を閉ざしし頃よりの事か

北大病院精神科診察室

くすし達寄りてひそひそ話しをり我父にかかはることならむか

河内專之助

病院がやうやく見ゆる橋に來て見下ろす川は寒きさざ波(足病みて)

棕櫚の木の花咲く見れば思ひつめて語りし人を忘れかねつも

石段に見下ろす町を晝にかける人は手前の樹も描きて居り

春秋のうつりかはりもなき庭と思へばかなしあらはなる石(龍安寺)

繩なぎれのちらばる道にあらあらしく埃吹きたつこの晝の風

河内政治郎

本堂へ合圖の板木打ちならすにこの寺庭の鳩驚かず

河内野弘基

海の上をひかり高ゆく飛行機のここより見れば眼の高さなり(長崎港外伊王島山)

乳に飽きしあはれ仔猿か春日さす土にまろびてひとりたはむる(西公園)

母猿の胸の和毛なまげにのぞきゐる乳首ほの紅し春の日ざしに

潮ひきし春河の洲にいでてあそぶ子らが野球は日の昏るるまで

登り來て汗拭く峰の秋晴れに百鳥のこゑ澄みひびきつつ(香椎の山)

晝間登りし鑛泉こうせんの宿ならむゆふ山の高處たかどにひとつ灯をともしたり

待ちかねし夕餉はすなれをさな子の險あやふく閉ぢなんとすも

昭和九年三月水雷艇友鶴轉覆す 二首

救はれし兵の興奮はいきなりまづ上官の安否を喚きたづねし

體溫をいまだ保てる屍體あり書きかけしばかりの遺書をのこせり

山蔭を船ゆきしかば風ぎ青む水面みづはあまた跳びにぐる小魚（長崎港外）

飛びすます蜂の翅風か丹つつじの花に若葉に吹きうつりつつ

子が捕りて庭に放ちし田蛙は日々に鳴けどもいつまでか鳴かむ

風にむかひ飛びなづむ魚翅とみひかり頼とみに傾き向き換ふるらし（飛魚）

草喰くめる二匹の仔山羊わが寄ればきよとんと佇たちぬ相寄りそひて

浪さわぐ今津長濱なぎさ添ひ人ひとりゆく夕陽にむきて

昭和十一年四月渡滿部隊を見送る

船腹ふかく兵が乗る間を巨き船ひとすぢうすき煙吐きをり

河津 加奈芽

蝸のまた一しきりなきいでて雨近まりし風の冷え來る

河津 直入

井手今滋ぬしへ消息のはしに

母君はいつまで草のいつもいつも苧うみてませり面かはりせず

河東 光路

もりあがり日光ひかりはらめる白雲に打ち向ひつつ息づきにけり
旃檀の若葉のほぐれこまやかに夕映ぞらのかげにそよげり

秋を病む

萱の穂の光まばゆき晝さがり疲れやすき身をいたはりて歩む

河 東 梨 雨

梅雨曇る渚の面の静もりに五大堂伽藍かげをうつせり(松島)

冬の日の晴れたる空にひびかひて杭打つ音の藪より聞ゆ

河 東 流 步

炭焼きのぶなの林に噴く煙おほにまきつつ山暮れむとす

河 野 き く 子

落葉松かいらまつの林につづく山畑は葱馬鈴薯をともしくぞ植う(蓼科高原瀧温泉)

群がりて大空をとぶ鳩の群の向き變ふる時遅れし一羽あり(新聞社の鳩)

河 野 戢 二

右左對ふ華表かぶらも石獸いしけも陵りやうを守りて此の日に至る(東陵)

四平街われの眼を遮るはただ大豆もて築かれし山

河野亮

茂りゆく青葉もさびしふるさとに就職見込なくてこもれば

河野榮

あかあかと夕べの陽光ひかりとほりたるこの竹藪にかなかな鳴くも

河野樹八郎

まなかひの若葉の森にすそひきて虹はいしくも立ちにけるかな

河野聽琴庵

朝庭に藪鶯のなきつげり袴の紐をむすびつつきく

河野通成

學び來し醫學もつひに役立たず妻は死にゆくわが眼の前に

水さへもほしとは言はずなりにけり死期近づきていとしよ妻よ

河野勉

山越しても
の買ひに来る人々が馬の繋ぎ場わが庭にあり

河野 慎吾

うつらうつら眠りごころに聴くものはふくらみ鳴きの蟾蜍の遠ごゑ

新月の光さしゐたり藏ぬちにこぼれて寒き精米の粒

蠟燭の灯だちの揺れの束の間は雛の鶏冠も照らし出されつ

ひひらぎの刺もつ枝もやはらかにけさ淡雪のふりそめにけり

さみだれの晴れますくなき薄日でり白壁に鳴く蟬を押へぬ

秋の野に遊べる馬の尾にふれて眼覺むる花もありと思はむ

あはれ春もこれが終りか蠶豆の鐵漿くろぐろと染めてゐにける

膝にして莢をむき居りそら豆のこぼれ落つるがただうれしくて

雪山に影おとしゐるむら雲は眞日をとほさず夕づきにけり

上林温泉

牛の背に乗りて見てをりあかつきの光をさまれる岩菅山を

雨あとの岩あらはるる山のみち牛も草鞋を履きかへてゆく(香打峠)

山上に湛へし水は冷たけれ翼をひたす鳥さへもなし(琵琶池)

別所温泉にて

鐘ならず山のみ寺は黝ずみて夕べの空を隔てけるかも

大正十四年三月宮城を拜観す

夕づく日さすや白木の宮づくりすがしさ過ぎてかしこし我は

焼太刀のにほふがごとくしづもれる賢所は塵もとどめず

この城に駿河の富士をとり入れしむかしの人のゆたけさを思ふ
越人が織りて着るとふ雪除の菅すげのころもを我は持ちたり
越後路を行きしかたみの菅ごろも壁に吊して着ることもなし

霜 夜

傳來の備前兼光鞆をはらひ眼もてつたへば寒けくもあるか
闌かけゆかば霜さへこゑを立つるなりわが打つ太刀のひらめきを見よ

芭蕉 賦

ふる雨に音たつるまで淺みどり芭蕉の玉芽ほぐれけるかも
芭蕉葉にときのま雨をこぼしたる夕べの雲はしづまりにけり

三宅坂附近

秋ふかし何におどろく青鷺の水の上ひくく脚さげて飛ぶ

しぐれの頃

降りすぎるしぐれの雨はさを鹿の角をつたひて滴りにけり
武藏野の落葉のころを思ひ見よきのふも今日もただ風の音
呼びかへす寒鯉賣は音たてて庭の落葉を踏みにけるかも

笹塚附近

水ぐるまかたりことりと音のして夜もすがら何を搗くにやあらむ

品海秋情

漕ぎいでて海の面さびし日の暮のちまたのひびき波にのりくる
空高く打つや投網あみのひろごりに朱あけの入陽をつつみけるかも
青笹を敷きて竝ぶる鯛の尾の反そひのゆゆしさ籠にあまりて

河野百合子

夕明りいまだもよどむ庭垣のひあふぎにきて蜻蛉はねむりぬ

河原木利一

稻妻につかの間見えし庭先の大輪の菊揺れりたりけり

河原武

夜勤の豎坑口を出でにけり凍み透りたる氣の中に立つ

河原塚重忠

鳥網はる黍の山畑霧はれて明けゆく空につぐみ鳴くなり

河原井正則

獨居のうらやすけさやねもごろに秋刀魚さかなを焼きて酒あたたむる

河邊蛙遊水

窓開けて庭木のそよぎ清々し吾が磨る墨の匂ふこの朝

風先のあらはに移る早稲の田や出穂近づきて朝は涼しき

河 南 傳 藏

初めて牛を使ふ 一首

朝戸出の人多き道おもはゆし牛引きつれて田にゆくわれは
田の草に朝いで立つと股引の裾をゆはへて身の引きしまる
小山田にひとり草とる晝たけて餉時けどきとおもふひもじさおぼゆ
心こめて作りし茄子の良きを賣り屑ばかり食ふ百姓たぐわれは
むきむきに倒れし稻を刈りがたみ刈りしぶりをる弟はげます
刈り終へて落穂を拾ふ家族うかららの影ながながと隣り田を越ゆ
用もちて誰一人來ず家族うかららと繩なひきほひし今日ぞたのしき

河 南 聯 吉

谿谷をへだてて目近き去年雪の色あたらし昨夜は暴風雨の中をわが來つ
岩尾根を下りてしたしき杉生山靴におもたき泥搔きおとす
山の上を幾日かも往きあるときは寂しかりけりわれのゆく影

瀬戸内海遠漕 一首

洲に滿つる夜潮に浮力得たるらし機船の泊り火時おきて揺らぐ
ビルの角曲りて對ふ工場よりぢかに身應ふ製鋏音波は
川風は冷ゆれど光り春づけり觀光汽艇の黄なる船體

河村 かつね

見る日より見ぬ日は更に暖かく君を思ふと告げまほしけれ

河村 清

つどひよる雲に大きく影おとし今か暮れゆく大富士の嶺

河村 千秋

政黨時代の時の人あはれ生死いきしにもいまは知られずなりにけるかも

河村 泰藏

作業終へし地下工事場はひえびえと湧き出づる水の音ぞ聞ゆる
爽けき葉ずれ聞ゆる明け方の闇は美しきものにしありけり

霧ヶ峰ヒユツテにて

雪ふかき大平おほひらが峰を越ゆると云ふ兵の馬はしづかに秣はみをり

河村 千代

夏あさし眞萩まきの小枝直すくにたちいまだしをらぬ短かさみぢかさにあり
山のかげ山にうつれりわがあぐる聲の山彦やまひこおくれてかへる

晝の日にまだいさぎよき朝顔や暑しといふもしばらくならむ

河村 宮 男

浅茅生のすぐろつづける猪名原を有馬へ通ふ馬車走りをり

河本 まさを美

照り翳り寂しき山の峽小田に早生の花穂は乏しかりけり

河 井 清

ひたる湯のすこしぬるきをたかせつつ手拭坊主こしらへてをる

河井 たか子

S 氏令息斃死さる亡兒の學友なり

母刀自に悔言申すとするわれやかかつては不慮に子を死なしめき

母刀自が嘆かす言はさながらにかつて知りたるわが思ひなる

北輕井澤高原

時じくぞ淺間の灰の降る原に狐を飼ひて人住みつけり

源山重砲聯隊營舎

海よりの夕日たださす一たひら厩舎建ちなめ馬飼へり見ゆ
山ぎはの道遠くまで追ひゆきて士官に狎るる犬ありにけり

川 千 鶴

いちのはつのははかなしも枕ちかく咲きこぼれつつ盛りながしも

川 合 直 次

よく見れば高田兵なり手を舉げて禮をなし行く松花江畔

川 合 尙 子

見るとなき空の景色のそこひなき深さも悲し星も暗きかな

川合良三

石狩平野

野のはてになづむ入日を見つつ行く熊笹原はすでに露原

川内常一

とりいれの頃も終れば靄こし機公益質屋に高くつまれぬ

川勝茂

月しろし今宵いささか風ありて目に立つほどのささむらのゆれ
硝子戸にほのかにうつる白きかげみぞれは雪と降りかはるらし

川上一郎

六甲山一首

ロープウエーの車窓ゆ見れば夕霧は八谷をこめてひろごり上る

何となく人の戀ほしくざわめける宵の巷をわがさまよへる
秀^{たけ}つ峯のかげをうつしてひそまれる大き湖くれ行かんとす
風落ちて夜は冴えにけりまたたける標識燈のあかき燈のいろ

川 上 榮 治

川のたぎち白々見ゆる夜の山路一臺のバス上り來にけり

川 上 嘉 市

歐米紀行

數多もつテープの一つつよく引く友と見あひてほほゑみかはす
わが影の地にしうつらず仰ぎ見れば赤道にありて日は眞上なる
櫻桃みだれ咲く野を驅り行けばナポリ灣に照る入日まばゆし
屍を並べし人のまくら邊に金入壺のあるははかなし(ボンベイ)

きらきらと入日にはゆるる波の上にゴンドラはゆれて舳高しも（ベニス）

大理石の首無き像のころがりてバラチの丘は草繁りをり（ローマ七丘の一）

雲の崖崩ると見ればもくもくとまたもり上る瀑布のましぶき（ナイヤガラ）

瀧しぶき宙にただよひ目のまへに二重の虹のむらさきに見ゆ

地平線のほのあかるさに二つ三つ家と木らしき影は立ちをり（アメリカ大陸）

川上 一 眞

軒近き桑の雄花の花咲きて赤き夕ばれに雫したたる

川上小夜子

時刻はいま午前三時を過ぐ天地のほの明るみて山川のみゆ

うち渡す野は冬ざれの泥田の面見るものとなし鴉が一羽

寒ぐもり小さう見えたる日の象のいつしかもなし身は椅子に冷ゆ

たちならぶいらかの波の薄光り寒々として曇りはふかし
雨すぢは昏れて見えねど降りしげし菜種田は淡き黄の花明り
重なりて反りゆたかなる濱木綿はまの月の照り葉は冷たきまでに

猪名野昆陽寺 一首

はちす池ほとりの竹のそよぎさへこころにぞしむ行基が寺に
洗ひ衣かけ干す眞上よぎりしは白鷺かあなや一羽光りつ

大和にて 三首

いにしへのみ寺に通ふ紫雲英みちとゆきかくゆき年は古りけむ
棚梨の花はしらじら散りしきてここも春ゆく法隆寺みち

塔をみて心しづけき寺庭はの歩み杉の落ち花かそかにふみつ

草ごもり嫁菜の花のとぼしさを蝶はたよたと來てとまりたり

眼を病みて思ひ切なる日ぞ過ぎぬ櫛のもみぢに風ぞわたれる
レンズはツアイスの磨きくもりなし秋光に紅きけいとう一點

病みて

下庭に遊べるこゑの幼さよ母はまことに生きたかりけり

川上晶雄

田草取り遅れ勝なる我が前に伸びくる父の手の大いなる

終日^{ひび}を重荷負はしめ夕ちかく疲れし牛か糞ゆるみたり

川上敏雄

日のおもてかげると見ればひそやかに櫻日照^そ雨^ぼのすぎゆきにけり

父死す

陽のもとに花は咲けれどうつし世は父なき國となりにけるかな

昭和十年十一月御鳳輦を薩摩に迎へまつりて

川上登代

みゆきまつみなみ薩摩の青雲に千羽の鶴の舞ひのゆたけさ

おほみゆきけふぞ仰ぐとわが子たちあたらしき服の胸はりて出づ

川上守彦

なにごとを世にのぞまむや今日をのみたのしかりしと思ひていねむ

川北朋春

花椿八重とひとへを生けたればひとへの紅はいろふかきかも

繪本の兒に兒がよびかけて話しゐる朝のたのしさは父のものなり

川北慎一

流れ去る霧の方向さへ目に追ひてけさはたぬしき山茶花のはな

地震過ぎて身ぬちの緊りほぐれゆくそのたまゆらはもの思ひもなし
もぐらもちあらしゆきたる庭苔はもたげられたるままに萌えをり

川 口 梢

職を求めつつ流轉生活す

世をしのぶ假りの我が名も言ひ馴れつ呼ばれ馴れつつ今は親しき
乗馬服手綱さばきをほめられつつ見し日に似たる今日の空かな
事あればありて驚き事なくば事なきままに疲るる心

養家を家出せし吾子とめぐり合ひて

つきつめて父の名言へとせがむ子に話そらして月ほめにけり

川 口 し づ 子

水底に深くこもれる魚のゐて透る日かげにふれて泳げり

川口千香枝

思ふことは何かたのしき對ひ觀るこの夕あかりの珍志梅の花

川口常造

海風の吹きとほしめる友の家にフアーブルの昆蟲記かりてわがよむ

川口南八

父母の年忌をなすと來し兄の年老けて猶貧しかりけり

川口楊子

うすぐもるまま陽は没りぬ芽ぶきたる雜木の山の淡き片照り

ここにきて思ふことなし春淺き夏井の山の片栗の花

川口れい

雨もよひ重き心にまむかふや光しづむる菜の花の色

川口 汪一郎

岩山のなだりにひくき赤松のひとつら並びに疎まきもとだち
ひた青き稲田に並ぶ電柱の遠きは雨にうすれつつ見ゆ
月夜道陸ま稲畑に入りにけり父とわれとの影はならべる
向ひ田の水に凍みつく稻株の日昏は黒きひといろの列
磨玻璃すりに竹たけの葉かげの映りつつこの幽かそけさやまだ朝ならず

土讃線にて土佐へ一首

山越えて南なだりといまはなり馬目ば櫓ろも椿もいろの明るさ
いきどほりおさへがたくてゆく道にとけしアスファルトを踏みておどろく

川越 守 固

もろ手もて刈草あつめひとかかへいだけばつよし草のにほひは

あそびるる晝は忘れて夜となれば輝ひびのいたむと泣くか吾が兒は

川崎綾子

總てにも超えて我が手の白く見ゆ招き寄すべし未だ來ぬ冬

憂き冬に見付けられじと我が紙の上へそとしもよりて來し蟲

子を探る盲ひの母の手つきして林を渡る山の霧かな

むらさきの石の聲もて蛙鳴くかけひの下もとの一寸の秋

秋の日が女となりて落したる視線の如き白きコスモス

烏龍の小さき鳥の心地して陽へ耳寄せて聽ける春かな

愚なる石の心を花のもつ秋のあしたのわれもかうかな

川崎生止松

ながらへむ望み空しき子と知りついよいよ愛かなしくなりゆくものか

つぎつぎに新しき着物子に着せて慰む妻の心しあはれ
引く息のひとつ深しと思ふときこと斷れにけり再びはせず
みじかかる命持ちきてこれの世に生くる限りは病みて過しき
寂しさは限なく家にこもりゐて夕されば吾子に思ひは通ふ

川崎 さと

たのしさは子にやはらかく掛けられし夜の衣に眠りゆくとき

川崎 杜外

一人子なる娘十六歳にて死ねる後

うつし世に親の二人が残りゐて亡き子が上に思ひ果てなし
かく様さまにありけるものと思ひ出で亡き子が上をな言ひそ妻よ

桐畑

一色の青き光や炎天の静けさ保つ若桐の畑

大正天皇崩御名古屋新聞長野支局にて

すめらみこと神去りますと知らせくる電話のベルの音けたたまし
夜明けぬに號外配り走り行けりすめらみことは神去りましたり
わが門の五百笹ゆきに夕を雪降りすめらみことは神去りませり

春來る

まさしくも春ぞと思ふ暖さ久々にして庭の土踏む

どぶ水を流す溝邊の土凍しみて盛りあがれるも落ちつきにけり

相聞

遠く見て在り經しものの身に近くあるに驚き心惑へり

我が愛めづる珍うづ白玉や手觸らじと長くもありきつひに手觸れぬ

手を觸らば碎けなむかもさもあらばあれ觸りての後は碎くるもよし
ひた心せむすべもなく極りぬ世の人言は耳にあれども

桑の實

摘みとりて掌ての上に見れば桑の實の熟れし熟れざるかがやきにけり

草市

明日の夜は青青あを蒲がまの筵敷き佛の御座をわれは作らな
老いたるも若きも來ませ佛たち蒲の筵に招じまをさむ

述懷

人厭ふ心いだきて籠もりをりいつか秋來りあき空寂びにけり

病妻

古り妻はいよいよ古りて言ふことことのあな煩はし朝夕べに

名古屋、中村公園に日夏八郎と共に遊ぶ

冬の日には砂地にしみて物の形ひそけき時に我等來りぬ
砂の上に落つる冬日の黄の色に心も染まり静けかりけり

冬 至

息かけて眼鏡を拭ふ親しさも身にしみじみと冬立ちにけり

籠の子鳥

尻みさらひに毛なき子の鳥巢に入るとうしろ見すれば愛しき様なり
籠に飼ふ小さき鳥すらに生まれ來て育ちゆくものは見るに樂しも

信濃より上京、友と駒澤九品佛に詣つ

寺庭のひとと椿はや咲きて盛りならぬに土に散り敷く
一日いちにちをかかくて曇れば寒々し落ち花椿人の拾はず

靄深き向うに行かば多摩川の川瀬見え來むと心に描く
大きなるくれなるの日は沈むなり草原通り顧み見すれば
夕靄の中にいつまでも残りたる赤き日見たり友と別れて

春 淺 し

槻の枝いまだ芽ぶかず夕かけて空より雨の降りしきるなり

述 懷

自らに心盡して生きむとする思ひやうやく据わるを覺ゆ

病氣にて失職す

貧しさを思ひゐる時庭の木の暗き縁に雨降りいづる

法師蟬尻ごゑ涼し秋めくと思ひ寝てゐるわが枕頭

耳長き山の兎が下り來ては足跡残せりこの雪の原に

三十六歳にて死ねる妻を憶うて

二十年の縁なりしかも來し方や時の間にして描く能はず

四子と母に先立たれて父獨り住めり

相離れをればかたみに憐みて生きゆくことをとぶらひ合へり
生きて行く事とぶらはむ手紙書きまさに悲しく涙落しけり

病床春來る

眠より覺めて汗拭く夜のほどろ疊の上に菜の花の見ゆ
枕べの疊のほとり寒けれど夜の目にしるく菜の花散れり

秋に入る

蟬の聲なほし鳴けれど日のひかり土にしみつ秋の色濃し
地に動く白き霧や朝明けていまだ起きざる家並びをり

寒雀

すいと飛びて土に下りたる寒雀一つは枝になほとどまれる
聲立てず四五羽の雀かたよりて土にあされり曇りて寒きに

晩秋

野の草の色づき枯るるさま見れば土に朽つるものは皆静かなり

蛭

井堰水ながるる中に蛭のゐて伸び縮みするは遊ぶらむかも

牡丹

健やかに起き出でむ日を待ち待てば庭の牡丹の蕾ふとりぬ

絶詠

死にて行く人の心は知らねども我も死に行くひとりさびしく

川 島 清

菜の花の咲き明る野の晝ふかしうらさみしくて眼鏡をふくも

料理職の歌

おのづから心はずみてわが作るこれの料理は蓋し美味からむ
時の移りに目を見張るよは一椀のあつものだにも味よきをわれは

川 島 燁 子

むらさきにルピナス咲けり退院の明日をうれしみ庭を歩めば

川 島 園 子

大和飛鳥郷島の庄

青山の瑞のなだりに畑作り世々を傳へて飛鳥びとの住む

飛鳥朝の御代のみ民と異邦人海渡り來て住み着きけるか

うまし人が常宮と人の在りがよひ見し世思ほゆ山躑躅の花

石棺の石蓋重く閉されつ葬れるみ代のいつと知られず

星満つる夜空突きぬきひと山の松そそり立てりあふぐ我が眼に

山松の梢間つれ梢間に満つる星手も觸れつべく仰ぐ眼に見ゆ

山松の梢を風の吹くなべに散りや落ち來る天の糠星

大き岩めぐり出づれば眼に近く谷水白く音立てあらはる

相州湯河原温泉

梅雨雲のとざし餘せる山一つわが軒にあり雨の靜かなる

たまさかの獨り居樂しく溪水のさやけき音に包まれ我がゐる

ひとりの父に思ひ深くして

子は遂に子なるすべなき母在さぬ父がほころびよくは縫ふとも

旅にて父の手紙を

汝がゐねば仔猫の處分すら未だしとみ文書かしぬ待たすらむかも
八十四歳秋のみ筆と書き添へて父がみ文を手筈にしまへり

滿洲事變起りて間もなきころ日々ラジオに戦死者氏名の
繼ぎて告げらるるに 一首

一人が墜す生命に運命の狂ひ生ずらむ人の數を憶ふ

よきことはまこと寡き世ぞと知り憎まざなれるわが忘れ癖

永 病

枕邊に顔を摺りゐる猫だにも今日は異なる身振りを見せよ

午前二時熱ひけるわが頭さわやかに灯のひろがり眼遊ばす

病篤くして死を覺悟しける日に

悔多き我なりながら力いつぱい生き來しと思ふにその悔の消ゆ

妹

日數ふればものも喰うべつ寝もしつと子を死なしたる母の我に泣く

箱根強羅にて病臥旬日に及ぶ

大杉の木立がかこむわが軒端ひきいや暗まして霧の立ち來る

硫黄湯のかをり澱ませ大杉の木の昏れ白く霧のとざしぬ

旅

眠藥みんぐやくの粉こぼれゐる枕上東とおもふ海よ日のさす

七階よ見下す鴨の河原なり人力車小さく木の橋わたる(京都ホテル)

横濱三溪園にて鎌倉松葉ヶ谷にありし有名なるかけこみ寺
の移しあるを見て一首

世を狭く生命生きつつをみな子のいかに嘆きて身を放はなりけむ

篁の暗きをうしろに日さす庭古木の梅のみな眞白なり

夜靄立つ小路を來ればわが歸り待つと閉さぬ門もえの扉との見ゆ

靄の上の灯影に見れば何の木かくれなるさせる一枝動けり

木群より舞ひ立つ蝶の白ければ即ちまぎれぬ空の曇りに

雨降れば鉢の金魚のなまぐさく疎ましきことを思ひぞ我がるし

しらじらと大庭にむかふ障あか子り戸どや木下の雪の迫り來て寒き（某寺）

松山の風が研ぎ出す冬の空きはまる青さの心を壓す

遮るものあらぬ河原のはてにしも日輪小さく曇りて傾く（多摩の河原）

妹の婚約

嬉しくもあらむと言へばわが妹涙眼に持たすうなづきつつも

くろ土に霜融くる音かそけて露の臺みな紫に濡るる

川 島 静 子

たちまちにその日はきたり花園に高鳴る胸をいだきて相見る

あなくるしと我くるしめど今此處に生れ出づる者も苦しからまし

川 島 深 厚

千曲野ちくまのに東南風いみなま吹く日の薄曇りか落葉松らまつの玉芽ほぐれそめつつ

川 島 青 路

別るべき辻にいつしかきかかりて君が寂しき瞳にあひぬ

川 島 つ ゆ

女房ははかなきものよ風呂の火の燃えよきさへをよろこびとする

灰皿のけふもよどれず春ふかき灯のいたづらにあかき文机

吾と共にこのともしさに堪へむとふ婢をんなとありて夜半を餅やく

川島 美美子

まむかひて仰げば山のひとなだり晝陽の光も青ざらひ見ゆ

生きわぶるかなしみにひたとむかふ時哭きてすがらむ母をしぞおもふ

静かなる眸におされつつ言へざりしひと言をおもふ思ひつきずして

とけゆるむ田の面おもてのけはひ音に立てど幽かなるものよ晝日の曇り

川島 保男

山のつつじうつろふころかひとときに雨ふりつのもり雷鳴りわたる

杉むらのうへ吹く風の音きこゆこの寂しさに山くだるなり

川添 ゆき子

元結の切れて暗める朝鏡まがまがしさは思ふべからず(子病む)

呼びとめて買ひし冬菜の一たばは濡れてぞありき朝の時雨に
秋さくら白くしさけばみ佛となりにし父のまさまざしけれ

臨終によめる

天がける火焰の中に身をおきてゆくよと見しは一瞬の夢
五年のわがあけくれの杉木立見えぬわが目に雨ふりそそぐ

川 田 和 孝

病人はむかうを向きていねてをり人氣なき家の日暮松風

門司三角山にて

入海は潮落つるらし鳥がとぶ田の浦の沖に水脈みながく見ゆ

川 田 多 代 子

日照り田の水おち口に浮びつつ稲の花粉の流れくるなり

川田とくゑ

垣間より路までのびし薔薇の花あさあさ夫つとのよけて出でます

何處か近く水田あるらし曇り日の朝間の蛙鳴く聲きこゆ

なが雨も晴るるならむか針運ぶ我が手にあかる夕日の光

まつば牡丹の花赤く咲き亡き父に暑中見舞のいくつか來にけり

川田順

雲雀が鳴くこの野つばらの日の光あはれ何處どこかに雲雀が鳴くも

大正十五年五月京城府滞在中韓國最後の皇帝なりし李王イワン拓殿下の
大葬に遇ふ昌徳宮に參候して詠める李王殯宮歌

おもほえず海隣うみあたより來て韓からの王きみの殯あらしの今日にあひにけるかも

殯にひする新喪にいの宮のみかきもり朝鮮歩兵をみれば悲しも

しら砂のすがしき道のゆく手にし殯の宮は深くこもれり

大殿のこの廻もとほりのしら眞砂衛士まきとのほかに人影もせぬ

言ことさへぐ韓の國はなしそこゆゑにいや悲しかるこの王おんかも

おのが民を常安とこやすかれとおもへこそ國なくしけめこの王おんろ

韓の國のをはりの王きみとよろづ世に悲しき今日を言ひ繼つぎにせむ

かなしびの言こときこえ上げて殯殿あらいどのまかり出づればゆふべとなりぬ

かはたれを杳くつの音して參まゐ來るはあらきの宮のとのゐ人かも

夕まけて朝鮮歩兵の疲れ立つ宮のみかどをまかり來くわれは

鶴

花あかるき泰山木したの下歩み丹頂の鶴を見に行かむとす

鶴の鳥のかうべうつくしかがやかに青水無月の眞日光まひかりらふなり

水際みづぎはに片脚立ちの鶴の鳥しづかなるかも影は揺れつつ

吹き過ぐる風は光れり丹頂の鶴翼張りひろげ聲啼きにけり

照り深き眞日のしじまを搔き亂し丹頂の鶴一聲啼きたり

あしたづの啼く時見たりほがらかに嘴を空に向けて啼きたり

一聲啼きて丹頂の鶴飛び立たむけはひ大きくいつくしきかも

飛び立たむものならなくにおほらかに羽根ひろげたる鶴のかなしも

ひろげたる翼しづかにをさめたりさびしき鶴のただ立ちてゐる

吾がいのち長閑なる日もありにけり公園に来て鶴を見て居り

丹波山國村の常照寺を訪ふ、午時住職の接待を受く

方丈にて臨濟の僧と對ひたり言ふこと知らに紅葉を譽めし

むささびの木づたふ夜のさびしさを僧の語れば泊りたく思ふ

この山に近づく冬のさびしさを臨濟の僧樂しむ如し

一時雨來るかも知らず寺庭のかへで紅葉に日の照り戻る

越中立山頂上

手力雄の神に仕ふる山禰宜の祝詞を聴くも石に坐りて

立山の雄山の谷は寒々し大きく刳ぐれて古雪残す

高やまのいただきにして眞夏日は上汚れせる堅雪照らす

立山が後立山に影うつす夕日の時の大きしづかさ

鷺、立山五色の小屋附近にて

沙羅峠眼にあらはなれうつそみの人ひとり行かぬ道灼けて居り

みすず刈る信濃路さして一百騎佐々成政の越えし峠か

目交の岩山の間ゆるちつけに大きな鳥の飛び出でにけり

立山に棲むとは聞きし大鷺の目交にして飛びたつを見き

案内者の佐伯八郎言へらくはかかる大鷲を初めてぞ見し
見上ぐらく山原の空を飛ぶ鷲の大き翼の白斑かがよふ
山空をひとすぢに行く大鷲の翼の張りの澄みも澄みたる
立山の外山が空の蒼深み一つの鷲の飛びて久しき
向つ峰の偃松叢へ大鷲の下りたる迅さ眼にもたまらず
大鷲の下りかくろひしむかつやま龍王岳は彌高く見ゆ

萬里長城

秋眞晝八達嶺を下りて來る駱駝の列にあひにけるかも
長城を觀に來る人の今日多し葡萄賣る兒は乞食ならむ
葡萄買へとまつはる童垢臭し長城の壁に吾が登るなり
踏みのぼる城の鋪道の草見ればすでにこの山に霜の下りたる

空晴れて烽火臺に人の居るが如し其處までわれも行かむと思ふ
築きわたす長城の壁眼傳へば谷に下り峯を上り谷に下り峯を上る
天のはてにまぎれむとして遠々に尾根に架けたる城壁はつづく
築きわたす長城の壁高々し幾たびか越えし蠻族をおもふ
滅びざるものの寂しさ秋の陽は萬里長城の壁にい照らふ
烽火臺の地下道に吾が下りむとし蠟の跂ふを聞きたる如し

晩秋羽後酒田に宿る翌朝

鳥海山の禰呂の斑雪は雷雨過ぎしこの曉にふりたるならむ

川 田 初 子

山茶花の雪なす清き花びらの軒つつましく正月を待つ
平原の雲をしづめて行く水の大きいなるかなや君がふるさと

川谷とせ

亡き兒を憶ふ

絶食の日が重なればいぢらしく知れる食物いひ並べたり

一匙の水を求めしその聲の耳に残れり消ゆる日あらず

胸の上に小さきもろ手くみて居るかなしき吾子よさむる日はなきか

歸り來ぬ旅に出すとあたらしきこれの晴着をきせてやるかも

母が生血わかち興へし餘滴の壘ににじめ吾子あらぬかも

添寝せる吾の指を握りつつ癒ゆるその日を樂しみまちつ

灯の許に眼閉づれば吾子がせし童謡踊次々見えくる

先だたむ命と知らず吾病めば死にてはいやと常いひにけり

霜晴の雜木林の上にある棚雲しろく張りてくづれず

川津てる子

格子越しに見ゆる今宵の月淡し夫は歸らじと思ふわびしさ

川手徳一

杭打てばかへす木魂こたまの太ふとしまたひとつ強く打ちて居たりき

川名孝

故ありて吾子と別る

耳深く學生帽を打ち被り駈け行きし兒は今いまは吾子わがこならず

川中悠行

旅にて

山くぼに薪まき作りゐる杣人に路の上より聲をかけたなり

山川のあらし積の岩むらはおのづひわれて白け居にけり

母について

吾を思ふたらちねの母世にますと心ほがらに獨言したり

この生活になづみ來につつ心かなし朝々母のわが靴を磨く

むらぎものこころほそりて思ふらむ死なむ家さへなしといふ母

伊豆に住みける時

もの書きつつ心なごみに晝たけてひととき鶏は鳴きかはしたり

南風うけて咲き咲きし花の實とおもふ磯の岩間にたまれる草の實

東京に住みつきて

夕道を肩くみかへるおとどひのかぶろの髪を撫でてわれ來ぬ

子らの爪切りてやりたり年齢なみに爪の柔きをあはれと思ふ

國道は夕風寒し自動車の切れ間よぎるとわが待ちてをり
蘆むらのひまゆ水鳥浮び出で向ふむきをりうなじ赤き鳥

川 中 愛 子

うつぶして雨に打たるる春の花白きが下に匂ふ土かも

川 中 柏 葉

電信局にて元朝を迎ふ

洋上に春を迎ふる喜びはあはれ電波にのりて來りぬ

川 野 斗 南

若桑の小枝の蔭りまつすぐに空刺す伸びのすがすがしさよ

この灣の風ぎに入り來る船の脚しかすがに白く波を切る見ゆ
白砂の底ひに映る波の光寄りのまにまに止まずゆらぐも

川野弘之

夕づく日しばしは照らふ空に浮きてさびしかりけり海のうへの虹
時雨すぎて峽はあかるむひとときを木群にしづむ霧うごきけり
崖土の赫きに垂るる山藤の若葉は濡れぬしたたる水に

川畑愛義

言ひすぎて快よからぬ心すべもなみひそけき雪にぬれて歸りぬ

川畑安彦

榛名山麓相馬原

蠶飼ふ村居をすぎて山畑の熟れし穂麥は日ににほひたつ
新芽立つ松にゐてなく尾長鳥日ざしはあつく原に満ちたり

川端春歩

障子みな外ほかして通す晝の風疊の上を新聞紙すべる

瀬戸鍋を安く買ひ來て喜べり貧しき妻はいたはりやらむ

器みな取り片づけて夕餉後の食卓は兒の叩くにまかす

巨大なる浚渫船の作業鈍のろし昨日も今日も同じ處に

糠雨に日の照り出でて眼に見ゆる青草の上の虹は短かし

門の邊に夕ゆふべを掃きためて落葉焚くべき寒さ至りぬ

水汲みに妻が出でゆく戸口より吹き入る雪は夜目に白かり

腹立ちて早寝せし我が枕邊に妻は着物を縫ひ初めたり

川 端 千 枝

着なれたる紅裏とりて白絹にかへんと思ひるたるこの春

われにとて友の呉れたる襟なれど縫ひはなやぎて娘によく似合ふ(絶詠)

つれづれに折鶴いくつつくることぞ呑み飽きたりし粉薬の紙に

貨物車の吐きし煙は病室のはり戸の日かげしばしおほひぬ

ひたすらに生きむとすれど癒えがたし病やしなふことにもうみぬ

暖くならば癒えむとたのしみしを櫻の花も散るといふなり

戸のすき間いまだ暗けど雀子のさへづるきこゆうれしや朝なり

なが病みの髪のもつれは解きがたく惜しみためらふ子に切らすなり

枕べにベルは引かれぬ手を押せば事足るほどに物も置かれつ

たはむれて海に笑へる聲きけばてんぐさ採りは若きをみなご

除夜の鐘鳴り響くなりわれのためいかなる年の來むとはすらむ

散らふ葉はよべの暴風雨に散りつくし木の間に透きて海近く見ゆ

この日頃ことさらしるきもの忘れ足袋の置き處を考へて居る

寝てゐる人と同じ位置までかがまりて見ゆるかと見れば空は見えにき
夕支度はやもせむかも隣人わが家の門に水打つ音す

指きりてちかへば安く居る兒なりそのをさなさよおかしがたしも

鬻ひやくがれてあまた小蟹はすべしなし金あみの中によぢつつぞゐる

一錢にて蟹を買ふ子にはそのうちの最も小さきが渡さるるなり

がま口をもてる子供はたくましき辨慶蟹を買ひゆきにけり

錢もたぬなるべしこの子蟹うりの前にしやがみてつくづくと居る

遮斷機は下りて待つ間の氣忙きせわしく夕小暗きに時計を透かす

姉を悼みて

年月を親しく聞きしその聲はいま臨終の苦しきもらす

月照らふ道をゆきけり世にあらむもののかぎりは影をもてるに

憎しみ受けて

憎まるるそれも一つの生活の張合ひとせんか事なく居りて

海近き家

探海燈の強き光は闇の夜をさし貫きて雲間に停とどまる

何の花とその名問ふ間に自動車のすぎてましろき花の眼に残る

信濃の旅 二首

碓氷嶺の高きに立てりたたなはる山より山に移る雲のかけ

峽はざまより立つ虹空にほのぼのし向ふの山は雨降りながら

落葉松からまつの林なかばの下り坂豫感まさしく湖が見ゆ(山中湖畔)

吾が歩むおなじ地上をながれゆく雲のゆゆしさよ高原に来て

井戸ばたに捨てし氷の清らかさ芹の若芽の青きが透きて

うら若き人の心の一途さにほだされもせば悔を重ねむ(齡)

嫁家にて自殺せし義妹をかなしむ 一首

なげきつつひとりひそひそ姑ははは居む外より覗けば暗しわが家
何をいかり何をうらみしふたりぞもほのぼのよせてみる眼なりけり

逢ひにゆく日 二首

船にあるゆられごこちに踏みしむる磯山道のこの草いきれ

夏まひるゆくは誰ぞもふたたびは踏まじといひし磯山道を

目覚めよと母は呼びたまふ目覚め居てありし夜のこと思へるわれに
背くべき人をももたず背かるる人をももたぬひとりならしめ

まかすべき命ならねばたんぼぼの黄にかがやくもくるしかりけり

川端篤三郎

中風症の父

いくたびも言ひなほしつと言ひあへずつひにさびしく父は笑ませり

川端 八洲 人

山小屋におそく着きたる人々のざわめきやみて遠き山鳴り(淺間登山)

病む母二首

下宿よりあわてて歸り病む母に思ひきやシャツの汚れいはるる

癒えがたきつひの病かこころおそれ醫師にしたがひ戸かげにたてり

尾根越えてひろがり寄する時雨雲かげを深々谷に落せり(野邊山原)

川原 重代

夕されば炭火を起すならはしもわれらが生きのいとなみなるも

川原 廣一

ほこり拭き硝子戸越しに床屋われ春の青空見つつうれしも
わが住めるここは町端杉皮の朽ちたる屋根に草の花咲けり

川原林一夫

群がりて養蜂器に來る蜜蜂は浮雲のごとし土を舐らす
とどろきて頭上過ぎ行く飛行機の翼かたぶく梅雨空の下に

川邊染人

ははそはの母がいひける寝ることのたのしみわれのいまにして知る

川邊潔

カムサツカ、ボルシエレスキーにて二首

毛だものの鳴く聲遠しカムサカの秋の荒野に月出でにけり
延びそろふ浮草ゆれず沼底に暗くうつるは空の色かも

大空の暗きをわたる風の音疲れてきけば心にぞ沁む

川邊謙造

この家を繼ぐ弟の子を持ちて貧しきに馴れ父さびにけり

父母のまだすこやけき家に歸り心をさなく吾がなりにけり

川邊森兵

いつはり多き社會と思ひつつありなれて憤ることもなくて過ぎ來し

越高計算に忙しき朝のひとときを學生の群がきほひて通る

前納屋の軒に積み置く豆がらに晝過ぎの雨はしばしあらあらし

川俣鷗涯

朝鮮金剛山

毘盧頂に立ちて嘯くわが聲は萬二千峰に衍するかも

米澤書記官の新京に赴任するを送りて

杯をとりつつ君の語ることにすべて燃え立つ火の如きかな

川見駒太郎

赤ちやけしサンドミンゴ城の古壁の頂近くまで蔦這ひ上る(臺灣淡水)

集材の太きロープを懸け渡す巨柱を見れば立木のままなり(太平山)

並なみよろふ四十八座の山々の嶺したかね白く雪かがやけり(新高山)

吠え集つどふ犬追ひくれてほほ笑みし蕃婦が背の白百合の花(蕃界にて)

溪を隔て霧をへだてて唄ひ交す蕃婦の歌聲すみ通り來る

日本の南のはての岩鼻の波のしぶきにわが立ちぬる(鷺鷥鼻にて)

川村吉之助

煮昆布を持ち來て嬌つよはたまさかの家居のわれに鹽加減しほを聞く

川 村 浩

氷詰の大き鮪は遠國ゆはこばれて來て日にさらされつ

夕はやく納屋の俵にのぼりゐてなじまぬ鶏がまた下りて來つ

莖ほそき桔梗ぢやうけいの花はしきやし二つ開きて相觸れにけり

國技館の裏の溝川に傾きて千蔭の墓は忘れにけり

土の上に影を落して飛ぶ蜻蛉今日の日ながく思ほゆるかも

川 村 節 子

言ひたき事あまたこらへて身に餘る仕事に疲れし夫つまに飯盛る

川 村 濤 人

松立てる谷戸の峽より帯ばかりもり上りたる青き海見ゆ(鎌倉)

汝ながめでし琥珀のパイプ色すみて肌なめなめし我が唇くちに吸ふ(亡弟)

川村 兵司

牡丹の花咲き揃ふ日は近からむ此の頃きざすみんなみの風

川邨 みしほ

波の音永久なる磯に鳥人の死骸（故郷の鳥）を焼く巖は焦げたり

川本 そよ

日むかひて尾根にとけつぐ路の雪に笹の緑の色しづかなる

川本 博子

さやさやにロープ高鳴り向山の材は揺られ来る谷の眞上を

松の花しるく見え渡る松山のなだりにとよみ汽車過ぎにける

川井 吉一

このゆふべ七群ばかり雁ゆきて葛城山の夕光消ゆ

大きな船解體されてたかだかと推進機うけり油よどむ水に
日のほてり耐へがたしとぞ居る壁のとなりに飼へるきりぎりす鳴く
みなぎらふ夏のひかりに罌粟けし立てり藥液採りし疵くろくみゆ

樺澤 幸一

病氣再發 一首

わが力つきたり今はとさみしみてをれば愛しや心明けくる
廣く深く今年は生きむと元旦の心うごかす力湧きにけり
讀まむとて集めける書本棚に並べる見れば生きたしただに

合田 定男

防空演習

管制の闇をつらぬき照空燈の光は雲にとどきてにじむ

澁を煮るかまどの煙は朝風に吹かれて松の林をなびかふ

合 田 艶 子

病院にて 四首

こきざみにちまたすぎゆく下駄の音こやりつつきくに凍^ひてたるらしき
鳴き澄めばむしろ閑けき蟬の聲まひるの庭に一人ききをり

手に持ちて歩めばしたし幾株の苗木の花のこもごも匂ふ

夕顔の蒼のよぢれほぐれきてはらり開きたり大輪の花

ひとり旅といたはられつつ女子の心かまへを持ちてさびしさ

本島のあけくれ

石橋の裏山下るひびきすぎて島の眞晝の深きしづもり

山の上は日の暮れ遅し寺庭に手斧うつ音の久しかりけり

庭松にからむ夏藤花咲きて眞晝の風のここにのみ見ゆ

飛びかふは千鳥なるらし目に追へど並立つ巖の色にまぎれつ

父逝き給ふ

好みましし父いまさねば落の臺たけて庭邊に花しろじろし

ちちのみの父のいまはは息のみてうち目守るよりすべもあらぬか

臘梅のうす黄に咲ける花さへや通夜の朝は我目にいたき

合田とくを

やみこやる枕邊ちかく移り來し春の陽光を掌に受けて見つ

冠木富美

勤め遅く歸りし我を聲立てて喜ぶまでに子は生ひ立ちぬ

赤子抱く我に甘えて泣き寄る子兄とはいへど汝も幼なし

釜田喜三郎

かくれんぼ (植物園)

しだれ咲く萩の垂枝にかくれし兒その身は見えねその靴の見ゆ

釜 范 忠 作

喉頭潰瘍にてみまかれる五男榮祐

枕邊に母をまねきて鹽引に濫なき飯食へる夢見しといふ

鎌田吉三郎

小走りにわが前をゆく犬の乳房赤くはりきりてゆさゆさ動く

雲の流さやかに見ゆる夜の空に枝張りて立てる大き槻の木

鎌田敬止

鹿野か山をわが越え來ればめづらかに伊豆の七鳥吹き晴れし見ゆ

巢をつくる土をはこぶと燕の軒くぐりいる夏は來にけり

山峽の夕坂くだる牛の列こゑこそなけれ行き寂しさ

牛くだる坂の埃はしらじらとながれたりけり青草の上に

ひさかたの天のしら雲わきたれば草山にゆくそのかけりはや

ひそましきをみなこのゑのやさしさにめざめてゐたり朝顔の花

夕山を勞れて下りおのづから言葉減りつつ寂しかりけり

居ながらに眠れる人の時をりに驚く顔を見てゐたりけり

さむざむと日かげうつろふ晝土間に鶏をおさへて寂しきものを

鎌田 定夫

のどのどとひとり心は遊ぶべし春田いづこも水の音かも

春暑き日照りに垂りて藤浪のむらさき深く咲きしづもれり

裏畑に積れる雪は夜ふけて凍るとすらし青く光れる

鎌田 民治

谷杉の下べにしめる青木の花今朝は澤水の音もとどろなり

峰遠く晝を横たふ雲の層照りひそむ視れば春や逝くらし

留守居してひるはいたたく蓴菜じゆんさいのうすき酢の味をまがなしみつつ

若葉とざす澤の路邊に數咲きて山蒟蒻は管くだ深き花

鎌田 俊雄

その母に同情おぼへみを寄せて酒氣帯べる今宵の父を厭へるらしも

鎌田 保吉

工場の構内寒く夕時雨ふり高架起重機一つ灯をともす

全身にうす紫の反射光あびて鐵板切り斷つ夜業の男

病父に代りて歳旦祭奉仕

み鑰^{かぎ}もちすすみてゆけば本殿のまぢかの大氣おもくしづもる

鎌田 春子

明日嫁^{よめ}がむ姉の寝顔を見守りつ今日を限りの共寝さびしむ

鎌田 總子

雑草に蓬まじりてありにけむ刈りつつゆくに香に立ち來るも

鎌田 政夫

政府米を今日も買ひに行く女等は策の大きさを話しつつ通る

鎌田 良平

谿川に突き立つ竹を鳴らしつつながるる水は遊べる如し

ゆらゆらにゆれをやまざる青簾眠りに落ちむ足に觸れつつ

地にこもり流るる水かしづけさの晝の林に音たつるなり

鎌手 白映

唐鞍の鞞ふとく色寂びて栗色の駒のたちの雄々しさ

面繫のあけの組紐よくしまりいつくしきかもよ若き張り駒

馬の眼のうるめる見ればあはれなり山櫻花ちぢにうつれる

水の上に微塵動かぬ鷺の姿態あはれと思へまどろみて居つ

へうとして立ちほそりたる白鷺のほのけかりけり日の翳りつつ

白鷺の消ぬがにも細き冠毛の飄々と靡く寒の日の風に

日ざかりや合歡の葉かげにゐる蟬のよく見えて居り鳴きはすみつつ

くれぐれと障子にあたる夕吹雪子らが起居もさびしげに見ゆ

勿體なと思へどあはれ亡き母の後姿に似し佛像あり

蒲 清 近

冬されば蝦夷の鹽鱒爐の端に俎板よせてそぎにけるかも
あたたかく朝餉の飯をよばれつつ溪越えの山の明方を見つ
雪解けの山の麓の萑畠來て鳴く鳥は鷓鴣かも

蒲 美 實

暮れそめて靄のなづさふ野の空に月すがと影立ちて來ぬ
山の端に疊まる雲のなほあれど日ざし定まるこの一谷に
忘れれしものの如くに刈り乾せる稻多からず峽の奥田に
楯山うちひびきゆく風音は牛伏寺谷にたはやすく起つ

蒲 池 正 紀

たまたまに兒を家におき妻と二人來しデパートに買ふものもなき

蒲生 俊文

ハリウッドの朝

朝かげにつぎつぎ馬を打たせ來る女優の群のころらのいでたち

上 稻 吉

一夏を凭りし机の向きを變へぬ午後の陽ざしのなじむ静かさ

上 代 皓 三

一九三二年春、ナチス政權成る

出で立ちてみぞれ寒き街や見渡すかぎり軒に濡れはためく^{ヘアケンクローイツ}卅の旗
寒風に霰降りつつ行進の少女隊に起るホルスト、ヴェツセルの歌

播磨國白旗山

さ夜ふけの白旗山に月かかり斑雪はだれのこれる谷を照しぬ

上坂 信勝

小學校教員御親閱 三首

現身のまさ目に玉座あふぎつつひきしめし心遂にきはまれり

畏さに洩たまりてあふぎたり我大君は舉手をたまへり

みことのりたまはる玉の大御聲遠くかすかなれどたしかに聞ゆ

五月田は植ゑてかがよふ眞陽の照り色かはりしは根づきたるなり

弱視の娘 二首

落穂ためて眼に合へるよき眼鏡購かはむといふかあはれわが娘よ

かぎろひの夕べは文色あいろあらぬ娘の手さぐりてなほ働きにけり

晩秋のいのち弱りし赤とんぼあやまちて踏む朝の山路に

歸り來て何か苛立つもののあり夕餉待つ間のひもじさに耐ふ

上 道 草 二

禿山の禿のま上に白雲のわきのぼりつつ秋の風ふく

營庭を吹き來る風のすずしきにわびつつぞ吊るその破れ蚊帳を
枕ならべをのこ八人むれてねるこよひの暑さ堪へがたきかも
もろこしもまひる靜かに葉をたれて秋日に長し赤とんぼ飛ぶ

上 條 行 雄

庭もせにむしろひろげて干す靱の色うつくしく朝日照らせり

上 林 角 郎

わが門の年祝ねがぎ松は枝ながく出で入るたびに袖觸りにけり

帝大病院に人を見舞ふことあり

灯の中をわが疲れ来て冬木立くらき構内に入るは静けし
醫學部の建物くらくわれを壓す恃むところに見上げたりけり
妻子らを先に寝ねしめてお茶飲めりかかるやすけさも知りそめにけり
寝は寝つつ何か訊き居る孫の兒にこたへる母は呟くごとし

日光に遊ぶ

靄罩めし山路のぼり来てひらけたる湖つみの向うに昏れぬ空あり

越後に姉を訪ふ 一首

山ふかきここの邊土に住む姉つばの夫と呼ぶひとをわれも恃めり
老母に本讀む妻のこゑやみて甘酒沸きしとわれを呼びに來ぬ
幼稚園にやや馴れそめて子が語る友達の名をわれも憶えぬ
もの食ひて語ることなく直ぐ起ちし受験生の甥は部屋に戻れり

伊豆下田の町は折柄黒船祭あり

祭の灯灣の向うにはなやげりくらき渚に寄する白波
晩く着きし温泉宿の玄關前灯かげあかあかと躑躅の盛り

温泉温泉にて 一首

佐渡ヶ島見えずなりしとおもふ時ここは羽前の國とこそ聞け
出歩きの叶はずなりし老母は洋樂放送も聽きていませり

熱海觀魚莊月夜

月夜なり湯の宿へ下る斷崖の段幾曲り先に磯波

瀬波温泉にて 一首

幼き日父と遊びしここの湯に父の齡となりて子と來つ
歳暮るるせはしさに居て歌無きを懶けしごとく時に嘆きぬ

この町の入營兵の發つに會ひ旅びとわれも帽脱ぎにける

上 林 繁 夫

新らしき家には住めど夢に見る亡父は古家にいつもいませり

上 林 た か し

入りつ日は沈みはてたりいくすぢの雲はなびけるままにしづけし

上 林 ひ さ

吾子いだきこのもろちちをふくまする日を思ひつつ湯にひたりをり
相なれていさかふことの多くなりぬさすがに留守をさびしくこもる

上 林 ふ み 子

老公孫樹の秀さきにかかりすばらしき拋物線や晩秋の魚座

はろはろと天に向ひておもふことはてしもあらず銀河のながれ

上村 健

のぼりくる砲兵隊の數見えて秋日あらはなり切通しの道

上村 正利

胡桃くるみの實あをく濡れつつ梅雨にいる今年は母に病あらすな

伊香保呂の蘇比の榛原した萌ゆる頃とを思ふに今日もふる雨(伊香保)

八十谷の百重のひだに沈む霧國原とほくかぎろひにけり(赤城山)

忘れぬしひとの寂しきふみあごと木の葉まひきぬ机の上に

上村 正雄

門のべの松の樹の根に下駄の齒の土を落して人ゆきにけり

夕されば風にざわめく冬枯の梢のほそり目に立ちにけり

病室の窓にみだれて降る雪のひそかに月の夜となりにけり

面會に來ると告げ來し父を待ちて子供の如く夜をいねられず

上 岡 勝

背戸山の若葉が中にこの夕べ蚊柱立ちぬ雨降るらしも

事務室のうす暗きよりのがれ來てしまらく仰ぐ冬の青空

つかれつつ職業婦人が歸るなりわれも歸るなり春の夕ぐれ

神 倉 長 次 郎

萱草の根の黄いろきをあらはにし土龍はむきをかへて潜れる

蠶棚竹繩にゆはへてうかべある川に吾も來て蠶棚竹洗ふ

春蠶けふ再びねむり桐の花ほのぼのとそらの青きにぞ咲く

繭賣のいまだ片附かぬに麥野良はすでに刈るべく熟れにけるかも

吐く絲のおのづからにして白妙の繭かたちづくるをしみじみと見つ

雨ふりて軒先暗しよごれ繭搔きにくくして捗らぬかも
繭賣のふところ工合讀みたらむ女の媚は常ならなくに

神崎 久子

妹にすべり方などして見せて男の子はスキーの話よりせず

神作 菁果

子をつれて出歩む道の街外れ夕づく日光廣くなりつつ
庭つ鳥白き二つがつれ遊ぶ畑の冬菜の今朝いきいきし

神澤 弘

逢ひぬれば母と呼ぶべき父の妻なさけ籠りしことを宣らしぬ
ふたたびは來ることなしと思ひつつ四方にかがやく山を仰げり

神田 早苗

伊良湖岬砲試射場のつつの音おほどかにひびく病院の朝

海ぎはに藻のかわきゐる陽のあつさ濱ゑんどうの花ひそかなり

病癒えぬ儘退院せむとす

しみじみとあはす眸にあきらかに人のこころのなげかひを見つ

神田 茂雄

耕馬は毎年越前國より借入る

食ひ残せる青草を束ね歸りゆく馬の背中につけてやりたり

神田 哲雄

裏町のいきるる暑さ道にそひて黒くにごりし川ながれたり

しづかにとどまりて居る機關車の牽引力をわれは感じぬ

たくましく枝張る大樹日ぐれより山おろしくる風にうなりつ

戦ひのためにのみある飛行機の空をおほひてうなりつとぶ

をさなごら偉くならむときそへるは世相に照らしかなしきごとし
わがからだのどこかにひそむ寂しさは固まりたらむごとくおぼゆる
北國の小暗きそらに呆然とたちつくす如く裸山あり

事しげき世に小市民とし生きゆくはときにやすらげきことならむかも

神 田 停 雲

二の雪溪遮二無二くだる我が同僚トのピツケル宙にはね飛び見ゆ
五合庵板新しく敷きかへて縁を貫く筈もなし(國上にて)

神 田 矩 丸

長廊下にあかりとどかず浴堂をいでて身にしむ山の寂かさ(永平寺)

一よねて霧はれあがる裏山の目づたふ傾斜ひだりもみぢすがるる(野澤温泉)

神田 満壽

叱りつつわが手をとらず夫つとの手に顔押當てて唯泣きにけり(病みて)

針持ちて室にこもればほのかにも夫の移り香匂ふかなし(新婚)

神田 正雄

大輪の紅のダリヤは開き切りおのれを重み傾きにけり

神田 よし子

我に寄る思ひ秘むといふ此の人と川沿道の雪を踏むなり

神津 聖明

空晴れて出穂の明るく陽に匂ふうへを蜻蛉あきつのとびみだれたり

神戸 庫八

奥津城に詣りて思ふ蜀黍を焼きてたびたる先生の顔を
休暇にて歸れる吾を父上は山の境につれて見廻る

神原克重

殘 暑 四首

秋口のしけを孕める海の音とどろと鳴りて庭の日暑し

庭前は日の照あつし脂浮く汚き顔をいとひてこもる

日向なる敷石強く照りひかり餘炎及ぶ端居のわれに

とどろきしは遠いかづちか空のいろ晴れ透りつつ限なく見ゆ

月夜雲さやかに照りて渡らへば大きく光る星かくろひぬ

腰川一磨宅にて

齒あたりのしこりしこりとよろしきに酢味噌の田螺一つ一つひらふ

わが父を繪にのこし置きこの家のすぐれし祖先みおやと語り繼がせむ

青葦の根がたに満ちてかつ揺るる川水涼しあげ潮ならし

家妻に厨の瓶かみを持て來させ生けておびただし鈴蘭の花（鈴蘭を送らる）

散りつもる枯葉がしたに湧く水の立つるひびきは幽けかりけり（初冬）

皇太子殿下御降誕

まごころをここに傾け聞え上ぐる萬歳の聲空ゆただ行け

國舉る大き歡は新聞にラデオに溢れ心にぎにぎし

梅雨季

縁近く茶を飲むわれに夕ぐれの梅雨の霧雨吹きつけて來ぬ

灯のいろを朱く映して梅雨の空街屋根まちの上になほ降らむとす

雨あとの小徑に這ひて幾すぢの葛の太蔓延びいでにけり

大孝塾にて

靜坐瞑目定まりゆきて心頭にひぐらし一つ鳴き透りたり

二二六事變

閑として雪雲凍る空の下この憤いづこにやらむ

大み心おし測りまつるだにみ民わが心は痛しやすからぬかも

この國の大き歎を言ふとして心愕き聲ひそめ言ふ

肅軍のこと國民の問題となりし時偶々後藤工兵大佐引責自決のことあり。大佐の息和光君は嘗つての余が教へ子にして大佐とも一面識あり。事の真相は審かに知り難けれども自ら感慨なきに非ず

猛々しく言擧げすなる世の中に君はしづかに自らを斷つ

かくあらば斯くするものと言ふがごと額打ち貫きぬますら男君を

君が死をむさぼり讀みつつこの頃のわが憤なごむとすらし

神原 大 虚

世にまさばわが生の緒の繰言も君にきこえて慰さまむものを(一則忌)

神原 宣 譽

解け減りし雪は夕に凍りつつ今夜こよひもものの澄むにやあらむ

神原 和 男

夜をこめて砧の音す此の村の繩なひ無盡はじまりにけり

この冬のたくはへ草も残りなく食べし兔を賣り拂ひたり

新藁の蒲團作りてぬくぬくと寝ねたる朝は起き澁るかも

柴出しの季とき近づきて郷山の雪道普請のふれが廻れり

神村 春 汀

米山の山ぎは少しあかりして九月下旬の月は出でくる

神谷政雄

朝寢せし吾を起しに來るならむ妻が子供に言ひつくる聲

神谷源太郎

或事件のため悶々の情堪へ難く家出して數旬昇仙峽にて

峽深くひとり入り來しさびしさや馬の足跡をながめけるかも

瀬鳴の音遠くなりしと思ふときうつしみ近く烏か啼きし

神谷青坡

組合事務所にて 三首

杉木立もれて机にさす日かげちららにゆれて秋の色なる

重要書類認むる我そばに來て誰にも出來ることを差しつく

いらだてるおもひを今は押へかね寒からねどもストーブを焚く

かばかりに優しきことを子に向ひ妻が言へるは初めて聞きたり
しみじみと我つたなさを知らるときし心いよいよ人を遠のく

神谷 慎子

山腹にいくつもみゆる炭がまの焚かれしものは煙をあぐる

神谷 竹子

外金剛山にて 一首

峯の巖に小さき根をはり露をすふあはれこの草紅ふかし
わが面をかすめてすぐる雲のあり雨のあがれる若葉山徑

神谷 昌枝

海外出張の夫を送る

張り裂くる胸いつばいの涙なりやさしき言ことはのたまふなゆめ

泣顔を君に見せじと突堤に足ふみしめて立つ間のながさ
速力を次第に増してゆく船に添ひて歩みつ残されにけり

ブエノスアイレスなる夫へ

わが朝を君には夕と異なりてめぐる地球のいやはてに住む
寂しければ渚に立ちて朝を見るこの青海は君につづけり
はるばると太平洋を越えて來し夫がたよりは胸に抱きしむ
月ひとつ大空にあり寂しさはひとりの胸にをさむべきなり

神 谷 豊

吾妹子の粉をひく白の音きけばにはかに冬は深まりにけり

神 谷 義 郎

晝ながら枯野を籠めて立つ霞暖き冬を寂しとおもひぬ

苦しめば我には遠く疎ましきものの如くに春は悲しき

神山裕一

庭間のかそけき雨をうちまもりこたへなき子の肩息づけり(相聞)

あたたかき冬の日つづくあぢきなさ白けし街の石だたみ踏む

小驛のをぐらきあかり燈はや過ぎてなほこころひくくあかりらきその驛(夜の急行列車)

枯原に夕かげ黄なりひそやかに卵うみをへし蟲は死ぬらむ

高貴山高山不動 二首

杉木群立ちしづかなる山のなかに流るる水のありて音すも

この山に音する水のながれゆくはてをおもへば國はひろしも

冬眠りひそけきもののかくろへる野にしみわたりけさの雨ふる

雲のかげをりをりすぐる枯野原日は照りながら時の空しさ

夕空を枯野へ落ちし鳥のかげのきびしき線ぞ眼には残れる

筑紫の友死にし報せの來しときをわがむさぼりて飯いひは食みゐつ

疊這ふ夜蜘蛛をとらへ火に焼けりいのち絶えしものの臭くにほふも

屋上に昇り來しとき日は照れりしまらくはわがひとりしあゆめる

神山晃一

伊勢の海眞冬をなぎて知多の岬あつみの崎の相寄りて見ゆ

神山信勝

工場労働

灯のくらくつめたき壁に菜つ葉服かくると釘のあたまをさぐる

こまごまと鐵削りつつ窓ごしに空のふかさを仰ぎけるかも

足尾銅山坑内 一首

ほそぼそと坑内しぬちに語るひとの聲つばらなればどころひかるる
檜落葉踏むになれたるつとめ路は霜しとしとと凝り深みける

神 吉 妙 子

料理場の窓はそよ風キュラソーの計量めもすがし夏の朝晴
世に人にわが職分のもつ意味を知り得し朝の陽の大きいなる
まぎれざる憂をもてば茶を立つるわが三味の時にくづるる
タンクいま丘を下りて幾臺のとどろき凄し戦車隊ゆく
戀も名もはるかに遠し命一つささげて悔いじ道をおもへば
険しとて避くべき世かは溢れくる涙をかみて起ちあがりたり
わが持つは絶対他力の信なりと言ひ放ちたる顔のかがやき

神 尾 光 子

この世界のいづくを行かば逢ふことかただひとりなる人を見んとす
わがちさき化粧鏡にうつりたる伊香保の山の初秋の色

夕空をながれてゆくは雲ならでうれしとおもふさまざまのこと
はしけやし女の帯の模様より我日の本の秋立つらんか

朝まだき皇宮警手がのぼりゆく紀の國坂も紅葉してけり
いと高く咲ける櫻の花の向きあざやかに見ゆ空の曇れば

神 岡 敏 夫

荒川の青瀬の波に啼く河鹿うちひびくなり草刈り居れば
日向邊を歩み來りて入りし家しまらくは暗し雛燕のこゑ

韓 鳳 洙

白鬚をなでつつ吾れに千字文を教へて呉れし祖父を忘れず

尻尾などちよいと持上げて一人前に小便放つ小牛愛しき

村の子ら親牛小牛ひきつれて萬丈峰にのぼる夏の朝

龜田菊治

堺市史史料展覽會にて足利時代の堺港の南蠻船渡來繪圖を見て

屋根低き家建ち並ぶ港町南蠻船の入り來るところ

港家の二階の人の海に向きて泊船がふねに居る人と話せるところ

開け放つ家の二階に人居りてマリヤの像ををろがむところ

犬連れし南蠻人の大いなる日傘をさして路行くところ

髯長き黒衣の僧の十字架を胸に吊して禱れるところ

和泉大仙陵

みささぎにここだも住める鷺の群一羽下ればみなくだる濠に

龜山昇一

わがはらから妻のはらから遠く來しかたじけなさよ涙ながるる(妻の死)

龜山悌吉

砲臺も崩れしままの石山に莖がこぼす紫の色(旅順三龍山戦蹟)

俳諧寺一茶がかつて見つめたる人間の世は今も變らず(信州柏原)

龜山麥子

秋雨のはれてしづけき朝光あさひかりや鹽田の中を犬あるくみゆ(小豆島)

龜山美明

信州満島より天龍を下る

底ふかき舟に蓆を敷きひろげゆたかに坐り川くだらむとす

渦まきて岩をうつ波の音にまぎれ幽けく聞ゆるは草こほろぎか

傾きて舟駛りくだる鳴瀬一つ過ぐればやがて下に瀬の見ゆ

信州三留野より飯田へ大平峠を越す 一首

山ぐみのくれなる熟れしつぶら實は細枝たわむに採る人みえず

四十歳となりて 一首

十餘年妻らと暮し家をもつたのしみがいま判りきにけり

軍需景氣ちまたにひびき物の値のきそひのぼるは許さるべきか

眞夜なかに物あさり行く人あるか軒の芥箱ごみの蓋の音きこゆ

兒に飲ます牛乳は朝ぬすまれて一日不愉快にわれなりてをり

遠き友丸野不二男と飲む

ひさびさに遭ひたる不二男話しつつ飲みつつ爪をかぢる癖やまず

夜おそく起きゐて顔にひびく寒さ耐へがたく思ひ歌選りにけり
山茶花の葉につもりたる雪のみが消えずしばらく庭に明るし

四十六歳の實兒子供五人遺して逝く 三首

ふるさとに生を畢りたる兄の面の眼にかび來るを汽車に哀しめり
兒を五人遺して死ぬはいかばかりつらかりしならむ思へば泣かゆ
繰返し死にたくなしと言ひをりし父のことをいふ子は泣顔に

歸省

齒ぎりよき韭の酢のもの食ふことの久しぶりなる鳥に歸りし

龜山良平

田の畦をあゆむ鳥のしなやかにその羽は艶ふ朝の光に

龜井文子

白牡丹瓣の底ひの紅あはし風吹くたびにほのぼのと見ゆ
遠近に牡丹のしろきかたまりのときなく揺らぎ光りゐるかも
咲きたけて葵祭の花傘のおもかげになる紅き芍薬

鴨 口 正 松

生國魂神社より西望す 一首

月光の下に眠れる大阪は荒れし曠野の如もしづけし

秋雨は残りの柿の紅き實にしみじみ降りてひと日つづけり

鴨 澤 恒 臣

潮ひく夕いたるらし堀川のよどみしづかにながれそめたり
やはらかに雨にぬれつつ牡丹花の重き据りはゆるがざりけり

鴨 下 萩 江

入院中他の患者の死にあひて

白壁にほのかにうつる木の影のゆれある時に人死にゆけり

いのちたもち起してもらひ見る庭の赤土暑く眼眩みぬ

ねむりさめて我が眼の前の夕あかりつばらに松の葉はかがやけり

鴨居道

あめつちのなしのままにとさわがざるころにきたるよろこび多し

人前になみだながさぬかたくなのさびしき心たむるすべあれ

掃部千歌

父死す

この父のひと世おもへばいやさらに寂しかりけり死に給ふまで

萱島功

鉛筆のさき尖らしてこの子たち落ちねばならぬ考査まつなり

一千の子らにかけやる念願のひとすぢなればたじろがじ我れ(教職)
油風ぎ一權ぎごとにきられゆく春の潮は琥珀のごとし

萱 島 邦 雄

うす紅く空はそまりぬ入日影港の船の窓を照らせり

茅 野 紅 二

せつばつまりしものの如くに荒浪の岩に眞向(まっこう)に來るいきほひ

製紙所見學

どろどろになりたる紙の見るかげもなくなりたるが紙になる見つ

唐 木 田 李 村

つかの間に過去となりゆく現代の流轉(りゅうてん)の底に闘ひつづくる

行詰まる世のもとすゑを窮めつつ村を治むることに苦しむ
取れ過ぎて安値の糶を持てあます矛盾をいかに切抜くべきか
つき詰めて生きんと願ふ此の村の娘等は髪のおどろを恥ぢず
滞納の處分に來ればしかすがに鬼ともわれの見ゆるなるらし
小作爭議まだ纏らぬ土間にして眼につく寒き糶の野俵
村自治に絡む苦惱のかずかず追ひこくられて吾は老ゆなり
餓ゑ死ぬる覺悟をもちて働ける民ありてわが國は亡びず

唐澤 左門

炬燵あけし今宵は寒し馬屋なる馬が物食ふ音のさびしさ
守屋山のやや北よりに山一つこえて雪白き霧ヶ峰見ゆ

假屋 安吉

越信濃こしなくにの境のなみ山の青山こえて雲のいかよふ

妻が背に負はれ行く子の赤き帽すすき野こえてしばらくは見ゆ
裏原の芒生わけて人ゆくと姿は見えね莖折るるおと

あげ潮の浪のおよべや岩窪にたまれる松葉うへうごきつつ
浪しぶき散り飛ぶ磯の巖間なる潮のたまりに松葉沈めり

瑞巖寺一首

異國のうづの切子とそのかみにめでけむ切子今もめづらし
窓掛けの明りは月のかげながら小夜のしぐれの音たてて來ぬ
蟲のこゑ此の頃細し幾夜さか知らぬ時雨の斯くは過ぎけむ
あまりにも亂れし萩を剪りしかば今宵蟋蟀は異かたに鳴く
次浪のすでに迫りて亂れ潮巖匍ひながれ瀬をなして落つ

巖に割れてとどろく濤の音歇みし磯のしじまに泡消ゆる音
おもむろにふくらみ移る青波に浮ぶ釣船おほにゆれゐる

道成寺

飽無き遠世に組みし堂に入り古りてひかれる柱を撫づも
此の寺に斯くてぞ遂に鐘なしと長き話を僧終りたり

歸郷

子供らは既に忘れし遠富士を猶見ゆるぞと母の見ています(事中)
曇ふる伊吹を越えてうち向ふ近江は赤き潮の夕照り
よき孫を見ませわが脊と老いし母御墓に申す子ら立たしめて

海澤溪

麓への雲や薄れしほの明り昏れたる山の下よりぞさす

日原溪

別れゆく友等の聲はこだまして檜原ごもりに又聞え來る
秩父嶺よ雲晴れそめて没りつ日の陽の筋長く天にさすかも

作者略歴

えの部

江川 静美

本名藤太郎。五十三歳。宮崎縣東臼杵郡細島町

六八三に生れ、延岡市大字土々呂一二一一に現住。小學校長。明治四十一二年新詩社與謝野寛氏の添削指導を受く。昭和十年秋延岡市の同好者と相談り短歌研究会を開き、をがたま會と稱す。同人として今日に至る。

江口 きち

筆號涼子。二十六歳。群馬縣利根郡川場村に

生れ同地に現住。百貨小賣商。河井醉茗氏の「女性時代」創刊當初より發表、引續き指導を受く。

江口 圭次

佐賀縣に生る。元臺灣總督府交通局鐵道部花

蓮港出張所勤務。臺北市あらたま社所屬三ヶ年。昭和十年二十八歳にて死去。

江口 健一

大正四年臺灣總督府臺北中學校を卒業し直ち

に鐵道部に奉職。大正九年國民文學社に入り

松村英一氏の指導を受く。大正十二年胸を病みて滿四ヶ年の病院生活を送り昭和二年七月七日永眠。行年三十。

江口 とり子

明治十七年五月十五日熊本市五十人組町一五

に生れ、東京市杉並區西田町一ノ四七〇に現住。明治四十四年頃より新聞雜誌に投書、大正十年アララギ會員となり今日に至る。

江口 まさ子

四十三歳。佐賀縣神埼郡蓮池村大字小松四三

に生れ、長崎市八幡町九七小寺方に現住。大正七年潮音社に入り現在同人。

江崎 綾子

三十歳。名古屋市中区、豊橋市新川町市南

六五ノ三に現住。昭和十年水邊に入社。

江崎 軌八郎

三十六歳。愛知縣東春日井郡小牧町に生れ、

同地に現住。陶磁器商。名古屋短歌會の「短歌」創刊直後より加入。

江崎 利一

本名利一。二十五歳。和歌山縣東牟婁郡下里

町下里に生れ、福岡市藥院鹽入町二四五に現

住。職業なし。これといふ作歌經歷なし。

江尻 萬左

本名正一。明治二十年二月二十二日、茨城縣

多賀郡松原町に生れ、東京市赤坂區新坂町三五に現住。初め銀行員として倫敦に約七年在りしが現在會社員。大正四五年頃「水甕」によりしも中絶。昭和八年、歌集「青柿」を上梓。この前後再び「水甕」による。かくて又昭和十一年より「水甕」に復活。日本ペン俱樂部會員。

江添 榮一

二十二歳。群馬縣北甘樂郡富岡町一九に生れ

同地に現住。酒類商。昭和九年七月作歌を始め、同十年三月「歌と觀照」に入社、現在に至る。

江連 詩路潮

本名龜吉。明治四十年

生れ、同縣上都賀郡鹿沼町中田町に現住。小學校教員。歌は大正末期よりはじめ、昭和初期日光町に在職中清水比庵氏の門に入り現在に至る。歌誌「二荒」の編輯をなす。昭和八年、歌集「早蕨」を出版。現在「二荒」同人。

江渡 哲太郎

明治十四年四月青森縣

外岡本に現住。神戸市立女子商業學校長。青年時代數年の作歌經驗ありしも久しく中絶せしが、最近再び作歌に志し東京高嶺社の社友たり。

江戸彩華 本名さい子。五十五歳。大阪府堺市に生れ、金澤市長町二番丁に現住。教師。明治三十六年頃より大日鯛二氏に學び、氏の没後大日本歌道奨勵會に入る。近年は與謝野晶子氏に指導を受く。

江波戸秋葉 本名好之助。三十五歳。千葉縣匝瑳郡共興村に生れ、同地に現住。農業。昭和三年一月橄欖入社現在に及ぶ。

江波戸醇一 二十九歳。千葉縣匝瑳郡築村稻田に生れ、同地に現住。農業。昭和七年橄欖社入社、現在に至る。

江波戸白花 本名仙松。明治廿年四月六日、千葉縣海上郡鶴巻村蛇園二五四一に生れ同地に現住。元小學校教員。昭和六年家塾を起し現在經營中。明治三十九年安東正胤氏に就き歌を學び明治四十一年頃より雜誌新聲に發表。後創作社に入り若山牧水氏に指導を受け大正五年頃迄同誌に發表、後思索生活に入りて發表をなさず。現在服部研石氏等の俳誌高潮同人。俳號抱一。

江原青鳥 本名九一。四十三歳。山口縣大津郡日置村に生れ、同地に現住。地主。大正十一年より「水麴」「白梅」「霸王樹」「吾妹」「白鷺」を経て昭和四年「白鷺」解體と同時に「地上」の同人として今日に及ぶ。

八十一歳。本籍、京都市下京區大宮八條下ル。京都府船井郡園部町に現住。中學校教諭。昭和六年四月潮音社に入社、太田水穗氏に師事し現在に至る。同十二年四月上田官治氏等と全京都教育歌人聯盟結成、歌誌「短歌實踐」刊行。

江村定憲 四十一歳。本籍、京都市下京區大宮八條下ル。京都府船井郡園部町に現住。中學校教諭。昭和六年四月潮音社に入社、太田水穗氏に師事し現在に至る。同十二年四月上田官治氏等と全京都教育歌人聯盟結成、歌誌「短歌實踐」刊行。

江村峯代 大正三年一月一日、和歌山市小野町三丁目に生れ、大阪市西成區新開通二ノ一六に現住。

穎田島一二郎 三十八歳。東京市に生れ、牛込區新小川町三ノ一四に現住。文筆生活。大正十一年一月以降今日まで小泉荃三氏の指導を受け、「ポトナム」創刊と同時に参加、現在同誌を編輯す。昭和七八年の頃「歌壇新報」を編輯せしことあり。著書に歌集「仙魚集」あり。

榎原山路 本名三治。明治三十九年八月一日生れなれど流轉の中に育ち、生地不詳。丹波船井郡八木町に現住。商業。大正十二年頃「國歌」に入り現在の「國民文學」に及び、植松壽樹氏に師事す。

榎本文女 二十九歳。和歌山縣海草郡加茂村小南に生れ、東京市澁谷區代官山町一〇代官山アパート二四ノ一六六に現住。昭和九年曼陀羅社に入社

日比野道男氏に師事し今日に至る。

榎本太郎 三十九歳。愛知縣渥美郡泉村大字石神に生れ同地に現住。農業。大正八年五月創作社に入社、昭和三年一時退社、同十一年再び入社。

榎本夢 本名久枝。明治三十七年十二月五日、岐阜市に生れ、神奈川縣片瀨町赤山下に現住。昭和十年若山喜志子氏の創作社に入社、今日に至る。

海老澤欽三 三十八歳。横濱市中區蓬萊町二ノ一二に生れ同市鶴見區鶴見町八二五に現住。和洋紙、文房具小賣。大正五六年頃より作歌を始め、創作、太白、國民文學、日光を経て一時口語短歌を作りしが橄欖、アララギ、朱鳥、多磨を経て現在何れの結社にも據らず。

海老沼泰明 本名角太郎。三十七歳。栃木縣下都賀郡部屋村大字野沼に生れ、小樽市花園町西四ノ一に現住。帽子商。二十五歳頃より作歌。「橄欖」を経て「ぬはり」に入りしも三四年作歌せず。本名光。三十四歳。千葉縣印旛郡本埜村中田切二に生れ、同地に現住。農業。大正十五年より作歌。昭和二年三月、創作社に入社、同年五月「ぬはり」創刊と共に入社し現在同人。

海老原翠山 本名光。三十四歳。千葉縣印旛郡本埜村中田切二に生れ、同地に現住。農業。大正十五年より作歌。昭和二年三月、創作社に入社、同年五月「ぬはり」創刊と共に入社し現在同人。

蝦名五郎 二十歳。弘前市に生れ、同市元寺町小路一五に

現住。弘前高等學校生徒。昭和十一年二月潮音社入社。

蛭原 濱壽 四十六歳。茨城縣稻敷郡葦崎村天寶喜に生れ

同縣日立町諷誦臺に現住。齒科醫師。會社員。大正七年初めて作歌に志し、久しく「アララギ」會員たりしが、昭和三年より「國民文學」に據り松村英一氏の指導を受く。歌集「道霜」の著あり。

蛭原 やる 四十二歳。茨城縣北相馬郡守谷町に生れ、千葉縣東葛飾郡野田町中ノ臺一六九に現住。産婆。大正四年秋金子薰園氏の短歌研究會に入會せるも一年足らずにて中止、昭和四年六月創作社に入社、十一年七月退社、現在は殆ど作歌せず。

延壽寺 末稱 三十七歳。福岡縣浮羽郡福岡村大字福益に生れ、福岡市渡邊通三二〇ノ五七に現住。昭和八年九州帝大法文學部國文學科卒業後二ヶ年大學院在學。目下國文學及一般文藝の研究に従事す。中學時代より作歌、昭和二年アララギに入り憲吉、茂吉、文明氏等の指導を受く。

おの部

隱岐とく子 年齡出生地不詳。學齡時香髓カリエスに冒せ

れ、終生病歿。昭和二年初自然詩社に入社、尾山篤二郎氏に師事。闘病二十有餘年、昭和十二年三月十九日、大阪市西淀川區浦江北三丁目に歿す。

織田 善雄 明治三十六年三月十三日、名古屋市東區松山町二四に生れ、同地に現在。曹洞宗含笑寺住職。歌は十八歳にして始めしも師につきしことなし。「つぎくさ短歌會」同人を最初に「名古屋短歌會」同人を経て、「青角髮短歌會」を起し編輯責任者として今日に及ぶ。

老川 潮 本名林平。四十七歳。静岡縣磐田郡光明村船明に生れ、福岡縣門司市谷町一丁目に現住。門司中學校教諭。窪田空穂氏に師事。「ぬはり」「日方」同人。

沖 大兄 三十七歳。長野縣東筑摩郡東川手村上生野に生れ、富山市千石町五に現住。中等教員。大正八年十月アララギに入會して島木赤彦氏に師事、その歿後は岡夔氏に師事す。

沖 美一 三十七歳。愛知縣海部郡八開村江西に生れ、東京市本郷區駒込坂下町一二六に現住。洋染クリーニング業。昭和九年十月より花房社に學ぶ。

沖本 悟樓 高知縣幡多郡下川口村下川口に生れ、昭和八

年逝去。享年二十五。小學校教員。歌に師なし。ただ、故島木赤彦氏の著書二三を繕きたるが如し。

沖本 重虎 號白水。三十七歳。高知縣幡多郡下川口村下川口に生れ、同郡月灘村西泊に現住。小學校教員。作歌は全く我流にして十六歳より作歌すれど師なし。

奥 榮一 明治二十四年三月二十四日、和歌山縣新宮市に生れ、東京市豊島區長崎南町三ノ二二九〇銀座アパートに現住。賣文業。明治四十一年和貝彦太氏を中心に「濱木綿」を發刊歌作を始む。爾來時につれて歌作すれど歌壇の流派に屬したることなく、何人にも師事したることなし。著書に新潮社その他より二三の譯著あり。

奥 和夫 二十五歳。大阪府三島郡千里村大字佐井寺に生れ、同地に現住。無職。中學病氣退學の翌年、十七歳頃より作はじめ「短歌研究」昭和八年十一月號に松浦柳翠の雅名にて推薦される。

奥田 和男 本名一雄。二十七歳。明治四十五年二月十五日、北海道釧路市に生れ、同市末廣町十二丁目に現住。大工。昭和十二年一月橋本德壽氏の「青垣」に入社。

奥田喜一郎 二十六歳。奈良市高畑町字御所馬場に生れ、

大阪市北區堂島上三丁目四に現住。活字製造業。昭和十一年一月多摩短歌會に入會し今日に至る。

奥田哲良 四十歳。淡路島に生れ、京都市嵯峨蕨舊嵯峨御所

内精華寮に現住。著述業。中學時代より好みて作歌、川中悠行、麻畑重稔兩氏の批評を受けしことあり。雑誌「くぐひ」に發表。

奥田富雄 三十八歳。長野縣小縣郡別所村に生れ、東京

市澁谷區幡ヶ谷笹塚町一〇一七に現住。三越に勤務。大正六年中學三年の頃より作歌し同九年潮音入社、現在同人。

奥田白水 本名實。大正二年五月一日、栃木縣金田村に

生れ、東京市芝區田村町六ノ一神谷方に現住。縫箔業職人。少年時代より歌を好み、牧水啄木等の歌に學ぶ。

奥津清子 大正三年十月鎌倉に生れ、鎌倉町由比ヶ濱一

〇〇に現住。昭和十年一月より五月迄水麴社に居り、同六月より潮音社友となり現在に及ぶ。

奥戸足百 明治三十七年八月十日

福岡縣若松市西本町四ノ二〇一に生れ、茨城縣行方郡麻生町羽生藤

四郎方に現住。二十歳頃より作歌に志し、直接の師なく獨學にて今日に至る。

奥貫信盈 明治三十五年十二月十六日、福島縣東白川郡

棚倉町に生れ、東京市目黒區中目黒三ノ一〇六〇に現住。火災保險會社々員。大正十四年中央大學卒業。十七歳の頃作歌を始め、主として金子薫園氏の選に投稿、一三年にして投書をやめ大正十年末故郷田東聲氏の覇王樹社に入社、東聲氏歿後白井大翼氏を主宰に仰ぎ今日に至る。歌集「朝霧」あり。

奥野町子 二十九歳。和歌山市に

生れ、大正十年一月頃より歌町南二ノ二に現住。昭和十年一月頃より歌に志す。

奥村奥右衛門 五十九歳。滋賀縣栗太郡治田村上鈎に生れ、

東京市淀橋區百人町三ノ三二四に現住。全國高等女學校長協會主事。明治三十四五年頃一二年間「文庫」に投書し、服部躬治氏の選を受く。昭和四年頃「水麴」に入社。現在水麴同人。昭和五年、同好者と「青波」を創刊、編輯同人として現在に及ぶ。

奥村さき 四十四歳。兵庫縣淡路郡志村萬歳に生れ、東

京市淀橋區百人町三ノ三二四に現住。佐藤高等女學校教諭。東京女高師在學中教授尾上柴舟氏より指導を受く。大正十二年頃「水麴」

に入社、現在同人。昭和五年四月、野澤楠葺、木村榮次、奥村奥右衛門等の諸氏と「青波」を創刊し、編輯して現在に至る。

奥村静子 五十二歳。大阪市南區三津寺筋に生れ、同市

天王寺區生玉町齡延寺に現住。十五六歳頃大口氏の歌誌「なでしこ」をよみ二十歳頃一明星」をよむ。其後京都の下村關路氏に學び、萬造寺齊氏の街道社創刊と共に入社。

奥村玉枝 三十歳。靜岡縣沼津市港町に生れ、同地に現

住。昭和五年創作社に入社、現在に至る。
奥村芙樹子 本名富貴。明治三十八年四月二十日、名古屋に生れ、同市東區長堀町三丁目に現住。大正十四年四月「青樹」創刊と共に入社、昭和三年「水麴」「青樹」合併と共に水麴に入る。水麴同人。

奥村文子 三十二歳。岩手縣膽澤郡水澤町鹽籠字裏町二

に生れ、同所に現住。昭和五年八月ぬはり社に入り今日に至る。

奥村政治郎 六十二歳。長野縣更級郡鹽崎村に生れ、神奈

川縣中郡三宮町に現住。三十四年間小學校教育に従事退職後無職。明治三十三年新聞「日本」にての正岡子規の短歌の募集に應じたる後歌を作らず。大正二年六月アララギ會員と

なり翌三年作歌を始め今日に及ぶ。

奥山 秋歩 本名清次。三十一歳。鹿兒島市下田町一五四

二に生れ、吉林省敦化軍事郵便取扱所長官舎に現住。關東通信官署通信局職員。少年の頃より作歌を始め昭和四年營口在住當時盛に新聞に發表す。其の頃滿洲短歌會に入會、爾來同志と共に機關誌合萌を守り殖民地文學運動をつづく。

奥山 樵平 本名英悅。大正二年三月十八日、山形縣北村

山郡福原村寺内に生れ、東京市向島區隅田町一ノ一一九〇佐藤方に現住。無職。昭和四年頃一時「水廻」社友となる。昭和八年一月「勁草」社友となり宇都野研氏に師事す。

奥山 友吉 三十六歳。山形縣最上郡秋野村大字泉田に生

れ、山形縣最上郡古口村大字古口に現住。小學校教員。十六七歳の頃、中學世界、文章世界に投書す。昭和六年以來山形新聞自由歌壇に投書す。星影、泉太郎と號したる事あり。

奥山 美佐雄 三十九歳。岡山縣邑久郡太伯村神崎に生れ、

神戸市灘區青谷町一ノ三九に現住。神戸市技師。醫博。昭和二年アララギ入會、今日に至る。但しアララギ發表の場合凡て大山操の筆名を以てす。

億川 攝三 兆山と號す。六十一歳。兵庫縣有馬郡大字名鹽

に生れ、大阪市西區西長堀南通四白髮橋南に現住。醫師。明治三十五年頃佐佐木信綱氏に添削を受けし事あり。雜誌醫學に寄稿せし以外に歌の會又は雜誌に關係なし。

押尾 克己 大正五年一月一日、千葉縣印旛郡酒々井町に

生れ、同地に現住。農業。昭和七年一月より「橄欖」「土筆」其他に投稿。現在専門雜誌に關係なし。

押尾 憲治 生年月日不詳。千葉縣松尾町に生る。醫を本

業となせし傍ら多年「いづかし」同人として短歌を學ぶ。昭和十一年二月轉地先なる伊豆熱川にて急逝。當時の推定年齢三十餘歳。

落合 一雄 本名一男。三十二歳。千葉縣安房郡吉尾村に

生れ、東京市淀橋區柏木三ノ三八三に現住。三菱銀行員。大正十四年短歌雜誌「常春」入會。現在「現實短歌」同人。

落合 鉦 三十一歳。愛知縣東春日井郡小牧町に生れ、

同地に現住。會社員。大正十四年中學五年の時作歌を始め、卒業後名古屋短歌會に入り、昭和三年「國民文學社」に入り、専ら松村英一氏の指導を受けつつ今日に至る。

落合 はな 二十八歳。豐橋市松葉町二八四に生れ、名古屋市南區熱田富江町一四に現住。小學教員。十九歳短歌に入會、後、水廻會員となる。

落合 詩有 本名修一。明治二十年美作國院庄に生れ、大阪市住吉區晴明通一ノ七七に現住。會社員。青年時代より萬葉集の研究に没頭、作歌めれど發表せず。

落合 直文 初め櫻舎後秋之家。文久元年十一月廿二日、陸前國本吉郡松岩村に生る。仙臺藩重臣鮎貝盛房の次男、後落合直亮の養子となる。明治十年神宮皇學館の前身伊勢神宮教院に入學、院費にて上京、十五年東京大學古典講習科に入り翌年入營の爲退學。廿一年皇典講究所の講師となる。當時の極端なる歐化主義を慨し國語國文學復興運動の先唱者たり。此年「孝女白菊の歌」を東洋學藝雜誌に發表。明治詩界に新紀元をつくる。廿三年池邊義象、萩野由之と「日本文學全書」廿五年雜誌「歌學」創刊に一文を寄せて短歌革新の意圖を明かにす。「緋威の鎧」の歌は此年の作なり。廿六年淺香社を駒込淺嘉町の自宅に創立、勃興し來れる古典研究の機運に乗じ専ら國文及和歌の革新を計る。作歌は「淺香社同人詠草」として日本新聞二六新報に發表す。淺香社は二三年

にして解散せるも彼の和歌革新運動は門人與謝野鐵幹(新詩社)久保猪之吉(いかづち會)尾上柴舟(車前草社)金子薫園(白菊會)等によつて繼承され、新派和歌を完成せしめた。卅六年十二月十六日糖尿病にて逝く。享年四十三。歿後「菽之家歌集」等刊行さる。其他國語國文に關する著多し。

音代節雄

三十七歳。出生は姫路市なれど祖父の代より大阪府北河内郡枚方町大字枚方五八に居住。會社員。短歌は大正十三年頃より始め、竹柏會々員。著書「短歌英譯集」"Chances of Japanese Poetry"、其他國史國文郷土史等に關する論文多し。現在大阪史談會理事。

及川水馬

本名馬吉。明治四十年一月、岩手縣東磐井郡興田村に生れ、同地に現住。小學校教員。

及川光子

本名ミツ。明治三十九年一月一日、群馬縣群馬郡澁川町新町一八七三に生れ、東京市澁橋區澁橋五八六に現住。昭和三年アララギ會員となり現在に及ぶ。

及川米子

明治三十九年九月二十三日、宮城縣登米郡上沼村彌勒寺に生る。宮城縣女子師範を出て教鞭をとりしも昭和五年末發病現在に至る。療養生活の無聊より作歌をはじめ、「橄欖」社友。

及川玲子

二十三歳。東京市に生れ、同市芝區三田北寺町二三渡邊方に現住。病氣療養中。昭和九年六月より同十一年三月迄「短歌鑑賞」"あゆひ"同人。現在「エラン」同人。

及川堅造

明治三十二年千葉縣香取郡常磐村坂一〇一〇に生れ、同地に現住。農業。大正十三年作歌に志し直ちに創作社に入社。牧水氏歿後喜志子夫人の薫陶をうけつつ今日に至る。

及川經子

三十六歳。東京市神田區に生れ、横濱市神奈川區西神奈川町四ノ九七に現住。簡易保險局勤務。昭和七年より「短歌研究」「日本短歌」に投稿。昭和九年四月「現實短歌」「短歌鑑賞」同人となり昭和十一年十月「現實短歌」を脱退す。

菱川憲

本姓及川。三十二歳。盛岡市餌差小路に生れ東京市豊島區池袋二ノ一〇五二仲町アパート内に現住。齒科醫。中學校入學と同時に作歌。後、谷口波人氏の指導を受け、轉じて口語歌を研究す。プロ短歌の洗禮を受け、プロ短歌の瓦解と前後して定刑律に還る。

樗木すゑ子

明治三十五年七月五日大畑に生れ、同地に現住。十有餘年療養中。大正十年作歌を始め「水麴」を経て昭和三年

九月「青虹」入社、現在同人。

大一中一郎

明治三十九年十二月二十四日、福島縣瀨郡鏡石村に生れ、同縣双葉郡新山町に現住。縣立双葉中學校教諭。大正十三年より金子薫園氏に指導を受く。現在「光」同人。著書に「現代短歌同句類集詳解(光社發行)」あり。

大石逸策

二十八歳。山梨縣北巨摩郡日野春村長坂に生れ、東京市江戸川區小岩尋常高等小學校内に現住。教員。昭和五年頃より作歌に志し、中村美穂氏の指導をうけ、最近は森本治吉氏の指導をうく。

大石花農

本名鐵雄。佐賀市に生れ、大正十二年八月十六日死亡。享年二十五。十六歳頃より歌に親しみ初め「詩歌」に入社せしが、大正六年「珊瑚礁」に入り大正八年「霸王樹」の創刊と共に又同社に入る。大正十一年七月佐賀縣有田町より雜誌「火の國」發刊せらるるや入りて同人となり、後編輯にもたづさはる。

大石隆子

明治三十四年十月十二日、東京市淺草區向柳原に生れ、同市小石川區久堅町一〇に現住。教員。昭和七年より尾上柴舟氏に師事、同時に水麴社友となる。

大石鐵雄

福島縣嘉穗郡内野村に生れ、八幡市枝光千代

町二丁目に現住。八幡製鐵所旋盤工。昭和三年四月創作社に入社し、昭和九年十二月退社。同十一年十二月國民文學社に入社し、現在に至る。

大石 亮三

明治三十四年七月一日 東京府八王子市に生る

大正十年東洋大學哲學科に在學中より健康思はしからず、同年五月二日相州南湖院に入院、同年十二月退院。大正十四年七月十四日逝去。行年二十五。大正七年八月アララギ會員となる。

大石 美沙緒

本名操。明治四十一年三月十日、京都府加佐郡朝來村字朝來中に生れ、同地に現住。小學卒業後役場書記、保險外交員、雜誌編輯者新聞記者等をなしつつ各地を轉々とし、昭和五年二月より出生地にかへり農業。歌集「未成品」「旅役者」の著あり。

大泉 米吉

二十九歳。宮城縣刈田郡宮村に生れ、新潟縣岩船郡村上本町三ノ町に現住。高等女學校圖書教員。作歌經歷といふほどのものなし。

大泉 和子

二十七歳。岩手縣盛岡市に生れ、東京市目黒區綠ヶ丘二二六八に現住。女學校在學中より作歌し、昭和十年十一月よりアララギ會員となり齋藤茂吉氏の選をうけて今日に至る。

大内 須磨子

二十九歳。大分縣佐伯町に生れ、宮崎縣延岡市北小路に現住。昭和四年作歌を志すと同時に長田良太郎氏の指導を受け、同年十二月、「國民文學」に入社松村英一氏の選を受く。昭和十二年三月より窪田空穂氏の「槻の木」に加盟して現在にいたる。

大内 鐵二

二十九歳。兵庫縣印南郡伊保村伊保崎六〇に生れ、同縣津名郡家町春海方に現住。教員。昭和五年上京國學院大學に學び、初め御歌所寄人島野幸次氏に、後釋道空氏に歌を學ぶ。卒業後「くぐひ」會員となる。

大内 規夫

岡山縣淺口郡大島村に生れ、京城府南山町二ノ二七に現住。銀行員。大正十五年八月「香蘭」に入社、同年七月退社。昭和十年「多磨」創刊と同時に入會今日に至る。

大内 波光

本名朔力。國學院大學卒業後教師となり、大正十四年歿。歌は大正十年より金子薫園氏に師事す。歌集「灰色の空」の著あり。

大江 保徳

二十七歳。栃木町泉町三九五に生れ、栃木縣上都賀郡足尾町中才に現住。足尾銅山鑛業所淨水夫。昭和三年頃短歌に志し足尾鑛夫之友に投稿、同七年東京「かぐのみ」に入會、同八年滿洲事變に従軍かぐのみ退社、九年凱旋

十年三月より東京一路會に入會し今日に至る。

大江 剛男

三十三歳。北海道札幌郡琴似村字新琴似に生れ、同地に現住。寫眞製版業。十八歳の時より短歌を作り始め、大正十五年日光に投書、同誌廢刊後はアララギに據りしが作歌に行詰りを生じ幾許もなく中絶、昭和二年より三年にかけて「創作」に投稿。

大江 氷原

本名菊太郎。三十六歳。横須賀に生れ、同市甲里八六に現住。官吏。大正七年「心の花」の島崎長治氏を識り初めて歌を學ぶ。大正九年頃より諸新聞雜誌に投書。大正十一年創作社に入社、なほ「蕃藻」にも加盟して今日に至る。

大河内 國子

明治十五年東京に生れ、同市牛込區喜久井町三四に現住。佐佐木信綱氏に師事す。

大河内 由美子

本名夕子。三十歳。香川縣綾歌郡坂出町に生れ、東京市小石川區鴛籠町一〇二に現住。東京女高師文科卒業。此の間「水薺」に據る。本姓岡野。三十二歳。

大川 きよ子

東京市淺草區瓦町に生れ、板橋區板橋町八ノ六二四に現住。大正十三年秋より潮音に入社、昭和三年春退社、同六年三月再入社して今日に至る。

大川すみ江

二十二歳。茨城縣水戸市樋木町一三一八に生れ、東京市淺草區左衛門町一に現住。實踐女子専門在學中高崎正秀氏に師事。

大川橋夫

本名橋雄。明治四十四年鹿兒島縣枕崎町別府に生る。昭和十年鹿高商卒業後鹿兒島女子商業教諭。昭和五年以降新聞に短歌を發表、同九年水麴社に入る。同十年「南陵歌人」編輯。「樟林」同人。「棕櫚」編輯。

大川涉

五十三歳。静岡縣田方郡内浦村長濱八八に生れ、静岡市藤匠町三ノ七二に現住。教員。馬酔木、アカネ、アララギ等愛讀、時々詠歌自ら慰むる事三十餘年。

大垣紋治

二十九歳。福岡縣京都郡今元村に生れ、直方市に現住。昭和二年以來、「アララギ」を購讀し、昭和十年六月同會員となりて岡麓氏に師事す。

大鐘よそ子

大正二年四月二十六日名古屋市西區園井町四名古屋市西區小川通りに生れ、同市東區吹上本町三ノ一七に現住。日本銀行名古屋支店事務員。昭和六年四月水廻入社。

大釜一男

三十歳。京都市に生れ、同市中京區小川通り押小路下ル西側下古城町三八九に現住。染織工

藝繪師。昭和四年九月水麴社に入社し今日に至る。

大木雄二

本名雄三。明治二十八年五月七日、群馬縣佐波郡赤堀村に生れ、東京市豊島區西巢鴨二ノ二六六八に現住。著述業。歌は土岐善麿氏主宰の「生活と藝術」に發表。著書に歌集「街路と口笛」創作集「村の斜面」童話集「紙芝居」研究「葉隠全書」その他十數冊あり。

大木良

神奈川縣中部東秦野村名古木に生る。銀行員。大正八年秦皮詩社に加入し河野慎吾氏に師事す。爾來昭和二年三十歳にて病歿。「秦皮」同人。歌集「冬木の丘」の著あり。

大木喬

本名竹端太作。三十九歳。石川縣珠洲郡寶立村鶴飼に生れ、同地に現住。小學校教員。作歌經歷といふほどのものなし。

大城清史

二十九歳。熊本縣玉名郡横島村京泊石塘に生れ、大牟田市諏訪町一丁目に現住。工場勞働者。昭和八年水廻入社、十一年退社。現在は短歌會現業會を設立、雜誌「筑紫」を編輯す。

大城貞夫

明治四十一年二月六日中瀬に生れ、同縣濱松市龍禪寺町二七二に現住。教員。昭和四年坂井半甫氏に師事、同年

木蔭會に入會今日に至る。

大久保琴子

四十二歳。東京に生れ、東京市澁橋區十二社二七五に現住。昭和五年より並木秋人氏に師事す。

大久保日吐男

本名仁男。明治二十七年三月十七日、長崎縣北高來郡戸石村に生れ、大正十四年五月二十八日、出生地にて歿す。大正七年より齋藤茂吉氏に師事、大正九年末アララギ會員となり翌年一月號より同誌に作品を發表す。昭和六年七年忌を機とし、戸石村に歌碑建立さる。

大久保文子

五十一歳。東京市日本橋區藥研堀町五三に生れ、大阪市住吉區天王寺町二六七三に現住。學校時代は尾上柴舟氏に、卒業後は佐佐木信綱氏に師事。現在竹柏會員。

大久保正繁

明治三十八年三月十二日、山梨縣中巨摩郡花輪村二六四四に生れ、同地に現住。農業。昭和四年頃より作歌、同八年「創作」に入社、同十年退社。同十一年「山柿」の同人として入會現在に至る。

大久保幸子

明治四十二年岡山縣赤磐郡可眞村山ノ池に生れ、高知市初月山ノ端に現住。昭和三年十月蒼穹入社。

大熊長次郎

明治三十四年六月七日
東京府八王子町に生る

「アララギ(會員)」とねりこ(會員)を経て、大正十三年古泉千櫻氏の門に入る。大正十五年、千櫻氏のもとに青垣會を結成し、昭和二年氏の歿後同門の友と共に「青垣」を創刊す。昭和八年一月二十一日東京にて歿す。享年三十三。

大熊勇二

明治四十五年三月、埼玉縣南埼玉郡武里村に

生れ、同縣所澤町に現住。商業學校教諭。作歌は昭和二年中學在學中より始め、「ささがに」「曠野」を経て昭和九年より「杜鵑花」同人となり現在に至る。

大藏宏之

三十一歳。奈良縣吉野郡白銀村湯川に生れ、

大阪市住吉區西今川町六ノ三三に現住。郷土史編纂。「啄木歌集」にて短歌を知り、「藝術と自由」に投書せしことあり。プロレタリア作歌同盟、プロレタリア歌人同盟に加盟してゐた。昭和九年より「啄木研究」を編輯發行す。現在「短歌評論」同人。歌集「地圖を描く鳥」あり。

大黒富治

四十六歳。秋田縣仙北郡大川西根村字東道地に

に生れ、秋田市楡山醫學院前町四四に現住。地方農林技師。大正四年アララギ入會、今日に至る。

大越候鳥

本名猛彦。三十六歳。茨城縣東茨城郡澤山村

大字阿波山に生れ、茨城縣久慈郡太田町宮本町に現住。小學校教員。大正八年より作歌、いはらき新聞木星に折々發表し、牧水、文明兩氏の指導を受く。後香蘭に入り、杉浦翠子氏に師事したることあり。昭和三年頃太田歌話會を組織し現在に至る。

大崎勝年

明治三十八年十一月、島根縣瀨摩郡大國村三

六八に生る。島根師範專攻科卒業後小學校教員となり昭和九年八月渡滿。現在は滿洲國吉林扶輪小學校に教員として勤務す。昭和六年秋より二箇年餘病臥しその間に作歌を始め。歌は常にひとりの道に研鑽す。現在「短歌鑑賞」同人。

大澤勇

三十七歳。群馬縣群馬郡大類村柴崎に生れ、

東京市湊橋區下落合四ノ一九七五野菊社に現住。書家。大正九年頃より數年間「霸王樹」に作歌發表。大正十二年より「野菊」創刊。兄、大澤雅休と其編輯に當り今日に至る。

大澤かつ

明治二十八年長野縣北佐久郡岩村田町に生れ

松本市巖ヶ崎に現住。十八歳の頃より作歌。大正八年大澤家に嫁し同十四年より夫と共に川崎村外氏の教を受け「國民文學」を愛讀。現在には作歌も怠りがちなり。

大澤茂樹

四十二歳。長野縣北佐久郡木牧村に生れ、同

地に現住。農學校教員。大正八年創作に入社、昭和七年同志と謀り、歌誌「科野」を創刊。科野社事業の一として昭和九年十一月、小諸懷古園に牧水歌碑建設。「科野」は現在休刊。

大澤忍

本名忍婦。三十九歳。長野縣上伊那郡飯島村

飯島に生れ、京都市岡崎東天王町九八に現住。京都帝大醫學部講師。大阪女子高等醫專教授醫學博士。昭和十年六月「竹相會」に入會し佐佐木信綱博士の指導をうく。同十一年一月より京都金雀校會を主宰す。

大澤清一

二十五歳。埼玉縣北埼玉郡川俣村に生れ、同

地に現住。昭和五年十月より作歌、「ささがに」に入社、同九年一月退社し「霸王樹」に入社、今日に及ぶ。

大澤千隈

本名清見。明治二十年松本市巖ヶ崎に生る。

世々神職たり。明治三十九年春作歌に志し太田水穂氏に教を受く。大正十四年故川崎村外氏と相識り其獎めにて國民文學社々友となり氏の選を受く。昭和七年氏の病氣漸く重るや半田良平氏に師事す。

大澤春子

明治二十六年五月二日東京市京橋區築地に生

れ、同市下谷區御徒町三ノ四八に現住。昭和

六年十月國民新聞社内藤の葉歌話會に入會、今井邦子氏の指導をうけ初めて作歌す。次いで昭和十一年五月明日香創刊より直に會員となり今日に至る。

大澤 弘 本名弘香。明治二十二年六月二十日、和歌山縣日高郡清川村に生れ、同地に現住。農林業。現在村長。中學卒業前後より歌を始め「文章世界」「明星」に歌を投じたることあるも、十數年間作歌を中絶す。大正七年頃島木赤彦氏の言説に動かされ再び始め、其後花田比露思氏の指導を受けて今日に至る。

大澤 政司 明治四十年四月十七日群馬縣佐波郡茂呂村大字茂呂三四四に生れ、同地に現住。機業。大正十五年十月、「野菊」「水麴」を経て「短歌雜誌」の松村英一氏に刺戟され昭和四年十二月「國民文學」に入り現在に至る。

大澤 雅休 四十九歳。群馬縣群馬郡大類村柴崎一二に生れ、東京市流橋區下落合四ノ一九七五に現住。村上成之、島木赤彦兩氏に添削選歌を得て出發し、後「霸王樹」に入り大正十二年二月「野菊」を創刊主宰し現在に及ぶ。

大澤 味香夫 本名小野澤正路。三十三歳。東京市在原區戸越町八三八に生れ、同地に現住。職業なし。詩歌研究會雲泥社に入社四年間。「野菊」誌

友として二年間。現在「村鵬花」同人たり。大正二年六月十三日、宮城縣栗原郡萩野村字末野に生れ、岩手縣西磐井郡一關町廣街四九に現住。高女卒業後専ら短歌によりて自己の創作的感興を表現せんとして現在に至れり。

大下 三雄 愛媛縣南宇和郡内海村中浦八七三に生れ、大連市桂町二〇ノ一三に現住。昭和五年高商卒業後、滿鐵、關東廳を経て現在大連市立實業學校教諭。昭和二年以來大分高商短歌會同人、同會發行「野火」同人を経て昭和五年十一月舊師甲斐水棟氏を慕ひて「水麴」入社、現在同人。

大鹽 學道 本名平作。文久三年十一月十九日、栃木縣那須郡大田原町一四二に生れ、同地に現住。栃木師範を中途退學し小學中學高女の訓導教諭學校長に歴任、日本史國典を研究す。在京中國學大家渡邊重石丸氏の道生館に入門す。短歌は左千夫翁の添削に益せられ盛胤、直文、廣眞、節、茂吉、赤彦、牧水各氏と交通、著述に沼津風（歌）秀樹草、姫小松、波々曾（歌文雜誌）その他若干あり。

大嶋 武雄 四十一歳。大阪市に生れ、同市西區靱南通五ノ三四に現住。鯉節問屋。若山牧水氏を慕ひ大正六年現「創作」復活にあたりその膝下に

參じ今日に至る。著書に歌集「水」（昭和十一年六月刊）あり。

大島 一邦 二十九歳。鳥根縣八束郡宍道町に生れ、大阪府外千里山四二に現住。大阪府醫師會健康保險部職員。十九歳の時「白日社」社友、以後「みづがき」「檜原」同人を経て現在「現實短歌社」同人。

大島 重一 二十三歳。上州高崎市に生れ、上州新町に現住。

大島 よね子 二十六歳。新潟縣岩船郡女川村上野新に生れ、同地に現住。郵便取扱所事務員。十年前より作歌をはじめ、「水麴」「香蘭」を経て、現在「歌と評論」による。

大島 葎花 本名徳次。明治二十一年十月二十三日、佐賀縣西松浦郡有田町に生れ、上海靈樂安路二四號に現住。保險業。昭和十一年六月より作歌「あしかひ」に屬し今日に及ぶ。

大島 青子 本名成一。明治三十四年一月十八日、横濱市に生れ、東京市大森區大森二ノ八四に現住。横濱正金銀行員。大正六年「珊瑚礁」に入社作歌を始め。大正十年滿洲に轉任、作歌中斷、昭和九年歸國、昭和十年七月「多磨」に入社今日に至る。

友として二年間。現在「村鵬花」同人たり。大正二年六月十三日、宮城縣栗原郡萩野村字末野に生れ、岩手縣西磐井郡一關町廣街四九に現住。高女卒業後専ら短歌によりて自己の創作的感興を表現せんとして現在に至れり。

大酢 英市 三十三歳。北海道厚岸郡厚岸町字若竹町に生

れ、根室郡根室町字千島町に現住。小學教師。特記すべき作歌經歷なし。

大須賀 英作 四十三歳。福島縣若松市中六日町六五に生れ

同地に現住。味噌醬油醸造。大正十四年吉植庄亮氏に師事し鐵體社に入り昭和七年退社。爾後作歌中絶現在に至る。嘗て滋賀英村と號せしことあり。

大杉 繁 本名小西富造。二十四歳。石川縣輪島町河井

町二部二に生れ、同町二部四に現住。漆器業。昭和七年頃より作歌し始め、「閑古鳥」「青鳶」に屬す。

大園 茂 明治四十年五月十一日

鹿兒島縣鹿兒島郡谷山町に生る。昭和七年曼陀羅に入社。日比野道男氏に師事す。昭和九年十月、二十八歳にて死去。「大園茂歌集」の遺著あり。

大田 きく 本名キク。二十九歳。

北海道に生れ、岩手縣岩手郡田頭村に現住。小學校教員。昭和四年二月「ぬほり」に入社、昭和十一年八月「現實短歌」に轉じて、今日に及べり。

大高 克己 二十五歳。岡山縣小田

郡金浦町字大河に生れ香川縣木田郡庵治村大島療養所に現住。農家

に生れ頼と成り、日々詩歌を友とし心の糧とし全生命とす。作歌經歷とは別になし。

大高富久太郎 三十七歳。水戸市に生れ同市尚井町に現住。

吳服商。大正十三年より吉植庄亮氏に師事し今日に至る。

大瀧 晴子 四十八歳。山形縣鶴岡

市に生れ、茨城縣立下館高等女學校官舎に現住。元女子學習院教授。東京女高師在學中は、尾上柴舟氏の指導を受く。卒業後は萬葉集を研究しつつ作歌にはげむ。

大竹 島緒 本名則夫。二十五歳。

東京市蒲田區新宿町八九五に生れ、岡山縣邑久郡蒙掛村長嶋に現住。職業なし。昭和十年頃、約一ヶ年間に、歌誌「あしかび」の誌友たりしことあり。

大竹 毅 二十五歳。愛知縣寶飯

郡蒲郡町に生れ、同地に現住。小學校教員。歌は中學在學當時より始め師につきし事なし。

大谷 嘉助 時に大川幸助の筆名を用ふ。四十一歳。島根

縣美濃郡益田町一九一に生れ、同地に現住。酒醬油醸造業。大正十一年始めて竹柏會に投じ今日に至る。現在歌は多く「一路」に發表、他に歌誌「蘭の花」を主宰。

大谷 谷泉 本名誠。四十二歳。福

町に生れ、同地に現住。開業醫。醫學博士。千葉醫大第一内科に助手及び講師として十數年勤務中、同大學短歌會々員たりし事あり。昭和六年同大學を辭して郷省後は時々同好の士と相會し作歌するを樂しむとす。結社に屬せし事なし。

大谷多香子 四十歳。奈良縣高市郡

八木町に生れ、廣島縣吳市稻荷町四に現住。公吏の妻。娘時代一時創作社に入社、奈良縣出身の社友等と「土魂」を發行。同時に大阪の新生社の同人となりしことあり。大正十年結婚後作歌を斷念、昭和七年頃よりひきつづき病床にあり再び歌道に入る。その頃より「吾妹」「眞樹」等を経て吳市の木槿短歌社同人となり今日に及ぶ。

大谷 典彦 二十四歳。大阪府堺市

寺六七七陶山方に現住。東京商科大學學生。昭和九年九月「短歌街」入社、十一年八月退社、九月「國民文學」社友となり現在に至る。

大谷 雅子 明治二十一年高知市に

生れ、昭和七年同市に歿す。享年四十五。明治三十六年頃落合直文氏の莫肯漢會にあり。のち「南人」「赤珊瑚」「青苔」等郷土雜誌にも關係。大正十年頃「ア

ララギ」に入會。

大谷津照子 三十七歳。長野縣埴科郡松代町に生れ、東京市世田谷區世田谷三ノ二四〇〇に現住。教員。昭和八年よりアララギにて土屋文明氏に指導を受く。

大知 正夫 二十歳。愛知縣津島町上河原に生れ、同地に現住。無職。昭和十一年四月よりアララギに入る。

大津 哲緒 二十八歳。茨城縣多賀郡大津町に生れ、東京府東村山全生病院内に現住。九歳にして頼に頼り、十五歳の秋癩療養所に入所。昭和八年二十三歳の頃より窪田空穂、松村英一、土屋靜男の諸氏を心に描き歌書に親しむ。昭和八年八月土屋氏の「あしかび」に入社、現在に及ぶ。

大津 晴朗 本名晴明。三十歳。神奈川県中郡大山町に生れ、東京市荏原區中延町二八二中延第一アパート内に現住。昭和五年よりつ作歌、翌六年「吾妹」に入社、病弱と闘ひつゝ斷續的に作歌、昭和九年退社現在に及ぶ。

大津 はる子 舊姓岡山。明治三十九年十一月、鹿兒島縣加治木町木田岩原に生れ、廣島市牛田町南町區一六ノ一に現住。昭和二年水廻に入社今日に

及べど結婚後は作歌を怠る。

大塚英都代 本名英子。三十三歳。廣濱市西戸部町御所山に生れ、神奈川縣津久井郡中野町中野に現住。昭和九年楠田敏郎氏主宰むらぎも會に入會現在に至る。

大塚 喜一 大正四年八月二十四日千葉市長洲町に生れ、同町一ノ五五江澤章方に現住。石版印刷業。歌は十七八歳の頃より作りはじめ、昭和十年七月「歌と評論社」に入社現在に至る。

大塚 楠緒子 明治四十三年十一月歿。士之妻。佐佐木信綱博士に師事す。

大塚 喜十 明治三十八年七月十九日、群馬縣碓氷郡東横野村下間仁田三七四に生れ、同地に現住。農業。昭和四年頃より新聞雜誌等に投書す。

大塚 五朗 本名五郎。明治三十一年長野市に生れ、京都市上京區等持院中町二七に現住。中學校教師。廿歳頃より歌を始め「詩歌」によりしも其後長く結社に遠ざかる。現在「水廻」に屬す。

大塚 泰治 三十三歳。徳島縣麻植郡川島町に生れ、神戸市灘區高羽字壽一に現住。會社員。大正九年國民文學社に入社、松村英一氏に師事し現在に至る。

大塚 武司 二十九歳。埼玉縣北埼玉郡元和村字北下新井に生れ、東京市王子區上十條町一五一〇に現住。東北帝大醫學部學生。昭和六年九月水廻社入社、今日に至る。

大塚 虎雄 明治三十五年六月、佐賀縣唐津に生る。東京日日新聞論説委員たりしも昭和十二年末死去。歌は我流にて時をり書き記せしのみ。著書に「學界新風景」「ナチ獨逸を往く」等あり。

大塚 文野 二十九歳。東京市に生れ、同市豊島區西巢鴨二ノ一九八二に現住。昭和六年十月今井邦子氏指導の椰の葉歌話會に入會。現在明日香會員。

大塚 政光 明治三十八年四月八日熊本市に生れ、東京市蒲田區蒲田町五八七に現住。國民新聞記者、東京週報社を経て現在日本青年館に勤務。作歌は大正八年頃始め、昭和五年勤草社に入り今日に及ぶ。

大塚 盈 三十五歳。北海道空知郡野付牛町大通東一〇に現住。小學校教員。大正十二年頃より作歌、昭和三年より吉植庄亮氏の選歌を受く。昭和五年「ぬはり」社友となり現在に至る。歌集「ふる郷の湖」あり。

大塚 政光 明治三十八年四月八日熊本市に生れ、東京市蒲田區蒲田町五八七に現住。國民新聞記者、東京週報社を経て現在日本青年館に勤務。作歌は大正八年頃始め、昭和五年勤草社に入り今日に及ぶ。

大塚 盈 三十五歳。北海道空知郡野付牛町大通東一〇に現住。小學校教員。大正十二年頃より作歌、昭和三年より吉植庄亮氏の選歌を受く。昭和五年「ぬはり」社友となり現在に至る。歌集「ふる郷の湖」あり。

大塚 武司 二十九歳。埼玉縣北埼玉郡元和村字北下新井に生れ、東京市王子區上十條町一五一〇に現住。東北帝大醫學部學生。昭和六年九月水廻社入社、今日に至る。

大槻 一夫 二十七歳。京都府何鹿郡以久田村大字大島に生れ、同地に現住。小學校教員。京都師範在學中より作歌をはじめアララギ、詩歌等に學べり。

大槻 俊 三十九歳。米國ハワイ島ヒロに生れ、東京市杉並區井荻三丁目東京女子大學東寮に現住。東京女子大學寮監。大正十四年より作歌す。昭和五年アララギ入會、齋藤茂吉、土屋文明、高田浪吉諸氏の指導を受け今日に至る。

大辻美枝子 二十四歳。京都市錦小路新町西入ルに生れ、同市諏訪町通り五條上ルに現住。昭和十年六月より山柿會員。

大坪 純 明治二十五年十月、出雲國宍道村の神職の家に生れ、大阪府三島郡茨木町下中條二二二に現住。少年時代より歌に親しむ。並木秋人氏らと「常春」を經營幹部同人たりしが後期の「詩歌」復活の際白日社同人となり自由律短歌に進展、後定型に郷愁を覺え退社す。内藤鑑策氏の「抒情詩」の編輯同人たりしことありしが、現在は中央結社に關係せず。「麥門冬」及「檜原」を刊行主宰す。

大坪 甲一 三十歳。秋田縣鹿角郡小坂町字杉澤四に生れ、同地に現住。機工。昭和三年より俳句を作り

昭和八年上京し、短歌に轉向す。十一年十月「むつき」の會員となる。

大坪 直子 熊本市に生れ、昭和十一年三月九日、大分縣連見郡日出町に歿。享年三十。アララギ會員にして遺歌集「花蘇芳」あり。

大坪 篤子 四十八歳。佐賀市に生れ、大阪府中河内郡枚岡村出雲井四六二に現住。官幣大社枚岡神社宮司大坪富妻。昭和九年一月頃より釋道空氏に師事し作歌を始め。

大坪 富 五十一歳。大阪府中河内郡枚岡村出雲井四六二に現住。官幣大社枚岡神社宮司。昭和八年頃より釋道空氏に師事。

大妻 一枝 明治四十二年二月二十六日、高知縣高岡郡戸波村字家後に生れ、同地に現住。洋服裁縫業。昭和四年頃より作歌をはじめ諸新聞雜誌に投稿すれど結社に屬せず。

大友 喜助 明治三十四年仙臺市に生れ、同市石垣町二四に現住。元官吏。短歌は少年の頃から作れど獨學。作歌生活に遠ざかることすでに十餘年。

大友 泰助 三十五歳。宮城縣桃生郡飯野川町に生れ、同縣栗原郡一迫町眞坂に現住。銀行員。山下隴

奥氏の添削を受け、一路誌會員。

大友 忠太 五十四歳。群馬縣北甘樂郡馬山村に生れ、岩手縣氣仙郡高田町に現住。農業。大正六七年頃より歌を作れど師無し。

大伴 貢吉 本名本間羅久治。樂寬とも號す。四十四歳。長野縣更級郡大岡村に生れ、東京市豊島區長崎町二ノ一九六六に現住。大日本雄辯會講談社々員。大正八年頃相馬御風氏の指導を受く。大正十二年「香蘭」創刊以來同人として今日に及ぶ。

大鵬 芳影 本名赤松義彦。筆名芳影は昭和十二年四月以來使用。二十歳。奈良縣宇智郡五條町二見八四七に生れ、和歌山市畑尾敷端之丁六に現住。和歌山商工會議所に勤務。小學校の頃より歌を作り、十六歳頃より諸雜誌に投稿。昭和十一年六月より池上秋石氏に師事す。

大鳥居金一郎 四十二歳。茨城縣稻敷郡浮島村に生れ、埼玉縣蕨町四九五九に現住。工場書記。十四歳の時はじめて歌を作り、前田夕暮氏の「詩歌」に發表す。以降「詩歌」同人「新緑」同人たり。現在「常春」同人。

大西 祝 操山と號す。元治元年八月七日、岡山藩士木全家に生れ、叔父大西定道を嗣ぐ。明治十七

年同志社神學科卒業。十八年東京大學哲學科に入る。卒業後倫理を研究、廿四年東京專門學校（早稻田大學）に聘せられ哲學を講ず。坪内逍遙と並び稱せられ門下學生に思想的影響を與ふる事大であつた。三十一年獨逸留學病を得て歸朝、卅三年十一月二日歿。享年三十七。歌は同志社時代に池袋清風風に學ぶ。歌論、悲劇論等文藝批評多し。大西祝全集七卷あり。

大西伊三郎

三十五歳。京都に生れ京都市東堀川御池南に現住。衣裳畫工。大正十三年より短歌雜誌に投稿す。大正十五年一月國民文學に入社、松村英一氏の指導をうけつつ現在にいたる。

大西耕三

四十六歳。香川縣に生れ、兵庫縣武庫郡精道村蘆屋樋口新田七五に現住。辯護士。法學博士。昭和八年二月大阪辯護士のうち短歌を愛好する者相集り方窓短歌會を結び作歌を試む。

大西正一

明治四十三年二月十日兵庫縣神崎郡中寺村中村二〇七に生れ、朝鮮木浦府祝町三ノ一に現住。教員。中學時代より短歌に興味は有せしも本格的に作歌を始めしは廣島文理大在學中。一定の師結社に就かず。現在「新羅野」會員。

大西貴美之

本名保。二十八歳。三重縣北牟婁郡二郷村山

本に生れ、同地に現住。農。昭和八年より作歌、雜誌新聞等に投書、今日に至る。

大西天陽

本名徳治郎。三十六歳。香川縣に生れ、岡山市東田町に現住。中學校教員。作歌經歷といふべきほどのものなし。

大西節

三十一歳。福岡市島岡町一ノ九に生れ、直方市西門前町二二七に現住。職業なし。十五歳にて作歌を始め、専ら福岡日日新聞短歌壇（當時選者若山牧水氏）に投稿、暫く牧水氏主宰の「創作」に加入せしことあり。二十歳より數年作歌を中絶、昭和七年秋より再び作歌を始めて今日に至る。現在結社に關係なし。

大西不歸

本名康弘。二十八歳。三重縣四日市に生る。昭和五年中學卒業後比律賓セブ市に渡航、八年歸國後繪畫の行商をなしつつ全國を放浪、その他職工、勞働者等の職業を経て、現在會社員。十四歳頃より作歌を始め、昭和九年勝山紫夕との合同歌集「椰子の濱邊」を出版す。短歌草原社同人。

大貫迪子

本姓鈴木。明治四十四年一月一日、神奈川縣高座郡海老名村柏ヶ谷二〇七に生れ、同縣鎌倉町西御門八一八に現住。昭和二年一月より香蘭に入社、村野次郎氏に師事す。目下香蘭同人。

大野定

二十八歳。岡山縣倉敷市田ノ上に生れ、同地に現住。岡山醫大學生。昭和九年八月より作歌、雜誌「短歌詩人」同人。十一年九月より雜誌多磨にも參加。主として服部忠志氏に指導を受く。

大野一雄

二十六歳。横濱市黄金町に生れ、同市鶴見區鶴見町九〇三に現住。染色業。十七歳頃より作歌、短歌雜誌、短歌月刊等に投稿、昭和八年八月國民文學に入社し、植松壽樹氏に師事して現在に至る。

大野皖司

本名鹿彌。明治十九年栃木縣河内郡城山村大字荒針一五一に生る。大谷石材の採掘販賣。天理教野洲城山支教會長。大正十五年十一月四十一歳にて病歿。殆ど獨學なりしも後年太田水穂氏に師事し「潮音」に屬したり。

大野保

明治三十一年九月四日千葉縣に生れ、東京市從橋區下落合四ノ二〇九六に現住。早稻田中學校教員。短歌に志したるは大正九年頃「國民文學」「アララギ」に關係した尾上柴舟氏に添削を受けた事なかりしが幾ばくならずして殆ど歌をよます今日に至る。

大野千代子

三十九歳。北海道石狩國上川郡美瑛村に生れ十勝國帶廣市縣社帶廣神社宅に現住。帶廣

神社司大野吳朗妻。昭和六年十月太田水穂氏の潮音社に入社、昭和九年四月小田潮登氏の新聖社にも入社し今日に至る。

大野 虎治 埼玉縣大里郡花園村に生る。昭和四年四月より齋藤茂吉氏選日々新聞歌壇に作歌を發表、九月肺結核發病、十月アララギに入會、十二月三浦半島長井町に轉地療養、五年十一月歸郷、六年十一月二十五日夜逝去。享年二十四。九年四月友人等相計り「大野虎治歌集」出版。

大野 信貞 明治四十二年八月三十一日、埼玉縣入間郡入間町二一七八に生れ、同地に現住。農業。歌を鳥元義輝氏に學び一時金子薰園氏主宰「光」に入會せしことあり。現在は朱船の同人。第一回（昭和八年度）「改造社短歌賞」を受く。

大野 白雨 本名喜悅。明治三十七年六月十日生。本籍、栃木縣那須郡七合村字大桶。同郡烏山町金井町に現住。事務員。十七歳の頃より短歌に志し十九歳の時ぬかりに入社、高鹽背山氏の指導を受く。退社するや「つき草」に入社、其の後若山牧水氏吉井勇氏の指導を受けし事あり。下野短歌、立春、うねりの同人を経て最近ぬかりに復社。歌集「麥の芽」あり。

大野 富美江 三十歳。東京市日本橋區兩國五〇ノ五に生れ同地に現住。十年間「草の實」にあり。現在

遠つびと同人。

大野 文雄 三十七歳。長野縣飯郡中津村大字原に生れ同地に現住。官吏兼農業。折に觸れ作歌を試むる程度。

大野 誠夫 大正三年三月二十五日茨城縣稻敷郡生板村藤藏岸に生れ、同地に現住。中學卒業後洋畫を研究、現在歸郷。短歌は初め長南村子夫氏に指導を受け、「ささか」に「香蘭」を経て、杉浦翠子氏に師事す。昭和九年「短歌至上主義」會員となり現在に至る。

大野 みどり 本名柳子。明治四十四年八月九日東京に生れ同市牛込區馬場下町二九、三田方に現住。昭和五年五月村鵬花社に入社、同一年七月同誌を退き、同十二月遠つびと社入社、現在同誌同人。

大野 默然人 本名景川弘道。二十五歳。鳥取縣氣高郡神戶村岩坪に生れ、北海道常呂郡野付牛町七區に現住。鐵道従業員。昭和六年春より始め今日に至る。多く先輩の著書に學び師に就きし事なし。

大野 郁子 雅號しぐれ。明治四十二年五月十一日、栃木縣那須郡上江川村字下河戸に生れ、同郡烏山町に現住。學生時代高鹽背山氏の指導を受く。

其の後、夫大野白雨に指導を受く。

大野 義雄 三十一歳。岐阜縣稻葉郡常磐村上土居に生れ愛知縣知多郡富貴村東大高に現住。漆器商。昭和八年より短歌研究に投稿し、昭和十年六月多磨短歌會に入會して今日に至る。

大埜 間 馨江 四十歳。岐阜縣飛騨高布區山元町四六に現住。醫師。大正十二年一月金子薰園門に入り、今日に至る。歌集「一つの世界」あり。

大場 多美江 二十九歳。山形縣北村神戸市灘區大和町三ノ一九に現住。十八歳の秋作歌し始め、「明光」に出詠せしことあり。

大場 寅郎 明治三十五年一月、新潟縣村上に生れ、大阪府住吉區田邊東の町四ノ三三に現住。住友銀行員。大正十三年六月以來松村英一氏に師事し「國民文學」に歌を發表す。

大場 益治 二十七歳。宮城縣加美郡中新田町南町四〇に生れ、茨城縣猿島郡生子菅村生子に現住。教員。昭和十一年より作歌、「山柿」に入會、今日に至る。

大庭 のぶ 本名延夫。明治四十二年三月二十五日、名古屋市中區伊勢山町に生れ、東京市世田谷區世

田谷二ノ二〇三二に現住。文部省直轄勤務。初め「アララギ」に據り、後芙蓉同人たり。

大庭 泰久 二十九歳。福岡縣鞍手郡劍村大字小牧に生れ

同地に現住。教員。昭和三年早稻田大學入學。早歲短歌會に屬し作歌を始む。昭和四年松村英一氏に師事「國民文學」に入社、今日に及ぶ。

大橋 倭文字 本名靜子。明治三十一年十二月二日、東京市本郷區弓町一丁目に生れ、同市淺草區雷門一ノ七に現住。病院長大橋矢妻。昭和九年二月

柳原白蓮氏のことたま社同人となり、昭和十年九月香蘭入社現在に至る。

大橋 邦喜 二十七歳。長野縣更級郡村上村に生れ、松本市城西町四三に現住。小學校訓導。十歳より作歌を初め、昭和八年五月アララギ入會。

大橋 光一 明治四十四年東京市日本橋區濱町に生れ、同區兩國一ノ一に現住。日本生命保險東京支店勤務。昭和七年より短歌に興味を持ち、昭和十年六月より由利貞三氏に師事す。現在、短歌公論社同人。

大橋 松平 明治二十六年九月五日大分縣日田町に生る。父は岩崎仁市。後長崎市に移りて幼少大橋家に養はる。家貧にして正規の學業を修むること能はず、家業の傍ら不規則なる獨學にて漸く文字を知り得るのみ。大正六年若山牧水の門に入り爾來恩師亡き後も創作社々友たり。職業を轉すること五度、居を移すこと數を知らず、長崎縣廳に勤務したること最も長く、昭和六年上京改造社に入社、「短歌講座」の編輯、雜誌「短歌研究」の編輯に従ひ現在に至る。東京市淀橋區上落合二ノ七八六に現住。歌集「門川」の著あり。

大橋 日名子 明治三十四年四月、豐後日田に生れ、東京市淀橋區上落合二ノ七八六に現住。大橋松平の妻にして若山牧水氏に師事す。

大橋 眞佐子 本名まさ子。明治三十六年八月六日、東京市淺草區芝崎町一ノ一に生れ、同市牛込區市谷河田町八に現住。昭和九年より柳原燺子氏に師事す。

大橋 正朗 二十七歳。愛知縣東春日井郡旭村大字新居四一七九に生れ、瀬戶市外新居愛宕公園山西梧葉莊内に現住。郵便局員。十六歳春より作歌を初め、名古屋の「森蔭」を経て昭和七年山脇一人氏の「杜鵑花」に入社今日に至る。

大橋 茂代 明治二十六年茨城縣結城郡結城町に生れ、兵庫縣武庫郡住吉村字垣内に現住。大正七年「心の花」に入社、現在「一路」同人。

大橋 良尚 大正四年八月、彦根市芹橋町十二丁目に生れ

同地に現住。郵便局員。昭和七年加藤今四郎氏（東邦）に師事して作歌を始む。昭和九年國民文學に入社、松村英一氏の選を受けて今日に及ぶ。

大橋 綠葉 本名虎吉。通稱雄七。明治二十三年四月八日

京都府乙訓郡久世村字中久世に生る。明治四十一年短歌研究會に入會し、金子薫園氏に師事す。大正十一年十月歿す。行年三十三。綠葉歌集あり。

大畑 千代子 三十歳。靜岡縣志太郡岡部町三輪に生れ、同縣清水市駒越小學校に現住。小學校教員。二十二三歳の頃より作歌し、昭和十年一月アララギに入會。

大園 哲子 二十一歳。茨城縣眞壁郡黒子村西保末に生れ同地に現住。昭和九年實踐女子專門國文科入學以來高崎正秀氏に師事す。

大原 彰 本名彰三。三十一歳。長野縣下伊那郡神稻村四四二二に生れ、仙臺市控木通り八に現住。商工省工藝指導所工藝技術官。幼時長谷川喬村氏に師事。東京美術學校時代同校短歌部に學び其の後「花房社」會員として高橋英子氏に師事し現在に至る。

大原 英三

三十五歳。明石市に生れ、同市大藏谷字山崎二〇九八に現住。銀行員。大正十三年より創作社社員。

大原 靖枝 三十四歳。明石市に生れ、同市大藏谷字山崎二〇九八に現住。大正十二年より創作社社員。

大原 弦月 本名榮作。明治二十七年三月五日、群馬縣勢多郡大胡町大字茂木一六に生れ、同地に現住。大正六年「心の花」に投稿す。大正十五年橋田東聲氏の指導を受け昭和二年五月「霸王樹」會員となり、昭和四年退會。昭和九年「草炎社」に加盟す。

大原しのぶ 本名石山チエ。岩手縣東磐井郡大原町字立町に生れ、東京市豊島區池袋五ノ一八五に現住。鐵工業。昭和十年二月ぬほりに入社、今日に及ぶ。

大原 潮花

本名廣司。明治三十四年七月四日、長野縣下伊那郡龍江村三七七二に生れ、同地に現住。

二十五歳の頃より大井廣氏に就きて學び後名古屋の「短歌」にも關係す。又昭和五年頃同志と雜誌「磷影」を發行し現在に至る。本名猛雄。明治三十六年四月五日、豊橋市植

大林 愛正

田町に生れ、同地に現住。小學校教員。短歌は並木秋人氏につきて學ぶ。「アララギ」を経て「水麴」に入りしが都合上やむ。

大東 由造 三十二歳。京都市に生れ、同市左京區下鴨中河原町九に現住。銀行員。大正十三年「アララギ」入會、昭和八年六月退會。同年十月「自然」に入社、今日に至る。

大平 松夫

本名吉田松太郎。三十歳。福島縣田村郡高瀬村大平四一に生れ、茨城縣西茨城郡笠間町九六六に現住。大日本電力株式會社員。昭和六年十月岡山巖氏の「歌之觀照社」に入社現在に至る。

大平登美子 三十一歳。鳥取縣八頭郡隼村大字福井一二三に生れ、大阪府旭區森小路町六ノ九に現住。藥劑師。十四五歳頃より短歌に趣味をよせ、大阪の帝國女子藥專在學當時同校短歌會に今中楓溪氏を迎へ指導を仰ぐ。昭和七年結婚以後數年歌なく、十一年より又作歌を始め今中氏に指導を受けつつ今日に至る。

大平 櫻山 本名善梧。三十四歳。福島縣若松市に生れ、東京市杉並區荻窪三ノ一九六に現住。東京商大助教授。中年にして歌を始め、鈴木北溪氏に師事す。現在「短歌街」同人。

大亦貴美子

二十六歳。和歌山縣海草郡直川村に生れ、大阪府東區博勢町一ノ八西脇方に現住。昭和十一年六月「御形」社友となり作歌を始む。

大丸なみ

福岡縣鞍手郡吉川村脇田金尾家に生れ、昭和十二年二月六日産後の肥立悪しく福岡縣八幡市石坪町七五四に歿。享年二十八。昭和三年篠原白風氏に手ほどきを受け、昭和五年一月吾妹に入社、生田蝶介氏に師事す。

大眉 一末 明治二十三年十一月三日、熊本市中莊町に生れ、同市横手町迫谷に現住。九州中央新聞社主筆。明治四十二年頃、若山牧水氏の「創作」に就き初めて歌道に入る。其後「水麴」「珊瑚礁」「霸王樹」「ポトナム」等に關係大正中期「銀燈詩社」を主宰、地方雜誌を發行。現在は歌作に遠ざかり、關係結社なし。

大見 清 本名杉浦正二。明治四十三年二月廿五日生。本籍及現住所、靜岡縣濱名郡入出村。小學校教員。昭和十年三月「ぬほり」に入社、菊池知勇氏の指導を受けつつ現在にいたる。

大宮 穂芳 本名一。三十八歳。木曾田立村元組に生れ、同所に現住。農業。同人雜誌「山峽」「ひとみ」「細路」等を發行の後「國民文學」「地上」後「アララギ」等に關係せしも大正十年

入管後歌を作らず。

大村 吳樓

四十四歳。大阪府豊能郡池田町に生れ、同郡

池田町石橋莊園に現住。大阪毎日新聞社員。大正十一年九月、アララギ會員となり引續き現在に及ぶ。中村憲吉氏歿年まで其選、後土屋文明氏の選を受く。霸王樹その他二三歌誌に關係せし事あり。

大村 つる子

京都府乙訓郡海印寺村に生る。昭和二三年頃より大村美美子の筆名にて短歌雜誌に投稿。學校卒業後教壇に立つ事數月、胸を病み十年の病床生活に遂に起ち得ず、昭和九年三月二十四日逝去。享年二十九。昭和四年春頃より最後まで國民文學にその籍を置く。嵯峨淑子の筆名をも用ぶ。

大村 信子

大阪の人。宮内省賢所に仕出。後嫁して幾許もなく病み、昭和八年八月十九日逝く。

大村 松之助

四十七歳。栃木縣喜連川町に生れ、東京市四谷區傳馬町新一丁目二三に現住。寫眞製版師。同郷の高鹽背山氏を介して若山牧水氏に親炙し、その長逝迄創作社友。其後創作社の先輩和田山蘭、高鹽背山、菊池知勇の三氏のぬはり社創立に参加して社友となりしも現在は無籍に等し。

大村 文子

明治三十一年二月十四日、東京府南千住町に

生れ、東京市四谷區傳馬町新一丁目二三に現住。大正六年秋創作社に入社、若山牧水氏の指導をうく。昭和二年六月現在の「ぬはり」創刊と同時に参加して今日に及ぶ。

大村 由太郎

明治三十三年四月、北海道上磯郡清川村に生

る。小學時代より歌を習ひ、大正五年頃「櫻草」に、同七八年頃「海峽」「銀の壺」等を遊歴し同年末より生田蝶介氏の指導を受け、大正十三年五月「吾妹」創刊と同時に入社し現在に至る。大正十二年歌集「土に生くる魂」を出版す。

大森 さなみ

本名小波。二十九歳。廣島縣御調郡原田村字

梶山田に生れ、同縣尾道市久保町に現住。小學校教員。昭和八年より作歌に志し、山本康夫氏の「眞樹」社友として今日に至る。

大森 繁子

二十七歳。岡山縣赤磐郡高陽村長尾に生れ、

岡山市下之町に現住。樂器店員。昭和七年九月「短歌詩人」社に入社、翌年「蒼穹」入社引續き今日に至る。

大森 すみ子

明治二十四年七月、東京市深川區木場大和町

に生れ、東京府北多摩郡多磨村多磨墓地内東郷元帥御墓所扱に現住。昭和五年五月竹會

に入會、印東昌綱氏に師事す。

大森 武

大正三年五月二十七日千葉縣君津郡大貫町上

六一七に生れ、同地に現住。農業。昭和七年頃より作歌し千葉縣青年處女に投稿、以後心の花、日本短歌等にも投稿す。

大森 波奈子

明治四十四年東京市京橋區南八丁堀に生れ、

中野區上ノ原町三に現住。二十歳の頃より水麩に及びしも、結婚と共に二年間にてやめ今日に入らぶ。

大森 弘

三十一歳。兵庫縣水上郡沼貫村字谷に生れ、

大阪府下阪和沿線聖ヶ丘住宅に現住。小學校教員。昭和二年夜光珠短歌會の創立と共に入會。昭和十年まで同人たり。現在無所屬。

大森 朴堂

本名萬次郎。五十七歳。長野縣上伊那郡高遠町

に生れ、東京市世田谷區上北澤一ノ一一に現住。幼時母より古歌の讀誦を教へられ、其後好みて古來の和歌を讀み、折に觸れ感興の湧くままによみ出づるのみ。

大屋 一三

明治四十一年一月三日新潟市に生れ、昭和六年九月九日死亡。昭和三年新潟醫大入學と同時に「ポトナム」に入社。

大屋 一郎

三十歳。埼玉縣大里郡藤澤村折ノ口一三一に

生れ、同縣比企郡三保谷村表七六に現住。小學校訓導。昭和八年十月ささがに社入社、昭和十年六月、多磨會員となり現在に至る。

大屋 重榮

三十四歳。川崎市溝之口六六七に生れ、同市溝之口五六に現住。下駄製造兼小賣。大正十二年春「敵艦」入社、現在に至る。

二年春「敵艦」入社、現在に至る。

大屋 正吉

三十一歳。神奈川県津町溝ノ口に生れ、東京市目黒區三谷町四に現住。商店員。大正十三年敵艦入社。「日光」にも關係し、現在敵艦社同人。

大矢 都根夫

二十七歳。神奈川県筑郡岡村白根に生れ、横須賀市逸見町一三三に現住。小學校教員。十六歳頃より作歌に興味を持ち、昭和七年、山上、泉氏主宰「かぐのみ」に入社、現在に至る。

大矢 美佐緒

四十歳。千葉縣香取郡多古町喜多四七七に生れ、同地に現住。公吏。大正三年頃より作歌を始めたるも途中休作、大正六年若山牧水門下となり、創作社友として今日に及ぶ。

大矢 道之介

本名迪象。明治三十七年五月十八日、山梨縣中巨摩郡大井村に生れ、京都市九太町通烏丸西入に現住。醫師。第八高等學校在學時代に同校教授石井直三郎氏の指導を受く。大正十

四年「水廻」入社今日に及ぶ。

大矢 流木

本名敏太郎。三十一歳。名古屋市熱田に生れ、愛知縣知多郡富貴村宇市場に現住。十六歳の頃作歌に志す。爾來結社を移ること再三、昭和四年大熊長次郎氏を知り歿年に至る迄師事す。目下何れにも所屬せず。

大八木 龜太良

五十二歳。滋賀縣野洲郡中里村に生れ、京都市下京區下松屋町通中堂寺下ル藪ノ内町に現住。清酒商。十數年前妻の死より作歌、一兩年獨學せしが、後山下陸奥氏に學び今日に至る。一路會員。

大藪 翠光

本名貞一。三十三歳。愛知縣丹羽郡古知野大字和田に生れ、同郡扶桑村大字齋藤に現住。小學校訓導。昭和六年來赤木邦輔氏の「つきくさ」に屬し、昭和六年十月同誌廢刊の爲、名古屋短歌會に入社、現在「短歌」同人。

大山 かをる

本名馨。大正九年三月二十日、茨城縣東茨城郡竹原村大字竹原三七に生れ、同地に現住。新口語歌と稱する口語短歌の定刊律を研究するも日猶淺くして現在に至る。

大和田 建樹

安政四年四月伊豫守宇和島に生る。幼くして歌を穴戸千建、徳積重樹に學ぶ。明治十二年上京、東京大學古典科講師、男女兩高師教授等

に歷任、その間著述、作歌に努む。「汽笛一聲」の鐵道唱歌はその作なり。詩、歌、文章何れも平明、溫雅、萬人に愛誦せらる。特に歌は當時の所謂舊派歌人の中において多少の新味ある詠風を示す。應用歌學、新體詩學、講曲通解等國文に關する著多し。大和田建樹歌集あり。

大和田 篤子

福島縣須賀川町に生れ、同縣安積郡豐田村川田に居住。大正四年神田高女卒業後竹柏會に入會し石樺千亦氏に師事す。大正十一年大和田玄與に嫁し大正十四年夏頃より病床に臥し昭和五年九月三十日逝去。享年三十三。遺著歌集「藪こうじ」あり。

大井 廣

明治二十六年一月二十八日、長野縣小縣郡長久保新町に生れ、神戸市須磨區行幸町三ノ三〇に現住。縣立第一神戸高等女學校高等科教授。潮音創刊以前より太田水穂氏に師事して今日に至る。

大井 重二郎

三十歳。奈良縣に生れ、東裏一五に現住。京都市立第二商業學校教諭。昭和六年曼陀羅社創始と共に之に加盟今日に至る。著書は萬葉集大和歌枕考、萬葉集山城歌枕考、佛足石歌と佛足石の研究等あり。

大井 秀子

四十六歳。兵庫縣宍粟郡神戸村に生れ、同郡

山崎町に現住。金子薫園氏の教を受くること数年、其後昭和七年より吉植庄亮氏の「敬禮」に入りて今日に至る。

大井田 齊 號す。萬延元年三月十七日、下野國宇都宮に生れ、大正十三年四月二十五日、六十五歳にて歿す。明治四十年六月短歌研究會に入會し金子薫園氏に師事す。神職にあること十八年。歌集、竹籜集あり。

大岡啓二郎 三十四歳。和歌山市に生れ、同市下町五二に現住。印刷業。昭和六年アララギ入會、翌年退會。現在名古屋短歌會同人。尙友人と圖り地方歌誌「きびと」發行。

大岡 博 三十二歳。靜岡市外羽鳥に生れ、靜岡縣三島町に現住。教員。昭和二年より昭和六年まで「八百潮」主宰。昭和六年豊島逃水氏に師事「山河」に據る。次いで「美穂」同人となり、「美穂」休刊後は「菩提樹」を主宰して今日に及ぶ。昭和八年より十年五月まで「いぶき」同人たりしことあり。

太田 郁朗 明治二十九年岡山縣邑久郡に生れ、大正十三年五月逝去。瀬戸内海の一小島犬島に教員たりし頃（大正七年頃）より短歌に親しむ。後新聞記者に轉じ職を中國民報社に奉ず。大正十年四月短歌雜誌「いぶき」を創刊す。師をも

たす。歌集毒煙、崩るる音の二冊を遺せり。

太田 うめ 三十九歳。長野縣上伊那郡中澤村に生れ、同郡宮田村田中に現住。農業。大正十五年頃より作歌。

太田 興夫 二十八歳。山形縣東田川郡東榮村大字添川に生れ、大阪市旭區森小路町一一二に現住。會社員。國學院大學在學當時より作歌。退學後郷里山形縣教員となり結城哀草果氏の歌會に參ぜし事あり。昭和九年上阪「短歌往來」の編輯を受けつぎ「あらくさ」に合同なるや同誌の編輯同人となり今日に及ぶ。

太田 幸一 三十六歳。愛知縣三河國牛久保町中條に生れ、同地に現住。教員。國學院大學在學中釋道空氏の指導を受く。「牧歌」「くぐひ」の同人たりしことあり。初め「日光」に投じ、後「アララギ」會員となり、半歳にして止む。

太田嘉都子 三十一歳。神奈川縣三浦郡浦賀町紺屋町一二に生れ、東京市芝區濱松町四丁目二六〇一に現住。嘗て「心の花」に投稿せしも、家事都合上續かず今日に至る。

太田 五郎 三十四歳。長野縣東筑摩郡廣丘村に生れ、東京市足立區千住末廣町一一に現住。醫師。昭和三年潮音社入社、今日に至る。

太田 青丘 本名兵三郎。三十歳。長野縣東筑摩郡廣丘村に生れ、東京市澗野川區田端町二八三に現住。官吏。昭和三年「潮音」社入社、現在に及ぶ。

太田 進一 二十五歳。靜岡縣濱名郡白脇村白羽一三三に生れ、同地に現住。職業なし。昭和六年アララギ入會。

太田 節子 二十二歳。松本市開智町に生れ、長野縣南安曇郡梓村下立田に現住。雜誌「むらさき」今井邦子氏選の歌壇に投稿す。

太田 節子 舊姓櫻田。明治四十年青森縣に生れ、東京市板橋區板橋町六ノ八七七に現住。

太田 素俊 明治三十八年十二月二十日、山形縣最上郡古口村藏岡九一に生れ、新潟縣佐渡郡澤根町五十里籠町に現住。僧侶。歌は二十歳頃より始め、金子不泣氏に就いて學び、昭和九年八月より藤川忠治氏に師事して「歌と評論」の社友となる。

太田 たけ穂 本名武雄。二十八歳。北海道紋別郡遠輕町白龍に生れ、仙臺陸軍教導學校機關銃隊に現住。小學校卒業後農業に従事、傍ら大澤雅休氏の「野菊」にしたしむ。昭和七年入營後渡滿、

及ぶ。

恩田 藤吉 明治十六年岐阜縣に生れ、埼玉縣越ヶ谷町に現住。理髮業。昭和六年竹柏會に入會して今日に至る。

織本 良子 二十一歳。東京市に生れ、同市中野區新井町五四九に現住。東京女子大學學生。森本治吉氏に四年間師事す。

かの部

加賀見はじめ 四十歳。山梨縣南都留郡明見村に生れ、同縣

峡北農學校女子部に現住。教諭。昭和八年一月「常春」に入り、十年二月「山柿」に入り齋藤慎吾氏の指導を受く。

加賀山 榮 二十七歳。愛媛縣北宇和郡吉田町に生れ、大

阪市東成區深江町西六ノ八字都宮和夫方に現住。高女卒業後少しづつ作歌しはじめ、並木秋人氏の「短歌祭」に入社せしことあり。

加古 未囚 本名義一。不耽庵と號す。四十三歳。愛知縣

知多郡横須賀町加木屋に生れ、兵庫縣宍粟郡山崎町に現住。齒科醫。昭和七年頃安田青風氏の指導を受け、一時「水漣」に入りしことあり。現在山崎歌話會々員。

加瀬 幸次 秋濤と號す。明治三十年二月七日、兵庫縣龍野町に生れ、同地に現住。建材商。大正九年潮音入社現在同人。昭和六年春歌集「荒海」の著あり。

加治 杉子 二十九歳。東京市小石川區諏訪町に生れ、横濱市保土ヶ谷區神戸上町六五四に現住。鐵道省官吏妻。昭和八年歌と評論社入社、同一年退社。

加地 富子 三十五歳。愛媛縣宇摩郡三島町に生れ、京都市中京區西ノ京馬代町六に現住。昭和十年四月「水漣」に入社現在に至る。

加藤 意沙彌 本名勇。明治三十五年十月、宮城縣氣仙沼町字釜ノ前に生れ、同地に現住。製箱業。昭和三年白日社々友となり「詩歌」誌の自由律に轉ずるに及び退社。隣村の熊谷武雄氏に師事。郷土歌人を糾合して野火社を起し歌誌「野火」を編輯發行す。昭和十年一月青垣會に入會

橋本德壽氏に師事して今日に至る。

加藤 和夫 二十八歳。鹿兒島縣川邊郡萬世町小湊二九一

六に生れ、栃木縣河内郡篠井村中篠井日東鑛山鑛業所に現住。鑛山技術員。昭和八年より、心の花青木政雄氏の指導を受く。現在下野短歌同人。一路會員。山下陸奥氏の指導を受く。

加藤 清介 本姓林。明治三十二年十二月、宮城縣氣仙沼町字釜ノ前に生れ、同縣本吉郡鹿折村字濱一八六に現住。肥料製造業。昭和三年郷土歌人と「あら草社」を結び歌誌「あら草」(後「野火」と改稱)の編輯に携る。此間熊谷武雄氏の指導を受く。昭和十一年七月青垣會に入りて今日に至る。

加藤 勘助 大分縣佐伯町に生れ、青年の頃武者小路實篤氏經營の日向新しき村に入る。三十歳頃盲目となり後新しき村に逝去。詩集あり。

加藤 清松 明治十八年二月一日、愛知縣海都郡南陽村大字西福田に生れ、名古屋市南區下之一色町字松蔭に現住。教員。昭和三年五月中央歌道會清洲支部研究部に加入り後藤秀實氏の指導を受けて今日に至る。

加藤 熊六 明治三十九年秋田縣平鹿郡沼館町今宿に生れ、同地に現住。小學校教員。四五年前より作歌を初め沼館町佐々木順氏の樹陰社に入る。

加藤 玄裳 本名清治。明治二十年八月三十一日、三重縣宇治山田市大字岩淵町神子ヶ坂に生れ、大正四年五月二十九日、同地に死す。鐵道職員。明治三十八年頃より短歌に親しみ、文章世

界「中學世界」などに投書。若山收水氏創作社を創立するや逸はやく之に入る。

加藤宏太郎

本名龍太郎。三十歳。三重縣津市築地町二三

に生れ、同市萬町一六三八に現住。自動車運轉手。かつて渚鳥、柢實、等の號を使用。霸王樹を経て現在水邊にあり。昭和九年友人等と津東聲會を結び後歌誌「志文浪」を編輯す。

加藤 阜蓮

本名正吉。二十三歳。秋田縣南秋田郡土崎港

町清水町に生れ、同縣平鹿郡横手町驛前に現住。日本カトリック教會附傳道師。昭和五年新潟市カトリック教會附傳道師。昭和五年國文教師神田喜代太郎氏に教授を受け、後秋田にて佐々木順氏の指導を受く。

加藤 三郎

二十九歳。群馬縣新田

れ、東京市杉並區堀之内一ノ六二豐岡方に現住。昭和八年四月アララギ短歌會々員となる。同年五月、肺結核症となり目下静養中。

加藤 參郎

三十三歳。福岡縣大牟

市東天籟寺二九六八に現住。小學校訓導。昭和六年三月アララギ入會、現在土屋文明氏に師事す。

加藤 七三

四十七歳。東京青山に

生れ、熊本市大江町九品寺六三二に現住。府立一中三年生の時歌を

作り始む。一高人學、一高短歌會に入る。九大醫學部入學、土地の歌誌「ナト」同人となる。大正十年京大化學科卒業。同年歌集「霧の花」出版。十三年熊本醫大教授。昭和二年渡歐と同時にアララギ會員となる。

加藤 章三

三十六歳。愛知縣丹羽

れ、東京市豊島區西巢鴨四ノ一八七に現住。生糸商。大正十三年創作に入り、後アララギに轉じ齋藤茂吉氏に師事す。昭和七年以降歌作中斷、最近再びアララギに復歸す。

加藤 杉枝

三十三歳。三重縣員辨郡

れ、同郡大泉原村大泉新田に現住。小學校教員。昭和七年桑名市金雀枝短歌社同人となる。

加藤 助三郎

明治四十四年滋賀縣甲

六八に生れ、奉天千代田通り一二に現住。會社員。昭和四年頃より作歌し地方新聞歌壇に投稿、同五年青海原入社、同七年自然に合同、十年同人となり現在に至る。

加藤 清一

四十六歳。愛知縣碧海

川町南三に生れ、同郡知立町大字牛田字地内に現住。小學校教員。明治四十四年（十九歳）より歌を詠み始め現在に至る。師なし。

加藤 泰三

二十八歳。東京市に生

れ、同市牛込區神樂町三ノ六盛天堂天童方に現住。彫刻。東京府立第四中學校囑託教員。花房誌友。

加藤 卓爾

明治二十二年三月十五

日、岩手縣下閉伊郡宮古町に生る。十九歳渡道流離の末、北海道根室町朝日町に現住。共同倉庫株式會社員。前期「詩歌」、後期「詩歌」にて前田夕暮氏の指導を受く。一時「まるめら」に在りしも昭和十年より「青垣」會員となる。

加藤 龍雄

明治三十七年八月二十

日、福井縣今立郡下池田村尾綏に生れ、同縣大野町三番通に現住。自動車會社員。昭和七年秋より作歌を始め、同時に福井市にて石原眞一氏等の「格」に入りて今日に至る。其間兩三年「アララギ」に加はりしことあり。

加藤 妙子

二十四歳。山梨縣北都

留郡七保村淺川一六一〇に生れ、同地に現住。小學校教員。女學校時代より作歌、昭和十年七月「山栢會」に入會、今日に至る。

加藤 鐵

四十三歳。宮崎縣東白

樺郡西郷村田代に生れ、大連市下藤町一五に現住。昭和製鋼所社員。大正十一年アララギに入會して今日に至る。

加藤 千代

三十一歳。岐阜縣可兒郡今渡町に生れ、青森市外松原陸軍官舎に現住。大正十四年愛知第一高女高等科入學、高崎正秀氏の指導を受く。青角塚短歌會員たりし事あり。

加藤 知多雄

大正二年一月二十五日、東京市淺草區千束町一ノ四一に生れ、同地に現住。私塾經營。十九歳の秋潮音に入社翌年退社す。後同志と「青蘆發行」以後同誌を編輯して現在に至る。

加藤 司

明治四十年一月二日、愛媛縣別子銅山麓立川村に生れ、神戸市灘區泉通二ノ三二に現住。神戸製鋼所職工。俳句を作り「摩耶」同人、昭和十年短歌誌「あしかひ」を知るに及び森園天派氏等の指導を受く。

加藤 恒二

二十七歳。愛知縣碧海郡知立町谷田に生れ、同地に現住。農業。昭和三年作歌を始め、昭和五年五月水甕入社、今日に至る。

加藤 柚實

本名茂。五十七歳。姫路市下寺町三六番屋敷に生れ、神戸市灘區高尾通一ノ一一に現住。元小學校校長。あけび」同人、二十年來花田比露思氏の指導を受く。昭和九年歌集「柚の實」刊行。

加藤 哲雄

明治三十七年一月二十日、神奈川縣津久井郡

川尻村に生れ、同地に現住。農業。大正十二年若山牧水氏の門に入り、以來創作社友として今日に至る。歌集「暗黒時代」「農夫哀歌」あり。

加藤 てるよ

舊名武川てる代。山梨縣東山梨郡玉宮村に生れ、東京市品川區上大崎長者九二八三に現住。教員。山梨縣女子師範本科卒業。遠つづと「會員。

加藤 てる緒

本名輝男。明治四十三年十一月、東京市芝區下高輪に生れ、同市品川區上大崎長者九二八三に現住。教員。

加藤 敏子

明治四十年五月十一日、東京市赤坂區青山南町三丁目に生れ、神戸市兵庫區會下山町一ノ六五に現住。第五高女在學中より歌に親しむも發表したることなかりしが昭和八年潮音社に入り今日に至る。

加藤 延年

慶應二年五月十七日、福岡縣山門郡城内村新外町に生れ、京都市左京區松ヶ崎小竹藪町四五ノ一三に現住。元京都同志社教員。曾て池袋清風氏の教を受けしことあり。

加藤 信夫

明治四十二年六月十日、栃木縣鹽谷郡北高根澤村大字平田に生れ、宇都宮市清住町九二に現住。警察官。昭和十年一月「國民文學」

社友となり松村英一氏の指導を受け今日に至る。

加藤 博陽

本名増夫。四十四歳。讚岐高松市に生れ、同市藤原町一六〇に現住。香川縣立圖書館司書。大正四年より作歌、前田夕暮氏の白日报社に加入、鳴海と號して「詩歌」に發表、大正七年十月「詩歌」廢刊と共に尾上柴舟氏主宰の水甕社に入社して今日に及ぶ。昭和十年より増夫改博陽と名のりて發表。

加藤 ひさ子

四十二歳。福井縣南條郡山村松森に生れ、大阪市住吉區阿倍野筋二ノ五八に現住。昭和六年春頃より作歌をはじめ、同時に創作社に入社現在に至る。

加藤 比呂史

本名比呂志。五十四歳。長野縣上伊那郡南箕輪村に生れ、同郡西春近村に現住。農。昭和九年より作歌すれど師なし。

加藤 ふみ子

三十八歳。東京に生れ、同市本郷區上富士前町一〇〇に現住。女子學習院在學中より尾上柴舟氏の指導を受け、數年前より水甕社同人となり現在に至る。

加藤 富美子

十九歳。福井縣福井市浪花下町二六に生れ、名古屋市南區御劍町二ノ一に現住。日本銀行名古屋支店勤務。松田常憲氏に師事し水甕社

友。

加藤 文友

六十五歳。山形縣飽海郡北俣村に生れ、仙臺市荒町五八に現住。宮城縣女子専門學校講師。大正八年霸王樹社に入り現在同人。昭和十一年歌集「靜日」出版。

加藤 文輝

明治四十一年三月五日、靜岡縣清水市清水仲町六四六に生れ、東京市大森區上池上町林昌寺に現住。日蓮宗僧侶、立正大學講師。佐佐木信綱氏に師事し、「心の花」會員。

加藤 武三

二十八歳。北米英領加加茂郡猿投村大字舞木に現住。果樹園業。同志と歌誌「栗の花」「柴笛」等を刊行せし事あり。歌誌「町」「加茂の素」の會員たり。杉浦亮一氏の指導を受く。

加藤 政吉

二十七歳。名古屋市區堀詰町三ノ六に生れ、同區北鷹匠町三ノ一〇に現住。小學校教員。愛知一師在學中より作歌、一時水廻入社。後東邦に入社、現在に至る。

加藤 政吉

三十歳。東京市板橋區東大泉町六四四に生れ、同地に現住。東京市會事務局吏員。昭和六年一月より雜誌「蒼穹」に入り今日に至る。

加藤 將之

明治三十四年七月三日、愛知縣愛知郡下之

一色村に生れ、東京市杉並區上高井戸町三ノ六六五に現住。昭和二年東京帝大哲學科卒業。文部省圖書監修官。大正十一年「水廻」入社石井直三郎氏に師事、現在同人。其の間に「青樹」「自然」の同人たりし事あり。

加藤 正雄

明治三十九年二月二十日、千葉縣安房郡平群村平久里中に生れ、同地に現住。銀行員。古泉千樞氏の教へを受け、アララギ、日光等を經て、目下青垣會員たり。

加藤 松之助

三十三歳。山梨縣谷村町上谷三二ノ一に生れ、同地に現住。元中等教員。昭和四年十月「みづがき」に入社中村美穂氏に師事し、今日に至る。

加藤 美枝子

大正四年八月越後高田一月十九日、東京市世田ヶ谷若林六〇三に病歿す。行年二十。

加藤 美知子

三十七歳。愛知縣中島郡起町に生れ、岐阜縣稻葉郡市橋村西勝寺に現住。小學校教員。昭和五年頃より本格的に作歌、「短歌研究」に投稿す。

加藤 明治

二十八歳。長野縣上伊那郡南箕輪村鹽ノ井に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和五年アララギに入會、現在にいたる。

加藤 滿

明治四十年八月靜岡縣谷區岩間上町二二四〇に現住。大日本パイル織布株式會社取締役。青山學院高等學部に學ぶ。中學時代より歌論を散讀すれど結社に關係せしことなし。

加藤 やす緒

本名安雄。二十七歳。埼玉縣北埼玉郡三俣村に生れ、同所に現住。農。昭和四年の四月よりささかに社の根岸清一氏に師事し現在に至る。

加藤 東籬

本名定一。明治十一年青森縣北津輕郡松島村に生れ、同地に現住。農業。若山牧水氏の知遇を得て創作社友として現在に至る。歌集「加藤東籬集」「啄木鳥」の著あり。

加藤 義一

二十九歳。神奈川縣高座郡六會村圓行五四四に生れ、鎌倉町長谷新宿一一二に現住。國鐵從業員。十八歳より作歌、並木秋人氏の「常春」に一年間歌を發表し其の後歌は作れど發表せず。

加藤 佳子

四十歳。名古屋市區杉ノ町二ノ一一九に生れ、同地に現住。大正八年青木禮子氏に師事このはな會創立と同時に其の會員たり。

加藤 寶作

五十一歳。大分縣南海部郡直見村字竹之下に

生れ、大分縣南海部郡佐伯町西丁角に現住。商業。小學校の終り頃より歌を作り始め別に師につかず。

加藤 洵綾 三十八歳。神奈川県大磯町に生れ、同町神明町に現住。畫工、日本美術院院友。大正十一年七月アララギに入會、島木赤彦氏に師事、その歿後藤澤古實氏の選をうけ、更に齋藤茂吉氏に師事して現在に及ぶ。

加藤木十二朗 本名十二郎。前橋市田中町に生れ、靜岡縣見付町に現住。昭和五年二月青虹社に加盟し、大脇月甫氏の指導を受く。昭和六年六月東京にて肺を病み爾來作歌もやめて療養に力めたるも、昭和七年一月二十三日、二十三歳にて死去す。

加納 曉 本名巳三雄。明治二十六年三月十日、兵庫縣氷上郡柏原町南町に生れ、昭和五年二月六日歿。貿易商。大正四年三月初めて齋藤茂吉氏を訪ひ爾後アララギ會員として歌を發表す。次いで島木赤彦、中村憲吉氏等と知りその選をも受く。後年は専ら赤彦氏の指導に依り作品を發表し、昭和二年以後アララギ選者となる。

加納小郭家 本名和氣生。五十三歳。熊本縣八代郡宮之原町に生れ、臺南市白金町三丁目に現住。醫師。大

正四年五月アララギ會員となり現在に至る。
加美 精二 本名中澤一誠。明治四十三年十一月佐賀縣東松浦郡濱崎町に生れ、東京市品川區西大崎一ノ三九に現住。前錦華學院主事。昭和六年一月かくのみ入人社、山上と泉氏に師事す。

加茂 昭風 本名顯精。二十九歳。山梨縣南巨摩郡増穂村に生れ、同村長澤善國寺に現住。僧侶。山上と泉氏の「かくのみ」同人。

加茂 南枝 本名義雄。三十七歳。靜岡縣濱名郡雄踏町八五二〇に生れ、同地に現住。織物整理工場社員。小學校時代より歌を好み諸新聞雜誌に投稿、大日本歌道奨勵會々員。

加茂 のぶ 四十六歳。靜岡縣濱名郡白脇村三島三一に生れ、同郡雄踏町西ヶ崎に現住。裁縫業。「短歌研究」報知新聞婦人歌壇等に投稿す。

賀澤あや子 二十八歳。東京市京橋區木挽町一ノ六に生れ、滿洲國奉天縣瀋陽町四二に現住。醫師妻。高女時代より作歌、後千代田女子専門國文科にて島野幸次氏に指導を受く。卒業後「こぎやう」を経て現在は歌誌「山栝」の同人。

嘉納 とわ 五十二歳。東京に生れ、神戸市須磨區須磨浦通六ノ九九に現住。官吏。白日社同人として前

田夕暮氏に師事す。昭和九年歌集「草にゐる」を出版。

鹿兒島壽藏 明治三十一年十二月十日、福岡市に生れ、東京市蒲川區田端町四六に現住。彫塑(人形)。大正十年「アララギ」に入り今日に及ぶ。

鹿兒島やすほ 本名ヤスオ。三十九歳。福岡縣早良郡入部村に生れ、東京市瀧野川區田端町四六に現住。大正十年アララギ入會、現在岡寛氏に師事す。

鹿島 良信 四十三歳。廣島縣豊田郡に生れ、東京市大森區新井宿二ノ一五〇〇に現住。會社員。特に師事したる事なきも、高等學校時代より諸新聞雜誌に投稿す。

可長 澄子 石川縣羽咋郡高濱町に生る。昭和十年四月橋本德壽氏に師事し青垣會に入會。昭和十二年二月十七日死亡。行年三十四。

可兒 敏明 三十六歳。岐阜縣可兒郡姫治村二七五に生れ、東京市葛飾區金町一ノ九六一に現住。教師。新聞雜誌の投書に出發、後生田蝶介氏、矢部道氣氏に師事。現在矢代東村氏、矢島歡一氏に師事。

可兒 作衛 四十九歳。千葉縣香取郡佐原町長島に生れ、同地に現住。昭和十年十月より始め今に至る。

獨學。

香川しげ子 本名奥村重。三十一歳。京都府久世郡宇治町に生れ、同地に現住。昭和八年七月潮音社入社、今日に至る。

香川頼彦 本名源祐。明治二十九年四月香川縣に生れ、大阪府東淀川區元今里南通三ノ二に現住。新聞社員。大正末金澤種美氏の「潮光」に入社、間もなく雑誌廢刊となりアララギに入り中村憲吉氏、のち土屋文明氏の選をうく。昭和七年「いぶき」入社同人として現在に至る。著書、隨筆と短歌集「白光」あり。

香取健助 本名島久太郎。二十五歳。和歌山市に生れ、同市下ノ町九に現住。十九歳より短歌を作る。

香取峻 三十九歳。茨城縣新治郡小櫻村大字弓弦に生れ、茨城縣猿島郡境町住吉町に現住。中學校國漢教諭。曾てアララギに加盟せしことあり。

香取秀眞 本名秀治郎。明治七年一月一日、千葉縣下總國印旛郡船穂村船尾に生れ、東京市瀧野川區田端町四三八に現住。現在帝國美術院會員。東京美術學校教授。帝室技藝員。帝室博物館學藝委員。古社寺保存會委員。明治二十五年東京美術學校に入學。この歳秋より翌明治二十六年秋まで大八洲學校の夜學に通ひ、明治

三十年七月東京美術學校鑄金本科卒業。明治三十二年春正岡子規の門に遊ぶ。大正元年以降金工藝術に關する著書十數種あり。昭和十一年歌集「天之眞彌」を上梓。

香取治吉 二十二歳。千葉縣香取郡久賀村西古内一五二に住。職業なし。昭和十一年五月梅檀に入り、同十二年五月退社。

香美雅子 本名松村薫。明治二十七年高知縣に生れ、大阪府市港區吾妻町二ノ三に現住。府立市岡高女教諭。昭和九年十二月よりアララギ會員。

香西照雄 二十二歳。香川縣木田郡前田村北龜田に生れ、姫路市姫路高等學校寮内に現住。學生。姫路高等學校入學以來荒木良雄教授の指導を受け今日に至る。

香坂竜男 明治四十五年三月二十五日、鹿兒島市上龍尾町に生る。貿易商社員。中學在學中より作歌、昭和六年一月歌と觀照に入る。現在同人。

香杉純 本名佐藤茂。二十一歳。東京市豊島區巢鴨町に生れ、同市瀧野川區瀧野川町二〇七〇に現住。通信事務員。昭和九年「若杉」に加盟。

幸節靜彦 明治三十五年十一月名古屋市西區福徳町に生

れ、大阪府旭區今市町九九九に現住。大阪區裁判所檢事。石井直三郎氏に教を受け、大正十一年「水鏡」に入り、現在に至る。其の間「青樹」の同人たりしことあり。

香村かずみ 本名島津露。三十歳。東京市本郷區駒込淺嘉町六三三に現住。明治二十五年帝國大學工科卒業（採鑛冶金科）工學博士。昭和五年潮音社入社、現在に至る、昭和十一年十月歌集「山路の菊」出版。

香村金北 本名小録。慶應二年十月金澤市に生れ、東京市本郷區淺嘉町六三三に現住。明治二十五年帝國大學工科卒業（採鑛冶金科）工學博士。昭和五年潮音社入社、現在に至る、昭和十一年十月歌集「山路の菊」出版。

香山治子 兵庫縣佐用郡三日月町乃井野に生れ、神戸市須磨區大手町二ノ一五に現住。年少作歌に志し、結婚後花田比露思氏の雜誌「しほさみ」會員となり、月野さとの名にてその選を乞ひ、現在も「あけび」の會員。

甲斐京子 二十六歳。熊本縣伊倉町寺臺六七に現住。昭和九年より「あしかひ」に發表、十一年秋同誌を去る。かつて水鏡の安永信一郎氏に添削を乞ひし事あり。その後森本治吉氏の教へをうく。

古屋市西區福徳町に生

れ、大阪府旭區今市町九九九に現住。大阪區裁判所檢事。石井直三郎氏に教を受け、大正十一年「水鏡」に入り、現在に至る。其の間「青樹」の同人たりしことあり。

本名島津露。三十歳。東京市本郷區駒込淺嘉町六三三に現住。明治二十五年帝國大學工科卒業（採鑛冶金科）工學博士。昭和五年潮音社入社、現在に至る、昭和十一年十月歌集「山路の菊」出版。

兵庫縣佐用郡三日月町乃井野に生れ、神戸市須磨區大手町二ノ一五に現住。年少作歌に志し、結婚後花田比露思氏の雜誌「しほさみ」會員となり、月野さとの名にてその選を乞ひ、現在も「あけび」の會員。

二十六歳。熊本縣伊倉町寺臺六七に現住。昭和九年より「あしかひ」に發表、十一年秋同誌を去る。かつて水鏡の安永信一郎氏に添削を乞ひし事あり。その後森本治吉氏の教へをうく。

古屋市西區福徳町に生

甲斐さやか

大正六年六月二十六日、大連に生れ、同市

鳴鶴臺二〇三に現住。甲斐水棹氏の「アカシヤ」に屬す。

甲斐水棹

明治十八年四月二十九日、熊本市島崎町に生

れ、大連市鳴鶴臺二〇三に現住。教員。事務員。明治四十四年旅順いさを會、大連浩然吟社の同人となり、四十五年滿洲詩社同人となる。大正六年水樂社に入社岩谷莫良氏に師事。昭和三年十一月あかしや會を創立主宰す。著書に「花あかしや」埴道あり。

甲斐雍人

二十六歳。大連に生れ、同市鳴鶴臺二〇三に現

住。職業なし。母甲斐水棹を通じ幼少より短歌の雰圍氣中にあり。昭和六年病後靜養中實作をはじめ松田常憲氏に師事。現在水樂社友。

甲村鼎

明治三十五年十一月、三河國高岡村に生れ、

名古屋市東區船附町二ノ二七に現住。無職。啄木、牧水の歌より作歌に入り「不二」「歌人」の編輯に關係せしも「歌人」廢刊後は作歌生活から遠ざかる。

甲本碩亮

本名顯正。明治三十四年一月二十六日生。本

籍現住地、岡山縣久米郡倭文東村。大正五年頃より病氣のため今日まで無職。昭和五年頃より作歌すれと獨學。

狩野晃

二十四歳。群馬縣利根郡桃野村に生れ、同縣

沼田町五七四に現住。會社員。「草炎」に據る。

狩野文朔

明治二十四年十一月、宮城縣栗原郡一迫町眞

坂に生れ、同地に現住。商業。中學時代より作歌すれど單に同好の士に索かれてたまたま作歌をたのしむのみ。

狩野満人

筆名長谷川奥太郎。明治四十二年六月二十五

日、大分縣大野郡長谷川村六五に生れ、同地に現住。會社員。昭和八年頃より短歌に興味を持つ。大分新聞にて土屋文明氏の選を受く「大分歌人」「志高」を経て「由布」同人、臼井大翼氏の「霸王樹」準同人。昭和十三年淺利良道氏等と共に霸王樹退社、高木一夫氏等の「博物」に據る。

狩野登美次

明治四十三年六月二十五日、群馬縣勢多郡南

橋村大字北代田に生れ、前橋市岩神町二二九九に現住。官吏。昭和十年八月「アララギ」會員となり、土屋文明氏に師事し現在に至る。

海達貴文

本名松一。明治二十四年八月一日、靜岡縣賀

茂郡松崎町に生れ、熊本縣玉名郡荒尾町に現住。天理教教師。大正十二年九月より北原白秋氏につき兒童自由詩の研究竝に童謡を創作、かたはら短歌を勉強す。

海達公子

大正五年八月二十三

日、長野縣下伊那郡飯田町に生れ、熊本縣玉名郡荒尾町に居住。大

正十三年以來北原白秋氏に兒童自由詩を雜誌「赤い鳥」に、また若山牧水氏に「金の星」に推薦せらる。大正十四年兒童自由詩集「お日さん」を出版、昭和二年兒童自由詩集「金の雲と雀」を出版、昭和八年三月十六日高瀨高女卒業式後盲腸炎にたふれ二十六日死去。行年十八。

海保行雄

二十五歳。千葉縣印旛郡旭村鹿渡に生れ、同

地に現住。小學校教員。昭和五年より作歌すれど師なし。

向後直衛

千葉縣海上郡嚙鳴村

高坂彪嘯

本名覺治。明治三十九年一月一日、磐城國棚

倉町に生れ、同地に現住。武道指南。昭和二年頃短歌雜誌「早苗鳥」を發刊せしも中途廢刊す。師なし。

高野正一

明治四十一年四月二十

七日、埼玉縣秩父郡大河原村大字奥澤に生れ、同地に現住。農業。北原白秋氏に師事し、多磨短歌會員。武藏野同人。

郷松樹

明治四十一年十二月、熊本縣菊池郡北合志村

大字高永に生れ、同地に現住。農業。十七歳頃より作歌に志し上田英夫氏選の九州新聞に發表す。昭和四五年頃水麿に入社せしことあり。地方結社としては熊本歌話會、古城を経て現在龍燈同入。

郷司 青嵐

明治三十六年九月三十日、大分縣東國東郡上國崎村大字下成佛八一に生れ、同地に現住。昭和四年七月より「霸王樹」大分歌人「水麿」を経て現在無所屬。

郷田 勝登

明治三十五年三月五日、廣島縣三原市中之町（舊山中村）に生れ、廣島縣尾道市對岸の向島東村に現住。小學校教員。昭和二年末三浦直正氏の光短歌社に入社せしも、數年にして退社。

郷間 儀一郎

三十三歳。栃木縣河内郡古里村下橋に生れ、同地に現住。教員。少年時代若山牧水氏の選歌を受く。後休詠數年、昭和五年頃「吾妹」に入社、約一年にして退社、「木陰」にて御風氏の選を受けし事もあり。目下歌誌「二荒」同人。

幸島 菊子

五十九歳。栃木縣鹽谷郡阿久津村に生れ、東京市小石川區駕籠町二二四に現住。明治二十八年落合直文氏に指導を受く。後佐佐木信綱博士に師事す。

幸田 躬行

大正三年一月五日、新潟縣西蒲原郡吉田町大字鴻巣に生れ、東京市牛込區籠笥町一八竹内方に現住。早大文科學生。昭和十年十一月槻の木會に入り作歌を始め、窪田空穂氏の指導を受けつつ今日に至る。

幸田 吉弘

二十七歳。和歌山市東紺屋町三六に生れ、同市船場町一八に現住。鐵工。昭和十二年一月「いぶき」に入社す。爾來香川頼彦氏の指導を受けつつ現在に至る。

幸野 羊三

本名鹽崎直幸。四十二歳。東京市牛込區に生れ、吳市西惣付町三三二に現住。花卉栽培業。大正五年「潮音」に加入、現在同人。短歌誌「木槿」を主宰す。

鏡 長壽郎

岡山縣吉備郡眞金町一三九に生る。溫室園藝業。昭和四年高松短歌會入會、昭和五年生咲義郎氏主宰の「かげとも」入社、土師龍吉氏と識つて國民文學に投稿、昭和八年七月十三日二十五歳にて病歿す。

蠣崎 稻男

明治四十一年五月二十十日目に生れ、仙臺市土樋一二三照井方に現住。學生。中學四年頃より作歌を始め、現在白日社々友。

柿市 靈仙

四十三歳。鹿兒島縣日置郡吉利村に生れ、同縣出水郡出水町に現住。鹿兒島縣社會教育主事補兼視學委員。大正十四年五月以來潮音社に入社今日に至る。

柿坂 拍夢

本名黎介。明治三十九年十月十日、鳥取縣八頭郡丹比村に生れ、師範部を経て現在同郡若櫻小學校に奉職す。中學在學中より各種の短歌誌に投稿す。最初「曠野」の會員たりしが後に定型歌に變り、地方誌「さんきらい」の結社を作り、又最近「青檜」の會員たり。

柿堺 欣一郎

二十四歳。埼玉縣秩父郡秩父町本町一三七三内に居住。國學院大學學生。作歌生活約四年、「多磨」の創刊されるに及び入會し、以後白秋氏に師事す。

柿木 鷹子

二十四歳。大阪市に生れ、堺市大濱南町一六一に現住。昭和十年より作歌をはじめ短歌雜誌に投稿、昭和十一年より五島美代子氏に指導を受く。現在竹柏會大阪支部會員。

柿谷 伸吉

明治二十一年三月二十日、金澤市に生れ、東京市淀橋區柏木三ノ四三一に現住。昭和製粉株式會社會計主任。大正七年サムボア復活號より北原白秋氏に師事し、とねりこ、香蘭

の同人を経て現在多磨會員たり。

柿村 秋人 本名根津高榮。長野縣上水内郡南小川村に生れ、長野縣上伊那郡伊那町に現住。小學教員。十八九歳の頃より作歌。大正十四年アララギに入會し現在に至る。

角谷 静江 二十三歳。山口縣下松町に生れ、大連市山手町三二に現住。昭和六年三月アカシヤ會に入會、甲斐水穂氏に師事す。同會同人。なほ昭和六年七月より水廻にも入社。

景山 碧 本名玉井美登利(男)。二十七歳。鳥取縣日野郡大宮村大字印實に生れ、同縣東伯郡下中山村松吟莊に現住。教員。小學校時代より歌を愛し、一時中絶、昭和七年、師範學校在學中、香蘭に入社、今日に至る。村野次郎、池上秋石兩氏に師事。他に、紀伊短歌同人。

影山 銀四郎 明治四十四年十一月十二日、栃木縣安蘇郡野上村大字作原に生れ、栃木市河合町九六七に現住。都新聞記者。初め鳴海要吉氏の「新緑」に關係せるも後文語歌に入り「短歌風景」「山蔭」其他の短歌雜誌を發行せしことあり。特別に指導を受けし師なし。歌集「稗草」萬葉集秀歌選釋」の著あり。

影山 邦俊 明治三十三年一月十九日、高知縣安藝郡安藝

町に生れ、東京市杉並區和田本町一〇〇六に現住。理容術師。幼少より歌に親しみ、北原白秋氏が多磨の創刊さるるに及び會員となり初めて歌を發表す。

影山 一 三十六歳。埼玉縣北埼玉郡樋遣川村古宮に生れ、同地に現住。農業。大正十二年より作歌を始め、十四年に檉權に入社し今日に至る。

影山 正治 二十九歳。愛知縣豊橋市に生れ、東京市淀橋區戸塚町一ノ五〇八に現住。新聞記者。十七八の頃より作歌を始め、特に二ヶ年半の獄中生活中に専念作歌す。昭和十一年十一月獄中作を中心に自選、歌集「悲願集」を出版。

掛貝 芳男 明治三十八年三月三十一日、東京に生れ、東京市杉並區高圓寺六ノ六三七に現住。慶應義塾教員。昭和三年より與謝野寛・晶子兩氏に師事す。

掛場 すす 四十六歳。秋田縣仙北郡白岩村に生れ、京城光化門通一に現住。官吏の妻。大正十年より作歌に努む。地上「新園」を経て目下ポトナムに籍をおく。歌集「雑木の花」あり。

掛札 幸江 二十三歳。茨城縣久慈郡西小澤村大字落合九二ノ一に生れ、同地に現住。小學校教員。師範時代より歌を好み、昭和十年七月短歌草

原に入社今日に及ぶ。

笠石 スミ 十九歳。青森縣上北郡市舘貝町に現住。料亭奉公人。十三歳より作歌。みじめな生活のなぐさめとして一人作るのみ。

笠原 中正 通稱十二郎。明治四十年、新潟縣北蒲原郡富田村に生れ、福島縣若松市南横町に現住。元銀行員。歌は故原宏平、小宮陸兩氏の指導を受くること二十年。

笠原 みつる 本名實鶴。三十四歳。長野市北條區に生れ、同地に現住。農業。初め信毎歌壇に投稿、後「現代生活」に入り、同誌廢刊後「いはひば」に入る。

笠原 道子 三十七歳。長野縣諏訪郡湖南村に生れ、同所に現住。大正十三年アララギに入會、土屋文明、結城哀草果兩氏に師事して現在に至る。

笠間 東太郎 山口縣長府町黒門に生れ、神奈川縣藤澤町鶴沼二四四二一に現住。元文部省官吏。昭和二年アララギ入會、岡麓、齋藤茂吉兩氏に師事現在に至る。

笠井 京平 三十三歳。岡山縣勝田郡勝加茂村大字西下に生れ、山形市東原町北一條一七二に現住。高

等女學校教諭。もと「常春」同人。現在は「山柿」同人。作歌年數十年餘。

笠井新也 五十五歳。徳島縣美馬郡脇町に生れ、同地に

現住。中學校教頭。明治三十五年國學院大學に入学、落合直文氏の指導を受け、又尾上柴舟氏に師事。卒業後中等教育に従事し、傍ら作歌を怠らざれども多く發表せず。昭和六七年の頃與謝野氏夫妻の指導を受け、その作品を「多柏」に載せし事あり。

風間文夫 二十四歳。茨城縣水戸市に生れ、栃木縣足尾

町渡良瀬に現住。足尾銅山測候所勤務。山脇一人氏に師事。

柏倉正 二十六歳。福島縣信夫郡大笹生村字上ノ町一

三に生れ、福島市豊田町一三齋藤方に現住。鑛製造職工。昭和十一年三月より福島市反響社々友として今日に至る。

柏木愛子 二十二歳。岩手縣江刺郡岩谷堂町中町八八に

生れ、仙臺市川内明神横丁二九に現住。作歌經歷といふほどのものなし。

柏木收三 明治三十六年神奈川縣鎌倉郡大船町岡本に生

れ、同地に現住。教員。昭和六年「かぐのみ」に入社、山上、泉氏に師事す。

柏木天彦 本名熊八。五十歳。福島縣河沼郡笈川村に生

れ、同地に現住。農業。星崎村氏に手ほどきを受け、青年時代は舊派歌會に籍を置きしも、大正十一年佐治斗牛氏、結城牧秋氏等と會津短歌會を創立し、引續き同人として今日に至る。

柏木英徳 本名英雄。三十五歳。福岡縣築上郡合河村下

川内に生れ、同縣飯塚市菰田三〇四に現住。昭和六年病を得て退き現在無職。大正九年作歌を始め、昭和五年よりアララギに依りて勉強し、昭和十年一月より會員となりて現在に及ぶ。

柏倉吉見 二十九歳。山形縣西村山郡柴橋村金谷に生

れ、同地に現住。農業。昭和五年九月歌誌草徑に入社し國井霞村氏に學ぶ。七年十月吾妹に入社。現霞村會々員。

柏原燭子 本名越智正子。愛媛縣越智郡岡山村大字浦戸

に生れ、東京市下谷區中根岸七一岩柳方に現住。東京市社會局龍泉寺方面館勤務。昭和十年四月アララギに入り、齋藤茂吉氏の指導を受けつつ現在に至る。

柏原俊郎 三十七歳。熊本縣小川町に生れ、熊本市仲間

町三六に現住。熊本醫大附屬圖書館出納吏。

大正十二年アララギ入會、途中退會、昭和九年十二月アララギ再入會、現在に至る。

柏原佳子 本名中澤文子。大正三年山形縣飽海郡觀音寺

村に生れ、鳥取市に現住。アララギに據る。村東九條に生れ、大正十年二月二日死去。享年四十一。明治卅八年東京帝大國文科卒業。明治四十年より死去するまで廣島高師に奉職。作歌は趣味として大學時代より爲せり。

櫻尾道子 明治四十四年五月十五日、廣島市大手町八丁

目に生れ、奈良市外辰市村東九條に現住。奈良女高師卒業後、名古屋市立第三高女に奉職。現在無職。作歌は女學校時代より始め、昭和七年より「水壘」社友となりて今日に至る。

粕谷貞一 明治四十四年一月二十五日、北海道札幌郡白

石村に生れ、同地に現住。農業。昭和三年八月礪漕社に入社今日に至る。

糟谷富美子 二十二歳。岐阜縣大垣市旭區森小路一〇八に現住。女學校に今中楓

溪氏ありしにより歌を作り始む。

春日篤史 本名河野初士。二十二歳。大分縣東國東郡朝

來村に生れ、同地に現住。小學校教員。十八

歳より作歌を始む。「由布」に作品を發表し、現在「エラン」に據る。

春日井 瀧 舊姓佐藤。行歌とも號す。明治二十九年五月

二十八日、名古屋市中區東田町に生れ、愛知縣丹羽郡布袋町に現住。實業學校教諭。大正四年「潮音」に入り、大正七年「珊瑚礁」に入り、大正八年「霸王樹」創刊と同時に同人として今日に至る。又大正十二年以來「短歌」同人たり。

春日井 政子 明治四十年一月十七日

東京市淺草區田原町に生れ、愛知縣丹羽郡布袋町に現住。春日井瀧妻。昭和四年「青垣」に入社。昭和八年二月「名古屋短歌會」に入社、現在同人。

片岸 巳年夫 大正六年七月二十三日

北海道旭川市に生れ、東京市世田ヶ谷區一ノ二七七に現住。學生。十七八歳より作歌を志し獨學にて現在に及ぶ。

片岸 芳久美 三十歳。富山縣西礪波

郡吉江村に生れ、同地に現住。農業。創作及び香蘭を経て現在多磨會員。

片桐 顯智 三十歳。山口に生れ、

東京市板橋區板橋町八一九四〇に現住。JOAK教養部講演課勤務。東京帝國文學科卒。近代短歌史專攻。

昭和十年「眞人」入社、現在同人。東京帝國大學銀杏短歌會員。

片桐 勘藏 三十五歳。山形縣南村

山郡本澤村大字長谷堂に生れ、同地に現住。農業。小學校卒業後單獨にて作歌しつつありしも、最近アララギ會員となる。

片桐 敏男 明治三十七年四月十八

日生。本籍東京市杉並區。臺北市東門町六六官舎に現住。臺灣總督府交通局遞信部勤務。昭和三年十月「アララギ」會員となり齋藤茂吉氏に師事。また「あらたま」同人たりしが昭和十年退會。歌集「遊光集」(昭和十一年九月刊)の著あり。

片桐 良 三十八歳。長野縣下伊

那郡市田村に生れ、同地に現住。農業。昭和八年より作歌に志し、爾來東京日日新聞短歌壇に投稿を續け、釋道空氏に師事す。

片口 安之助 明治二十七年一月十五

日、富山縣射水郡小杉町に生れ、昭和七年一月二十九日、享年三十九を以て歿す。歌集「寂しき路」黎明「光の中へ」の三著あり。

片瀬 宗英 二十八歳。大阪府豐能

郡池田町に生れ、大阪府泉北郡高石町羽衣八〇二に現住。圖案業。日比野道男氏に師事、昭和六年「曼陀羅」に入社今日に及ぶ。

入社今日に及ぶ。

片野 靜緒 明治四十一年二月九

日、神奈川縣上溝町二四九六に生れ、同地に現住。農業。昭和三年香蘭に入社、同好の士と相模野を創刊。昭和十年十月香蘭退社、九月桐の花を創刊。多磨會員として現在に至る。

片柳 恒夫 二十九歳。栃木縣佐野

町に生れ、同町江戸町に現住。時計商。宇都宮市の下野短歌社々友。

片山 廣子 明治十一年東京市麻布

新井宿三ノ一三五二に現住。明治二十九年竹柏園に入る。大正五年歌集「翡翠」を出版。そのち歌より遠ざかりしが、昭和十年より再び作歌す。

片山 久太郎 四十四歳。滋賀縣伊香

郡七郷村西物部に生れ、同縣長濱町錦北に現住。雜貨商。大正十年より吉植庄亮氏に師事し「橄欖」同人。

片山 邦夫 三十三歳。兵庫縣氷上

郡黒井町に生れ、東京市豊島區池袋四ノ四四二に現住。中等教員。森本治吉氏に手ほどきを受く。

片山 敏彦 明治三十一年十一月五

日、高知市に生れ、東京市杉並區清水町二五に現住。第一高等學校

獨逸語講師。詩集一册及び評論「ロマン・ロラン」他に譯著數種あり。

片山平四郎 三十三歳。徳島市徳島町に生れ、東京市杉並區馬橋四ノ四四〇に現住。官吏。大正十五年水郷社に入社、途中二回中斷したるも復社し今日に至る。

片岡永左衛門 七十九歳。神奈川縣小田原町緑四ノ六八七に生れ、同地に現住。農業。福住正兄翁に師事し、其後は誰にも師事せず。

片岡宗 明治三十八年五月三日、兵庫縣養父郡廣谷町に生れ、徳島縣板野郡板東町に現住。國幣中社大麻比古神社禰宜。昭和元年神宮皇學館に入學。千田憲氏主宰短歌雜誌五更に入會、昭和二年よりアララギに入會し、岡籾、結城哀草果兩氏の選を受け、後昭和四年より五更會同人として現在に至る。

片岡長英 明治四十二年八月二十七日、新潟縣古志郡栃尾町字栃尾に生れ、東京市淀橋區戸塚町一ノ三八七に現住。製綿工場職工。昭和十一年三月頃より作歌、獨學。

片岡恒信 三十四歳。高松市に生れ、東京市中野區高根町四に現住。會社員。とわりこ「三田短歌」を経て現在「多磨」會員。

片岡久子 本姓峯村。三十五歳。大阪府住吉區田邊本町七ノ三四に現住。大正十五年潮音社入社、今日に至る。外にあじろ木社友。

梶谷輝夫 本名銀右衛門。明治四十一年十一月十八日、長崎縣南松浦郡岐宿村二一八八に生れ、佐世保市今福町二二六に現住。佐世保海軍工廠勤務。昭和五年作歌を始め、瀬王樹に入る。

梶塚鈴音 三十四歳。石川縣能美郡小松町字京町八五に生れ、臺北州海山郡板橋街深丘二五九に現住。故鑛山業者の妻。「相思樹」社友。

梶原九八郎 明治三十一年十一月二十五日、大分縣下毛郡薄部村大字吉野二四八に生る。農業。日光「詩歌」に投稿したることあり。

梶原とよ子 明治三十五年北海道に生れ、樺太豊原町大通南八丁目に現住。樺太廳官吏。大正十四年作歌に志す。獨學。

梶原太 二十五歳。朝鮮忠南大廳土木課内に現住。土木技手。眞人社に入社して五年。

梶村正義 四十二歳。大阪府東區瓦町五丁目に生れ、同

市西區阿波堀通一丁目に現住。醫學博士。耳鼻咽喉科開業醫。昭和三年以降齋藤茂吉氏に師事しアララギ會員として現在に至る。昭和八、九年頃一時「いぶき」に加盟せしことあり。

梶本綾子 大正二年十一月東京市村町二二五に現住。昭和六年より作歌を始め六月「ぬはり社」に入る。

勝崎猪之助 五十三歳。愛知縣知多郡旭村大字日長に生れ、名古屋市西區上仲町三丁目に現住。中等學校教員。短歌誌「東邦」同人。數年前より太田水穂氏の指導を受く。

勝田基文 三十八歳。北海道旭川區高圓寺六ノ七〇六に現住。商業。十六歳より歌を作り始め、大正十一年「とねりこ」に入社。大正十五年青垣會に入會古泉千櫻氏に師事す。昭和二年千櫻氏歿後「青垣」發刊に努力、昭和四年藤川忠治氏其他と「歌と評論」を興し今日に至る。

勝野正男 三十六歳。岐阜縣惠那郡中津町に生れ、同地に現住。蠶種製造業。昭和二年六月「ぬはり」創刊と同時に入社、現在同人たり。昭和八年歌集「花穂」を出版す。

勝侯久作 三十八歳。神奈川縣足柄下郡仙石原村に生れ、東京市世田谷區太子堂町四五八に現住。國學院大學在學中、釋道空氏の指導を受く。卒業後中絶し居たりしが、昭和七年より「くくひ」同人となる。

勝目實 二十五歳。臺灣花蓮港瑞穂に生れ、鹿兒島市平之町に現住。會社員。水産社友。

勝山紫夕 本名弘。二十九歳。岡山縣苫田郡東一宮村に生れ、山東省青島長山路九號地に現住。會社員。昭和五年比律賓セブ市に渡航九年歸國、十一年大陸に移住す。商業學校在學中より作歌、歌集「カデイナ・デアモール」椰子の濱邊一詩集「椰子丘麓の街」等の著あり。短歌草原同人。

桂孝二 二十七歳。大阪に生れ、朝鮮鎮南浦府三和町林新治郎方に現住。女學校教諭。作歌は十七八歳頃より始む。昭和五年歌誌「吾妹」に入社、なほ昭和八年京都帝國文學科に入學と同時に吉澤義則氏に師事し、昭和十二年六月朝鮮に赴任するまで同氏主宰歌誌「掃木」編輯。

桂定治郎 郡大枝村大字塚原字中山に生れ、鳥取市東町官舎に現住。鳥取縣警務部長。十二歳の時より作歌。昭和三年橋田

東聲氏の門に入り、その死後は平賀春郊氏の門に入る。昭和八年歌誌「草炎」同人及「草紙」同人となる。昭和十二年第一歌集「山小屋」出版す。

桂木陽一 二十九歳。滋賀縣伊香郡永原村大浦に生れ、同地に現住。小學校教師。昭和二年より四年迄「詩歌」に屬す。其の後は「短歌雜誌」「水鏡」等による。現在、地方同人歌誌「波」の同人。

葛城史朗 本名伊佐靜麿。二十六歳。岐阜縣海津郡今尾町に生れ、東京市豊島區巢鴨町二ノ五〇に現住。官吏。昭和六年十二月若杉短歌會同人となり、同十年九月金井彌吉氏の後を承けて歌誌「若杉」の編輯に従事、今日に至る。

門林兵治 明治三十三年五月大阪府泉北郡北池田村に生れ、東京市杉並區高圓寺二ノ一三〇に現住。著述業。二十歳の頃より作歌し、若山牧水氏に師事せり。

門屋いつらう 本名逸郎。三十八歳。岩手縣和賀郡岩崎村岩崎に生れ、同地に現住。小學校教員。十八歳より作歌、二十六歳より佐佐木信綱氏の「心の花」に投稿。

門屋まする 三十六歳。高知縣吾川郡弘岡下ノ村九十五番

屋敷に生れ、同地に現住。農業。昭和七年二月に縣内の同人雜誌「短歌藝術」に入會。昭和十年二月アララギに入會現在に至る。

門井眞 二十五歳。茨城縣結城郡石下町横堤に生れ同地に現住。農業。府中歌話會會員「ごごがに」同人を経て現在「短歌至上主義」同人。

角繁子 五十七歳。東京市品川區御殿山に生れ、同市世田ヶ谷區池尻町五二四に現住。昭和八年楠田敏郎氏主宰「むらぎも會」に入會、其指導をうけ今日に及ぶ。

叶翠村 本名權之信。明治四十年五月二十七日、大阪府泉南郡有眞香村土生瀧に生れ、同郡貝塚町西脇之濱に現住。職業なし。昭和四年より短歌を佐澤波弦氏に學び、歌誌「つき草」「短歌」の同人を経て「霸王樹」に入社、合著歌集「わだつみ」あり。かつて歌誌「かつらぎ」を主宰發行す。

叶多重雄 三十三歳。福島縣石城郡好間村に生れ、奉天浪速通四三東浪園に現住。印刷屋の校正。昭和五年より十年まで病臥。病臥中作歌、後しばらく作歌にとほざかり渡滿後再び作歌をはじめ、「ポトナム」に入社、現在に至る。

鉛山良太郎 本名解良富太郎。新潟縣三島郡寺泊町字片町

新治郎方に現住。女學校教諭。作歌は十七八歳頃より始む。昭和五年歌誌「吾妹」に入社、なほ昭和八年京都帝國文學科に入學と同時に吉澤義則氏に師事し、昭和十二年六月朝鮮に赴任するまで同氏主宰歌誌「掃木」編輯。

郡大枝村大字塚原字中山に生れ、鳥取市東町官舎に現住。鳥取縣警務部長。十二歳の時より作歌。昭和三年橋田

に生れ、昭和十二年二月病歿、享年三十七。前東大法學部助手。翻譯。晩年療養無職。大正十三年十月アララギ入社。昭和九年「水蘂」「潮」入會。昭和十一年「水蘂」退社。三月アララギ再入社。

金子 花城 本名八郎。大正八年創作に入り歌を作る。

大正十二年九月一日大震災により、横濱市花咲町にて壓死す。行年三十二。

金子 薰園 本名雄太郎。明治九年十一月三十日、東京に生れ、同市杉並區神明町七四に現住。新潮社調査部長。明治二十六年十七歳の十月、落合直文氏の淺香社の一員となり和歌革新の運動に参加す。同三十四年一月第一歌集「片われ月」を出してより最近還曆記念として刊行せる「白鷺集」まで十幾歌集を出す。作歌研究書は「作歌新辭典」「歌に入る道」「作歌の第一歩」「現代名歌選集」「歌の作り方」等。現に「光」主幹。

金子 不泣 明治二十五年十二月二十日、新潟縣佐渡郡畑野村の一商家に生れ、同地に現住。明治四十四年前田夕暮氏の白日社に入り、詩歌刊後「日光」同人となり昭和三年「詩歌」復活し再びその同人となる。歌集「波の上」「童髮」「獨居」の著あり。

金子 健 三十四歳。福岡市に生れ、福岡市住吉木ノ下町八四九に現住。會社員。大正十三年歌誌「日光」によつて作歌の機縁をめぐまる。昭和四年三月九大法文學部「能古の會」に據り歌誌「能古」に發表。昭和五年三月、同誌解散、アララギに入會。近年寡作にて、單に歌誌、歌集の多讀を念するにすぎず。

金子 信三郎 三十七歳。群馬縣新田郡太田町に生れ、同縣北甘樂郡磐戸村に現住。教師。大正六年より作歌。天笠大録氏等と雜誌「土と光」發行。大正十一年副王樹に入り現在に及ぶ。

金子 靜光 本名安一。三十六歳。富山縣東礪波郡太田村に生れ、北海道空知郡南富良野村金山に現住。請負業。大正七年より小田觀瑩氏に師事し、大正十一年「潮音」に入社今日に至る。

金子 善治郎 三十八歳。明治三十四年九月二日京都市に生れ、尼崎市昭和北通六ノ二〇九に現住。關西學院大學豫科教授。九州帝大國文科卒業。大學院に入り春日政治博士の教を受く。年少國民文學社に入り窪田空穂、松村英一兩氏の教を受け今日に至る。嘗てちくさと號せし事あり。現在「國民文學」同人。

金子 貞美 明治三十五年五月長野縣諏訪郡湖南村に生る

農業。嘗てアララギ會員たりしことあり。

金子 白光 本名正一郎。栃木縣那須郡馬頭町に生る。酒造業。野口青眉氏に學び同氏主宰の「うねり」同人を始め、橄欖、ぬはり、下野短歌等の社友となりしも、現在は所屬なし。

金子 秀子 本名伊佐一枝。舊姓金山府に生れ、東京市豊島區巢鴨二ノ五〇に現住。昭和七年十二月若杉短歌會に入會、現在に至る。嘗て大澤雅休氏の添削を受けし事あり。

金子 英美子 本名三三子。二十二歳。谷區山下町二九伊藤重春方に現住。事務員。昭和九年十二月若杉短歌會入會、現在に至る。

金坂 花影 本名徳司。明治十六年二月十日、千葉縣山武郡丘山村油井一二に生れ、同縣船橋市九日市天沼一九九に現住。官吏。大正六年國民文學社同人となり松村英一、半田良平兩氏の指導を受く。現在土筆の同人。

金崎 民三 本名兼崎理藏。俳號地橙孫。明治二十三年三月二十七日、山口市道場門前に生れ、下關市新町一丁目宇中島に現住。四十九歳。辯護士。大正十年京都帝大法學部卒業。自由律俳人。著書「佛論隨筆集 觸目皆花」。歌は「山上の

火「珊瑚礁」終刊迄、後「霸王樹」に入りしも久しからず。現在歌籍なし。

金澤長三郎 三十三歳。青森縣に生れ、青森市古川町千劫

三二に現住。鐵道員。二十七歳より作歌を始め、三十歳佐野翠坡氏の選音同人。現在青森市にて同好者と深淵莊短歌會を組織す。

金澤恒治 明治四十四年十二月三十日、秋田縣大館町大

町に生れ、同地に現住。吳服商。昭和五年十二月アララギに入會、齋藤茂吉氏の指導を受け今日に至る。

金澤一雄 三十歳。大阪市西區京町堀通四ノ二一ノ三に

生れ、京都市上京區小山東元町二三に現住。京都帝大助教。工學部探鑛冶金學教室勤務。生野鑛山在勤時代「菱華」誌上に齋藤茂吉氏の選をうく、又當時大阪朝日新聞神戸版歌壇に投稿す。

金澤照子 二十三歳。東京市に生れ、神戸市林田區五番

町一ノ二六ノ七に現住。神港女子商業學校短歌會にて作歌。其後岡野直七郎氏に師事し蒼穹社に入社、現在に至る。

金澤種美 本名宥信。大阪府豐能郡池田町に生れ、東京

市本郷區駒込林町一七四に現住。僧侶。著述業。尾上柴舟氏に師事し雜誌「車前草」を編

輯せしことあり。短歌雜誌「潮光」を主宰せしことあり。現在「水鏡」同人。著書に「増鏡新解」「百人一首新釋」歌集「密林」論集「短歌への認識」歌話と隨筆あり。

金澤眞砂 本名正。二十六歳。茨城縣久慈郡生瀨村大字

大生瀨に生れ、大連市水仙町三六水仙寮に現住。滿洲興業銀行員。昭和十一年六月滿洲短歌會合朋の會員となり、昭和十二年三月より創作社友となり現在に及ぶ。

金澤ひさ子 本名ヒサ。二十五歳。長野縣東筑摩郡麻績村

に生れ、岩手縣九戸郡山形村荷輕部小學校に現住。小學校教員。宮城女專時代「霸王樹」の加藤文友氏に師事、後關德彌氏に師事、昭和十年九月「自然」社友となり現在に及ぶ。尙十一年四月より今井邦子氏に師事し、現在「明日香」會員たり。

金田美山 本名厚。明治二十八年十月八日、岡山縣美作

國英田郡西粟倉村に生れ、大阪府三島郡島本村に現住。東洋日日新聞社長。大正二年以降大正七年頃まで新潮、文章世界等の歌壇に投稿、金子薫園氏の添削を受けしが大正十三年以後多忙の爲作歌少し。

金田千鶴 明治三十五年十一月、長野縣下伊那郡泰阜村

に生れ、昭和九年八月死去。大正十三年岡麓

氏の門に入り同十五年アララギ會員となる。遺著「金田千鶴歌集」あり。

金近信 本名信子。二十八歳。廣島市に生れ、千葉縣

東葛飾郡柏町豐四季に現住。教員。専門學校在學中、中河幹子氏の歌會に數度出席。三四年前「草の實」社友となり故横田葉子氏の指導をうく。

金津於菟 本名於菟二郎。明治三十二年十二月二十三日

熊本縣下益城郡松橋町一一〇に生れ、東京市赤坂區新坂町五に現住。侯爵細川家家職。昭和三年水鏡入社、現在同人。

金登雙紫 本名金戸巖。明治四十年一月二十七日、茨

城縣眞壁郡中村に生れ、栃木縣芳賀郡眞岡町に現住。教員。昭和二年師範在學中本居亮一氏の指導を受く。前後四年「國民文學」の誌友たり。現在「下野短歌」同人。

金箱慶三 明治二十九年三月三十一日、長野縣北佐久郡

五郎兵衛新田村下原に生れ、昭和四年七月十一日死亡。享年三十四。元群馬師範國漢教諭。アララギに作品を發表し、また地方同人雜誌にも發表。昭和五年遺稿歌集「櫻陰集」刊行。

金丸與志郎 本名與志夫。三十六歳。福岡縣嘉穂郡稻築村鴨

生に生れ、同地に現住。教諭。昭和三年頃よ

り作歌、昭和四年六月より昭和七年十二月迄月刊歌誌「くにはら」を編輯發行す。後「ひこばえ」「勁草」を経て昭和九年一月より「青蛙」の社友となり現在に及ぶ。

金村シゲ子

明治三十九年九月十五日、愛媛縣松山市北夷子町六八に生れ、同地に現住。女子師範二部を卒へ小學教育に従事すること四年、後職を辭し師範學校教諭金村治三郎に嫁す。

金森契月

本名傳一。山梨縣甲府に生れ、東京府下北多摩郡東村山に療養中昭和六年五月三十日死亡す。享年二十六。晩年あしかび社に入社せしことあり。作歌生活四五年。

金森宏

三十三歳。熊本縣葦北郡吉尾村に生れ、同地に現住。教員。中學在學中より宗不早氏に師事。卒業後ポトナムに入社す。現在「龍燈」同人。

金盛仁平

三十七歳。東京市豊島區西巢鴨三ノ六五〇に現住。醬油味噌製造販賣業。昭和十年十月より「自然」の會員となり作歌を始め、昭和十一年四月より今井邦子氏の指導を受け、雜誌明日香の會員となり現在に及ぶ。

金谷正二

二十六歳。福島縣伊達郡大久保村字芳池八に生れ、同縣同郡川俣町字新中町三九に現住。

實科高等女學校教諭。國學院高等師範部在學時代、歌を釋道空氏に學ぶ。少年時代、地方歌誌「虎杖」「青杉」編輯に携はりし事あり。著書「文字提要」一卷。

金山平二

昭和八年一月十一日、富山市南田町九九の自宅にて死亡。享年二十五。富山縣廳内務部農林課農林技手。富山詩人同人。國民文學會員。昭和八年一月「金山平二遺稿集」刊行さる。

金山曠

明治二十七年四月二十日、山口縣熊毛郡鹽田村に生れ、下關市幡生町一二八二に現住。山口高商を卒へ大阪の會社に就職す。病を得て歸郷後縣下の商業學校に職を奉じ辭任後更に實業界に入る。少年時代より歌を好むも就いて學びたる師なし。

金井廣吉

舊姓福原。明治三十二年一月二十一日、新潟縣中魚沼郡外丸村に生れ、長野縣下高井郡中野町に現住。教師。大正八年三月潮音に入社、太田水穂氏の指導を受け現在に至る。

金岡正男

明治二十四年四月十五日、千葉縣香取郡大須賀村奈土に生れ、同地に現住。農業。少年時代より作歌すれど獨學。

兼田重子

十九歳。兵庫縣加古郡加古郡平岡村に生れ、兵庫縣

子商業學校短歌會に入會作歌す。二十九歳。東京四谷に生れ、現在大阪にて細菌學、レントゲン學等を研究中。昭和二年頃より短歌に興味を持ち、中學の先輩故橋田東聲氏に歌稿を送りし事あり。昭和八年一月新進歌人社に入りて、昭和十年三月退社、今日に至る。

兼松義明

本名繁次。明治三十四年三月九日、愛知縣額田郡藤川村に生れ、同地に現住。米穀商。二十歳郷土歌誌「蒼空」發刊、廢刊後水廻、創作、潮音、自然、短歌、不二、歌人等に關係せしことあり。

河合一路

二十六歳。愛知縣東春日井郡志段味村大字吉根に生れ、同地に現住。農業。昭和七年一月より村上廉氏に師事「野菊」に入會して現在に及ぶ。

河合元巳

三十九歳。東京に生れ、同市麻布區六本木町一に現住。女子學習院在學中より現在まで引續き尾上柴舟博士の指導を受け、數年前より水廻同人。

河合千代子

二十八歳。愛知縣豊橋市植田町に現住。水廻同人。昭和七年より並木秋人氏に就き作歌を始め、昭和九年水廻に轉じ、松田常

河合恒治

向乘組。軍人。昭和七年より並木秋人氏に就き作歌を始め、昭和九年水廻に轉じ、松田常

憲氏に師事今日に及ぶ。

河合 年枝 二十九歳。東京市に生れ、同市芝區新橋六ノ

六〇に現住。金箔業。かくのみ社準同人。

河越 百代 三十三歳。鳥取市西町四九に生れ、同地に現

住。昭和十年詩歌雜誌「胎座」を發刊今日に至る。尙「珊瑚樹」に關係す。

河崎 敏之 本名海田國。三十三歳。吳市に生れ、同市八幡

通一ノ一四に現住。吳海軍工廠工員。昭和九年より短歌研究に投稿す。吳幸雄とも稱す。

河杉 初 舊姓松本。明治二十九年奈良に生れ、横濱市

鶴見區生麥町一四四四に現住。十七歳の時竹柏門下に入り、佐佐木信綱氏の教を受け今日に及ぶ。歌集「藤娘」「柳の葉」を心の花叢書として刊行す。

河瀬 菊枝 二十五歳。大阪府泉南郡西葛城村木積に生れ

同地に現住。高女在學中、作歌を覺え、昭和八年五月青虹社に入社、今日にいたる。

河田 世子 本名誠。三十二歳。岡山市西川原本町に生れ

長崎市飽之浦二ノ一七に現住。十四歳頃より作歌、昭和十年八月「香蘭」に入る。

河田 烈 明治十六年東京に生れ同市四谷區東信濃町二

八に現住。明治四十一年東京帝大法學部卒業。爾來約三十年官界に在りしが、現在貴族院議員。中學時代より作歌、「文庫」「新聲」等に投稿す。金子薫園氏の指導を受けしことあり。

河田 菊乃 三十歳。熊本市京町二ノ七一に生れ、同地に現住。第一高女在學中より作歌。

河田 楠男 二十二歳。岡山縣小田郡北木島村字楠に生れ

大阪市東區横堀六ノ一四佐伯千太郎方に現住材木店員。昭和十一年九月水廻社に入社、金澤種美氏の選を受けて今日に至る。

河田 政一 三十二歳。東京市世田谷區代田二ノ八五三に

現住。醫學博士。九州帝大講師。現在留學中。大正十三年より三年間八高短歌會にて故石井直三郎氏より指導を受け、その後復活後の地上社に入り、爾來約十年間對馬完治氏の指導を受けて。

河内 阿希美 本名朝子。二十七歳。德島縣美馬郡半田町に

生れ、大阪府布施市長瀬金岡一六一、岡本勝一方に現住。昭和十一年よりやまぶき入會。一時「水廻」に入社せしことあり。

河内 英壯 本名榮藏。大正二年四月一日、北海道釧路市

に生れ、同市入舟町三ノ二に現住。商業學校在學中歌を作り始む。昭和八年「吾妹」入社、

昭和十一年十月退社、同年十一月より橋本德壽氏に師事し「青垣會員」として現在に至る。

河内 專之助 明治四十四年九月十七日、大阪府南區長堀橋

筋二ノ三八に生れ、同市住吉區田邊東之町八ノ二に現住。會社員。昭和八年春より歌をつくりはじめ、昭和九年七月、アララギに入會

土屋文明氏の指導を受けつつ今日に至る。

河内 政治郎 四十四歳。京都に生る。京染吳服商。「あしか

ひ」社友。

河内 野弘基 四十六歳。佐賀縣唐津市に生れ、福岡市春吉

六番丁に現住。醫師。大正七年水廻社に入社、後「自然」「蒼穹」等を経て昭和六年岡山嚴氏が「歌と觀照」社を創立すると同時に同社に轉ず。現在同人。

河津 加奈芽 本名要。三十六歳。千葉縣市原郡内田村江子

田二七三に生れ、同地に現住。千葉縣道路技手兼土木技手。大正十年頃より作歌、同十四年國民新聞及東京日日新聞にて牧水氏、釋迢空氏に師事す。

河津 直入 文政七年十月一日、福

鐵之助、元服して孫十郎祐信と言ひ後祐淳と改む。後に藩主松平春嶽公より直入の名を賜はる。琴屋、琴酒屋と號し國文和歌を橋驛覽

に學ぶ。明治二年皇學科員を命ぜられ藩學明
道館出仕、文學大訓導、明治十五年皇典講究
所委員となる。晩年居を寶永町に移し沙鷗眠
處と號す。明治三十六年六月二十五日卒す。
年八十。歌集に井蛙集あり。

河東 光路 本名、加藤德次。明治
四十一年六月十三日、

神奈川縣中郡伊勢原町池端八三八に生れ、二
十七歳にて死亡。大正十三年、「流星」創刊主
宰及「ポトナム」に出詠、昭和四年一月「石
路」發刊主宰、昭和七年「短歌月刊」社に入
りて「現代歌人録及大日本歌人集」編纂、昭
和十二年二月「遺稿集善提樹」中に「夕光」
集をとむ。

河東 梨雨 本名加藤彌二郎。明治
三十五年八月十七日生

昭和二年一月十六日、愛知郡鳴海町字中島一
〇の實家に病歿す。行年二十六。大正十二年
橋田東聲氏の「霸王樹」に入會（一ヶ年位）。
大正十二年十一月「森蔭」創立加盟同人。著
書に遺稿歌集「眞情集」あり。

河東 流歩 不明。

河野 きく子 本名喜久。四十歳。兵
庫縣出石郡出石町に生

れ、同縣川邊郡雲雀ヶ丘に現住。大正十四年
頃より今中樞溪氏に學ぶ。後中絶。昭和七年
一月より國民文學社々友となり、菊池庫郎氏

の選を受けつつ現在に至る。

河野 敬二 生年月日不詳。出生地
不詳。多年南滿洲撫順

に在りて大谷商會に勤務の傍ら「いづかし」
同人として約十年間歌道に精勵す。不幸病を
得、昭和八年十月ついに任地に於て逝去。當
時の推定年齢三十三歳。遺稿歌集「洗滌」
一卷あり。

河野 亮 明治四十三年九月十五
日、廣島縣安佐郡飯室

村此谷に生れ、神田區錦町三ノ一正則豫備學
校内に現住。正則豫備學校、正則商業學校教
諭。昭和五年頃より作歌。師と稱すべきもの
なく、各種雜誌に投書して今日に至る。

河野 榮 二十五歳。福井縣今立
郡舟津村小黒町十三號

六に生れ、東京市下谷區谷中初音町四ノ三四
武井方に現住。日大法文學部國學專攻科生。
短歌雜誌「梅檀」創立と共に加盟、同誌同人
たり。研究「短歌寫生説の胎生と其展開」の
著あり。

河野 樹八郎 舊姓上野。明治十二年
十一月三日、栃木縣芳

賀郡中村に生れ、京城府三坂通二五四に現住。
教師。師範在學中より作歌。「心の花」に投書
せしことあり。

河野 聽琴庵 本名悅太郎。明治十九
年四月九日、香川縣琴

平町一番戸に生れ、同地に現住。神職。最初
俳句に志ししも後短歌に轉じ、昭和六年七月
竹柏會に入り、ついで一路會員となり、山下
陸奥氏に師事す。現在一路同人。竹柏會員。

河野 通成 明治二十四年七月二十
五日、東京市麴町區三

番町二に生れ、同市澁谷區中通三ノ三四に現
住。醫師。醫學博士。大正五年九月より大正
七年五月まで「白光」に、大正八年四月より
大正十年三月まで「港」に關係し、大正十五
年五月より短歌雜誌「常春」同人として現在
に至る。其間昭和六年六月より短歌雜誌「月
刊歌集」を主宰し、尙昭和十年八月より短歌
雜誌「こもり沼」同人をも兼ね關係す。

河野 勉 二十七歳。大分縣宇佐
郡龍王村龍王一六八に

生れ、佐賀市神野町草場鐵道官舎第四號に現
住。鐵道従業員。昭和四年商業二年在學中、
教師安部迪雄氏に始めて歌を學ぶ。昭和十年
アララギ會員となり、齋藤茂吉氏の選歌を受
けつつ今日に至る。

河野 慎吾 明治二十六年四月十一
日、兵庫縣赤穂郡赤松

村河野原に生れ、東京市澁谷區幡ヶ谷笹塚町
一〇二六に現住。阿蘭陀書房、博文館、東京
朝日新聞社等に奉職せし事あり。地上巡禮「
アルス」煙草の花」を経て「ザムボア」の
編輯同人となる。大正七年奏皮詩社を創立、

雜誌「とねりこ」を主宰す。

河野百合子

三十一歳。兵庫縣網干町に生れ、樺太眞岡町に現住。昭和二年に「とねりこ」に加はり、廢刊後昭和六年末「歌と評論」に加はり、

河原木利一

雅號蚊原霧一。三十二歳。青森縣三戸郡市川村に生れ、北海道渡島國上磯町字富川町三二九に現住。海産物肥料製造業。創作社により若山牧水氏の指導を仰ぎ、同氏歿後數年吉植庄亮氏の教示を受く。歌誌「本心」を編輯主宰せし事あり。はまなす會々員。

河原武

三十三歳。熊本縣玉名郡高瀬町に生れ、朝鮮慶尙南道東萊郡鐵馬面追間鐵業所内に現住。鑛山技術員。大邱短歌會の福島勉氏の指導を受く。

河原塚重忠

新潟縣村松町に生れ、東京市杉並區阿佐ヶ谷六ノ二五に現住。無職。二二三歳の頃、鈴木重嶺翁に添削を受けたことあるのみ。爾來四十年間折にふれて、歌は詠み續けたれども、師なし。

河原井正則

三十八歳。水戸市上市向井町に現住。米穀肥料商。大正六年の頃より歌を始め、水薺、常春、現實短歌等に發表せり。

河邊蛙遊水

二十五歳。三重縣安濃郡片田村片田に生れ、同地に現住。理髮師。昭和六年頃より作歌、昭和十一年三月、多磨短歌會に入會、北原白秋氏の指導を受けて今日に至る。

河南傳藏

二十六歳。滋賀縣神崎郡栗見村大字栗見新田第八番屋敷に生れ、同地に現住。農業。昭和七年六月「いぶき」に入社、今日に至る。

河南聯吉

本名嵩。明治四十年五月十九日、兵庫縣多紀郡篠山町下西戸五〇に生れ、同地に現住。昭和九年勤務地神戸に病を得て歸郷。病床のつれづれなるまま、昭和十年五月短歌を始め、昭和十一年一月「六甲」の會員となり、現在に及ぶ。

河村かつね

三十四歳。福岡縣三潁郡久間田村字田脇に生れ、福岡市平尾一本木一四二ノ一に現住。一昨年より讀賣新聞婦人欄に投稿し、尙「冬栢」にて與謝野晶子氏に師事す。

河村清

三十一歳。北海道小樽郡稻澤町大字稻澤一六〇に現住。小學校教員。曾て水薺社友たりし事あるのみ。

河村千秋

本名泰敏。三十九歳。京都市上京區新島丸頭町一五二に生れ、同地に現住。京都市吏員。中學生時代より獨學。未だ結社に加入したる

河村泰藏

二十四歳。京都市右京區嵯峨六反町二四に生れ、同地に現住。銀行員。自然詩社準同人。

河村千代

三十二歳。新潟縣高田市南本町に生れ、東京市板橋區板橋町一ノ二四一三に現住。百貨店女店員監督をへて現在會社員。昭和六年暮香關詩社入社、村野次郎氏に師事し現在に至る。

河村宮男

二十六歳。三重縣宇治山田市岩淵町三七一に生れ、大阪府堺市南三國ヶ丘三和銀行寄宿舎に現住。銀行員。

河本まさ美

二十六歳。兵庫縣揖保郡神部村那波野。教員。少年時代より作歌すれど師なし。

河井清

號黃楊。岡山縣津山市に生れ、同市上ノ町に現住。津山高女習字科教諭。水薺社準同人。

河井たか子

本名高。明治三十一年十月廿五日、岐阜市に生れ、兵庫縣武庫郡精道村芦屋平田一八九三に現住。年少の頃佐佐木信綱氏、角鷗東氏の教へを受く。その後中絶。昭和六年末國民文學に入社、菊池庫郎氏に師事、目下同社同人。

川千鶴

本名島貴美子。臺灣臺北州基隆郡金瓜石に生

る。看護婦。昭和九年七月臺灣高雄の海響に入社。昭和十年七月より病氣となり昭和十一年三月二十日歿す。行年二十二。

川合直次 明治七年二月越後直江津に生れ、同町八幡四

八に現住。衆議院議員。少時父を喪ひ獨學苦修す。短歌は竹相園の流を汲む。

川合尚子 明治三十八年一月二十八日生。原籍、高知縣安

藝郡川北村。大正十一年夏宮崎虎之助氏の新宗教に入信、川合幸信と結婚、夫婦生活の破綻、信仰生活の葛藤等内外の苦難と闘ひ、遂に昭和三年四月二十一日服毒自殺を圖り、同二十八日夕東大病院にて絶命す。二十四歳。作歌は獨習。

川合辰三 本名良藏。明治三十三

年生。會社員。中學四年生の頃より作歌、故橋田東聲氏、白井大翼氏に師事し、「珊瑚礁」を経て「霸王樹」創刊と同時に入社、今日に至る。

川内常一 二十八歳。島根縣隱岐

五箇村登記所に現住。裁判所書記。十年來斷續的に歌を獨りたのしむのみ。

川勝茂 三十二歳。京都府船井郡富木村に生れ、同地

に現住。教員。十七八歳頃より短歌に興味を

持ちしが、昭和五年より本格的に作歌、萬造寺齊氏に師事し「街道」の創刊さるるや同人として加はり今日に至る。

川上一郎 二十九歳。岡山縣阿哲

生れ、神戸市灘區高羽竹丸二に現住。教員。國學院大學在學中折口信夫氏の指導をうく。其後は短歌研究等に依り作歌するのみ。

川上榮治 二十九歳。茨城縣多賀

同地に現住。教員。アララギ會員。

川上嘉市 明治十八年三月靜岡縣

濱名郡小野口村内野に生れ、濱松市廣澤町三四四に現住。日本樂器製造株式會社社長。昭和五年頃より作歌「心の花」佐佐木博士の教を受く。「茅海雜詠」「隣のつぶて」の二歌集あり。

川上一眞 二十一歳。鹿児島縣大

島郡東天城村母間に生れ、同地に現住。中學校中途退學。以後郷里にありて靜養。現在農業。十七歳より作歌を始む。

川上小夜子 明治三十一年四月二十

七日、福岡縣八女郡三河村高塚に生れ、大阪府北河内郡守口町守口五〇六に現住。大正五年「詩歌」により作歌を始む。「詩歌」廢刊後「霸王樹」創刊と同時に入社。同十四年「霸王樹」を辭し女流歌誌

「草の實」を創刊す。昭和十年「多磨」創刊と共に會員となり現在に及ぶ。

川上晶雄 明治四十四年六月岡山

縣川上郡手莊村七地に生る。郵便局員。昭和五年頃より作歌を始め、昭和七年八月「晚鐘」に入り昭和十一年に陸月會を創始す。

川上敏雄 明治三十三年六月二十

六日、岡山縣小田郡三谷村大字東三成二八二〇に生れ、同縣吉備郡總社町大字總社四四〇に現住。高等女學校國語科教員。作歌經歷といふほどのものなし。

川上登代 本名豐子。三十四歳。

鹿兒島縣薩摩郡入來村に生れ、鹿兒島市下荒田町一五一に現住。昭和三年十月潮音社入社現在に至る。

川上守彦 大正七年四月七日、岡

七地に生る。農。昭和十年頃より作歌を始め、同十一年二月より晚鐘社（廣島）に入社す。

川北朋春 明治三十四年滋賀縣長

京區東堀川御池上ルに現住。裾襖様下繪師。大正十年頃歌を作り始めると共に水鏡社に入社、今日に至る。

川北慎一 明治四十五年四月二十

八日、三重縣河藝郡一身田町一身田四一四番屋敷に生れ、同地に現

住。書齋、雜詩、文具販賣、印刷業。昭和八年二月「霸王樹」に入社。昭和十一年六月印田巨鳥氏と歌誌「志支浪」を創刊、發行人として現在に至る。

川口 梢 明治三十三年愛知縣中島郡稻澤町に生れ、東京市日本橋區箱崎町四ノ一、大野方に現住。職業を轉々するも現在ダンスホール專屬美容師。作歌經歷といふほどのものなし。

川口 しづ子 三十一歳。東京市淀橋區栢木三ノ三五一に生れ、廣島市千田町三ノ七四に現住。昭和五年草の實社に入り作歌、昭和十一年十二月同社を退き多磨に入り今日に及ぶ。

川口 千香枝 明治三十二年五月十三日、長崎市上筑後町に生れ、東京市杉並區阿佐ヶ谷二ノ六〇八に現住。大正九年より「霸王樹」地上、「美穂」を経て昭和元年「草の實」創刊より現在に及び草の實社擔當。

川口 常造 三十三歳。鹿兒島縣肝屬郡花岡村白水に生れ、同地に現住。教員。昭和九年三月東洋大學卒業。昭和六年四月よりアララギ會員となり。結城哀草果氏の指導を受け今日に至る。

川口 南八 三十一歳。千葉縣海上郡旭町ロノ五九九に生れ、東京市足立區千住五ノ五九に現住。教員。

昭和四年三月國民文學入社、松村英一氏に師事し現在に至る。

川口 楊子 本名美代志。二十七歳。山梨縣甲府市に生れ、新瀧縣曾根町に現住。小學校教員。「うつそみ」より相馬御風氏の「木蔭」を経て現在藤川忠治氏の「歌と評論」社友。

川口 れい 二十歳。滋賀縣栗太郡大寶村に生れ、同地に現住。草津高女卒業後同校補習科に入り専心作歌す。

川口 汪一郎 三十歳。東京市大崎に生れ、同市麴町區下二番町三二に現住。出版業。杜鵑花、多磨、を経て現在短歌鑑賞を發行。

川越 守固 四十九歳。秋田縣仙北郡藤木村に生れ、同地に現住。農業。少年の頃より作歌、後に國民文學社、白日社、水穂社等に入りしが身邊雜事のため作歌を休み今日にいたる。

川崎 綾子 大正三年福岡縣に生れ、東京市世田ヶ谷區成城町三六八に現住。與謝野晶子氏に師事す。明治三十二年十一月北海道岩内町に生れ、室蘭市新富町社宅一〇一號に現住。日本製鋼所勤務。大正六年前田夕暮氏の白日社に入社、七年十二月詩歌休刊後は國民文學社、霸王樹

社、ぬはり社に籍を置きしも現在無所屬。

川崎 さと 明治二年二月二十六日、東京市芝區濱松町一ノ三に生れ、昭和七年九月二十八日歿す。行年六十四。

川崎 杜外 本名左右。明治十七年摩郡和田村に生る。家は農を業とす。二十一歳、東京早稲田専門學校に入學せしが野砲兵として徴せられたため退學す。除隊後、三十八歳までの十四年間に専心農業に従ひしが、郷里以外にての生活を求め、名古屋新聞松本支局、長野支局に勤務し、四十九歳病氣をもつて退職するまでの十一年間を續く。昭和九年呼吸器病をもつて長野市の寓居に死す。年五十一。妻と一女に先立たれ、又四人の弟妹にも先立たれ高齡の父を残して死せり。歌は十六歳、太田水穂氏和田小學校の訓導として來りしに刺戟せられて始め、農業に専心せし間は中絶せしが、大正三年國民文學の創刊と兵に再燃し死に至るまで續く。昭和二年、歌集「山守」を國民文學叢書として刊行、死後の昭和十年友人相謀りその遺稿「川崎杜外歌集」を國民文學叢書として刊行。

川島 清 明治三十七年生。滋賀縣神崎郡五峯村宇佐野に現住。料理職。尾山篤二郎氏門下「自然」同人。

川島 燁子 本名右田澄子。二十三歳。福岡縣浮羽郡竹野村徳間に生れ同地に現住。取立つべき作歌經歷なし。

川島 園子 明治二十六年七月十三日、佛蘭西、里昂に生れ、東京市牛込區喜久井町四六に現住。小學生時代小出繁氏に和歌を一年程學びしことあり。大正十年末地上社々友となり翌十一年より窪田空穂氏に師事す。爾來、地上(第一期)國歌、白鶴同人を経て地上同人たり。歌集新樹)及び「蒼澁」あり。

川島 紅芽 本名健三郎。五十歳。千葉縣山武郡蓮沼村に生れ、神奈川縣鎌倉町小町本覺寺内に現住。寺院雇人。青年時代より作歌、昭和十一年頃より諸雜誌に投稿す。

川島 靜子 明治三十三年十一月十四日生。大正九年九月より大正十五年六月十一日病歿す。

川島 深厚 三十八歳。長野縣北佐久郡志賀村法禪寺に生れ、同郡南輕井澤上發地大聖寺に現住。僧侶。昭和五年三月、相馬御風氏の木蔭會に入會。昭和九年十二月退會して現在に至る。

川島 靑路 本名一郎。大正元年十一月十八日、石川縣羽

昨町サ四八に生れ、金澤市下本多町五ノ三に現住。文房具雜貨小賣業。昭和九年一月金澤の關古島詩社社友となり作歌を始め、現在に至る。

川島 つゆ 本名沼田いし。明治二十五年一月埼玉縣行田町に生れ、東京市澁谷區代々木富ヶ谷一三七四に現住。舊「俳味」の投稿家たりしことあり。俳諧研究に志す。「一茶俳句新釋」「一茶の種々相」「玫瑰」「銀の壺」等の著あり。昭和五年沼田頼輔と結婚、同九年死別。俳諧研究会員。あけぼの會員。

川島 芙美子 本名富美。二十九歳。北埼玉郡須加村に現住。昭和四年歌を初め「水甕」に入社。十一年春より作歌を休み今に至る。

川島 保男 二十四歳。東京市赤坂區青山に生れ、澁谷區丹後町二八に現住。精米業。約四年前より作歌すれど別に經歷なし。

川添 ゆき子 本名江村雪子。明治三十年二月十六日、高知縣香美郡明治村に生る。大正五年三月潮音社に入社、太田水穂氏に師事、昭和六年二月二日病歿。享年三十五。昭和七年春遺稿歌集「杉の雫」潮音社より刊行さる。

川田 和孝 本名爲藏。四十歳。栃木縣足利市に生れ、福岡縣遠賀郡折尾町則松松ヶ原に現住。折尾高女教諭。少時父爲則に従ひ海上胤平氏に教を受く。其後師事せる人なし。大正十三年日光に投稿し、昭和八年門司に日方創刊せられて之に加はり、今日に及ぶ。

川田 多代子 明治十八年神奈川縣小田原町萬年町三丁目に生れ、小田原在綱一色に現住。華道教授。初め山本信也氏に師事、昭和六年より山下陸奥氏に師事、現在に至る。

川田 とくゑ 福岡縣三井郡御井町大字宮ノ庫村五郎丸に生れ、福岡縣遠賀郡折尾町則松に現住。昭和八年日方社に加盟、現日方社同人。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 順 明治十五年一月十五日、東京三味線堀に生る。父は文學博士薨江川田剛。兵庫縣御影町字掛田(六甲山麓)に住み、家を山海居と號す。東京帝國大學法科を卒業、大阪住友に勤務する事二十九箇年、既に引退して文筆に専念す。十六歳にして佐佐木信綱氏の門に入る。著書は歌集陽炎、伎藝天、山海經、青淵鶴立秋、旅鷹の七卷、詩集春の木がくれ、其の他論集隨筆等數卷、現に竹柏會同人。大日本歌人協會理事。

川田 初子

明治四十五年一月十日、兵庫縣明石郡垂水町東垂水に生れ、東京市杉並區成宗町三ノ三六二に現住。昭和三年潮音社入社。太田水穂氏の指導を受けつつ今日に至る。

川谷 とせ

明治三十二年三月五日、大阪府南河内郡高向村大字高向に生れ、堺市材木町東一ノ一八に現住。女學校國語科教員。寢屋川高女時代今中楓溪氏に師事し、後しばらく中止の状態なりしが、昭和五年「霸王樹」社に入社、現在に及ぶ。

川路 迪郎

四十八歳。鹿児島縣川邊郡萬世町小湊に生れ、鹿児島縣伊佐郡本城村南浦に現住。教員。

川津 てる子

三十歳。大津市膳所本町に生れ、同地に現住。昭和七年頃より作歌をはじめ、昭和九年五月より「自然」に入社、尾山篤二郎氏に師事す。

川手 徳一

三十六歳。岡山縣淺口郡六條院町に生る。教員。作歌經歷といふほどのものなし。

川名 孝

三十五歳。千葉縣安房郡大山村釜沼一八三九に生れ、同郡千倉町平館六五〇に現住。小學校教員。小學校時代より歌を好み、昭和十年四月より青垣會に入會し今日に至る。

川中 悠行

本名金藏。四十歳。福井縣南條郡武生町三八に生れ、東京市品川區大井庚塚町四八八七に現住。川崎中學校教諭。大正十一年以來、釋道空氏に師事す。大正十四年「くぐひ」創刊より、昭和十一年末まで同誌同人。

川中 愛子

二十四歳。大阪市に通一ノ二八に現住。夕陽ヶ丘高女在學時代國語教師より指導を受けしのみ。

川中 柏葉

本名徳重。大正四年一月八日、長崎市大浦相生町に生れ、同市稻佐町二ノ一八六に現住。長崎電信局勤務。中學三年頃より短歌に興味を覺え藤崎杏水氏に師事、昭和六年六月「霸王樹」に入社、昭和九年九月退社、同十月草炎に入社。

川野 斗南

本名道明。三十七歳。鹿児島市に生れ、山口縣柳井町後地に現住。教員。中學時代鹿児島「並木」に入り、同誌廢刊後作歌中絶、昭和二年頃より再び始め、同八年「霸王樹」入社。

川野 弘之

二十五歳。岡山縣英田郡林野町に生れ、同縣倉敷市旭町に現住。警察官。昭和七年「蒼穹」入社、昭和十年一月「國民文學」に轉じ松村英一氏に師事今日に至る。

川畑 愛義

三十四歳。鹿児島縣川邊郡川邊町大久保に生れ、京都市田中西浦町七九に現住。京都市衛生試驗所技師。醫師。京大短歌會、暫時アララギ社友たりしことあり。

川畑 安彦

大正元年八月二日、鹿児島縣日置郡市來町大字大里二一八に生れ、東京市淺草區花川戸一ノ九柳澤小兒院に現住。醫師。昭和八年三月國民文學社に入社し窪田空穂氏、谷鼎氏に師事し現在に至る。

川端 春歩

本名土屋謙四郎。明治三十七年一月七日、千葉縣匝瑳郡野田村野手一二七五六に生れ、同郡八日市場町イ二三九五ノ一に現住。小學校訓導。昭和六年八月敬禮入社、今日に至る。

川端 千枝

舊姓炬口。明治二十年八月九日、神戸市下山手通りに生れ、明治三十八年淡路島大野村、川畑家に嫁ぐ。同四十二年夫に死別して後、住居を東京に移し、昭和八年七月四日病勢重りて死去。大正二年「白日社」に入り、同七年「詩歌」廢刊、同志と「耕人」を創刊す。同十三年「日光」同人となり、昭和二年日光廢刊後、同四年香蘭詩社同人となる。昭和八年、病を得て香蘭詩社を退く。

川端 篤三郎

大正四年津山市小田中に生れ、中學卒業後關

もなく肺を病みて八年一月死亡。行年十九。昭和六年「早蕨」創刊と同時に入社晩年に至る。昭和七年同志と歌誌「城下のほとり」創刊之を主宰せしことあり。「短歌草原」にも一時關係す。

川端八洲人

本名櫻井保人。二十七歳。長野縣小縣郡豊里

村小井田に生れ、同地に現住。教員。昭和五年信濃毎日新聞短歌欄に投稿。同六年歌誌國原に入る。同七年長野師範學校專攻科入學、同志と長師短歌會を催し、傳田青磁氏に師事す。同八年アララギ會員となり今日に及ぶ。

川原重代

明治四十一年十一月十八日、栃木市旭町に生

る。東京實踐専門部國文科に學ぶ。昭和五年四月、川原正二と結婚、昭和十一年十二月二十四日、宇都宮市中埴田町に歿す。享年二十九。歌歴と稱すべきものなし。

川原廣一

四十歳。新潟縣糸魚川町字寺町に生れ、同地

に現住。理髮業。大正七年歌道に入る。銀葉樹「創作」等の社友たりしも、大正九年九月郷里糸魚川に歸りて相馬御風氏に師事し今日に至る。木蔭會同人。昭和十二年二月より「木かげ」の編輯を擔當す。

川原林一夫

二十三歳。滋賀縣阪田郡長濱町に生れ、同縣

高島郡安曇村西萬木に現住。扇骨問屋。大毎

滋賀歌壇に投稿せし事あり。昭和十年十月より雜誌自然に入社、今日に至る。

川邊染人

本名佐藤馬吉。五十七歳。岡山縣邑久郡今城

村字仁生田に生れ、廣島市河原町二二三ノ三六に現在。露店商人。明治三十五年佐藤月洲の名にて初めて讀賣歌壇に投稿。同四十年河井醉者主宰の詩草社へ入社。大正八年川邊染人の名にて竹柏會に入社「心の花」に發表、後退社。現在は同誌寄稿家。

川邊潔

明治三十七年八月五日、岩手縣和賀郡二子

村字宿に生れ、同縣禰貫郡石鳥谷町に現住。會社員。大正七年より作歌、短歌雜誌等に投書、大正十二年自然に入社、尾山篤二郎氏に師事し今日に至る。

川邊謙造

明治三十二年秋田縣南

生る。京都帝大文學部哲學科卒業。一時秋田縣女子師範學校囑託教諭たり。高校時代より歌に親しみ、「青垣」一創作に入稿せし事あり。昭和十年十月二十日肺患にて没す。享年三十六。

川邊森兵

大正二年十一月二十九日、群馬縣高崎市成田

町一二に生れ、同地に現在。郵便局員。昭和十一年三月アララギに入會し土屋文明氏に師事す。

川俣鷗涯

本名篤鷗洲とも號す。明治十五年十一月二十

三日、鹿兒島縣始良郡山田村に生れ、滿洲國安東縣大和橋通三ノ二に現住。安東新報社長。昭和六年より「多柏」による。

川見駒太郎

四十四歳。靜岡縣に生

に現住。中學校國語教師。十六七歳頃から作歌を試み、時折新聞雜誌に投書。目下は柴山武矩氏の相思樹社友。

川村吉之助

四十四歳。鹿兒島市易

居町に生れ、神戸市須磨區稻葉町三ノ二〇に現住。中學時代「鹿兒島新聞歌壇」投稿。昭和五年アララギに入會。川村浩。明治三十五年東京に生る。昭和四年二月病

川村節子

明治三十四年十一月二

日、福島縣若松市一之町に生れ、同市徒之町五二に現住。女學校時代より作歌。昭和八年より「短歌術」の鈴木北溪氏に指導を受く。

川村濤人

本名武夫。三十五歳。

北海道空知郡江部乙村に生れ、同郡砂川町字上砂川に現住。小學校教員。大正十四年潮音社に入社。川村兵司。三十二歳。東京府北多摩郡東村山村南秋津一

○八四に生れ、同地に現住。農業。歌を始めてより十四年。初め若山牧水氏の創作に入社。その後後ねはり社に入り和田山蘭氏に學ぶ。また二三の者と計り叢生を發刊、また現在いぶき同人。

川邨みしほ

四十三歳。兵庫縣飾磨郡家島眞浦に生れ、兵庫縣西宮市川添町三七に現住。昭和七年ぐひ入社。時々婦人公論短歌壇に投稿す。

川本そよ

二十八歳。鳥取縣氣高郡末恒村大字伏野に生れ、北海道北見國越紋別郡中湧別市街に現住。履物商。昭和十年七月より北海道旭川新聞歌壇に投稿、昭和十一年八月香蘭詩社に入社。

川本博子

二十四歳。東京市芝區愛宕町一ノ十一に生れ、兵庫縣武庫郡魚崎町横屋字川井二〇二に現住。女學校教員。女學校時代より作歌、女高師入學後尾上柴舟氏に師事、その頃（昭和十年）アララギに入會し今日に至る。昭和十二年より今中楓溪氏にも師事す。

川井吉一

二十九歳。大阪市に生れ、大阪市住吉區松屋通一ノ三に現住。會社員。昭和四年十二月アララギ會員となり、土屋文明氏の選歌を受けつつ今日に至る。

樺澤幸一

本姓樺澤。青森縣八戸市大字小中野町新町に生る。教員。昭和二年三月稻垣浩氏に師事「白鷗」社友となる。昭和四年「地上」復活と共に同人となる。昭和九年五月十日、二十六歳にして歿す。地上叢書第九編として「樺澤幸一歌集」あり。

合田定男

二十八歳。鳥取縣氣高郡神戸村大字岩坪に生れ、下關市赤間町二一に現住。遞信省官吏。昭和十一年三月より作歌、吾妹の會員となり現在に至る。

合田艶子

愛媛縣宇摩郡三島町に生れ、香川縣仲多度郡多度津町に現住。十三四歳頃より作歌、昭和二年ごぎやうに入社、中河幹子氏の指導を受け現在に至る。

合田とくを

明治三十八年香川縣に生る。小學校卒業後父の漁業に従ふ。癩を病み大正十五年大島療養所に入る。昭和五年俳句短歌に志を寄せ、瀧汐短歌に投稿を續け今日に至る。

冠木富美

二十八歳。大阪府堺市に生れ、大阪府泉北郡神石村市一一に現住。教員。昭和六年霸王樹入社、今日に至る。

釜田喜三郎

明治四十四年六月二十八日、岡山縣立高梁中

學校寄宿舎官舎に生れ、千葉市富士見町一七に現住。陸軍戰車學校教員。昭和四年水戸高校教授中村已喜夫氏に手ほどきを受け、後「心の花」に入り佐佐木信綱氏に師事、今日に至る。

釜范忠作

明治十二年三月弘前に生れ、青森市柳町通に現住。遺傳の眼疾あるを以て鍼術を修め、曾て八戸盲學校の教諭となり聾啞部を設置し八戸盲啞學校と改稱せしむ。歌を詠みしは明治三十二年頃よりにて、黒田清綱翁の瀧園支社等に入りしことあり。

鎌田吉三郎

三十六歳。宮城縣栗原郡高清水町字中町三六に生れ、同地に現住。教員。司法書士。昭和五年釋道空氏選の東京日日新聞の歌壇に投稿、昭和八年「朱鳥」に入り、「心の花」にも出詠せしことあり。

鎌田敬止

嘗て虚焼と號す。明治二十六年八月五日、千葉縣君津郡小糸村鎌瀧四一三に生れ、東京市大森區調布嶺町一ノ三四七に現住。日本地名大辭典編輯。大正二年帝大醫科中途退學前後より作歌に興味を持ち一時「水鏡」「アララギ」の社友たりしことあり。大正六年「珊瑚礁」創刊さるるや同人となり尋いで「行人」同人、後「日光」同人たりしがその頃より殆んど作歌無し。

鎌田 定夫 二十八歳。福島縣信夫郡松川町に生れ、福島市西町二〇に現住。官吏。昭和四年作歌を始め、同六年三月並木秋人氏のみこばえ(昭和八年短歌祭と改題)に入社、昭和十二年二月、岡山巖氏主宰歌と觀照に入社、現在に至る。

鎌田 政夫 二十四歳。宮城縣栗原郡高清水町字新町に生れ、同地に現住。朱鳥誌により指導を受け、同誌廢刊後は地方の先輩に指導を受く。

鎌田 良平 明治十三年八月十五日生れ、滋賀縣高島郡今津町大字今津八一に現住。湯屋業。昭和四年水蘗社入社、今日に至る。

鎌田 俊雄 四十三歳。和歌山縣立新宮中學校教諭。霸王樹、あけび等に發表せしことあり。

鎌田 保吉 三十六歳。三重縣志摩郡答志村二七〇に生れ、大阪市住吉區北田邊町六七に現住。會社員。昭和六年五月、鳥羽町の白鳥短歌會に入會し作歌し始む。昭和十年四月竹柏會に入會、石槿茂氏に師事し今日に至る。

鎌田 春子 二十四歳。大阪市内に生れ、大阪市港區菅野町三ノ六に現住。昭和十一年五月對馬完治氏の地上に入會、川島園子氏に添削を受けて今日に至る。

鎌田 總子 三十五歳。京都市に生れ、大阪市西淀川區大和田町七五三ノ三に現住。二十一二歳の頃より作歌、昭和六年九月歌誌「閑古鳥」に加入

し現在に至る。

蒲池 正紀 明治三十七年七月熊本本町南濱三四に現住。徳島高工教授。大正末期より熊本市の「非歌人」同人となり、同誌廢刊後西村光弘氏と共に「龍燈」を創刊編輯にあたり、今日に至る。其間「青垣」及び「歌と觀照」に同人たりしことあり。

蒲生 俊文 明治十六年四月九日、宇都宮に生れ、東京市杉並區馬橋一ノ九に現住。協調會產業福利部長。明治大學講師。二高時代より時々作歌、昭和七年七月佐佐木信綱氏の門に入り今日に至る。

鎌手 白映 明治二十八年飛驒の高山に生れ、同市に現住。實業。大正二年秋、妻太短歌會を創立し、後山百合詩社を結び、靜なる饗宴、悲陀を経営刊行し、昭和五年夏、裸形詩社を結び「裸形」を主宰し今日に至る。水蘗、詩歌に籍を置きしことあり。

蒲 清近 本名堅治。三十七歳。高雄州東港街に現住。神官。初め萬朝、新愛知、短歌雜誌等に投稿、後大正十年頃地上に入社せし事あるも次第に作歌生活と遠ざかる。

蒲 美實 三十七歳。長野縣東筑摩郡宗賀村に生れ、同郡中山村に現住。小學校教師。大正十五年、國民文學社に入り松村英一、半田良平、川崎杜外三氏の指導を受け現在に至る。

蒲池 正紀 明治三十七年七月熊本本町南濱三四に現住。徳島高工教授。大正末期より熊本市の「非歌人」同人となり、同誌廢刊後西村光弘氏と共に「龍燈」を創刊編輯にあたり、今日に至る。其間「青垣」及び「歌と觀照」に同人たりしことあり。

蒲生 俊文 明治十六年四月九日、宇都宮に生れ、東京市杉並區馬橋一ノ九に現住。協調會產業福利部長。明治大學講師。二高時代より時々作歌、昭和七年七月佐佐木信綱氏の門に入り今日に至る。

上 稻吉 本名根本景行(原姓市毛) 明治三十三年十二月二日、茨城縣土浦町に生れ、水戸市仲町五三〇に現住。私立茨城中學校教師。昭和六年頃アララギ入會、同七年頃より専ら土屋文明氏の選を受け今日に至る。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上 皓三 四十二歳。兵庫縣佐用郡久崎村に生れ、東京市板橋區下石神井二ノ一二三二に現住。日本醫大教授(生化学)。大正五年六高に於て岡山巖、上田英夫、岡野直七郎氏等と相識り短歌を知る。大正七年以來アララギ會員。主として中村靈吉、同氏歿後土屋文明氏の指導を受け今日に至る。筆名石黒醇(又は醇) 石楠子等を用ひしことあり。

上坂 信勝

四十七歳。宮城縣栗原郡宮野村字上宮野秋山

七〇に現住。農兼小學校教員。大正三年頃アラギ會員たりしことあり。昭和七年七月より香蘭社友となり荒木暢夫氏の指導を受く。北原白秋氏主宰多磨創刊とともに入會現在に至る。

上道 草二

本名房治。明治三十一年十一月十二日、兵庫

縣朝來郡東河村中に生れ、昭和三年二月十三日、縣立神戸病院にて死亡。大正七年頃創作社に入社し死亡に至る迄同社々友。藤原東川と共に著の歌集「郷愁」あり。

上條 行雄

明治二十八年十二月、長野縣諏訪郡永明村塚

原に生れ、同村横内に現住。活版印刷業。大正八年作歌をはじめ、同時にアララギに入會、島木赤彦氏に師事す。爾後作歌に間斷ありて今日に至る。

上林 角郎

明治三十一年十二月五日、新潟市寄居町に生

れ、東京市小石川區原町九一に現住。會社員。霸王樹同人。

上林 繁夫

明治三十七年一月、福井縣大飯郡青柳村東三

松に生れ、同地に現住。商業。昭和六年一月より蒼穹社に入り現在同人。

上林 たかし

本名神林孝。二十八歳。長野市北石堂町一三九

に生れ、長野縣下水内郡常盤村に現住。小學校教員。昭和七年より潮音社に入社し今日に至る。

上林 ひさ

大正元年十二月、福井縣大飯郡高濱町に生

れ、同郡青柳村に現住。商業。昭和六年頃約二ヶ年短歌雜誌「草の實」會員たりしことあり。

上林 ふみ子

明治十六年生。京都府宇治町二四〇に現住。

明治三十八年歌道奨勵會に入會、同四十年退會。昭和九年一月帚木の會に入會現在にいたる。

上村 健

二十五歳。神奈川縣中郡秦野町上大槻一〇六

六に生れ、同地に現住。鐵道員。昭和十年より作歌。

上村 正利

三十一歳。新潟南魚沼郡石打村大字關に生

れ、群馬縣前橋市堅町一五に現住。小學校訓導。昭和四年郷土文藝誌「ゆけむり」創刊、約一年半にして廢刊。その後作歌を斷續しつつ諸誌に投稿今日に至る。

上村 正雄

熊本縣球磨郡人吉町に生れ、同縣菊池郡合志

村九州療養所にて死亡。昭和四年水喪に入

り、昭和六年退社。

上岡 勝

三十四歳。栃木縣下都賀郡三鴨村に生れ、東

京市豊島區池袋五ノ三二四に現住。公吏。牧水氏生存中の創作社に二ヶ年程籍を置く。爾後何れの結社にも屬せず。

神倉 長次郎

明治三十五年九月九日、群馬縣佐渡郡名和

村八斗島一三八〇に生れ、同地に現住。農。昭和七年秋より作歌、短歌研究、短歌春秋その他に一ヶ年投稿。敬禮に在籍一年三ヶ月、その後、楠田敏郎氏の短歌月刊に入り現在に及ぶ。

神崎 久子

明治三十七年二月、東京市澁谷區千駄ヶ谷町

に生れ、大阪市住吉區田邊東之町五ノ二四に現住。昭和十年十一月より五島美代子氏の指導をうけ同十一年心の花に入り現在に至る。

神作 菁果

本名實。三十六歳。千葉縣安房郡國府村に生

れ、同縣館山北條町裁判所官舎に現住。官吏。白井大薫氏に就き短歌の指導を受く。霸王樹準同人。

神澤 弘

二十三歳。東京市本郷區森川町一に生れ、同

市足立區柳原町一三〇に現住。鈴木北溪氏の「短歌街」其の他二三の歌誌に發表。昭和十一年春より何れの結社にも屬せず。

神田 早苗 本名治郎。明治三十七年一月一日、名古屋市

押切町三ノ六四に生れ、愛知縣知多郡龜崎町大字乙川字薬師二八に現住。理髮業。二十三歳より作歌す。

神田 茂雄 明治三十六年三月二十二日、石川縣石川郡宮

原村字宮保に生れ、同地に現住。農業。昭和三年頃短歌雜誌に投稿、同年十一月竹柏會に入會、昭和四年三月勤草社に入社、昭和六年より専ら勤草の宇都野研氏に指導を受く。

神田 哲雄 明治四十二年一月六日、群馬縣勢多郡下川

淵村新堀に生れ、東京市大森區新井宿二ノ一四五八に現住。書籍業。大正十五年常春社に入り、昭和九年現實短歌創刊にあづかり同人として今日に至る。

神田 停雲 本名喜代太郎。明治八

年新潟縣東蒲原郡三川村大字内川に生れ、新潟市旭町通二番町南山に現住。教員。歌の業（佐佐木博士書）によりて自から學び、原宏平、本居豐頼兩氏の添削を乞ひ、舊派の大八洲雜誌に出詠。後新派に入りアララギ、敬禮に投稿せしことあり。

神田 矩丸 本名憲圓。三十四歳。長

野縣上水内郡三水村赤鹽に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和二年より昭和五年春まで雜誌アララギの會員。

以後何れの雜誌にも關係せず。

神田 満壽 二十八歳。廣島縣佐伯郡淺原村一八五〇に生

れ、同郡觀音村字千同に現住。昭和六年一月より廣島市の眞樹により現在に至る。

神田 正雄 二十五歳。東京市日本

橋區兩國三に生れ、同地に現住。學生。短歌月刊を経て現在エラシ人。森本治吉氏に師事す。

神田 よし子 二十五歳。大阪市西區

南堀江に生れ、同區南堀江下通四ノ一に現住。清水千代氏の「どうだん」に入つてより約二年。

神津 聖明 本名榮。明治三十八年

十二月二十九日、長野縣小縣郡中鹽田村五加に生れ、同地に現住。歌作十七年、昭和三年より「郷土文藝同志會々誌」「ひびらぎ」「高原文藝」「白嶺」等に關係す。

神戶 庫八 二十九歳。長野縣東筑

摩郡筑摩地村に生れ、同郡新村に現住。小學校教員。昭和九年頃より作歌、アララギ會員となり今日に至る。

神原 克重 明治二十五年一月二十

五日、千葉縣海上郡飯岡町に生れ、同縣安房郡館山北條町鶴ヶ谷二〇九二に現住。教員。大正六年創作社入社、故若山收水氏の指導を受く。其の後引續き同

社々友として作歌。歌集「棚雲」あり。

神原 大虚 本名義男。三十五歳。本籍現住所廣島縣深安

郡坪生村。元會社員。昭和六年發病と共に短歌に興味を持ちしも、最初の程は歌壇のいづれの結社にも屬せず。昭和九年始めて歌誌六甲に名を連ね、引續いてあげび、やまぶき等に籍を置く。現在やまぶき同人。

神原 宣馨 明治四十二年十月卅

日、北海道爾志郡乙部村字蚊柱村に生れ、同地に現住。三等郵便局員。昭和七年六月アララギに入會、作歌を始む。以來病のため屢作歌を休みしも、現在なほ同誌に據る。

神原 和男 三十五歳。秋田縣平鹿

郡醜刺村に生れ、同地に現住。家業神職手傳。昭和四年以降柿崎紅葉氏につきて學び、傍ら秋田魁歌壇にて安成二郎氏の指導を受け現在に至る。

神村 春汀 本名豐治。三十歳。新

潟縣中頸城郡保倉村大字上吉野新田に生れ、同地に現住。小學校教員。師範學校第二學年頃より作歌。

神谷 政雄 明治四十年五月二十日

生。奈良縣磯城郡三輪町上ノ庄に現住。會社員。昭和二年ポトナム社に入り、小泉孝三氏に師事して今日に及ぶ。

神谷源太郎

明治四十年十月四日、愛知縣常滑町に生れ、

同地に現住。事務員。「あしかび」「杜鵑花」を経て現在舊の會、若芽會を起す。

神谷青坡

本名繁太郎。五十三歳。愛知縣碧海郡依佐美村

高棚に生れ、同地に現住。農。大正三年十一月水廻に入社、現在同人。なほ武都紀準同人。

神谷慎子

三十三歳。栃木縣芳賀郡眞岡町に生れ、宇都

宮市大寛町二ノ六一に現住。小學校教員。昭和二年頃より作歌、同六年「二荒」入社、現在同人。

神谷竹子

四十歳。福井縣大野郡上穴馬村下半原に生

れ、朝鮮江原道春川丹陽町に現住。官吏の妻。女學校當時より作歌、東京女高師在學中尾上八郎氏に師事、當時より水廻の讀者となり今日に至る。昭和元年より九年まで眞人の同人。

神谷昌枝

明治四十年三月二日、東京市麴町區四番町三

に生れ、熊本縣天草郡鬼池村に現住。昭和二年二月眞人に入社、細井魚袋氏に師事し今日に至る。

神谷豊

四十三歳。愛知縣碧海郡依佐美村大字高棚に

生れ、同地に現住。農業。二十三歳頃より同郷の神谷青坡氏に指導を受く。其後水廻に入

り、六年前武都紀に入社し現在に及ぶ。

神谷義郎

三十歳。愛知縣碧海郡明治村大字和泉に生

れ、同地に現住。銀行員。在學中故石井直三郎氏の指導を受く。現在水廻社友。

神山裕一

明治四十二年四月十一日、埼玉縣北足立郡志

木町に生れ、東京市杉並區西田町一ノ四二八に現住。新女苑記者。昭和二年十一月「香蘭」に入り現在に及ぶ。その間「短歌民族」「フォルム」「善藻」に關係せしことあり。

神山晃一

埼玉縣人間郡志木町に生る。百貨店店員。浦

和中學時代、受持主任の高橋俊人氏の指導を受く。ついで創作に入社、中學五年の頃同郷の友と善藻社を結び、今日に至る。

神山信勝

三十一歳。栃木縣足尾町に生れ、同町上間藤

一三六二に現住。機械工。昭和四年より相馬御風氏に師事、木かけ同人。

神吉妙子

本名吉田たけ。三十八歳。東京市淺草區に生

れ、同市神田區神保町二ノ二に現住。昭和五年潮音入社、今日に至る。

神尾光子

明治二十三年伊豆國三嶋町に生れ、東京市四

谷區籠筍町四〇に現住。幼時より作歌、十三にて死別する迄父の指導を受く。二十三歳茅

野雅子氏に師事雜誌スバルに數回發表。昭和四年歌集夕櫻出版。此間佐佐木信綱氏、堀口大夢氏に教へを受く。

神岡敏夫

本名利雄。三十二歳。埼玉縣大里郡用土村二

四九に生れ、川越市西町七三三に現住。川越郵便局員。作歌經歷といふほどのものなし。

韓鳳洙

本名韓福壽。二十六歳。朝鮮慶尙南道金海

郡生林面羅田里に生れ、東京市豊島區雜司ヶ谷町三ノ五六六久保鶴三郎方に現住。瑛那看板製作工。一九三七年一月「鍛冶」に參加して今日に至る。

龜田菊治

三十七歳。大阪府堺市神明町北横手に生れ、

同市材木町東一丁一二に現住。小學校教員。大正九年より大正十五年まで七年間創作社に入り牧水氏に師事。爾後十餘年間作歌生活と遠ざかる。

龜山昇一

號敬外。四十七歳。三重縣名賀郡瀧川村丈六

に生れ、朝鮮仁川府萬石町に現住。醬油醸造業。歌は明治四十年頃より關本梁村氏を初め尾上栗舟氏、與謝野晶子氏、花田比露思氏等の指導を受く。

龜山悌吉

四十六歳。岐阜縣苗木町に生れ、東京市澁谷

區千駄谷四ノ七六〇に現住。大理石會社并に

車輛製造會社勤務。少年時代より獨り讀み習り作る。

龜山 麥子 本名末廣。明治三十九年七月八日、香川縣仲多度郡四箇村に生れ、同縣多度津町加治屋町に現住。蠶油販賣及び生命保險代理業。昭和八年頃水薺に入社し、後國民文學に轉じ現在無所屬。

龜山 美明 本名久雄。明治三十一年三月二日、廣島縣芦品郡府中町土生に生れ、名古屋市東區東主税町三に現住。新聞記者。大阪毎日新聞名古屋支局勤務。十七歲頃より作歌、創作、アララギ、短歌雜誌に投稿、知友と五高在學中、歌誌「白路」發行、昭和六年一月より歌誌「いぶき」を發行主宰し今日に及ぶ。

龜山 良平 三十七歲。岡山縣都窪郡帶江村二日市五四七に生れ、同地に現住。農。大正十三年頃より作歌「短歌雜誌」「黃薇」「吉備人」「詩歌時代」等を經て昭和二年「蒼穹」に入社、岡野直七郎氏に師事す。

龜井 文字 不明。

鴨口 正松 號香嵐。四十六歲。大阪市大正區大正通六ノ五〇に現住。大正八年秋佐佐木信綱氏の竹柏會に入り心の花に投稿今日に至る。

鴨澤 恒臣 大正二年三月十五日、茨城縣多賀郡大津町に生れ、浦和市鯛ヶ窪一五七二に現住。會社員。昭和十年山上、泉氏主宰かくのみに入社、大津多賀夫の筆名にて發表す。

鴨下 荻江 本名須賀子。明治三十一年二月七日、東京市に生れ、神奈川縣鎌倉町海岸通に現住。學生時代尾上柴舟氏の指導をうけ、其の後獨學にて幾度か中絶、昭和七年水町京子氏に師事。同八年「草の實」に入り同九年退會、十年「遠つびと」創刊より同人となる。

鴨居 道 三十六歲。香川縣に生れ、東京市目黒區下目黒三ノ四九八に現住。昭和九年より尾上柴舟氏に學ぶ。

掃部 千歌 本名主税。明治四十二年二月八日、兵庫縣朝來郡梁瀬町鹽田に生れ、同町大内一三〇に現住。目下病氣療養中。昭和八年六甲同人を退き、梁瀬歌話會を主宰し短歌地帯を發行す。現在ポトナム、獵矢二誌に據る。歌集「雜草の花」あり。

萱 島 功 本名徳。四十九歲。大阪府立京都第二高女校長。少年の頃より作歌、昭和六年「潮音」に入り太田水穂氏に師事し、今日に及ぶ。

萱 島 邦雄 三十五歲。熊本縣八代町長丁に生れ、同地に現住。小學校教員。中學時代より興味は持てど本格的に作歌するは最近なり。

茅野 紅二 本名宮本敬一。三十七歲。兵庫縣朝來郡竹田町竹田一六八に生れ、神戸市須磨區松風町三ノ一三ノ一に現住。安田銀行員。尾山篤二郎氏に師事して、自然詩社同人。

唐木田 李村 本名義郎。五十三歲。長野縣下高井郡平野村四に生れ、同地に現住。平野村名譽村長。大正四年若山牧水氏に師事し「創作」に屬し、同年太田水穂氏に就き、「潮音」の同人となる。「白鳩」「茅獨活」「寒露」「短歌の新研究」等語問答」等の著あり。

唐澤 左門 二十八歲。長野縣上伊那郡中箕輪村上古田に生れ、同郡朝日村樋口に現住。小學校教員。十八歲頃より作歌、昭和十一年二月アララギに入會し現在に至る。

假屋 安吉 四十三歲。和歌山市に生れ、東京市杉並區和田本町八一五に現住。獨逸染料合名會社技師。大正六年窪田空穂氏に就き「國民文學」に入りて今日に至る。